

18800
3

山陽新幹線関係 埋蔵文化財調査報告

福岡市埋蔵文化財調査報告書第32集

1974

福岡市教育委員会

山陽新幹線関係 埋蔵文化財調査報告

福岡市埋蔵文化財調査報告書第32集

福岡市教育委員会

序 文

この報告書は、山陽新幹線建設に伴う福岡市域内の埋蔵文化財包蔵地発掘調査の記録であります。

本調査は、昭和46年4月から昭和48年6月までの2年2ヶ月にわたる長期間の発掘調査で、調査地点も五十川・弥永・名子・津屋・多々良・箱崎地区の6区にわたって実施してまいりました。

発掘調査の結果は、報告書に見られるように弥生時代から古墳時代を経て中世に至るまでの村落遺構、条里遺構、各種遺物等豊富な学術資料を収録した報告書として、上梓することができました。

本書に収録された資料が永く保存され、地域住民はもとより、市民各位の文化財保護思想育成に活用されますとともに学術、研究の分野においても役立つことを願うものであります。

本書の刊行にあたりまして、日本国有鉄道福岡工事事務所の関係者をはじめ、多くの方々のご理解とご協力をいただきましたことに、厚く謝意を表わす次第であります。

昭和50年3月

福岡市教育委員会

教育長 古村澄一

例　　言

- 一、本書は山陽新幹線岡山・博多間建設に伴ない、福岡市教育委員会が昭和46年度より3ヶ年
の継続事業として実施した、福岡市域新幹線路線内埋蔵文化財発掘調査の報告書である。
- 一、発掘調査は、日本国有鉄道福岡工事事務所が福岡市教育委員会に委託したものであり、調
査費はすべて日本国有鉄道の負担によるものである。
- 一、発掘調査の実施は、福岡市教育委員会社会教育部文化課が行い、調査には塩屋勝利・折尾
学があたり、調査として教育委員会の委嘱を受けた、梅沢一男・二宮忠司・立石泰久の
各氏に御援助頂いた。
- 一、個別遺物復元写真の撮影・現像・焼付は斎藤博明氏の多大なる力による。
- 一、本書の執筆は塩屋勝利・折尾学が行ったが、「五十川高木遺跡」、「弥永遺跡」出土遺物
の石器の項の作図、製図、執筆は二宮忠司氏による。
- 一、本書の編集は塩屋勝利・折尾学で当った。

本文総目次

序 説	1
五十川高木遺跡.....	7
弥 永 遺 跡.....	65
多々良・津屋地区の遺跡.....	107
箱崎・名子地区の調査.....	151
後 記.....	152

挿 図 目 次

序 説	頁
Fig. 1 福岡市域新幹線路線と調査地点図（縮尺 1/100,000）	4
Fig. 2 五十川高木遺跡現地説明会風景	6
五十川高木遺跡	
Fig. 3 五十川高木遺跡周辺図（縮尺 1/25,000）	8
Fig. 4 五十川高木遺跡調査地点図（縮尺 1/5,000）	11
Fig. 5 A地点発掘区平面図（縮尺 1/600）	12
Fig. 6 A地点土層図（縮尺 1/60）	（折り込み）
Fig. 7 井戸内土層図（縮尺 1/60）	15
Fig. 8 井筒組実測図（縮尺 1/30）	16
Fig. 9 井筒材実測図（縮尺 1/6）	17
Fig. 10 第3号住居址出土古鏡折影（実大）	23
Fig. 11 井戸出土木箆状製品実測図（縮尺 1/2）	24
Fig. 12 各層出土土器実測図 I（縮尺 1/3）	25
Fig. 13 各層出土土器実測図 II（縮尺 1/3）	26
Fig. 14 各層出土磁器実測図 I（縮尺 1/3）	27
Fig. 15 各層出土磁器実測図 II（縮尺 1/3）	28
Fig. 16 各層出土磁器実測図 III（縮尺 1/3）	29
Fig. 17 各層出土陶器実測図（縮尺 1/3）	30
Fig. 18 各層出土陶器・滑石製品実測図（縮尺 1/3・1/2）	31
Fig. 19 第1号住居址出土土器実測図（縮尺 1/3）	32
Fig. 20 第1号住居址出土土器・磁器実測図（縮尺 1/3）	33
Fig. 21 第2号住居址出土遺物実測図（縮尺 1/3）	34
Fig. 22 第3号住居址出土土器実測図（縮尺 1/3）	35
Fig. 23 第3号住居址出土磁器・陶器・滑石製品実測図（縮尺 1/3・1/2）	36
Fig. 24 ピット出土土器・陶器・滑石製品実測図（縮尺 1/3・1/4）	37
Fig. 25 ピット出土磁器実測図（縮尺 1/3）	38
Fig. 26 溝出土遺物実測図（縮尺 1/3）	39
Fig. 27 井戸出土土器・陶器実測図（縮尺 1/3）	40
Fig. 28 井戸出土瓦質土器実測図（縮尺 1/3）	41
Fig. 29 井戸出土磁器実測図（縮尺 1/3）	42
Fig. 30 井戸出土滑石製品実測図（縮尺 1/3・1/2）	43
Fig. 31 井戸出土砥石灰測図（縮尺 1/3）	44

Fig. 32	出土土器底部拓影各種 (縮尺 1/2)	45
Fig. 33	B地点発掘区平面図 (縮尺 1/1,000)	56
Fig. 34	B地点土層図 (縮尺 1/60)	57
Fig. 35	B地点出土遺物実測図 (縮尺 1/3)	58
Fig. 36	B地点出土石器実測図 (縮尺 1/2)	59
弥永遺跡		
Fig. 37	弥永遺跡周辺図 (縮尺 1/25,000)	64
Fig. 38	弥永遺跡調査地点図 (縮尺 1/5,000)	67
Fig. 39	A地点発掘区平面図 (縮尺 1/1,000)	68
Fig. 40	A地点土層図 (縮尺 1/60)	(折り込み)
Fig. 41	A地点出土土器実測図 I (縮尺 1/4)	70
Fig. 42	A地点出土土器実測図 II (縮尺 1/4)	71
Fig. 43	A地点出土石器実測図 (縮尺 1/2)	73
Fig. 44	B地点発掘区平面図 (縮尺 1/1,000)	74
Fig. 45	B地点土層図 (縮尺 1/80)	(折り込み)
Fig. 46	I区遺構平面図 (縮尺 1/60)	75
Fig. 47	B地点出土鉗縫車実測図 (縮尺 1/2)	79
Fig. 48	I区出土土器実測図 I (縮尺 1/4)	80
Fig. 49	I区出土土器実測図 II (縮尺 1/4)	81
Fig. 50	II区Aトレーナー出土土器実測図 I (縮尺 1/4)	82
Fig. 51	II区Aトレーナー出土土器実測図 II (縮尺 1/4)	83
Fig. 52	II区Aトレーナー出土土器実測図 III (縮尺 1/4)	84
Fig. 53	II区Aトレーナー出土土器実測図 IV (縮尺 1/4)	85
Fig. 54	II区Bトレーナー出土土器実測図 I (縮尺 1/4)	86
Fig. 55	II区Bトレーナー出土土器実測図 II (縮尺 1/4)	87
Fig. 56	B地点出土石器実測図 I (縮尺 3/5)	92
Fig. 57	B地点出土石器実測図 II (縮尺 1/2)	93
Fig. 58	B地点出土石器実測図 III (縮尺 1/2)	94
Fig. 59	B地点出土石器実測図 IV (縮尺 2/3)	95
Fig. 60	C地点発掘区平面図 (縮尺 1/700)	98
Fig. 61	C地点土層図 (縮尺 1/60)	99
多々良・津屋地区的遺跡		
Fig. 62	多々良田遺跡Bセクション土層図 (縮尺 1/30)	(折り込み)
Fig. 63	多々良城ノ元遺跡出土土器実測図 (縮尺 1/3)	111
Fig. 64	多々良吉川Bトレーナー出土土器実測図 (縮尺 1/3)	112

Fig. 65	多々良込田遺跡出土土器実測図（縮尺 1/3）	113
Fig. 66	多々良込田遺跡第1号住居址出土土器実測図（縮尺 1/3）	114
Fig. 67	多々良込田遺跡第2号住居址出土土器実測図（縮尺 1/3）	114
Fig. 68	多々良込田遺跡第3号住居址出土土器実測図（縮尺 1/3）	115
Fig. 69	多々良込田遺跡第4・5号住居址出土土器実測図（縮尺 1/3）	116
Fig. 70	多々良込田遺跡第4号住居址出土土器実測図I（縮尺 1/3）	117
Fig. 71	多々良込田遺跡第4号住居址出土土器実測図II（縮尺 1/3）	118
Fig. 72	多々良込田遺跡第4号住居址出土土器実測図III（縮尺 1/3）	119
Fig. 73	多々良込田遺跡第6号住居址出土遺物実測図（縮尺 1/3）	120
Fig. 74	多々良込田遺跡第4号溝出土土器実測図（縮尺 1/3）	121
Fig. 75	多々良込田遺跡第4・5号溝出土遺物実測図（縮尺 1/3）	121
Fig. 76	多々良込田遺跡第4号溝出土須恵器実測図I（縮尺 1/3）	122
Fig. 77	多々良込田遺跡第4号溝出土須恵器実測図II（縮尺 1/3）	123
Fig. 78	多々良込田遺跡第4号溝出土須恵器実測図III（縮尺 1/3）	124
Fig. 79	多々良込田遺跡第4号溝出土須恵器実測図IV（縮尺 1/3）	125
Fig. 80	多々良込田遺跡第4号溝出土須恵器実測図V（縮尺 1/3）	126
Fig. 81	多々良込田遺跡第4号溝出土須恵器実測図VI（縮尺 1/3）	127
Fig. 82	多々良込田遺跡第4号溝出土須恵器実測図VII（縮尺 1/3）	128
Fig. 83	多々良込田遺跡第4号溝出土須恵器実測図VIII（縮尺 1/3）	129
Fig. 84	多々良込田遺跡第4号溝出土瓦当実測図拓影（縮尺 1/3）	130
Fig. 85	多々良込田遺跡第4号溝出土瓦当及び埴輪実測図拓影（縮尺 1/3）	131
Fig. 86	多々良込田遺跡出土越州窯青磁及び緑釉陶器実測図（縮尺 1/3）	131
Fig. 87	多々良頃ノ元遺跡Aトレンチ土層図（縮尺 1/40）	（折り込み）
Fig. 88	多々良古川A・Bトレンチ土層図（縮尺 1/40）	（折り込み）
Fig. 89	多々良古川C・Dトレンチ土層図（縮尺 1/40）	（折り込み）
Fig. 90	多々良地区遺跡と環境地形図（縮尺 1/500）	（折り込み）
Fig. 91	津屋井田遺跡平面図及び地形図（縮尺 1/500）	134
Fig. 92	津屋井田遺跡Aトレンチ上層図（縮尺 1/40）	（折り込み）
Fig. 93	津屋井田遺跡出土木器実測図I（縮尺 1/4）	136
Fig. 94	津屋井田遺跡出土木器II（縮尺 1/4）	137
Fig. 95	津屋井田遺跡出土木器と土器（縮尺1/8, 1/3）	138
Fig. 96	津屋方才田遺跡平面図及び地形図（縮尺 1/500）	139
Fig. 97	津屋方才田遺跡出土土器実測図（縮尺 1/3）	140
Fig. 98	津屋方才田遺跡Aトレンチ土層図（縮尺 1/40）	（折り込み）
Fig. 99	津屋楠田遺跡Aトレンチ上層図（縮尺 1/40）	（折り込み）

Fig. 100 津屋塙田遺跡平面図と地形図（縮尺 1/500）	141
Fig. 101 津屋道田地点Aトレンチ土層図（縮尺 1/40）	（折り込み）
Fig. 102 箱崎大坪地点Aトレンチ土層図（縮尺 1/40）	（折り込み）
Fig. 103 箱崎大坪地点Bトレンチ土層図（縮尺 1/40）	（折り込み）
Fig. 104 箱崎糸切地点Aトレンチ土層図（縮尺 1/40）	（折り込み）

付 図 目 次

付図 1 五十川高木遺跡A地点遺構実測図（縮尺 1/60）
付図 2 多々良・津屋・箱崎地区条里関係字図（1/10,000）
付図 3 名子地区遺跡地形図（1/10,000）
付図 4 多々良込田遺跡遺構平面図（1/100）

表 目 次

序 説

Tab. 1 福岡市城新幹線路線内発掘調査地区と遺跡一覧	1
------------------------------	---

五十川高木遺跡

Tab. 2 第3号住居址出土古銭一覧	23
Tab. 3 A地点出土土器一覧	46
Tab. 4 A地点出土陶器一覧	51
Tab. 5 A地点出土磁器一覧	52
Tab. 6 A地点出土石製品一覧	55

弥 永 遺 跡

Tab. 7 A地点出土土器一覧	72
Tab. 8 B地点出土土器一覧	88
Tab. 9 B地点出土石器一覧	96

多々良・津屋地区の遺跡

Tab. 10 多々良地区遺跡出土土器一覧	107
-----------------------	-----

図 版 目 次

五十川高木遺跡

P.L. 1 (1)A地点近景北より (2)A地点発掘風景
P.L. 2 A地点遺跡全景北より
P.L. 3 (1)遺跡近景北東より (2)遺跡近景北西より
P.L. 4 (1)遺跡近景東南より (2)遺跡近景西より
P.L. 5 (1)第1号住居址南より (2)第2号住居址西より

- P.L. 6 (1)第3号住居址東より (2)第3号住居址と第4号溝北西より
P.L. 7 (1)第1号ピットと第2号・3号溝南より (2)第4号溝南より
P.L. 8 (1)第3号溝西端の状態 (2)井戸堆積土層断面西より
P.L. 9 (1)井戸全景西より (2)井筒出土状態
P.L. 10 (1)第3号住居址遺物出土状態 (2)洞古銅出土状態
P.L. 11 (1)第4号ピット青磁塊出土状態 (2)C-37・38区3層滑石製品出土状態
P.L. 12 出土土師器环
P.L. 13 出土土師器坏・皿・壺
P.L. 14 (1)黑色土器 (2)瓦器 (3)火合
P.L. 15 出土陶器 I
P.L. 16 (1)出土陶器 II (2)出土古銅
P.L. 17 白磁類 (I)
P.L. 18 白磁類 (II)
P.L. 19 青磁塊 I
P.L. 20 青磁塊 II
P.L. 21 (1)出土青磁 (2)越州窯系青磁
P.L. 22 青磁皿類
P.L. 23 出土滑石製品
P.L. 24 井戸出土古瓦頃
P.L. 25 (1)井戸出土木筒状製品 (2)井筒材
P.L. 26 (1)B地点遠景南より (2)B地点発掘状態
P.L. 27 (1)B地点土層断面 (2)同土層断面
P.L. 28 (1)須恵器出土状態 (2)石器出土状態

赤永遺跡

- P.L. 29 (1)A地点遠景東南より (2)A地点近景北より
P.L. 30 トレンチ完掘状態 (1. Aトレンチ, 2. Bトレンチ, 3. Cトレンチ, 4. Dトレンチ)
P.L. 31 トレンチ土層状態 (1. Aトレンチ, 2. Bトレンチ, 3. Cトレンチ, 4. Dトレンチ)
P.L. 32 A地点出土遺物
P.L. 33 (1)赤永遺跡B地点遠景東より (2)赤永遺跡B地点近景南より
P.L. 34 (1)I区発掘状態 (2)同完掘状態
P.L. 35 I区土層状態
P.L. 36 (1)第1号ピット (2)第2号ピット
P.L. 37 II区トレンチおよび土層 (1. Aトレンチ, 2. Bトレンチ, 3~4. Aトレンチ土層)
P.L. 38 I区石器出土状態
P.L. 39 II区Aトレンチ遺物出土状態

- P.L. 40 II区各トレンチ遺物出土状態
P.L. 41 I区およびII区各トレンチ出土土器
P.L. 42 Aトレンチ10層出土土器I
P.L. 43 Aトレンチ10層出土土器II
P.L. 44 Bトレンチ各層出土土器
P.L. 45 土器底部鉢底
P.L. 46 B地点出土石器I
P.L. 47 B地点出土石器II
P.L. 48 B地点出土軽轆車
P.L. 49 (1)C地点遠景北東より (2)C地点近景南より
P.L. 50 (1)発掘風景 (2)トレンチ発掘状態
- 多々良辻田・藏ノ元・古川遺跡
- P.L. 51 (1)作業風景 (2)作業風景
P.L. 52 (1)遺跡遠景 (2)作業風景
P.L. 53 (1)地・瓦・須恵器出土状態 (2)埴・瓦・須恵器出土状態
P.L. 54 (1)瓦出土状態 (2)第4号溝内遺物出土状態
P.L. 55 (1)第1・2号住居址全景 (2)第3号住居址全景
P.L. 56 (1)第4号住居址全景と遺物出土状態 (2)第6号住居址全景
P.L. 57 (1)第4号溝内瓦出土状態 (2)第4号溝内越州窯磁器出土状態 (3)第1号住居址内环形土器
出土状態 (4)第3号住居址内壹形土器出土状態 (5)第4号住居址内土器出土状態 (6)第
4号溝内石縁出土状態 (7)B-1区下層土器出土状態
P.L. 58 (1)遺構遠景 (B-1区南東より) (2)遺構遠景 (B-3区南東より)
P.L. 59 (1)遺構遠景 (B-4区南東より) (2)遺構遠景 (B-6区南東より)
P.L. 60 (1)遺跡遠景 (東北より) (2)須恵器出土状態 (3)土師器出土状態
P.L. 61 多々良藏ノ元・辻田遺跡出土遺物
P.L. 62 第2号溝出土遺物
P.L. 63 第1号・第6号住居址出土遺物
P.L. 64 第3号住居址出土遺物
P.L. 65 第4号住居址出土遺物
P.L. 66 第4号住居址出土遺物
P.L. 67 第4号住居址出土遺物
P.L. 68 第4号住居址出土遺物
P.L. 69 第4号住居址出土遺物
P.L. 70 多々良藏ノ元遺跡出土遺物
P.L. 71 第4号溝出土瓦及び埴

P L. 72 第4号溝出土瓦

P L. 73 第4号溝出土遺物

P L. 74 第4号溝出土須恵器

P L. 75 第4号溝出土須恵器

P L. 76 第4号溝出土須恵器

P L. 77 第4号溝出土須恵器

P L. 78 第4号溝出土須恵器

P L. 79 第4号溝出土師器

P L. 80 第4号溝出土遺物

津屋道田・津屋楠田遺跡

P L. 81 (1)津屋道田地点の流木出土状態 (2)津屋楠田遺跡遠景(東南より)

P L. 82 (1)遺跡遠景(南より) (2)杭列近景(東南より)

津屋方才田遺跡

P L. 83 (1)遺跡遠景(北西より) (2)杭列近景(北西より)

P L. 84 (1)杭列とその層序 (2)杭列とその層序 (3)杭列と同層出土の土師器 (4)土師器近影

津屋井田遺跡

P L. 85 (1)遺跡遠景(北西より) (2)遺跡遠景(東北より)

P L. 86 (1)遺構全景(東北より) (2)全景(西南より)

P L. 87 遺物出土状態(東北より)

P L. 88 (1)遺物出土状態(北東より) (2)遺物出土状態(東南より)

P L. 89 (1)木棗山土状態 (2)木棗出土状態 (3)フォーク状木器出土状態 (4)木器出土状態

(5)木器出土状態 (6)木器出土状態 (7)建築材出土状態

P L. 90 (1)矢板出土状態 (2)土器出土状態 (3)土器出土状態

P L. 91 津屋井田遺跡出土木器

P L. 92 津屋井田遺跡出土木器

箱崎地区的調査

P L. 93 (1)箱崎大坪地点発掘区遠景 (2)箱崎駒込地点発掘区遠景

名子地区的調査

P L. 94 (1)名子地区遠景(湯ヶ浦より名子地区をのぞむ) (2)第1地点発掘区遠景

P L. 95 (1)第1地点杭列と燧出土状態 (2)第1地点燧出土状態

P L. 96 名子第1地点出土肥前窯系磁器

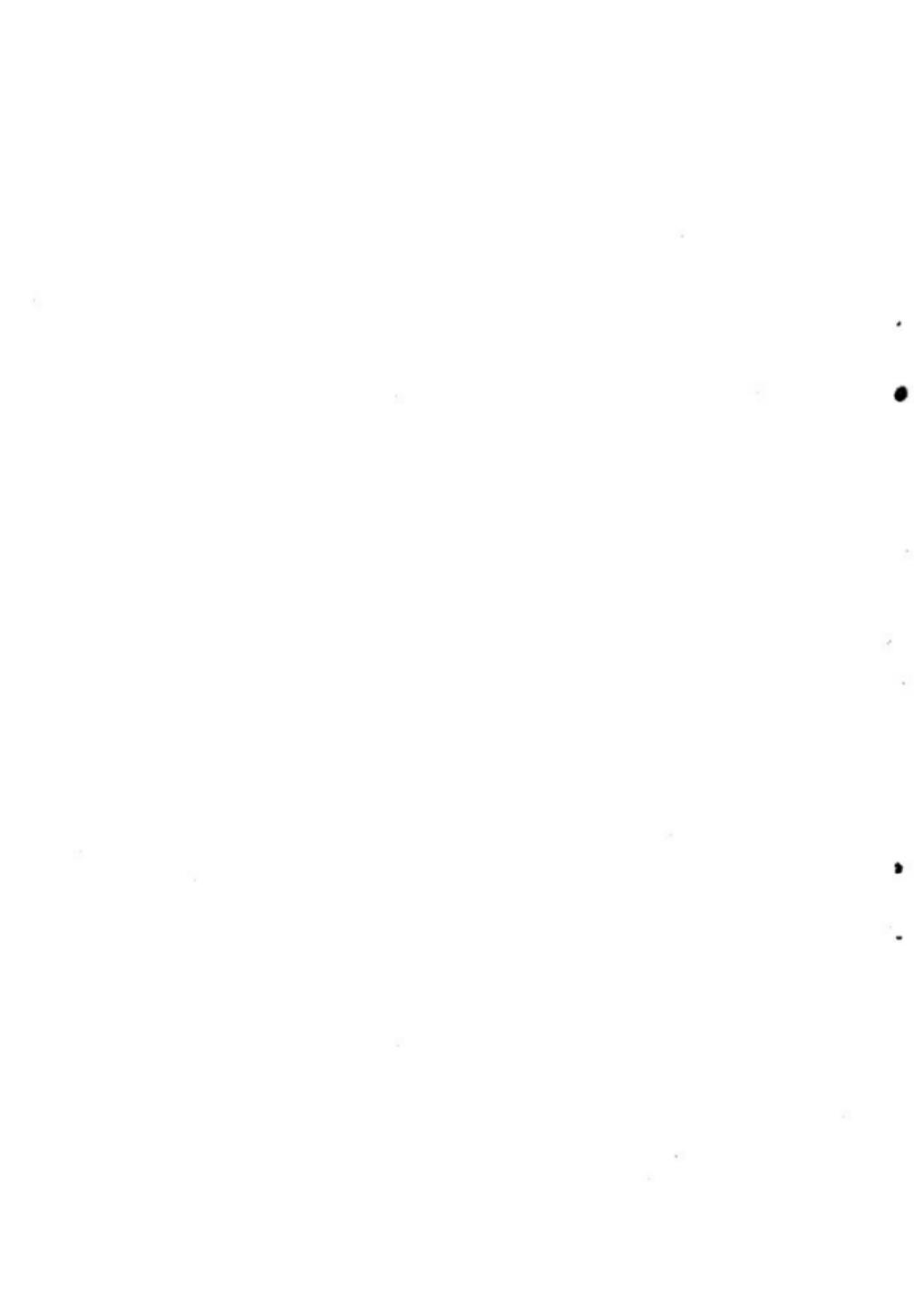
P L. 97 第2地点発掘区全景

P L. 98 第2地点作業風景

P L. 99 (1)第3地点発掘区全景 (2)第4地点全景

序 説

第1章 調査に至る経過.....	1
1. 調査の契機.....	1
2. 調査遺跡.....	1
第2章 調査の組織と構成	3
第3章 調査の経過.....	5



序 説

第1章 調査に至る経過

1. 調査の契機

昭和44年9月、日本国有鉄道は山陽新幹線岡山、博多間の建設について運輸大臣の認可を受け、同年12月に路線を決定し、新幹線九州乗り入れが現実化した。このため、新幹線路線内の埋蔵文化財に対する保存の要が起き、国鉄下関工事局より福岡県教育委員会に対し、調査依頼がなされた。福岡県教育委員会は昭和45年度に分布調査を実施し、その結果を国鉄当局に報告すると共に、存在する遺跡に対して、文化財保護の立場から、万全の配慮を求めた。

その後、国鉄当局から埋蔵文化財発掘調査の委託があり、福岡県教育委員会はそれを受託した。しかしながら、福岡市域内の埋蔵文化財については、福岡市教育委員会で調査を実施するのが適切であるということより、国鉄、県、市三者で協議し、福岡市域内の埋蔵文化財発掘調査を福岡市教育委員会が受託することになったのである。以後、国鉄福岡工事事務所、福岡市教育委員会で協議の上、調査に関して、調査費、調査期間、発掘調査遂行のための諸条件整備、新たな遺跡の発見の場合の配慮、等を含む基本的事項についての合意を経て、福岡市教育委員会は昭和46年度より3ヶ年にわたる継続事業として、発掘調査に着手することになった。

2. 調査 遺跡

福岡県教育委員会が実施した分布調査の結果と、福岡市教育委員会の踏査結果および調査途上において新たに確認したものによって発掘した遺跡、地点は次のとおりである。

福岡市域内に分布する遺跡一覧					(番号は分冊調査番号)
地名	番号	位置	面積	調査結果	文書番号
五井町地区	11	高丘字下五井10番地(北側)10番地	1,750m ²	未生~9世紀、古墳時代	54年6月調査報告書
	12	同上	650m ²	+	-54年6月2日
新木地区	13	新木字新木町1丁目2番地	1,250m ²	江戸~李代、後醍醐天皇	54年6月調査報告書
	14	同上	1,000m ²	+	新木地区3月
	15	同上	250m ²	+	-54年6月
	16	同上	1,000m ²	+	-
新木地区	17	新木字新木町2丁目2番地	300m ²	未生~李代	54年6月調査報告書
	18	同上	300m ²	+	新木地区3月
	19	同上	300m ²	+	-54年6月
	20	同上	300m ²	+	-
本郷地区	21	本郷字本郷1丁目2番地	2,100m ²	未生~7世紀、後醍醐天皇	54年6月調査報告書
	22	同上	1,000m ²	+	54年6月2月
	23	同上	5,500m ²	+	-54年6月
本郷地区	24	本郷字本郷2丁目2番地	1,200m ²	未生~7世紀、後醍醐天皇	54年6月調査報告書
	25	同上	750m ²	+	54年6月
	26	同上	600m ²	+	-54年6月
	27	同上	600m ²	+	-
新郷地区	28	新郷字新郷1丁目2番地	1,000m ²	未生~7世紀、後醍醐天皇	54年6月調査報告書
	29	同上	1,000m ²	+	54年6月

第2章 調査の組織と構成

1. 調査の組織

調査委託 日本国鉄道福岡工事事務所

調査主体 福岡市教育委員会

2. 調査構成

調査担当 福岡市教育委員会文化課埋蔵文化財係

(事務) 青木 崇・清水義彦・石橋 博・三宅
安吉・岩下拓二・木村義一・徳永照代
西村桂子・永田正子・千輪ヨシエ

(技術) 三島 格・塙屋勝利・折尾 学・柳沢
一男・二宮忠司・立石泰久

(資料整理) 薮野智恵子・池上富美子・花畠照子・井上
徳子・板谷澄子・寺坂文香・香月芳子
橋智子・筑紫敦子・秋山千佳子・今泉
宣子・松浦重遠・砂川寿男・田口哲美

調査指導

(考古学) 鎌山猛・岡崎敬・森貞次郎・小田
富士雄・藤井功

(建築史学) 太田静六・土田光義

(地質学) 浦田英夫

(花粉分析学) 畑中健一・西田民雄

3. 調査協力者

国鉄関係 沢瀬清美・海原正二・属勉・長安智重・原口修・上杉
俊直・若松安志・徳永勝・吉岡才・高谷任・中川正義・高
島義勝・境正弘・笠原義行

五十川地区 大村重夫・谷一男・谷義実・武藤
正忠・谷鎌助・内野栄次郎・星山利久
富永光雄・八尋辰雄・富永千里

内野ヒサエ・谷　　聰・木山ツネエ・山根
キミエ・進藤カオル・宮永金子・進藤フデノ
谷　　恵美子・谷　　英子・谷　　照子・橋本
紀子・藤村佳公惠

弥永地区

藤　　常次・大賀　清・藤　秀海・大賀
健・藤　ハナ・藤　ヨシエ・新飼芳子
新飼　好・原口スエノ・藤　ヤツエ・大賀
勝子・藤　ヒサノ・井上房子・新飼クニヨ
香月久子・新飼雪野・藤　ツネ子・新飼
雄子・藤　千代子・成田サナエ・新飼キミ子
池見助弘・黒木包雄・池見善吉・黒木
忠規・池見義信・黒木義人・原田ふさえ
長　みね子・黒木あさの・池見ひさ子・柴田
トキノ・黒木かね子・黒木博子・黒木恵子
黒木博子・黒木妙子・池見ふさえ・石川
マサ子・池見三枝子

多々良津屋地区

後藤周二・徳永　弘・徳永親光・久木田
育穂・大歯ミツ子・大神ミヨ子・松田小夜子
大神トミ子・大神キミ子・後藤満代・後藤
美代子・蓑原ハツ子・関　八重子・蓑原シズノ
大神タキノ・雨堤静江・大神タキノ・楳原
スミ子・徳永マツ子

学術協力

杉原莊介・トレイガー・オックスフォード大学教授
高島忠平・下川達弥・龜井明徳・栗原
和彦・森田勉・樋口一成・新谷武夫

上記以外の各地区、各分野の多くの方々からも、発掘調査および資料整理の過程でさまざま
な御協力、御援助をいただいた。

これらの方々に対し、厚くお礼を申上げる次第である。

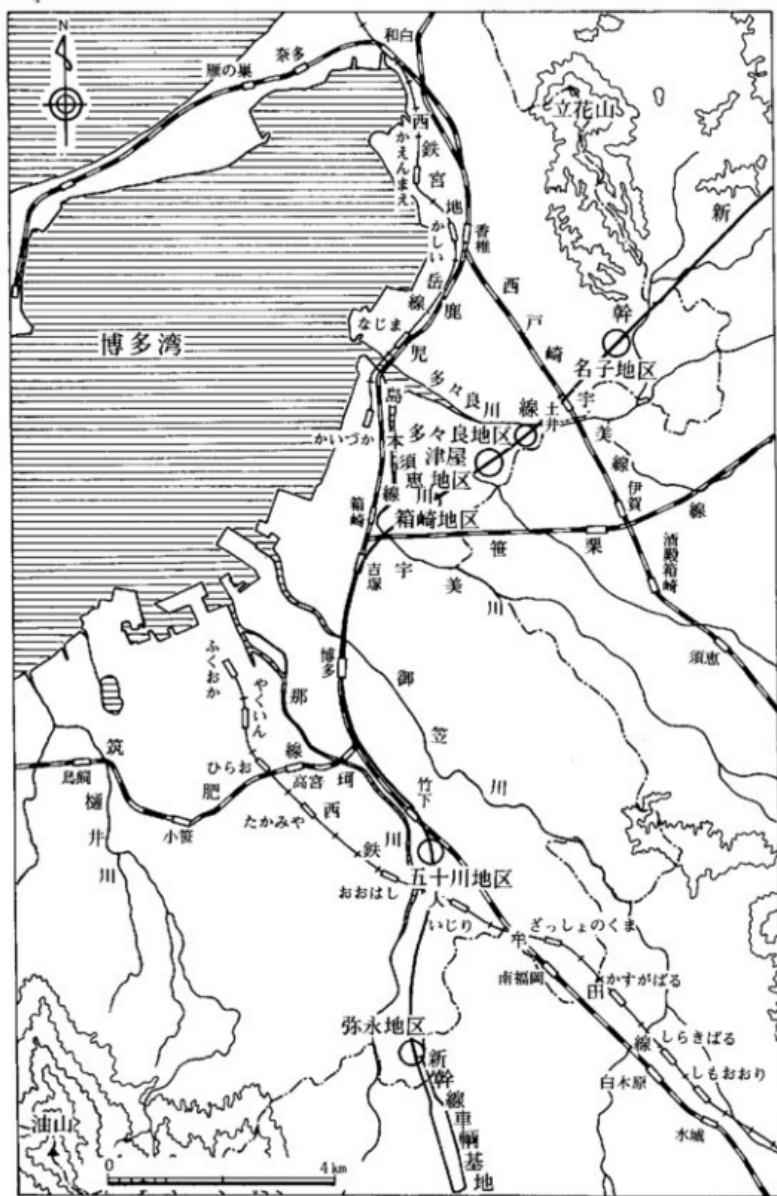


Fig. 1 福岡市域新幹線路線と調査地点図 (縮尺 1/100,000)

第3章 調査の経過

すでに述べたように、調査は福岡市教育委員会文化課の昭和46年度より3ヶ年にわたる継続事業として着手されるに至ったが、用地買収交渉が難行したため、当初の発掘計画が二転、三転し、実際に発掘調査を開始したのは、昭和46年9月からである。発掘調査から資料整理、報告書作成に至る全般の経過は次のとおりである。

五十川地区の調査

昭和46年9月1日より発掘調査に着手した。最初にB地点の発掘から開始し、10月中旬よりA地点に移動した。両地点の発掘調査を終了し、排土埋め戻し作業を完了したのは、昭和47年2月中旬である。

弥永地区の調査

昭和47年3月7日より発掘調査に着手した。まずC地点より始め、次にB地点、最後にA地点の発掘調査を行ない、すべての現地調査を終了したのは昭和47年8月下旬である。

名子地区の調査

昭和47年9月上旬より発掘調査に入り、本地区の4地点の調査を終了したのは昭和47年10月下旬である。

多々良・津屋・箱崎地区の調査

本地区は昭和47年11月下旬より開始した。当初の調査計画では、箱崎、津屋、多々良各地区を順次発掘する予定であったが、新幹線工事の工程上の都合によって、各地区を行来する結果となつた。調査はまず箱崎大坪地地点より行ない、続いて津屋地区の井田遺跡と方才田遺跡の調査を並行して行なつた。この後多々良地区に移り、最初に込田地点、続いて古川地点、最後に蔵ノ元遺跡の発掘を行なつた。多々良地区の調査を終了した後再び津屋地区に戻り、道田地点と柿田遺跡の発掘を順次行なつた。最後に箱崎地区的祇迦地点を調査し、これらの地区をすべて終了したのは昭和48年5月下旬である。

資料整理および報告書作成

当初の事業計画では昭和46年当初より2ヶ年を発掘調査に充て、昭和48年度を資料整理および報告者の作成の期間としていたが、昭和46年度の発掘調査開始が遅延したことによって昭和48年度まで発掘調査がずれ込んだことや、発掘調査員の異動、それにも増して出土資料が莫大な量にのぼることなどもあって、資料整理期間を1年延長することとなった。

以上のように発掘調査から報告書作成まで4年度にまたがる事業となり、その期間は通常すると3年6ヶ月という長期にわたるものである。これらの期間中、実に多くの方々から御協力御援助を頂き、無事にすべての調査を完了することができた。特に作業員の方々には、真夏の



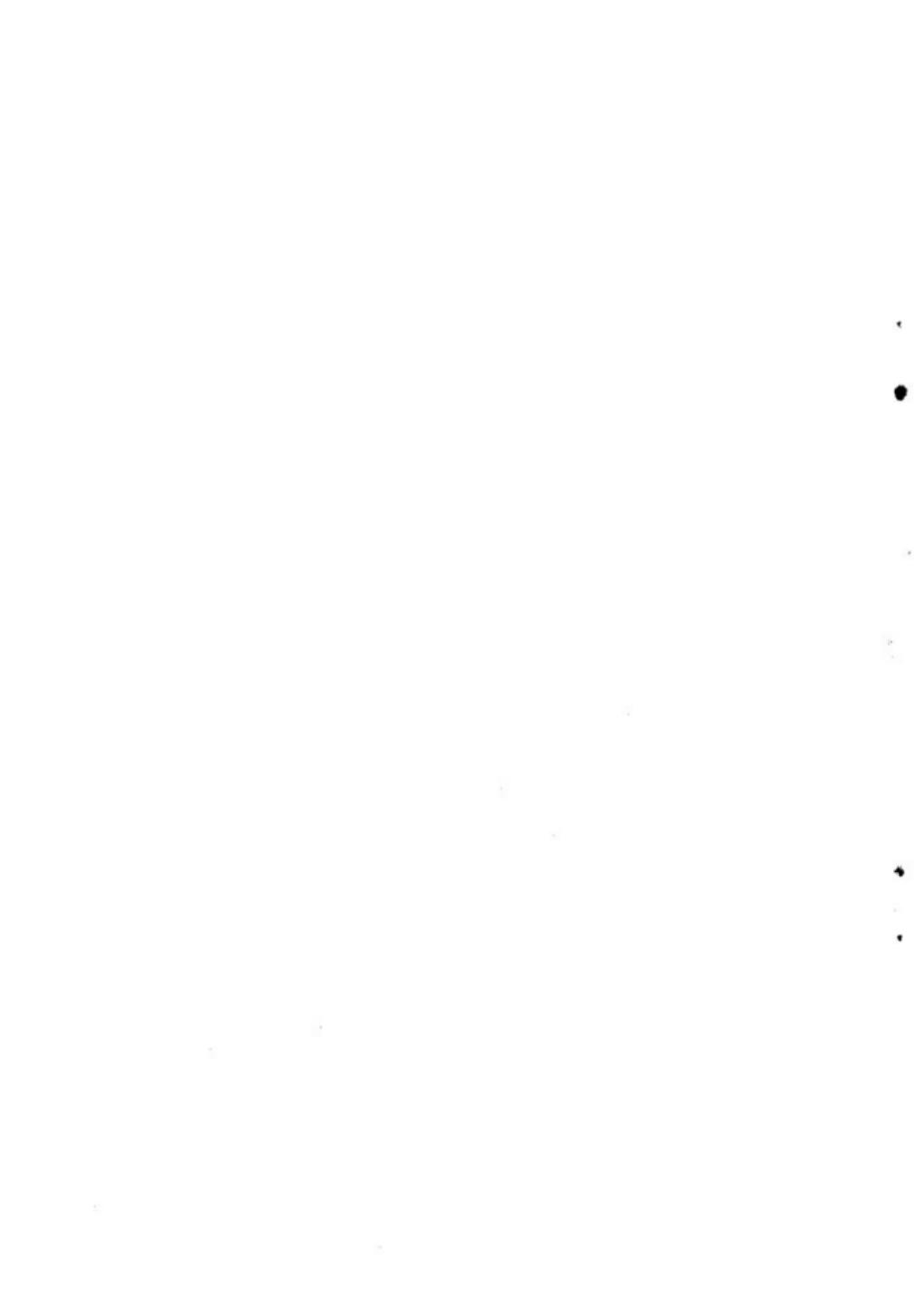
Fig. 2 五十川高木遺跡現地説明会風景

炎天下、真冬の嚴寒の中をものともせず、きわめて献身的な御協力を頂いた。また、各地区的町内の方々からは、宿舎の提供をはじめ諸々の調査上の便宜を頂いた。

発掘調査の期間中、やがて失われゆく遺跡の姿を少しでも多くの方々に知って頂く意味で現地説明会を催し、小学生からお年寄まで多くの人達の見学があった。特に五十川地区では、宮竹公民館の武藤主事の御協力により、調査期間中4回にわたって郷土史講座を開講したが、常時60人ほどの地区の方々が集まり、夜おそらくまで熱心に郷土の歴史を語り合った。

五十川高木遺跡

第1章 遺跡の環境	7
1. 地理的環境	7
2. 周辺の遺跡環境	7
第2章 調査の概要	10
第3章 A地点の調査	12
1. 発掘区	12
2. 層位について	13
3. 遺構について	13
4. 出土遺物	18
第4章 B地点の調査	58
1. 発掘区	58
2. 層位	58
3. 出土遺物	61
第5章 まとめ	63



五十川高木遺跡

第1章 遺跡の環境

1. 地理的環境

博多湾に向かって開ける福岡平野は、東側を山郡山地に、南側から西側を背振山地にさえぎられており、西部は背振山地より派生した長垂山丘陵と鷲ノ巣山丘陵に囲まれ、宝見川流域に広がる早良平野、中部は四王寺山塊より派生する月隈丘陵に東を限られ、那珂川、御笠川の流れに開ける福岡平野、東部は北を限る立花山を境とし、宇美川、多々良川の流れをもつ柏原平野といふ3つの地域に区分される。

本遺跡を含む中部地域は、背振山地と山郡山地が相接する二日市周辺を狭隘部として、細長く北西へ向かって展開する。この地域の河川は御笠川が大宰府東部に水源を発し四王寺山塊の北麓線に沿いつつ北西へ流れ、背振山地東北麓に水源を発する那珂川が北流しており、この両河川は五十川から板付を結ぶ中流域で流れが狭り、下流域にデルタを形成しつつ博多湾に注いでいる。五十川周辺は、西方に那珂川、東方に御笠川に挟まれた両河川の中流域にあたり、この両河川によって形成された沖積地である。この地域には低平な河岸段丘が発達しており、さらにまた、花崗岩を基盤岩としてその上に粘土、砂礫、火山灰などの洪積世堆積土をのせる、標高10~20m前後のいくつかの小独立丘陵が点在する。井尻および五十川の台地、諸岡山丘陵板付丘陵などである。

2. 周辺の遺跡環境 (Fig. 3)

このような地形的環境をもつこの地域には、すでに遠い昔から人々の生活空間となっておりそれを示す遺跡は豊富である。以下、これまで知られている遺跡について概観してみよう。

先土器・縄文時代 この地域はその地形的条件とあいまって、この時代の遺跡は知られていないかった。しかしながら、五十川の東南東1.5kmの位置にある諸岡山丘陵から、昭和33年に中原志外顕氏によってナイフ形石器が採集され、さらに昭和48年に福岡市教育委員会によって行われた諸岡遺跡の調査においても先土器時代の石器類が検出され、この地域にも先土器時代の遺跡があることが明らかとなった (Fig. 3 の 5)。福岡市教育委員会は、昭和47年より板付遺跡の整備を図るために板付遺跡調査事務所を設置すると共に、周辺の遺跡の調査をも行なっており、今後、この時代の遺跡が解明されると思われる。

弥生時代 この時代の遺跡が豊富なことが、この地域の顯著な傾向である。とはいえる、遺跡

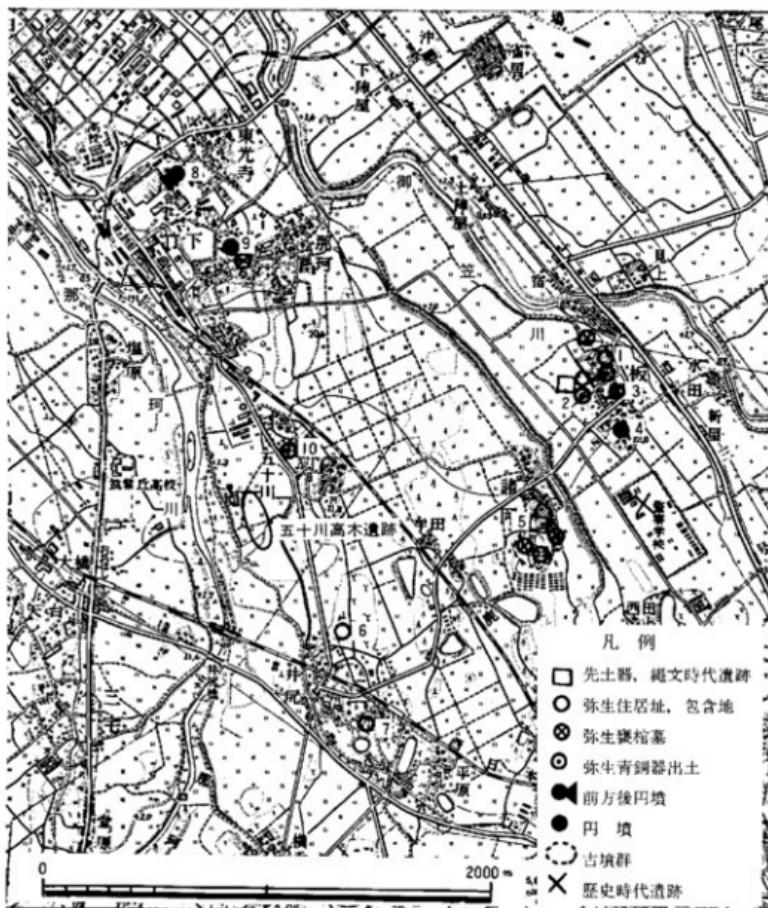


Fig. 3 五十川高木遺跡周辺図 (縮尺 1/25,000)

を埋蔵文化財として社会的に認識する学史的発展の過程と、現実の開発の速度とのギャップによって、その全容を知ることなく失われた遺跡が多いことも、この地域の特色であろう。

この時代の著名な遺跡を挙げると、五十川地区では銅鉢の溶范を出土した妙楽寺遺跡（Fig. 3の10）があり、井尻地区では壺棺、土器、石器を出土した井尻栄町遺跡（Fig. 3の6）、弥生中期の住居址で知られる地獄神社遺跡（Fig. 3の7）がある。前述の諸岡丘陵では、戦前に壺棺が出土し、昭和28年頃には神社建立工事に伴なって壺棺の中より、細形銅劍、貝輪などが発見されている。さらに福岡市教委の昭和48年～49年にかけての調査においても、弥生中期を主体とする壺棺墓、窓穴などの遺構が検出されている（Fig. 3の5）。五十川の東方約1.8kmの位置には、船載青銅器を副葬した壺棺を出土した板付田端遺跡（Fig. 3の3）、弥生前期初頭以来の集落址として著名で、江戸時代に国产青銅器を出土した板付遺跡（Fig. 3の1）をのせる板付丘陵があり、その西隣では水田址の調査が行われている（Fig. 3の2）。また五十川の北方1kmには銅戈の溶范を出土した那珂八幡遺跡（Fig. 3の9）があり、那珂川、御笠川の中下流域にかけて、春住遺跡、比恵遺跡をはじめとする多くの弥生時代遺跡が分布している。

古墳時代 弥生時代の遺跡数に比して数が少なく、集落址などは確実でない。諸岡丘陵では5基の円墳が知られ（Fig. 3の5）、板付丘陵には小円墳の板付八幡古墳がある（Fig. 3の4）。五十川の北方には那珂八幡古墳（Fig. 3の9）、さらにその西北方には前方後円墳の劍塚古墳（Fig. 3の8）が知られている。

歴史時代 この時代の遺跡も確実に把握できないが、諸岡遺跡では土師器、青磁器を出土する遺構が検出されており、板付丘陵南方の警察学校敷地は須恵器、磁器、古瓦類などの出土が知られている。

主要関係文献

- 福岡市教育委員会『福岡市埋蔵文化財遺跡地名表第2集』（福岡市埋蔵文化財調査報告書第9集）1970年
- 福岡市教育委員会『福岡市とその周辺の文化財』1969年
- 森貞次郎・岡崎敬『福岡縣板付遺跡』（『日本農耕文化の生成』）日本考古学協会編 1961年
- 中山平次郎『銅鉢銅劍の新資料』（『考古学雑誌11卷1号』）1920年
- 中山平次郎『井尻の弥生式遺跡』（『考古学雑誌14卷12号』）1924年
- 中山平次郎『井尻及寺福塚の壺棺』（『考古学雑誌17卷12号』）1927年
- 中山平次郎『焼米を出せる窓穴址』（『考古学雑誌14卷1号』）1923年
- 鏡山隆『環濠住居址小論』（『史測58輯』）1941年
- 原田大六『日本古墳文化一叢國王の環境』 1954年
- 森木六爾『筑前発見の磨製石鎌』（『日本原始農業』）東京考古学会 1933年
- 『東光寺古墳』（『福岡県史蹟名勝天然記念物調査報告書第一輯』）1925年
- 1都土の歴史を語ろう資料古代編』那珂公民館 1966年
- 『郷土の歴史を語ろう資料第4集』那珂公民館 1969年
- 筑紫野史研究会『見捨てられた春住遺跡』（筑紫野史研究会公報第2集）1972年
- 福岡市教育委員会『板付遺跡調査報告』（福岡市埋蔵文化財調査報告書第8集）1970年
- 福岡市教育委員会『板付周辺遺跡調査報告書（T）』（福岡市埋蔵文化財調査報告書第29集）1974年

第2章 調査の概要

1. 調査地点について

五十川地区の調査地点は、昭和45年に実施された福岡県教育委員会の分布調査番号のA11地点とA12地点にあたる。しかしながら両地点は、新幹線路線幅に限定されているものであるところから本書では両地点を合わせて、その所在する町名を付して五十川高木遺跡と呼称することにし、A12地点をA地点、A11地点をB地点として報告する。

A地点 五十川の集落が立地する段丘の西南端部に位置し、周囲の水田面との比高差1.5m、標高10mを測る畑地に立地する。A地点西方0.5kmには那珂川が北流し、東側は住宅が建ち並び、竹下から井戸へ抜ける県道までわずか100mの地点である。

B地点 A地点の北方約200mの位置にあり、標高9mを示す水田を利用して畑作が行われているところである。県道を挟んですぐ西側は福岡保養院があり、すでに述べた妙楽寺遺跡と県道を挟んで西方へ100mの地点にあたる。

2. 調査経過

昭和46年9月より五十川地区の発掘調査に着手し、まずB地点の調査を9月3日より開始した。B地点は南北140mと長大な調査対象地であったが、全面にグリットを設け完掘を期した。B地点の排土埋め戻し作業と並行して10月10日よりA地点の発掘調査にかかった。A地点は発掘面積が小さかったけれども、比較的長期間を要し、両地点の調査をすべて終了したのは、昭和47年2月中旬である。

以下、A地点、B地点の順で調査の結果を報告する。

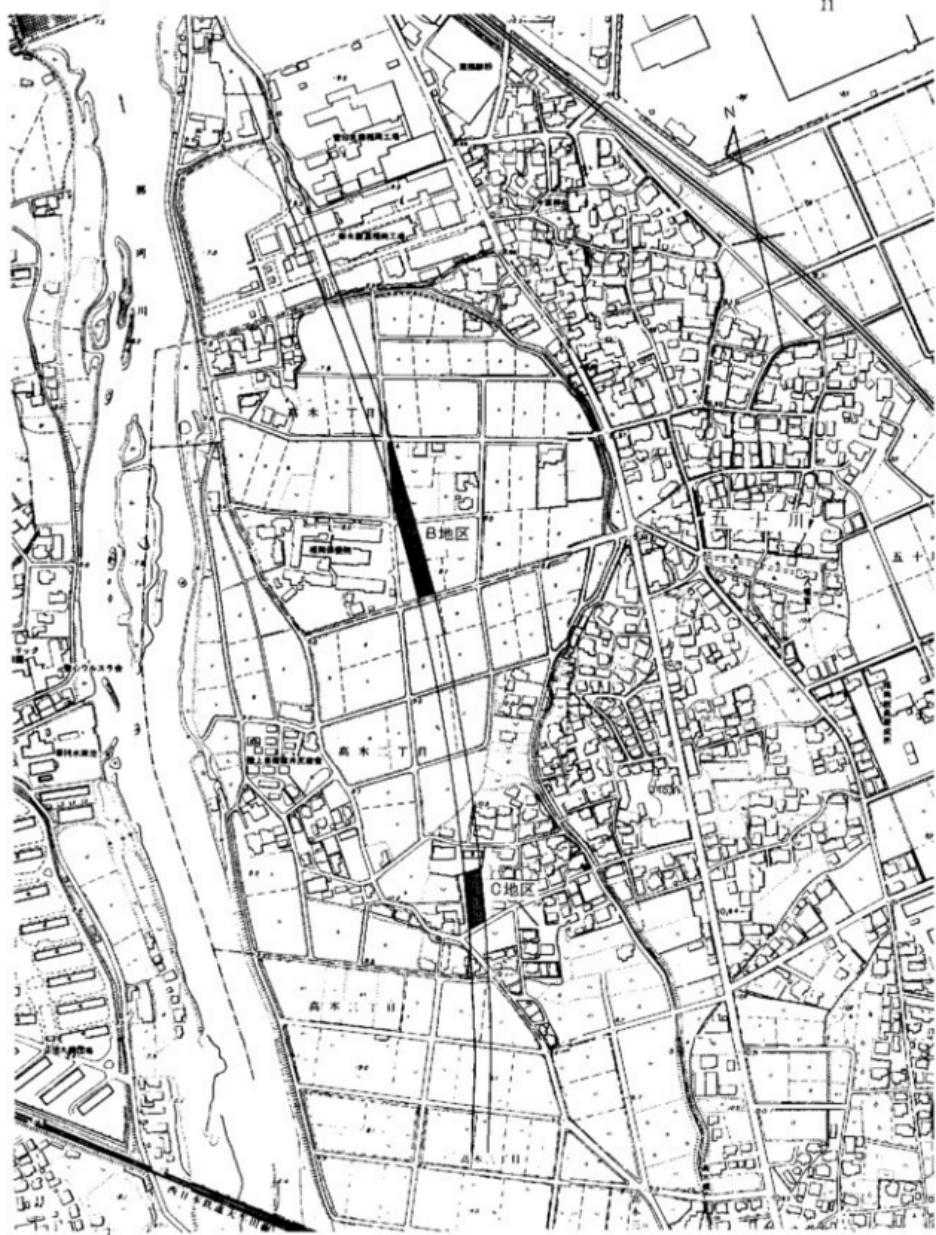


Fig. 4 五十川高木遺跡調査地点図 (縮尺 1/5,000)

第3章 A地点の調査

1. 発掘区 (Fig. 5)

新幹線路線の中心線を主軸として利用し、ほぼ東西南北に $4m \times 4m$ のグリッドを、東西に5列、南北に9列設定し、グリッドには西から東へA～Eのアルファベット、北から南へ35～43とアラビア数字を付して、1グリッドの呼称については、たとえば、B-35区のようにB列から東、35列から南の区画を指すようにした。

発掘調査は最初、C列東側に幅2m、長さ24mのトレンチを北から南へ設定し、土層の状態を観察することより着手した。その結果、各層に豊富な遺物の出土を見、さらに遺構の存在することが確認されたため、グリッドによる発掘に切り換え、遺構の検出につとめた。

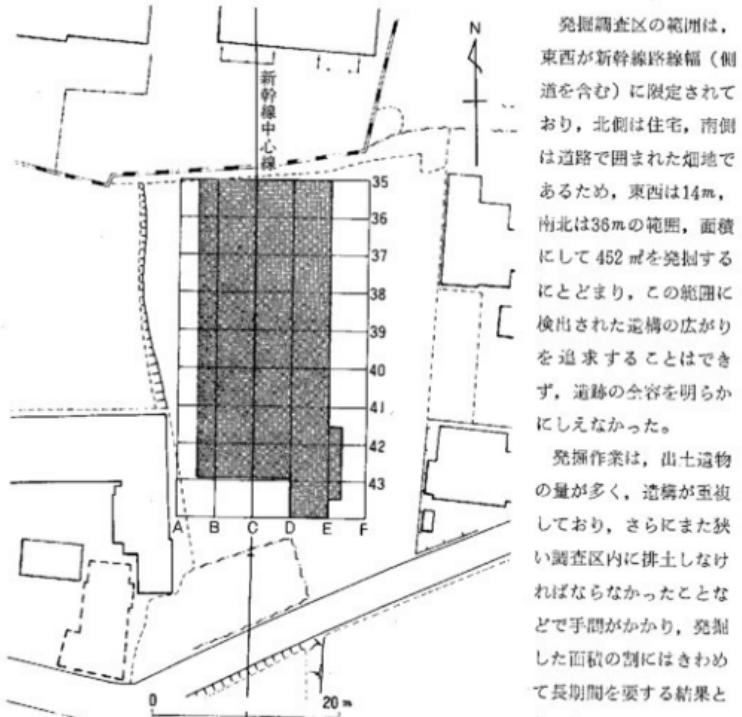


Fig. 5 A地点発掘区平面図 (縮尺 1/600)

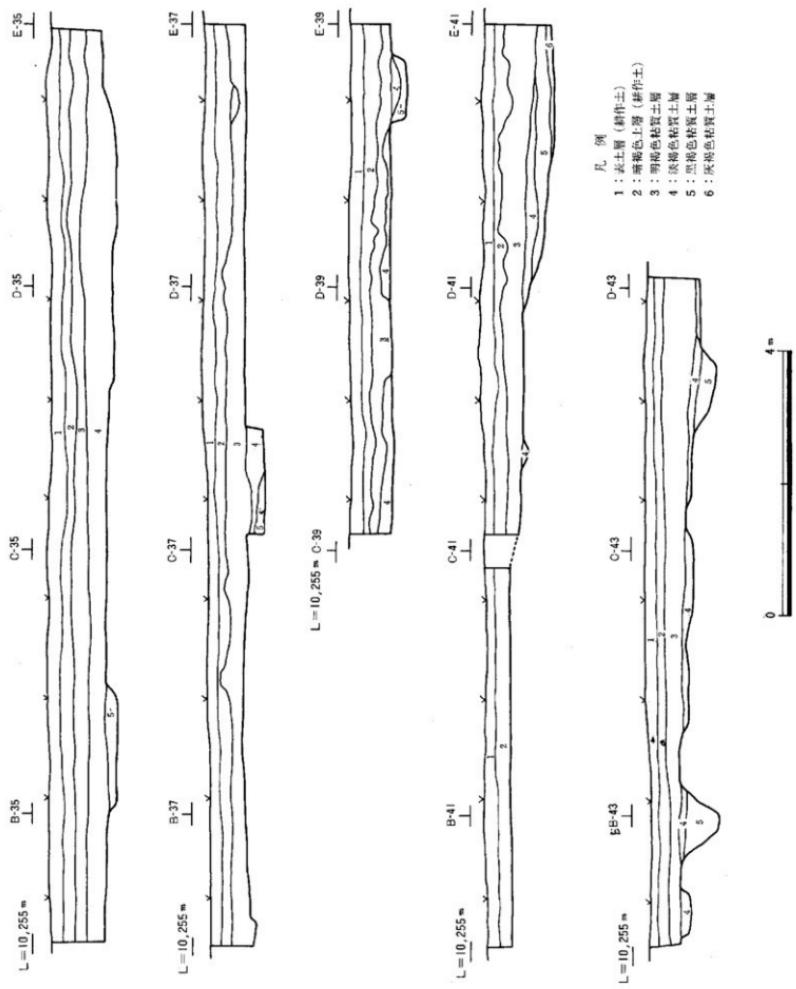


Fig. 6 A地点グリット構造地土壤図 (縮尺 1/50)

2. 層位について (Fig. 6)

調査区畠地の耕作者の話によると、10数年前にごぼうの作付けを行なうためほほ50~60cmの深さまで大穴返しを行なったということである。土層図に示すようにその深さまでは表土層を含めて3層に分離できるが、包含される遺物は土師器、須恵器、陶磁器などが等しく検出され、擾乱を受けていることが知られる。しかしながら第3層は厚く遺物の包含量が最も多い。この層は調査区南側に厚く北側になるにつれて薄くなっている。この層の下には遺物を含む淡褐色粘質土層が堆積しているが、第3層が漸移的に変化しているものであり、図上では一応区別したが遺物の包含状況よりして層位的に分離できないようである。この層は第3層の状態と関連して第3層が薄い調査区北半に厚く、南半は薄くなっている。したがって、この層も第3層の薄い部分は後世の擾乱を受けているところがある。この層の下は酸化鉄分を含む黄褐色の微砂を混じえる結質の強い土層があり、本遺跡の地山となっている。遺構はこの地山に掘り込まれているが、層位的な土層の変化を伴なわない遺構の重複があり、調査はきわめて困難であった。この地山は調査区の西南へかけて砂粒を多く含む土壤に変化する傾向にある。遺構内には、第4層の流れ込みの下に遺物を含む黒褐色粘質土がレンズ状に入り、第2・第3号住居址ではその下に灰分を含む土層が認められる。遺構内より出土する遺物であっても相当隔てた地点の第2層あるいは第3層より出土するものと接合するものもあり、必ずしもプライマリーな状態ではない。

3. 遺構について (付図1)

調査区が狭い範囲に限定されていることから、全体のまとまりを把握するには至っていないが、検出された遺構は、堅穴住居址3棟、井戸1基、溝7条の他、大小のピット、柱穴状遺構、溝状遺構などがある。溝以外の遺構は調査区の南半に集中しており、もっと西南の方向に広がる傾向を示しており、このことは調査区西側の地表が段をなして落ちていることと、南側に地山が傾斜したことからもうかがえる。

a. 堅穴住居址

C-37区にかかる位置に第1号住居址、D-40区に第2号住居址、B-38からB-39区にかけて第3号住居址を検出した。

第1号住居址

黄褐色粘質土を掘り込んで營まれており、プランは不規長円形を呈し、東西に長くなっている。南側の壁には階段状の平坦な造り出しが認められる。壁はやや内側に傾斜しており、南側では壁高は約45cmと高く、北側では地山の傾斜に沿って南側より約10cm低くなっている。掘り方の平面は長径5m~40cmを測り、短径4m~40cmを測る。

内部には床面直上にうすい黑色土が堆積しており、その上に第4層がレンズ上に乗り、さら

に第3層がその上に流れ込んでいる。床面に堆積する黒色土層中には多量の土師器、黒色土器が含まれるが、第3層および第4層に含まれるものと組合せを異にしており、時期的に古く考えられる。本遺構に伴なう柱穴などは検出されず、住居址と認定する積極的な根拠はないが、一応、住居址と考えることにした。

第2号住居址

D-40区に検出されたが、東側が調査対象地外のため、西側4分の3の発掘にとどまった。黄褐色粘質土の上面を掘り込んで營まれており、平面形は隅丸方形を呈し、東西のさしわたしは5m-90cmを測る。壁面は一般的な窓穴住居址のような垂直の立ち上がりをもたず、2段の傾斜をもって浅皿状を呈す床面に接する。住居址中心より北よりの位置に径約50cm、深さ25cmのピットがあり、この住居址に伴なうものと考えられる。また南側の壁から床にかけて炭化物の厚い堆積が認められた。また床面、壁面に柱穴次の掘り込みが検出された。本住居址覆土中からは土師器、陶器、磁器、石製品などが出土したが、層位的には分離できなかった。

第3号住居址

B-38区からB-39区にかけて検出された。西側は調査区が限定されているため住居址西隅の状態は不明である。この住居址も第2号住居址と同様の形状を呈し、プランは大体隅丸方形を呈し、壁面は顕著な立ち上がりを見せず、床面の傾斜との差をもって壁となしている。第2号住居址と同様に、北西から南東の方針をとって營まれている。覆土中には多量の土師器、陶磁器、石製品が含まれておらず、床面からは土師器と共に古鏡が出土している。覆土に含まれる遺物と床面上の遺物の間に形態的な相違は認められず、同時期と考えられる。

b. ピット

調査区のはば全面に不規格円形を呈す大小のピットが散在して検出された。最も大きなもので長径348cm、短径198cm、深さ100cm(第8号ピット)、小さなもので長径40~50cm、短径30~40cm、深さ20~30cmのもので、いずれもこの間に含まれる。これらのピットはいずれも黄褐色粘質土の地山に掘り込まれている。内部には土師器、土師質土器、瓦質土器、陶器、磁器、滑石製品を含む暗褐色土が堆積するが、量的には少量であり、これらのピットの性格は不明である。第2号ピットについては、第3号溝の東端部に含まれるもので図示されていない。

c. 溝および溝状遺構

調査区北側のA~Dまでの35・36区には、東から西へ並行して走る溝が検出され、それぞれ北から第3号溝、第2号溝とした。また第2号溝の南側のD-36区には細い溝が東西に検出されており、第1号溝とした。また第3号溝には北側から接続する幅が広く深い溝が認められ、B-35区のものを第4号溝、D-35区のものを第5号溝とした。さらにC-42区南端よりA-37区西端へ続く溝が検出され、第6号溝とした。また、この第6号溝には南北へ続く溝があり、第7号溝とした。

これらの溝の中で第3号溝は第3号ピットの掘り込み面より下層に検出され、第2号溝と同じ面で掘られていた。幅65cm前後、深さ45cm前後の断面逆台形を呈す溝で、床は東から西へ傾斜しており、東西両端の比高差は20cmである。西端部は床面が段状に約10cm高くなっている。第2号溝は第3号溝とほぼ平行に流れているが、やや両側にゆるくカーブする。幅40cm前後、深さ20cm前後の浅い溝である。第4号溝および第5号溝は幅160cm前後、深さ10cm前後のきわめて浅い溝であり、第3号溝に流れ込む。第6号溝は第11、第12号ピットおよび第3号住居址の面では検出されず、さらに第7号溝も第3号住居址の床面から検出した。いずれも幅は北側に向かって狭くなっていくが、最大幅60~70cm、深さ50cm前後を示し、断面は逆台形を呈している。同時期のものと考えられる。

d. 柱穴構造

調査区中央部から多数の柱穴構造が検出されたが、それらの掘り込みの時期は最低2時期ある。しかしながら、建物を具体的にすることはできなかった。

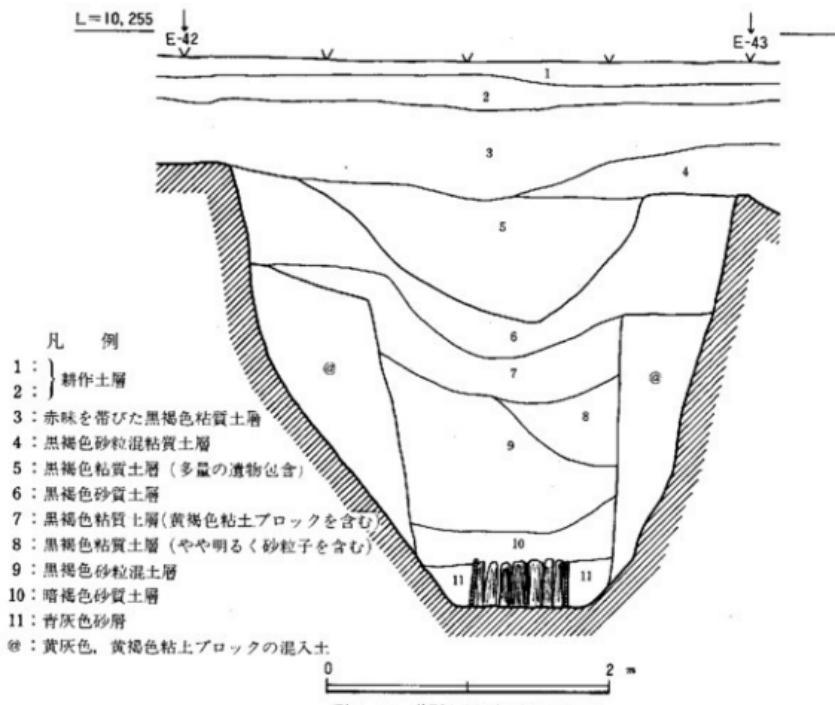


Fig. 7 井戸内土層図(縮尺1/40)

五十川高木遺跡

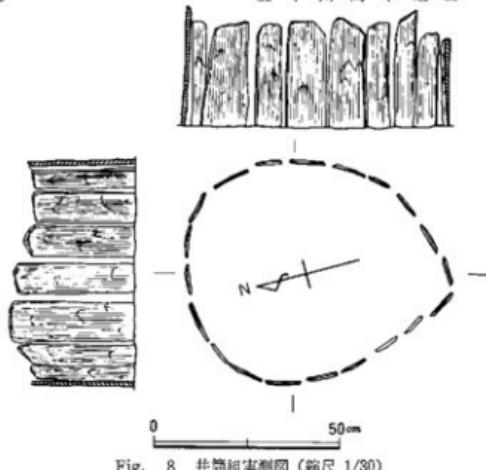


Fig. 8 井筒組実測図(縮尺 1/30)

れており、それを中心に径1m40cmで基部より約2mの高さまで円筒状に黄灰色・黄褐色粘土ブロックの固い上が掘り方との間に詰まっている状態が検出された。この中に遺物を含む土層が堆積しており地表より第6層はその上にかぶっている。この6層の中央部上面は径約2m、深さ90cmで窪んでおり、この中に古瓦類、磁器類、磁石を多量に包含する黒褐色粘質土が堆積している。

井筒は最下段のものが組合わされた状態で検出できたが、その中に板材の破損したものが落ち込んでおり、本来現存する井筒の上に組合わされる井筒があったことが知られる。現存する井筒は厚さ2~2.5cm、幅10~20cm、長さ40~45cmの狭長な板材を20枚組合せ、長径70cm、短径60cmの円筒をなしている。たがは認められなかったが、井戸内よりたがに使用されたと考えられる竹の破片が出上しており、もともと竹製のたがで締められていたことが推測される。井筒の板材は上端が欠損しているが、外面が内側へ斜めに削られており、上部の井筒は外側より挿入されていたことを示している。しかしながらこの井筒の上部の構造がどのようになっていたかは不明である。遺物は掘り方上面の第3層~第4層に土師器、青磁、古瓦類が含まれ、円形の窪みに堆積する第5層に最も多く含まれる。遺物は第7層まで多く含まれるが、8~10層では殆んど含まれていない。現存井筒内からは、石錠2点、青磁1点、木製品2点が出土したのみである。

f. その他の遺構

これまで報告した溝やピット、柱穴構造の他に、調査区全体に溝状あるいはピット状の掘り込みが検出されたが、その性格は不明である。

e. 井戸 (Fig. 7 ~ Fig. 8)

D-41・42区に地山を掘り込んで營まれている。掘り方の平面形は不整円形を呈し、底へ向かって斜めに掘られており、上面の長径約4m50cm、短径4m15cm、井筒基底までの深さ2m90cmを測る。

井戸内への堆積土層を見ると、湧水層の青灰色砂層に井筒下端が固定さ

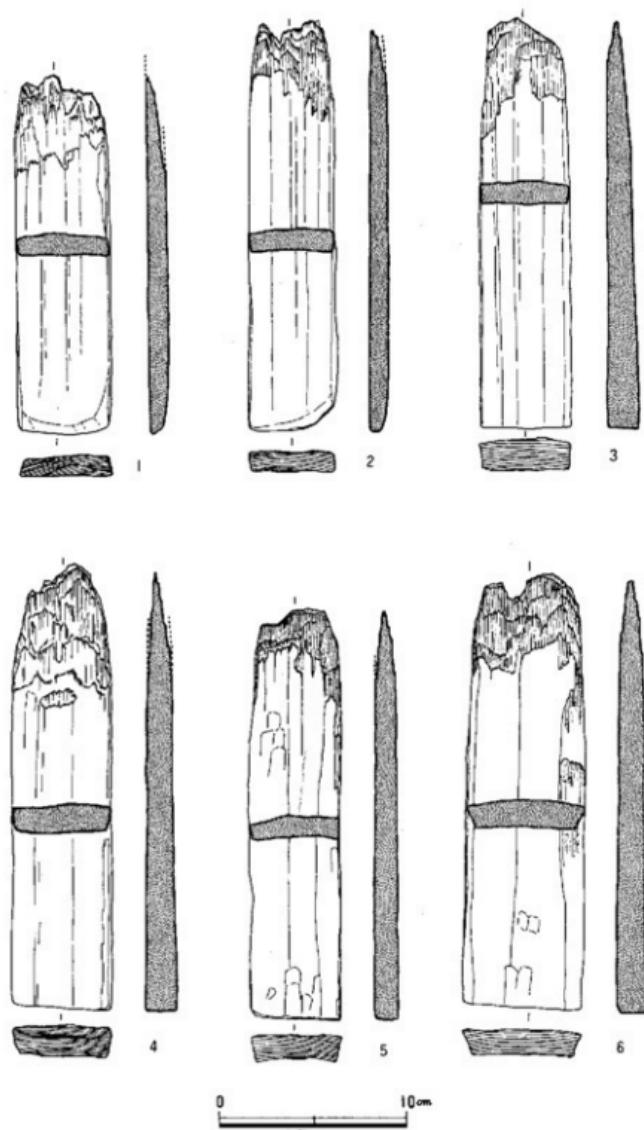


Fig. 9 井筒材実測図 (縮尺 1/6)

4. 出土遺物 (Fig. 10~Fig. 32)

a. 土師器・土師質土器 (Tab. 3)

本遺跡出土遺物の中で最も出土数が多く、各包含層や遺構出土のものを合わせ、個体数にして500点を越すが、完形となるものは少ない。器種は、高台付塊、高台付坏、坏、皿が多数を占め、甕、鉢、壺が若干混じっている。坏、皿以外は破片が多く完形となるものは少ない。

高台付塊 図示したもの以外に第1号住居址より多数出土しているが、いずれも底部の破片で全形を知りうるものはない。体部は内彎しつつのび、口縁部を軽く外彎させるもので、底部はヘラ切りし細身のやや外開きの高台をはり付けるものが多数を占め、短かいはり付け高台で体部内外面を丁寧に擦磨きしているものもあるが少量である。他の器種に比べ出土量が少ない。

高台付坏 口径12.0~12.2cm、器高4.0cm前後のものと、口径14.2cm、器高4.6~5.2cm前後のものがある。体部は直線的に外広し、口縁部をそのままおさめ、鋸切りの底部に細身の高台を貼り付け、やや外に開く。精良な粘土を用いている。第1号住居址より多く出土する。

坏 形態上口径8.4~9.0cm、器高2.5cm前後の中形のものと、口径11.0~13.0cm、器高2.2~3.6cm前後および口径13.6~15.0cm、器高2.3~3.1cm前後の中形のもの、口径17cm、器高3.1~3.6cm前後の大形のものにまとめられるが、手法上は底部籠切りのものと糸切りのものの2類に分けられる。籠切りのものをI類、糸切りのものをII類とする。I類は第1号住居址から出土するもので、口径11.0~12.4cm、器高2.2~3.6cm前後にまとまり、体部はやや内彎気味に外広し口縁部を軽く外彎させる。底部は籠切りし板目痕を残すものが多い。精良な粘土を用い焼成は良好なものが多い。II類は平坦あるいは上げ底の底部から体部が直線的に外広し、口縁部をそのままおさめるものが多いが、中形のものでやや内彎するものがある。小形の坏および大形の坏は各々2点ずつ出土しているだけで、中形のものが多数を占める。底部は糸切り離しで板目痕を残すものが半数以上を占める。

皿 口径7.2~9.4cm、器高0.6~1.6cmの間に含まれる扁平な小皿で、短かく口縁を引き出すものである。内面に煤の付着するものがあり、證明皿として使用されたものであろう。底部は糸切り離しで、板目痕を残すものが多い。

甕 出土数はきわめて少ない。ゆるやかに外反する口縁部から長い胴部が続く、内面はナデ、外面は叩きを施す。胎土に砂粒を含むが焼成は堅固である。

鉢 口縁部を短かくし字形に外反させ口唇は丸味をもつ、体部はあまり張らず平坦な底へすぼまるものであろう。内外面ナデ調査、胎土に砂粒を含むが焼成は堅固なものが多い。

壺 底部から内彎気味に立ち上がり、稜をなして口縁部を内彎気味に外反させるものが多く、器内がうすく底部から直線的に外広し、口縁部を折り返し断面長方形の口唇をつくるものもある。前者は内面に横方向の粗い刷毛目を施し、外面も部分的に刷毛目が見られる。後者は内外

ともにナデ調整である。胎土はおおむね精良であるが焼成は軟調である。体部外面は煤の付着が認められる。

その他 脚付壺、壠の脚、かまどの一部などが出土しているが、少量で全体の形状を知りうるものはない。

b. 黒色土器 (Tab. 3)

第1号住居址を中心に出土する。器種は高台付壺が多数を占め、小形の壺が1点ある。体部内外面はジグザグの磨きを施し、壠の底部は鋸切りで短かい高台をはり付ける。炭素吸着が内面のみに認められるもの（A類）、内外両面に認められるもの（B類）の2種類あり、量的にはA類が多数を占める。壺、皿などの器種が全て土師器であるのに比較し、壠では出土量の中で黒色土器の占める割合が大である。

c. 瓦 器 (Tab. 3)

全部で4点検出された。器種は壠のみである。底部から内側気味に立ち上がり、口縁部はそのままおさめる。鋸切りの底部に断面三角形に近い低い高台をはり付ける。体部内外面は磨きを施す。胎土は精良で、器面は灰白色あるいは灰色を呈しややつやがある。

d. 須 恵 器 (Tab. 3)

各区第3層、第4層を中心に多く出土するが、土師器の出土量に比較するとときわめて少ない。破片が多く、全体の形状を知りうるものはほとんどない。器種は壺、高台付壺、高台付壺、蓋、高壺、疊などが認められる。壺は脚部の破片が多く、内面に青海波文の叩き、外面上部が認められる。口縁部はくの字形に外側し、口唇を折り返し肥厚させるものがある。壺は低いはり付け高台の底部から体部は直線的に外広するが、あまりのびず器高が低い。高壺は脚部のみが知られ、低く扁平で脚根が極端に聞くものである。

e. 瓦質土器 (Tab. 3)

図示していないが釜のつばの部分の破片が1点認められる以外はすべて鉢である。平底の底部から直線的に外広し、口縁端を平坦に落すもの、やや積をなすものがほとんどで、口縁部を内側させるものが1点ある。内面は刷毛目を施し、3~5本単位の刻線を放射状に施して摺鉢とするものや、内外面ナデ調整のものがある。また、平坦な口縁直下に連續菊花文の押印を施す火舟が1点出土している。胎土は精良なものが多く、焼成は軟調、器面は暗灰色を呈するものが多い。

f. 陶 器 (Tab. 4)

各包含層中より出土するが遺構に伴なうものもある。出土量はあまり多くない。国産品と確認できるものと、輸入品と考えられるものがある。器種は、壺、壺、鉢が認められる。

壺 口縁部の破片が多い。長脛の壺となるもので施釉のものと無釉のものがある。施釉のものは、灰釉のものと鉄釉のものがある。灰釉のものは短かく口縁部をくの字形に外側させ丸くお

さめるものと、小さくつまみ出すものがある。胎土は精緻で焼成も堅緻である。鉄釉のものは短かく水平に外反する平坦な口縁部をつくり、肩部が長く小さな上げ底の底部に続く。外面はヘラ削りし、段状の隆起をつくっている。器面は鉄褐色を呈し光沢がある。無釉のものはくの字形に外反する短かい口縁部であるが、やや内彌する。肩部に沈線を施している。

壺 常滑焼き、源美古窯系のもの他、窯を比定できないものがある。T7は口縁を折り返し口唇部がやや垂れ、肩部が張るもので初期常滑焼の特徴を備えるものである。内面は茶色を呈し、外面は灰釉がかかり、器面は粒子が浮き荒い。肩部に長方形の押印がある。T15は肩部の破片で、内外面は茶褐色を呈す。外面に草花文の押印がある。これと同一個体となると考えられる破片が2~3点出土している。源美古窯系の陶器である。

鉢 灰釉のかかるものと、茶褐色を呈するものの2種がある。前者は口縁部をL字形に折り、平坦な広い底部にすぼまるものである。内面は体部上面まで施釉され、外面は全面にかかるものが多い。胎土に砂粒を少量含み、焼成はやや堅緻である。茶褐色のものは、底部から内彌気味に立ち上がり、口縁部内端を短かく張り出すものと、突帯状の隆起帯をつくるものがある。器面はこぶ状にふくらむものが多い。灰釉のものは輸入品と考えられるものであり、後者は窯を断定できないが国産品である。常滑焼に似るものや備前焼に似るものがあるが、窯の比定は今後に待ちたい。

g. 磁器 (Tab. 5)

包含層、各遺構から合わせて約300点の青磁、白磁類が出土したが、包含層出土のものが大多数を占める。極力接合復原に努めたが全体の器形を知りうるものは少ない。器種は塊が大多数を占め、皿がこれにつぎ、合子、瓶の細片が若干混じる。以下、出土した磁器について特に塊と皿の形態と手法・文様などの特徴によって分類しながら報告する。

白磁

胎土が灰白色あるいは灰色を呈す精緻なもので、青白色、乳白色、青灰色の釉調を示すもので、あるいは青白磁とも称されるものも含めて次のようなものが出土している。

I類 塊は高台が肉薄で高くのび、水平の狭い疊付をもつ深い削り出しのもので内底縁に沈線をめぐらし、体部はゆるやかに内彌しつつのび、口縁を外反させる形態のものである。本遺跡からは完形となるものは出土していないが、大宰府からの出土例で全体の器形が知られる。本遺跡ではきわめて少量であり、これとセットをなすような皿は出土していない。

II類 塊のみが認められる。口縁部を外側に折り返し玉縁状をなすのが特徴で、大小の差と折り返し痕を残すもの、あるいは横ナデによって消すものの2種がある。本遺跡からは小さな折

り返し痕を持たない口縁部片が2点出土している。この口縁に接合する高台の形態は、大宰府や上和白遺跡、多々良遺跡出土例で知られるように、肉厚のべつたりした感じのもので、本遺跡では1点だけ確認できる（G97）。見込に沈線をめぐらすことでもII類の特徴である。

III類 底部の破片で数は少ない。見込に沈線をめぐらし、その内側に重ね焼きの痕を示すと考えられる釉毛げの円圏帯をもつものである。高台は肉薄でやや高く疊付は平坦で、あるいはI類に含ませるべきかも知れない。

IV類 塚と皿がセットをして出土し、他の白磁に比較して出土数が圧倒的に多く本遺跡の特徴として興味深い。口縁内外両端部に釉がかからず、いわゆる口禿を呈すものである。塚は高台径が狭い肉薄の低い削り出し高台をもち、体部は内輪気味にのび口縁部を外反させるもので内面に沈線をめぐらすものが多く、内底は小さく盛り上がるものと、口径に比して器高が低い、内底が広く沈線より内側が沈むものの2種が認められる。皿は底部が平坦あるいはやや上げ底で、体部は底部から直線的またはやや内輪気味に外広し口縁部を外反させるもので、口縁内面に稜をつくっている。見込には必ず沈線をめぐらし、外底は釉をかけた後、刷毛で撫でた痕か、円圏細線があるものなどである。口径と器高の比によって2種に細分できる。

その他 瓶（G18）と皿（G16, G83）は白磁であるが、以上のどの類にもあてはまらないよう、点数もこれだけである。

青磁

白磁類に比べ圧倒的に多い。胎土、釉調などバラエティに富んでいる。

I類 体部外面に鎬葉文を陽刻するもの、あるいは鎬片彫りの蓮弁を配すものを一括してI類とした。鎬葉には単複2種があり、蓮片彫りの蓮弁にもバラエティが認められる。また、内底に草花文、文字の印刻があるものもある。これらは、文様構成によってさらに細分できるであろう。塚は高台が低くすんぐりした感じで内輪気味にのびた体部から口縁部をそのままおさめるものが主で、鎬葉文を陽刻するものは体部の開きが大きいようで、釉薬も厚くかかり、淡青色、草緑色を呈し優美である。皿は薄く疊付が狭い高台をもち、口縁部を外反せるもので平坦面をつくるものが多い。疊付は茶褐色の脂胎となっている。内底に双魚文を施すものもあるが、本遺跡からは出土していない。

II類 体部外面に獣搔手文、内面に横描、鎬描のジグザグ文、曲線文を施すもので、いわゆる珠光青磁と称されるものである。塚は器の容量に比して径が小さく、削り出しが鋭い高台をもつのが特徴で、体部は内輪しつつのび口縁部をそのままおさめるものであるが、本遺跡では底部片（G106）が知られる。皿は平底から外広し、いったん縁をなして外輪する体部に外反する口縁部をつくるもので、釉薬は外底までかかるない。内面の沈線と文様は塚と同様である。

III類 塚は高台が低くすんぐりした感じで底部が厚い。体部は底部からゆるやかに立ち上がり口縁部を丸くおさめる。内面かつ内底に鎬描草花文を施すもので、G73が代表例である。皿は

狭い上げ底からいったん稜をつくって外広するものと、顯著に稜をなさないものがある。内底に草花文を施している。また境の中で全く文様が無いもの、あるいは内底に「金玉満堂」を刻すものもあり、器形の特徴よりⅢ類に含まれると考えられる。

IV類 形態の特徴はⅢ類と類似するが、内面に劃画文あるいはそれに雲形文を配するものである。内底に梯描文を配すものもある（G54）。この類の皿は不明である。

V類 底が平坦で外底を削り出さないもの、あるいは低く平坦な削り出し高台をもつもので、体部はそのまま外広し、器肉がうすく、口縁外端を斜めに落し、刻みを施すものである。見込には白砂が部分的に付着し、釉薬が剥落している部分が多い。G61は口縁部の形態で疑問が残るが、底部の形態よりV類に含ませた。

以上の青磁の中で、I類は龍泉窯系とされ、II類は福建省産のものとされる。III類とIV類は共に龍泉窯あるいはその影響を受けたものとされる。V類は越州窯系の青磁と考えることができる。また不明としたG47、G107は、釉調などから龍泉窯系とも考えられ、あるいはI類に含まれるべきかも知れない。

h. 石 製 品

包含層、各造構より相当数の石製品が出土したが特に井戸第3層および第5層からの出土量が多い。これらの石製品の材質のはほとんどが滑石であり、他はすべて砥石である。

石塙 約10個体分の破片が出土。いずれもいわゆる滑石を材質とするが、色調の相異によって2種に大別できる。緑味を帯びた灰色を呈するものと、淡い灰褐色を呈するものであり、前者はS1のみに認められる。本遺跡出土の石塙は、いずれも口縁部直下に断面三角形あるいは合形の鈎をめぐらす形式のものが多く、無鈎の形式は1点だけ認めることができ、口縁部からそのまま巾の広い鈎を削り出すものや、断面コの字形の巾広い鈎をめぐらすもの、あるいは把手を削り出したものなどは検出されていない。

その他の滑石製品 石塙の破片を二次加工したものを含め、はっきり製品として確認できるものは8点あり、その他に石塙の破片の下端を内外両面から擦り切りかけて途中でやめたもの、石塙の鈎の部分を擦り切ったままのものが認められる。これらの滑石製品の種類には、硯、有鉢蓋形品とその未製品があり、その他に用途不明な有孔円板、有孔方板、表面が亀甲状を呈し裏面が平坦で5ヶ所に孔を穿った橢円形石製品、形はこれに似るが裏面を抉って周縁をつくり出す有孔石製品などがある。このうち、硯と小形容器は他の製品に比べて色調も明るく、丁寧に調整されており、つややかな仕上がりを見せている。

砥石 井戸第5層中より4点、包含層中より4点の砥石が出土した。石材は砂岩、硬質砂岩、粘板岩の3種がある。S17は長方形を呈した扁平な小形の砥石であり、きわめて端整な作りを見せている。他の砥石はこれよりはるかに大形で、形態もさまざまである。扁平なものは表裏両面が使用され、断面がぶ厚いものは3つの面が使用されており、使用面はなめらかである。

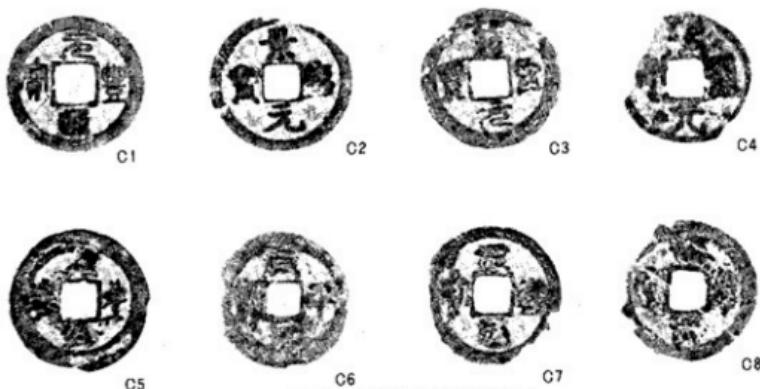


Fig. 10 第3号住居址出土古銭拓影（実大）

i. 古銭 (Fig. 10, P.L. 16)

第3号住居址床面より計8枚の古銭が出土した。この内、6枚は連なった状態で折り重なって出土し、他の2枚は別々に出土した。

いずれも銅錢であり銘化が著しく鑄銘の判読が困難なものが多い。次表に掲げるよう5枚がはっきりと判読でき、元豐通宝、景德元宝、咸平元宝など北宋代に铸造されたものが多く、判読不明のものも北宋あるいは南宋のものである可能性が強い。

これらの古銭は第3号住居址の営まれた実年代を知る上で手がかりとなるものであるが、輸入時期や国内流通期間によって、相当の年代幅があると考えられる。

Tab. 2 第3号住居址出土古銭一覧

(単位mm)

番号	鋳 銘	計 測 値			鋳 造 年 代		備 考
		径	郭 孔	厚 さ	国	西 历	
C 1	元 豊 通 宝	24.5	7.0	1.5	北宋	1078~1085	
C 2	景德 元 宝	25.4	6.5	1.5	"	1004~1007	
C 3	□ □ 元 宝	25.4	6.5	1.7			北宋の紹聖元宝か？
C 4	□ □ 元 宝	23.5	6.6	1.1			南宋の淳熙元宝か？
C 5	元 豊 通 宝	25.5	6.0	1.6	北宋	1078~1085	
C 6	咸 平 元 宝	24.5	6.0	1.5	"	998~1003	
C 7	元 豊 通 宝	25.5	6.5	1.5	"	1078~1085	
C 8	判 説 不 明	25.2	6.0	1.8			C 5 の元豊通宝に似る

k. 木簡状製品 (Fig. 11)

井戸枠内の最下部より 2 点の木製品が出土した。W1 は長さ 21.4 cm, 幅 3.5 cm, 厚さ 0.2 cm を測り、短冊形をした薄く平坦なきめの細かい柾目板である。上下両端を鋭く切り、角はやや丸味をもつ。一方の面に細かい横方向の擦痕が部分的に認められる。

W2 も材質、形状とも W1 と同様であり、長さ 21.8 cm, 幅 3.6 cm, 厚さ 0.2 cm を測る薄く平坦な板である。ただ、W1 に比べ表面の擦痕が著しくほぼ全面に認められる。

これらの木製品の用途については、その形状からすると曲物などとは考えにくく、木簡の可能性が強い。しかしながら、いずれにも墨書きの痕跡を認めることはできない。

l. 古瓦 (P.L. 24)

細かい破片まで含めて約 120 点の古瓦片が出土している。井戸第 3 層および第 5 層出土のものが半数を占め、他は各区の包含層より分散出土している。いずれも破碎されたものばかりで完形のものはない。軒平瓦らしきものが 1 点認められる以外はすべて平瓦と丸瓦である。濃い灰色を呈す焼成良好なものと灰褐色の軟質のものがある。

平瓦 表面はヘラ削りを施しており、そのため布目が全く認められないものと、部分的あるいは片側に布目を残すものがある。裏面はいずれも目が細かい斜格子の叩目を施すものばかりである。側面に明瞭な截断面を残すものがあり、桶巻造りで製作されたことが知られる。

丸瓦 全体の形状を知りうるものは少ないが、頭から尻へとすぼまってゆく、いわゆる行基幕丸瓦がほとんどで、玉縁付丸瓦は確認できない。表面は叩目を残さず、ヘラで丁寧に調整されている。裏面は截頭円錐形の叢状の模骨に布を被せ、その上に粘土を巻いて叩きしめ、半裁した製作法を示す痕跡を残しているものが多い。

軒平瓦 頭部の破片であるが、文様はただ 1 個の珠文をかろうじて確認できる程度である。

m. その他

以上その他に土鍤の破片と鉄片が出土している。土鍤は第 3 号住居址より 1 点、包含層中より 1 点出土し、鉄片は包含層中より 4 点出土した。鉄釘と考えられるものである。



Fig. 11 井戸出土木簡状製品実測図 (縮尺 1/2)

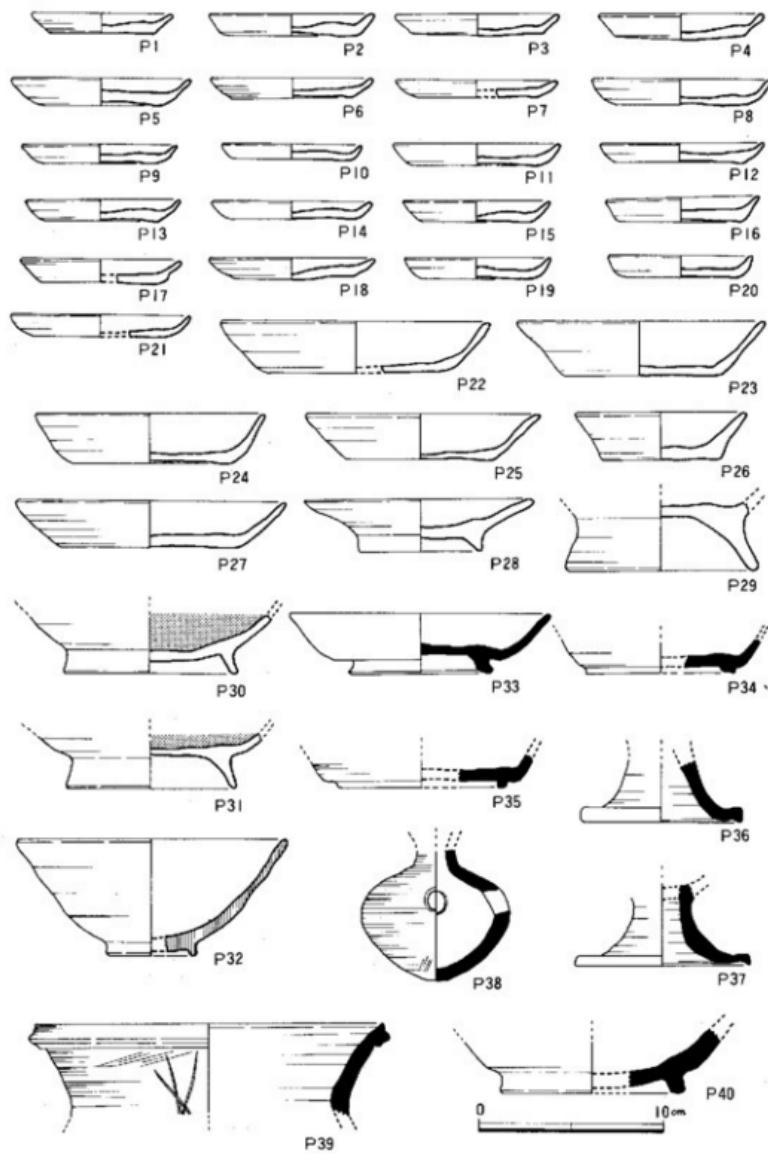


Fig. 12 各種出土上器実測図 I (縮尺 1/3)

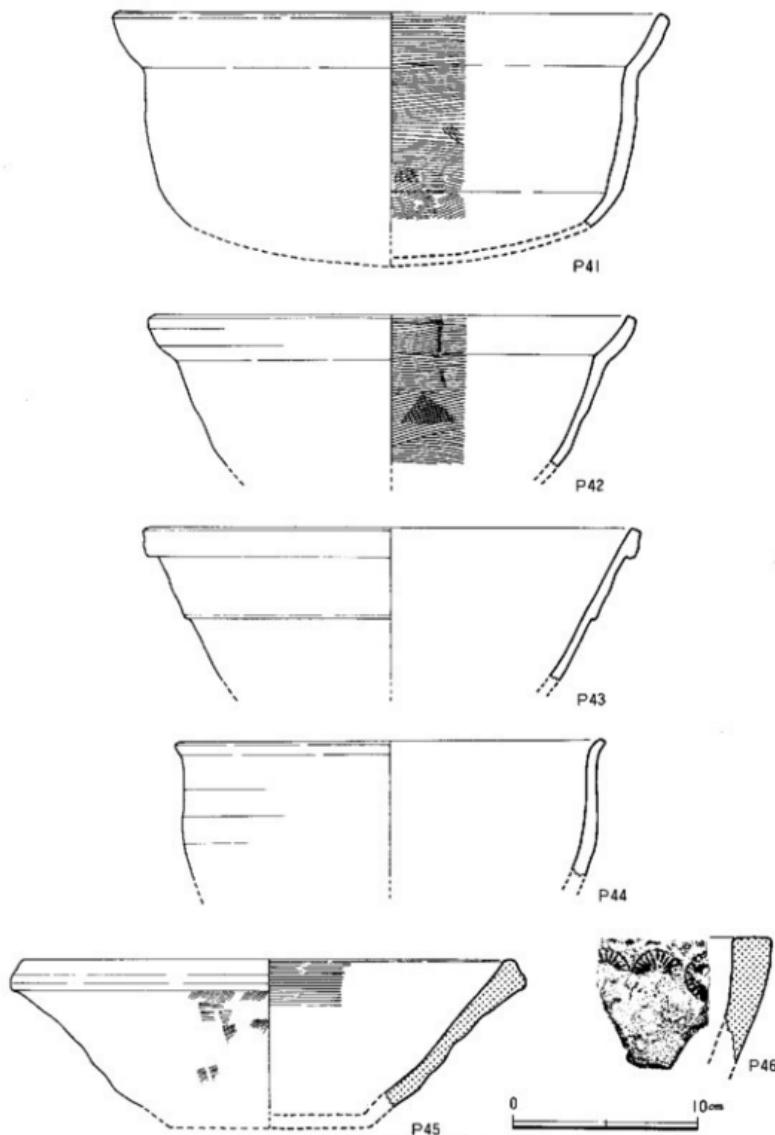


Fig. 13 各種出土土器実測図 11 (縮尺 1/3)

27

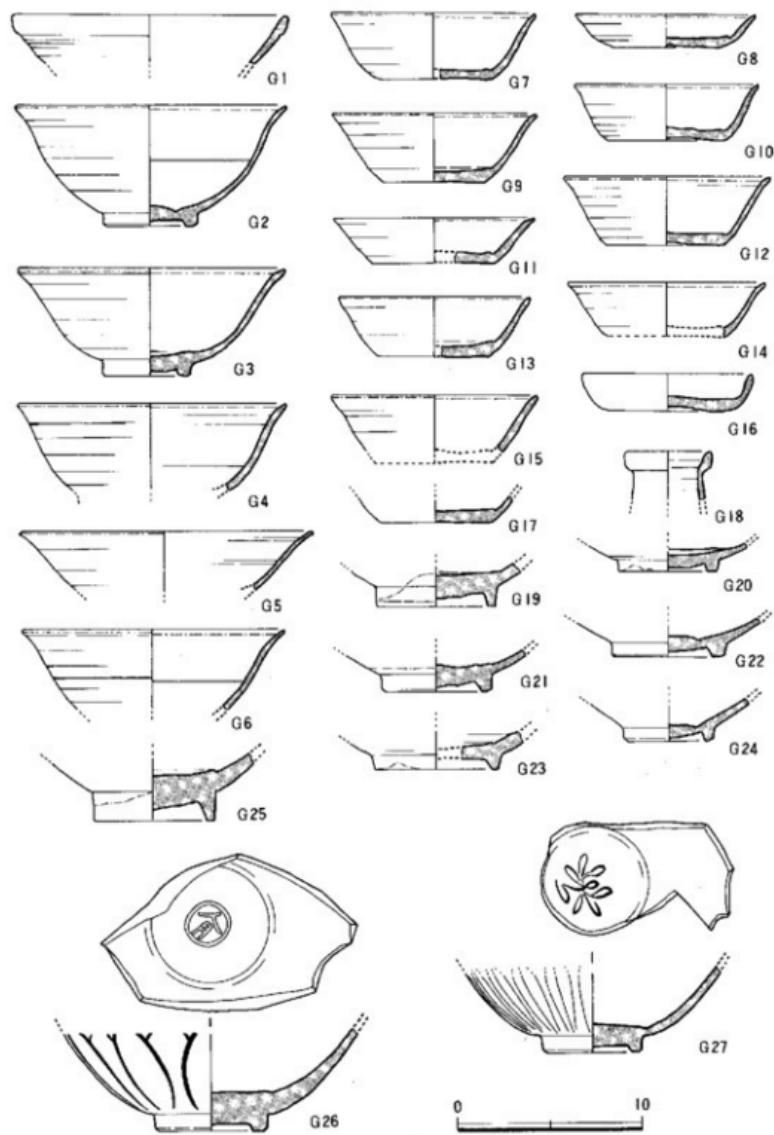


Fig. 14 各層出土磁器実測図 I (縮尺 1/3)

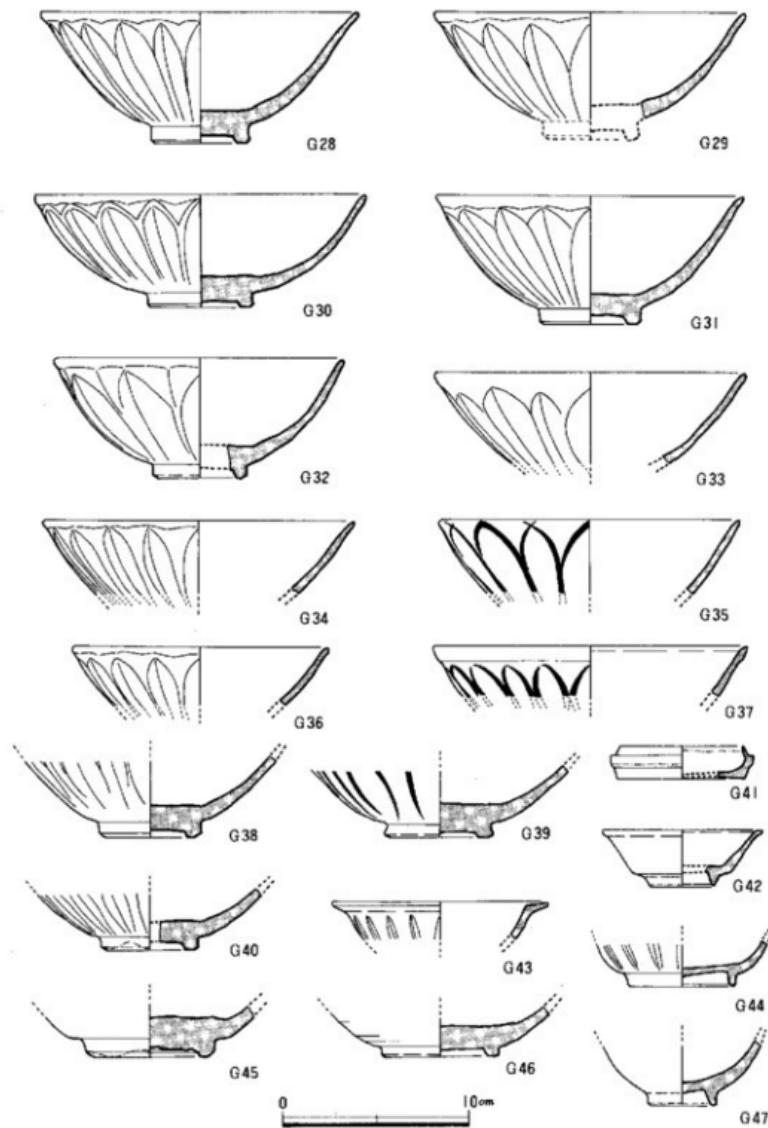


Fig. 15 各層出土磁器実測図 II (縮尺 1/3)

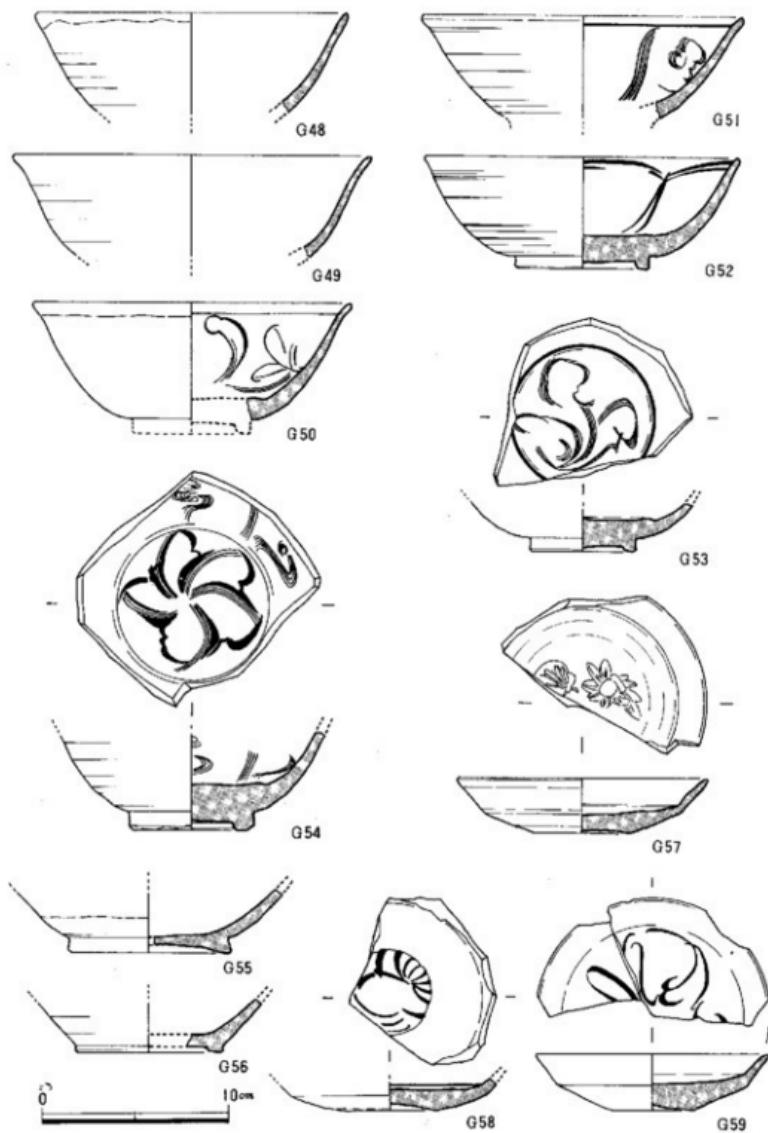


Fig. 16 各層出土器物實測圖 III (縮尺 1/3)

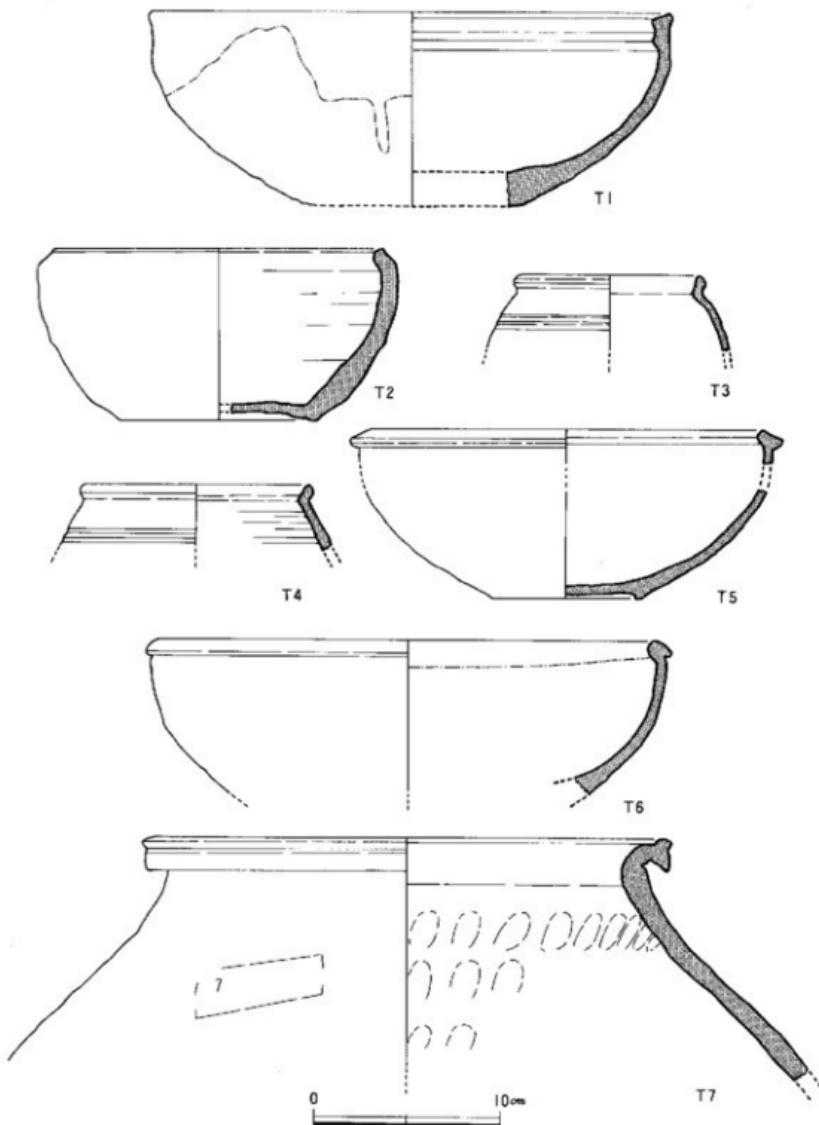


Fig. 17 各層出土陶器実測図 (縮尺 1/3)

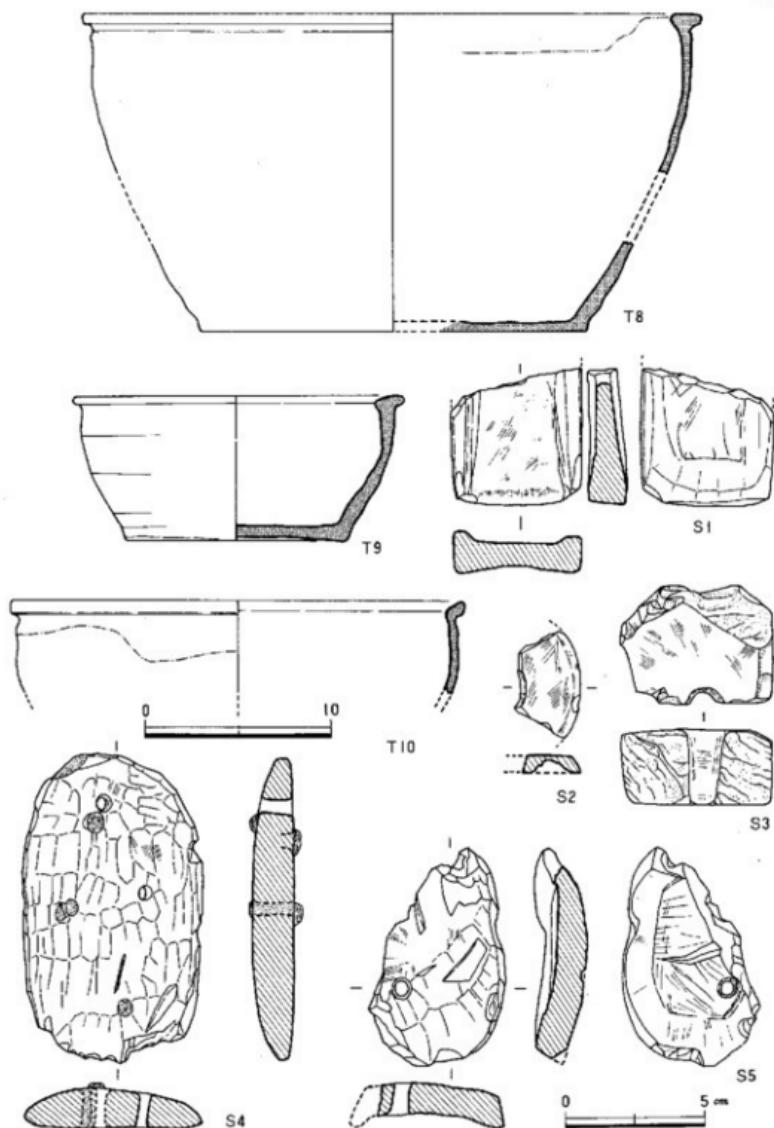


Fig. 18 各層出土陶器、滑石製品実測図(縮尺 1/3・1/2)

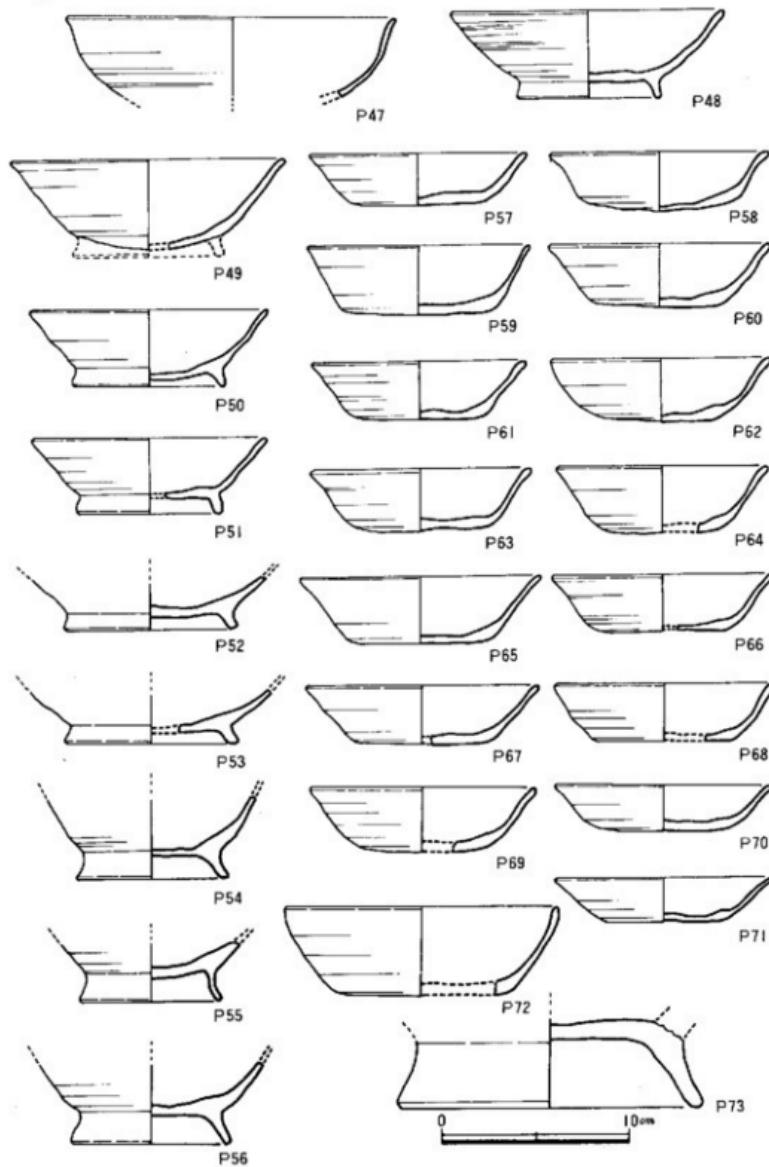


Fig. 19 第1号住居址出土土器実測図(縮尺1/3)

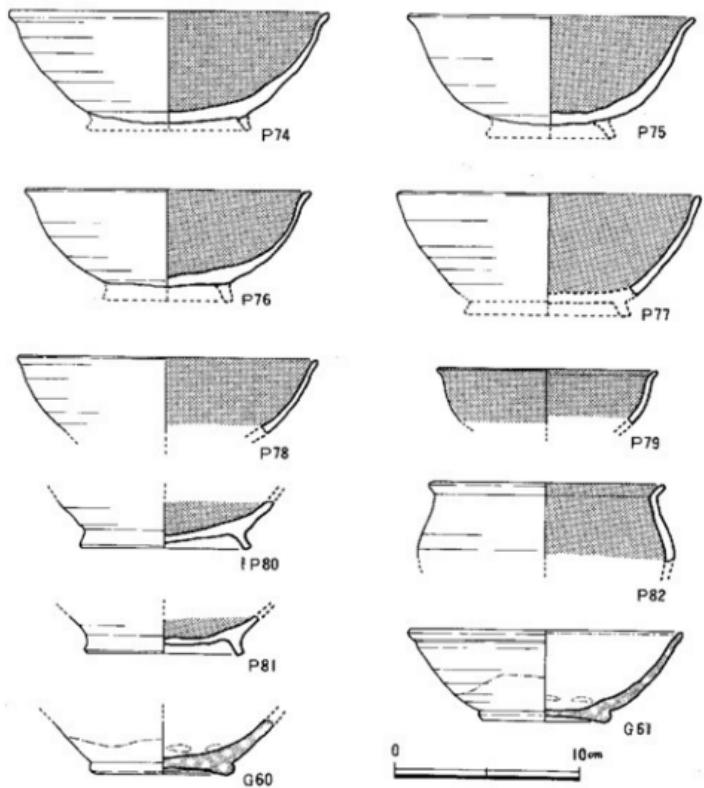


Fig. 20 第1号住居址出土土器・磁器実測図 (縮尺 1/3)

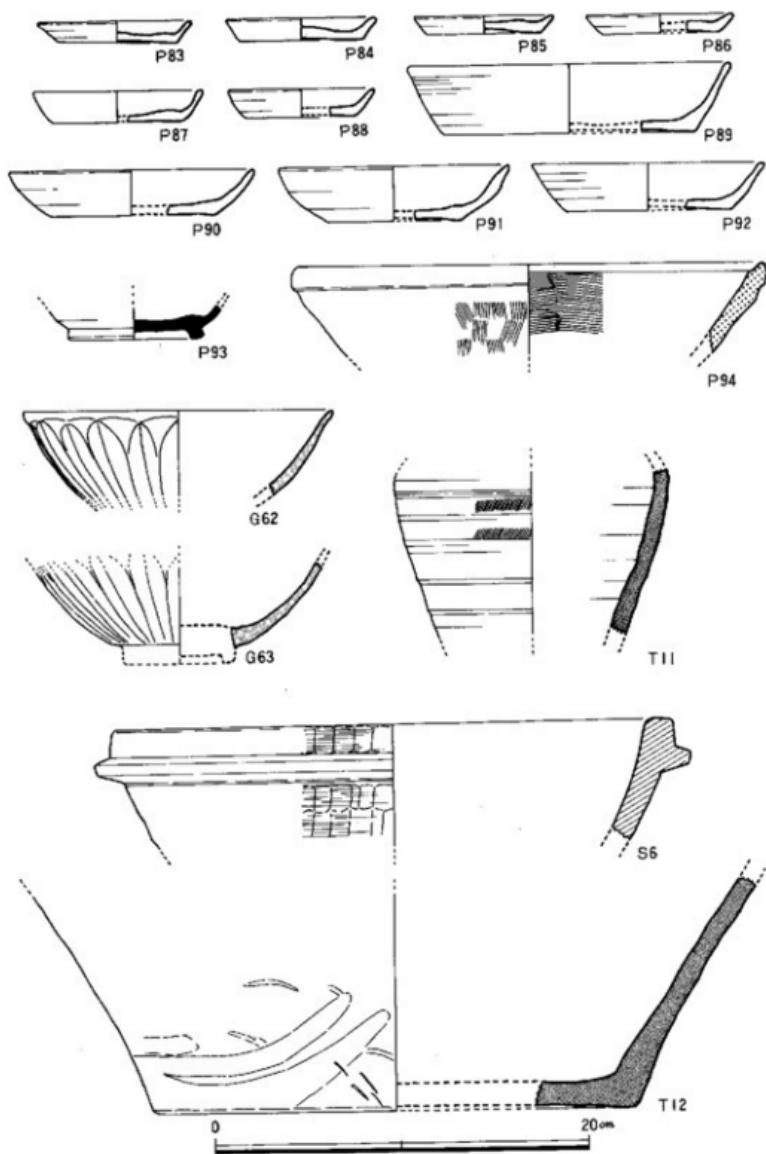


Fig. 21 第2号住居址出土遺物実測図（縮尺 1/3）

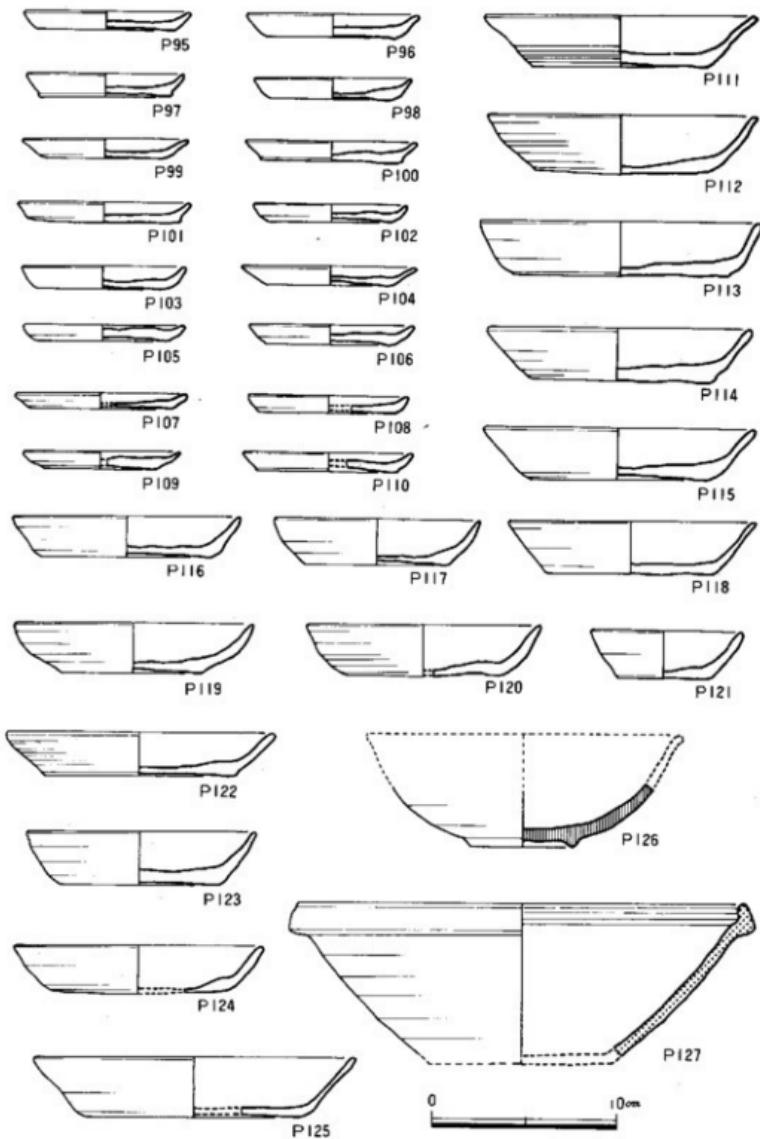


Fig. 22 第3号住居址出土土器実測図（縮尺 1/3）

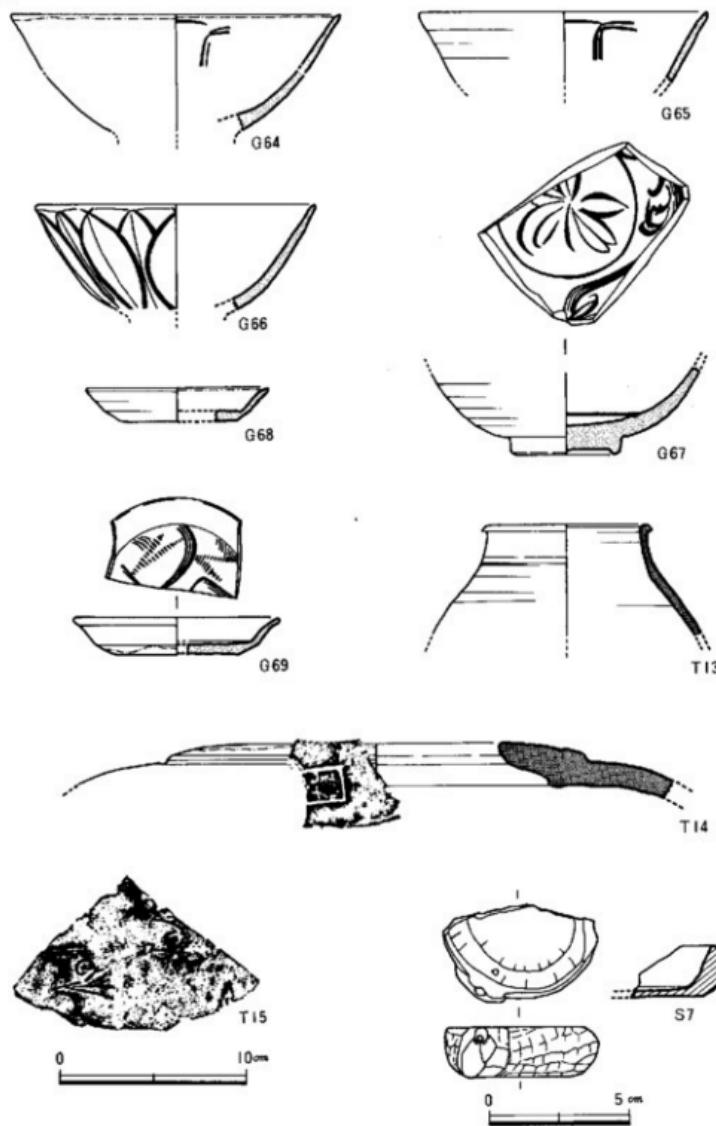


Fig. 23 第3号住居址出土磁器・陶器・滑石製品実測図（縮尺 1/3・1/2）

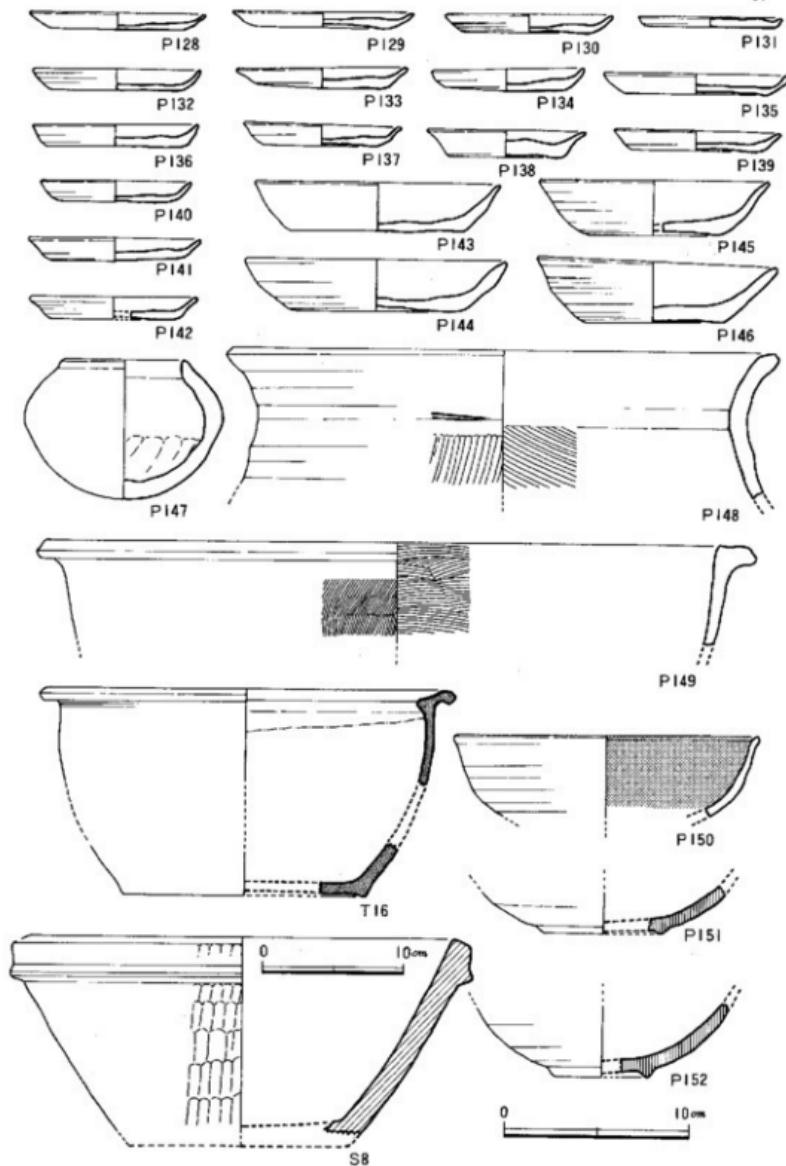


Fig. 24 ピット出土土器・陶器・滑石製品実測図（縮尺 1/3・1/4）

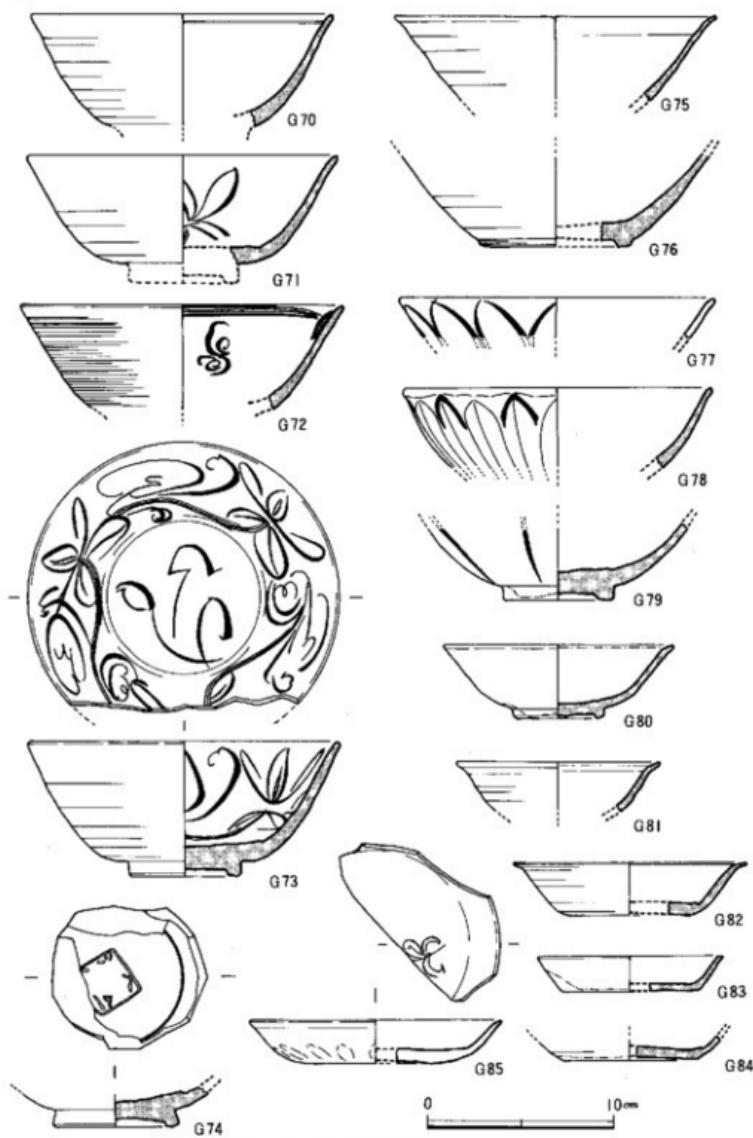


Fig. 25 ピット出土磁器実測図 (縮尺 1/3)

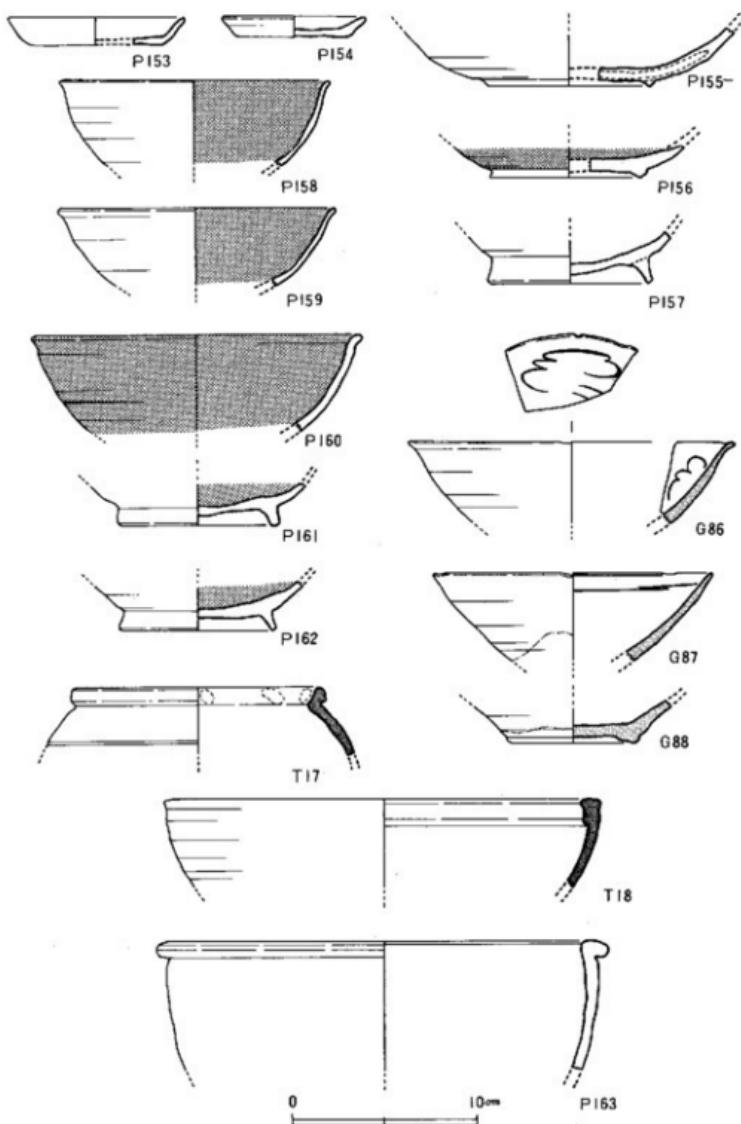


Fig. 26 溝出土遺物実測図（縮尺 1/3）

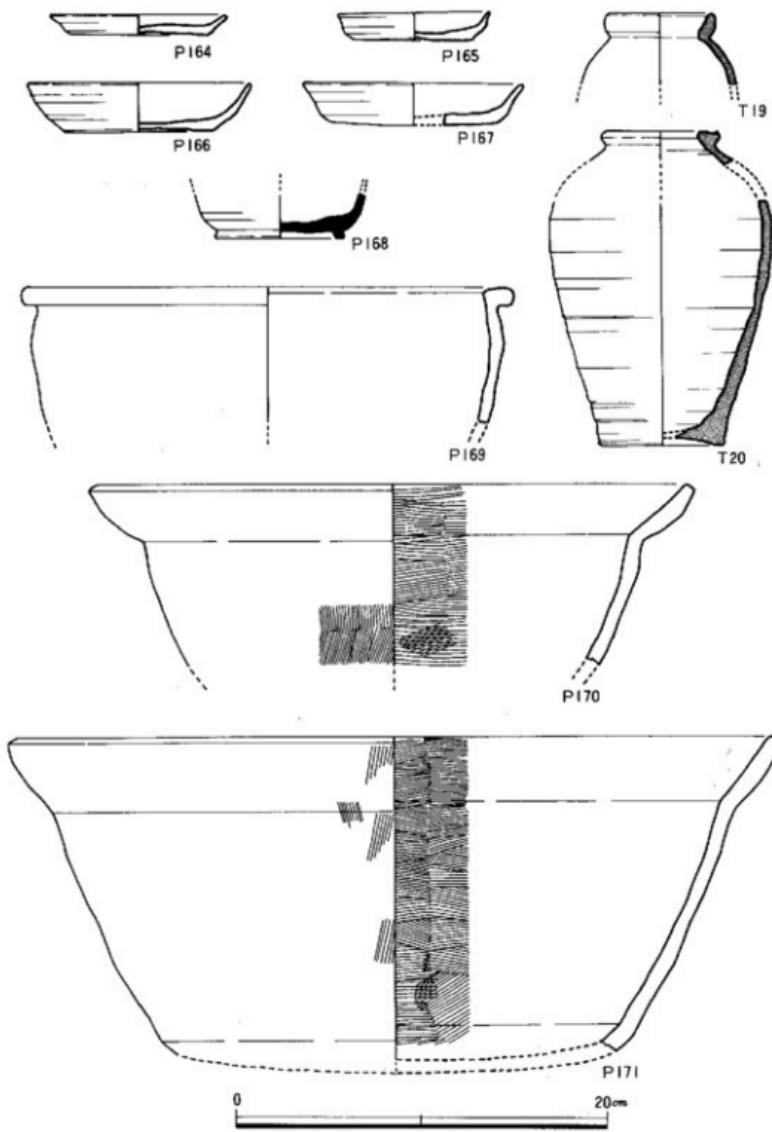


Fig. 27 井戸出土土器・陶器実測図（縮尺 1/3）

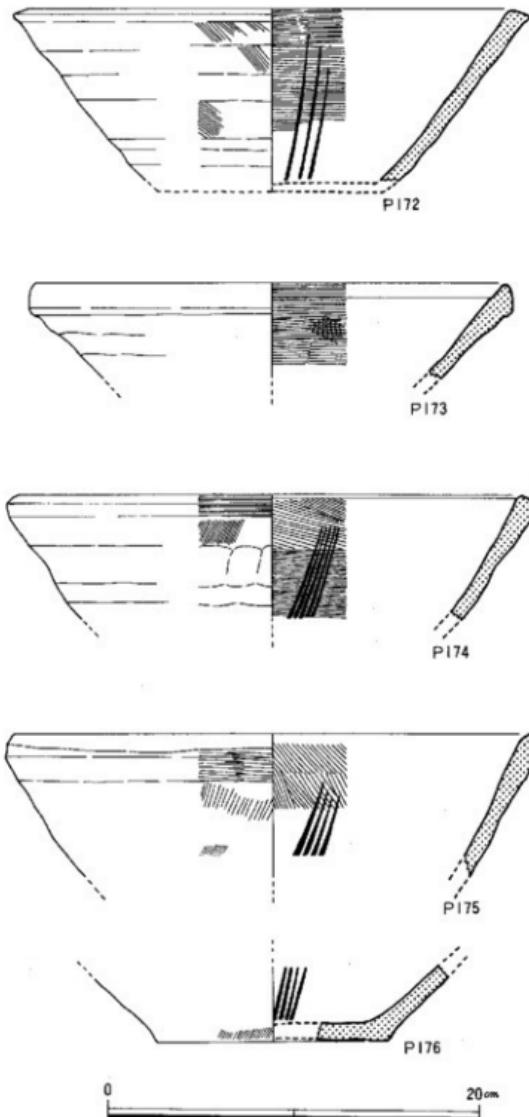


Fig. 28 井戸出土瓦質土器実測図 (縮尺 1/3)

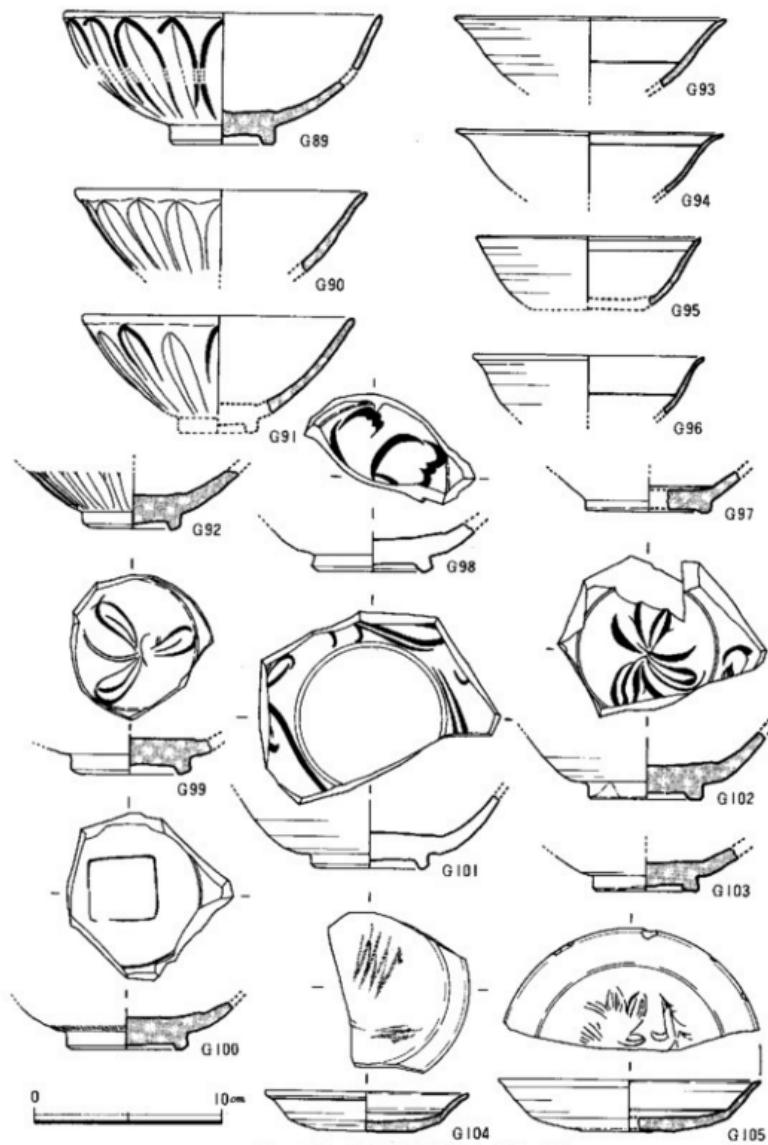


Fig. 29 井戸出土磁器実測図（縮尺 1/3）

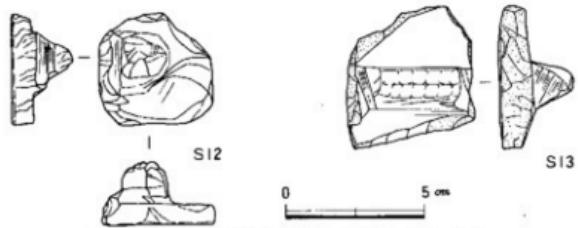
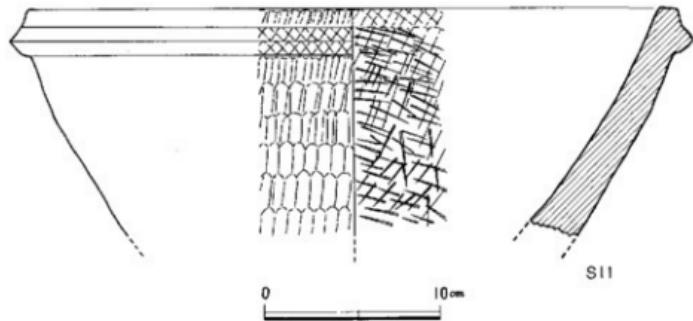
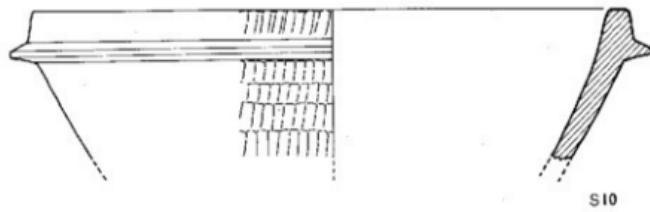
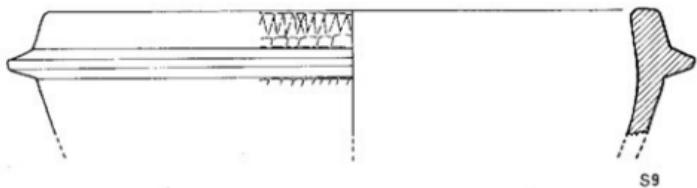


Fig. 30 井ノ出土磨石製品実測図 (縮尺 1/3・1/2)

44

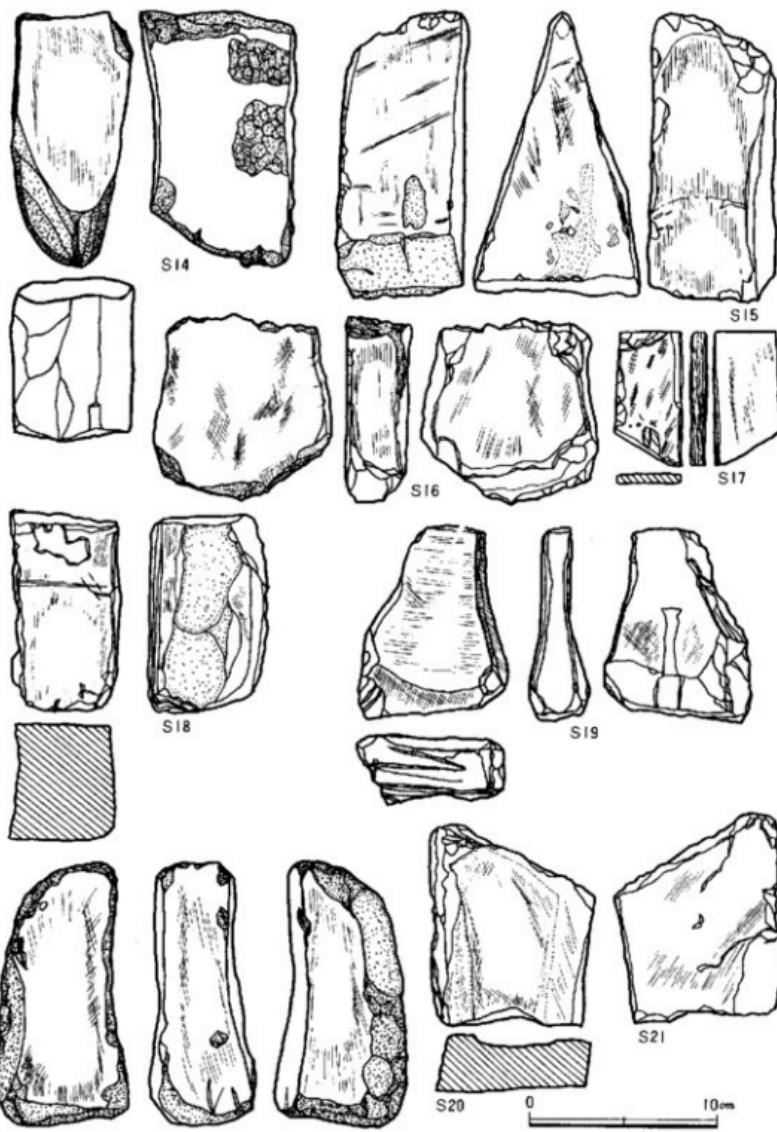


Fig. 31 井戸出土底石実測圖 (縮尺 1/3)

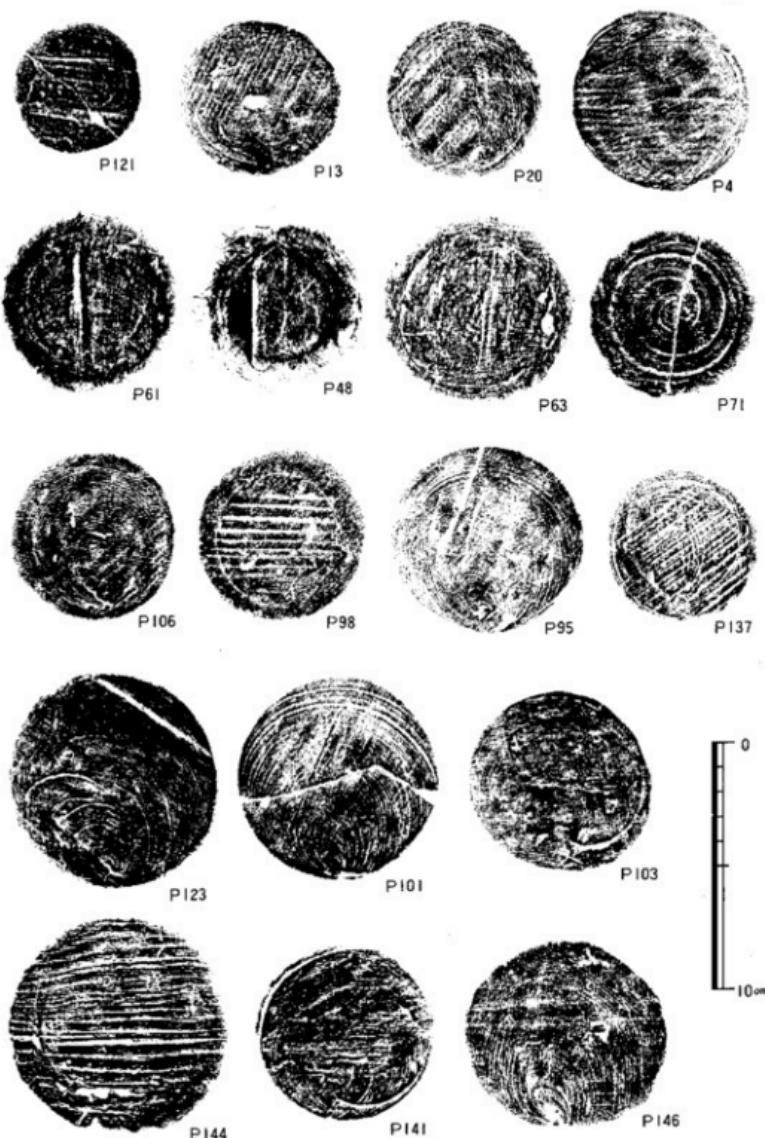


Fig. 32 出土土器底部拓影各種

五十川高木遺跡 Tab. 3 A 地点出土土器一覧

(※印は復原値、単位cm)

通 番 号	出土区・層位	器形・ 型	種 類	法 量	形態の特徴	手法の特徴	胎 土	地 皮	色 調	備 考	Fig.-PL	
P 1	B-35・3層	皿	土鉢型	口径 器高	7.2 1.0	いずれも体部の立ち上がりが低い小皿である。口径が9.4cm前後のものと、8.4cm前後のものの2つがある。	手切り、板目	黄褐色 良	普通	黄褐色	12.	
P 2	B-36・3層	/	器	口径 器高	8.4 1.2	手切り、ナデ	赤褐色 良	/	赤褐色	内底に 灰付着	**	
P 3	B-37・3層	/	器	口径 器高	8.4 1.1	手切り、板目	赤褐色 良	/	赤褐色		**	
P 4	/	/	器	口径 器高	8.5 1.4	手切り、板目	赤褐色 良	/	赤褐色		**	
P 5	B-38・3層	/	器	口径 器高	9.4 1.4	*	赤褐色 砂粒を含む	/	赤褐色		**	
P 6	/	/	器	口径 器高	8.4 1.0	*	赤褐色 砂粒を含む	赤	赤褐色 外壁色		**	
P 7	/	/	器	口径 器高	8.4 1.0	手切り、板目	赤褐色 良	普通	赤褐色		**	
P 8	C-37・3層	/	器	口径 器高	9.4 1.3	手切り、板目	淡褐色 良	*	淡褐色		**	
P 9	/	/	器	口径 器高	8.2 1.0	*	黄褐色 砂粒を含む	*	黄褐色		**	
P 10	C-37-38	/	器	口径 器高	7.2 0.8	手切り、板目	黄褐色 良	*	黄褐色		**	
P 11	D-37・3層	/	器	口径 器高	8.6 1.2	*	黄褐色 砂粒を含む	*	黄褐色		**	
P 12	/	/	器	口径 器高	8.8 1.0	手切り、ナデ	/	不良			**	
P 13	D-38・3層	/	器	口径 器高	8.4 1.1	手切り、板目	黄褐色 良	普通			**	
P 14	/	/	器	口径 器高	8.4 0.9	手切り、板目	黄褐色 砂粒を含む	*	黄褐色		**	
P 15	/	/	器	口径 器高	7.8 1.1	手切り	黄褐色 良	*	黄褐色		**	
P 16	/	/	器	口径 器高	8.6 1.3	手切り、板目	黄褐色 良	*	黄褐色		**	
P 17	D-37・3層	/	器	口径 器高	8.4 1.2	手切り、板目	赤褐色 良	*	赤褐色		**	
P 18	D-38・3層	/	器	口径 器高	8.6 1.1	*	*	*	*		**	
P 19	/	/	器	口径 器高	8.3 1.1	手切り、板目	赤褐色 良	*	赤褐色		**	
P 20	/	/	器	口径 器高	7.4 1.1	*	*	*	*		**	
P 21	/	-4層	器	口径 器高	9.4 1.1	手切り、ナデ	赤褐色 良	*	赤褐色		**	
P 22	B-37・3層	碗	器	口径 器高	14.4 2.7	体部は底部からほぼ直線的に開き、口径をそのままおさめる	ハラ切り、板目	*	*	*		
P 23	/	/	器	口径 器高	13.0 3.0	*	*	*	*		**	
P 24	C-37-38	/	器	口径 器高	12.9 2.6	内部にナデ、外側に ナデを調整	手切り	暗褐色 良	普通	米褐色	**	
P 25	D-36-3層	/	器	口径 器高	12.4 2.4	手切り、板目	黄褐色 砂粒を含む	*	赤褐色		**	
P 26	D-38・3層	/	器	口径 器高	9.0 2.0	口径に比して器身の高い 角張った形状で、外側は直線的に外方 傾く。	内外面削り、板目	黄褐色 良	黄褐色		**	
P 27	D-37・3層	/	器	口径 器高	14.8 2.4	手切り、板目	黄褐色 砂粒を含む	不直	灰褐色	器面部域	**	
P 28	B-35・3層	高台付 盤	器	口径 器高	11.4 2.7	浅く開く底に、断面 角張った形状で、外側は直線的に外方 傾く。	浅次褐色 板目	普通	灰黃褐色		**	
P 29	C-38・3層	塔 底盤	底盤	底盤 高	10.0 2.8	はり付け窓合	黄褐色 砂粒を含む	*	黄褐色		**	
P 30	D-35・3層	黑色 土器	器	底盤 高	6.5 1.0	体部は内側を滑らかに 上から、下から時間の 早い窓合で、外側は直線的に外方 傾く。	内外面研磨 内側炭素吸着	赤褐色 良	内黑色 外黃褐色		**	
P 31	C-35・3層	高台付 盤	器	底盤 高	8.8 1.5	底盤はハラ切り、 はり付け窓合	*	*	*		**	
P 32	B-35・3層	碗	瓦器	口径 器高	14.0 0.9	黄低いハラ切り窓合 体部は内側を滑らかに 上から、下から時間の 早い窓合で、外側は直線的に外方 傾く。	内外面ハラ研磨	暗灰色 良	灰色		**	
P 33	C-40・4層	高台付 盤	器	口径 器高	13.6 3.2	体部は内側を滑らかに 上から、下から時間の 早い窓合で、外側は直線的に外方 傾く。	内外面ハラ研磨 ナデ底部ハラ削り	灰 良	暗灰色		**	
P 34	C-36・4層	灰 泥	器	底盤 高	8.0 0.3	平滑な器底。底くず 直なはり付け窓合	底盤ハラ削り	*	*	灰色		**

第3章 A地点の調査

47

采 集 番 号	生土区・層位 高さ付 け	器種・部 位	種 類	法 量	形 態 の 特 徴	手法の特徴	地 土	走 度	色 調	備 考	Fig. PL
P35	B-35・4層 高台付 け	遺物	底径 高台高	9.0 0.3	底径 9.0	*	*	深灰色 粘土	普通 灰		12.
P36	B-36・3層 高台・ 廻廊	*	軸杆	8.8	低い脚で、外刃しな がらのび。断面は極 端に聞く。	内外面擦ナデ 擦擦裏はやや凹 む。	暗灰色 粘土	*	*		
P37	*	*	軸杆	9.4 3.5	軸杆 孔径 1.8	底部から内寄 底部より高台	内外面擦ナデ 擦擦裏はやや凹 む。	暗灰色 粘土	*	*	
P38	*	軸・ 廻廊	軸杆	8.0	底形の開脚から頸部 は極くねじまる。穿孔 孔径	底部へラ削り、 頭頂部ナデ	*	灰	*		
P39	D-35・3層 高台付 け	*	口径	18.5	底部から外寄する山根部 は斜面を有する	内外面擦ナデ	*	*	*	底部にヘラ 記号	
P40	B-35・3層 高台付 け	*	底径 高台高	9.5 0.8	底径 9.5	底部から内寄 厚いはり付高台	内外面擦ナデ 底部へラ削り	深灰色 粘土	*	暗灰色	
P41	C-39- 40・2層 場	下脚質	口径	20.0	底部に立ち上がりが急な 山根部は内寄時に開く	内外面擦ナデ 底部へラ削り	赤褐色 粘土	普通	内赤褐色 外無色	体部外面に 付着	13.
P42	B-42・3層	*	口径	25.0	体部の立ち上がりが急な 山根部は内寄時に開く	内面擦方向の刷 毛行、外擦ナデ	赤褐色 粘土	不良	内赤褐色 外無色	*	
P43	B-40・3層	*	口径	25.6	体部は急激な外立、中央に 窓をつくら。山根部は内寄 時に開く	内面ナデ、外面 擦ナデ	暗褐色 粘土	*	内赤褐色 外無色	*	
P44	C-37・5層 場	*	口径	22.0	縦横開きから外も、体部 は斜面を有する	内外面擦ナデ 底部へラ削り	黄褐色 粘土	*	灰褐色		
P45	C-39-2層 体	瓦質	口径	26.0	平底と近縁の丸く内寄 山根部を厚する	内面上部擦毛行 外擦ナデ	深灰色 粘土	*	*		
P46	D-39・3層 火 体	*	底径	2.0	底から内寄傾向に立 ち口縁上面は平底	内外面擦ナデ	*	*	*	蓮輪菊文花 の押印あり	
P47	第1号作場址 底部欠 高台付 け	土器部	口径	19.2	体部内寄、口縁付近 よりやや外寄する。	内面擦ナデ、外面へ ラ削り、擦毛行ナデ	赤褐色 粘土	普通 灰褐色			19.
P48	*	*	口径	14.2 4.6	平坦な底部から、体 部はほぼ直線的に外 寄し、そのまま口縁 をまとめる。	内外面擦ナデ、底部へ ラ削り、擦毛行ナデ	赤褐色 粘土	良	黄褐色		
P49	*	*	口径	14.2 4.6	内寄	内面擦ナデ、底部へ ラ削り、擦毛行ナデ	赤褐色 粘土	不良	黄褐色		
P50	*	*	口径	12.2 4.0	内寄	内面擦ナデ、底部へ ラ削り、擦毛行ナデ	赤褐色 粘土	普通	黄褐色		
P51	*	*	口径	12.0 4.0	内寄	内面擦ナデ、底部へ ラ削り、はり付高台	赤褐色 粘土	不良	灰褐色		
P52	*	燒・ 底部	口径	8.8 6.8	内寄	内面擦ナデ、底部へ ラ削り、はり付高台	赤褐色 粘土	*	*		
P53	*	*	底径 高台高	8.6 0.7	内底から内寄傾向に 立ち上がる	内面擦ナデ、底部へ ラ削り、はり付高台	赤褐色 粘土	不良	内赤褐色 外淡黑色		
P54	高台付 塔	底径 高台高	8.0 1.1	底径 高台高	底径 8.0 高台高 1.1	底径の高い高台以外 に高く、体部は直線的 に外寄する。	*	黄褐色 粘土を含む	普通 灰褐色		
P55	*	*	底径 高台高	7.2 1.5	底径 7.2 高台高 1.5	内寄	内面擦ナデ、底部へ ラ削り、はり付高台	赤褐色 粘土	良	黄褐色	
P56	*	*	底径 高台高	7.8 1.4	底径 7.8 高台高 1.4	内寄	内面擦ナデ、底部へ ラ削り、はり付高台	赤褐色 粘土	普通	灰褐色	
P57	*	塔	口径	11.0 2.7	塔	ヘラ切り、瓶目	黄褐色 粘土	*	*		
P58	*	*	口径	11.5 2.1	塔	*	*	*	*		
P59	*	*	口径	11.4 3.6	塔	*	黄褐色 粘土	普通	黄褐色		
P60	*	*	口径	11.4 3.3	塔	*	*	*	赤褐色 粘土		
P61	*	*	口径	11.0 3.5	塔	*	黄褐色 粘土	普通	黄褐色		
P62	*	*	口径	11.4 3.3	塔	*	黄褐色 粘土	不良	灰褐色		
P63	*	*	口径	11.5 3.2	塔	ヘラ切り、瓶目	黄褐色 粘土	普通	黄褐色		
P64	*	*	口径	11.0 3.5	塔	ヘラ切り	*	*	灰褐色		
P65	*	*	口径	12.4 3.5	塔	ヘラ切り、瓶目	*	*	黄褐色		
P66	*	*	口径	11.4 3.0	塔	ヘラ切り	黄褐色 粘土	普通	黄褐色		
P67	*	*	口径	12.0 3.1	塔	ヘラ切り、瓶目	黄褐色 粘土	普通	内赤褐色 外赤褐色		
P68	*	*	口径	11.3 3.0	塔	ヘラ切り	*	*	黄褐色		
P69	*	*	口径	12.0 3.4	塔	*	*	*	黄褐色		

五十川高木遺跡

遺 墓 番 号	出土区・層位	器種・ 器形	種類	法 量	形 動 の 特 徴	手 法 の 特 徴	胎 土	地 成	色 調	備 考	Fig.-PL
P 70 第1号住居址	I環	土器器	口径 底高	11.2 2.4	P69に同じ。	ヘラ切り、板目	黄灰色 精良	普通	淡灰褐色		19 -
P 71 *	*	*	口径 底高	11.2 2.2		ヘラ切り	黄褐色 精良	*	赤褐色		-
P 72 *	*	*	口径 底高	14.0 4.6	直槽から内側気孔に外 出し、そのままとめる。	内側ナデ 外側へラ削り	*	*	黄褐色		-
P 73 *	高台付 壁?	造作器	口径 底高	15.0 3.5	深く、高いはり付け 高台	直槽ナデ 底部ナデ	黄褐色 砂粒を含む	不良	淡灰褐色		-
P 74 *	頂 高台穴	黑色 土器	口径 底高	15.0 6.3	直槽から内側気孔に立 ち上がり、口縁部 を鋸く外舟とめる。	体内内外面はシ ブザグのヘラ磨 きを施す。 底面はヘラ切り	*	普通	内面黑色 外側黃褐色		20 -
P 75 *	*	*	口径 底高	15.0 6.5	はり付け高台の底 を削る。	P74は内外両面 ともに灰黒吸着 し黒色であるが 性質はすべて内面 のみ灰黒吸着 のものである。 直槽はヘラ切り 底面は糊あり	黄褐色 精良	良	*		-
P 76 *	*	*	口径 底高	15.0 6.0	直槽から内側気孔に立 ち上がり、口縁部 を鋸く外舟とめる。	*	普通	*		-	
P 77 *	*	*	口径 底高	15.8 6.5	直槽から内側気孔に立 ち上がり、口縁部 を鋸く外舟とめる。 そのままとめる。	*	黄褐色 精良	不良	*		-
P 78 *	*	*	口径 底高	15.6	P79は小形のもの。	直槽はヘラ切り 底面は糊あり	黄褐色 精良	雪白	*		-
P 79 *	*	*	口径 底高	11.8	直槽は内、外、口縁部 を鋸く外舟とめる。	*	*	*		-	-
P 80 *	堀・ 底部	口徑	高台 底高	8.4 0.7	傾斜の低いはり付け 高台で、外に開く。 底面は外舟とする。	直槽は糊あり	黄褐色 精良	*	*		-
P 81 *	*	*	口径 底高	8.0 0.8		*	*	内外黑色			-
P 82 *	堀・ 底部穴	口徑	高台 底高	12.4	傾か外反する口縁 部が認める。	直槽は糊あり	黄褐色 精良	*	内面黑色 外側黃褐色		-
P 83 第2号住居址	Ⅲ	土器器	口径 底高	7.6 1.1	扁平な小柱で、平坦 な底部から直ぐに体 部をつまみ出す。 底面は糊い。	直槽は切り、板目	黄褐色 精良	普通	赤褐色		21 -
P 84 *	*	*	口径 底高	7.6 1.2		直槽は切り	黄褐色 精良	良	赤褐色		-
P 85 *	*	*	口径 底高	7.2 0.9		直槽は切り、板目	黄褐色 精良	普通	黄褐色		-
P 86 *	*	*	口径 底高	7.4 1.0		直槽は切り、板目	黄褐色 精良	*	*		-
P 87 *	*	*	口径 底高	8.6 1.6		直槽は切り	黄褐色 精良	*	*		-
P 88 *	*	*	口径 底高	7.6 1.5		*	*	*	*		-
P 89 *	环	*	口径 底高	17.0 3.6	大型の杯や、直槽から 直接的に外にする	直槽は切り	黄褐色 精良	良	*		-
P 90 *	*	*	口径 底高	12.6 2.4	直槽な直槽からやや 内側気孔に外出し、 直槽部をそのまま くさめる。	*	*	普通	*		-
P 91 *	*	*	口径 底高	12.0 2.9		直槽は切り、板目	黄褐色 精良	不良	*		-
P 92 *	*	*	口径 底高	12.0 2.5		*	黄褐色 精良	普通	*		-
P 93 *	高台付 II	造作器	直槽 底高	7.2 0.5	直槽な直槽	直槽ナデ 底部へラ削り	黄褐色 精良	良	黑色		-
P 94 *	底・ 底部穴	瓦 質	口径	25.0	人大きな開く体部、口 縁部は丸削りをもつ	直槽は切り、板目	黄褐色 精良	普通	暗灰色		-
P 95 第3号住居址	Ⅲ	土器器	口径 底高	8.8 1.3	直槽な直槽	直槽ナデ 底部へラ削り	黄褐色 精良	良	黄褐色		22 -
P 96 *	*	*	口径 底高	9.0 1.3	直槽 0.8~1.3cm の間に含まるのが 小さな直槽である。	直槽は切り	黄褐色 精良	良	赤褐色		-
P 97 *	*	*	口径 底高	8.0 1.3	直槽から直ぐに体部 をひき出し、小さく まとめる。	*	黄褐色 精良	普通	灰褐色		-
P 98 *	*	*	口径 底高	8.4 1.1		直槽は切り、板目	黄褐色 精良	不良	黄褐色		-
P 99 *	*	*	口径 底高	9.0 1.0	横直な粘土を用いて いる。 底は角切り削りし、板 目数をもつものが半 数を占める。	*	黄褐色 精良	不良	黄褐色		-
P 100 *	*	*	口径 底高	9.0 1.1		直槽は切り削り	黄褐色 精良	良	明褐色		-
P 101 *	*	*	口径 底高	9.0 1.0		直槽は切り、板目	黄褐色 精良	普通	赤褐色		-
P 102 *	*	*	口径 底高	8.6 1.0		直槽は切り	*	*	*		-
P 103 *	*	*	口径 底高	8.8 1.2		直槽は切り、板目	黄褐色 精良	*	黄褐色		-
P 104 *	*	*	口径 底高	9.0 1.0		*	*	*	赤褐色		-

第3章 A地点の調査

番号	出上区・層位	器種・部品	種類	法算	形態の特徴	手法の特徴	新土	焼成	色調	備考	Fig-PL	
P 105	第3号住居址	皿 土師器	口径 器高	8.6 0.9	P104に同じ。	底部糸切り、板目	炭灰色 精 精	普通	淡灰褐色		22-	
P 106	*	フ ル	口作 器高	9.0 1.0		底部糸切り、板目	黄褐色 精 精	普通	赤褐色		x-	
P 107	*	フ ル	口径 器高	9.0 0.8		底部糸切り	炭褐色 精 精	不良	灰褐色		x-	
P 108	*	フ ル	口径半 器高	8.2 0.9		底部糸切り	黄褐色 精 精	普通	赤褐色		x-	
P 109	*	フ ル	口径半 器高	8.4 1.0		底部糸切り、板目	*	不良	黄褐色		x-	
P 110	*	フ ル	口径半 器高	9.0 1.0		*	浅褐色 精 精	良	*		x-	
P 111	フ ル	フ ル	口径 器高	14.4 3.1	大形のものは、口径 14.0-17cm、器高 3.0cm前後、中形の ものは口径11.0cm 器高3.1	底部糸切り、板目	灰褐色 精 精	普通	淡灰褐色	外面下部に 4条の沈継	x-	
P 112	*	フ ル	口径 器高	14.0 3.0	13.0cm前後、中形の ものは口径11.0cm 器高2.5cm	*	黄褐色 精 精	普通	淡灰褐色		x-	
P 113	*	フ ル	口径 器高	15.0 3.1	前後の内に含まれ、 P 121の2つを小形 のものもある。底部 から体部まで口直邊 的に引き出し、口部 を丸くおさめる。	*	赤褐色 精 精	良	赤褐色		x-	
P 114	*	フ ル	口径 器高	14.0 2.8	中形のものやや内 側するものが多い。 底部内外面は微ナデ 内壁はナデ調整し、 底は点切で触して、 板目模をもつものが 多い。	*	黄褐色 精 精	普通	*		x-	
P 115	*	フ ル	口径 器高	14.4 2.8		底部糸切り、ナチ	黄褐色 精 精	良	赤褐色		x-	
P 116	*	フ ル	口径 器高	12.0 2.3		底部糸切り、板目	赤褐色 精 精	普通	*		x-	
P 117	*	フ ル	口径 器高	11.0 2.4		*	灰褐色 精 精	普通	黄褐色		x-	
P 118	*	フ ル	口径 器高	13.0 2.7		*	木褐色 精 精	不良	赤褐色		x-	
P 119	*	フ ル	口径 器高	12.6 2.6		*	淡灰褐色 精 精	普通	黄褐色		x-	
P 120	*	フ ル	口径半 器高	12.4 2.7		*	赤褐色 精 精	普通	黄褐色		x-	
P 121	*	フ ル	口作 器高	8.4 2.5		近縁糸切り	黄褐色 精 精	*	*		x-	
P 122	*	フ ル	口径 器高	14.0 2.3		底部糸切り、板目	*	良	*		x-	
P 123	*	フ ル	口径 器高	12.0 2.8		*	黄褐色 精 精	不良	黄褐色		x-	
P 124	*	フ ル	口径半 器高	13.0 2.6		*	普通	赤褐色			x-	
P 125	*	フ ル	口径半 器高	16.8 3.1		底部糸切り	褐色 精 精	*	暗褐色		x-	
P 126	塊 瓦	瓦	底面 器高	4.2 0.4	底部から内削してのびる基 底面三角の付合部	内外面へラ侧	褐色 精 精	良	内米黄色 外暗褐色		x-	
P 127	块 底部欠	瓦	底面 器高	23.4 1.0	体部は大きく開き、口端 部分はその字形に内削	体部内削模ナデ 外側ナチ	淡褐色 精 精	普通	灰色		x-	
P 128	第4号ピット	皿 土師器	口径 器高	9.4 0.9		底部糸切り、板目	黄褐色 精 精	不良	黄褐色		24-	
P 129	*	フ ル	口径 器高	9.4 1.1	P127.8-9.4cm 器高1.0cm前後の扁 平な小球である。厚 く平坦な底面から左 右斜面を大きくおさ める。P 131は施塗 に疑ひ。	*	灰褐色 精 精	*	灰褐色			x-
P 130	第5号ピット	フ ル	口径 器高	9.0 1.0		*	黄褐色 砂粒あり	*	黄褐色		x-	
P 131	*	フ ル	口径 器高	7.6 0.6	かく体部をつまみ山 し口縁部を大きくおさ める。P 131は施塗 に疑ひ。	底部糸切り	黄褐色 精 精	良	赤褐色		x-	
P 132	*	フ ル	口径 器高	8.8 1.1		底部糸切り、板目	*	*	*		x-	
P 133	*	フ ル	口径 器高	9.4 1.1		*	灰褐色 精 精	*	明褐色		x-	
P 134	*	フ ル	口径 器高	8.6 1.2		*	灰褐色 精 精	不良	黄褐色		x-	
P 135	*	フ ル	口径 器高	9.6 1.0		*	赤褐色 精 精	*	赤褐色		x-	
P 136	*	フ ル	口径 器高	8.6 1.2		底部糸切り	赤褐色 精 精	良	*		x-	
P 137	*	フ ル	口径 器高	8.0 1.1		底部糸切り、板目	黄褐色 精 精	不良	黄褐色		x-	
P 138	第6号ピット	フ ル	口径 器高	8.4 1.4		底部糸切り	黄褐色 砂粒あり	*	*		x-	
P 139	*	フ ル	口径 器高	8.8 1.1		底部糸切り、板目	灰褐色 精 精	*	灰褐色		x-	
P 140	*	フ ル	口径 器高	8.0 1.1		*	暗灰色 細砂あり	*	暗灰色		x-	

五十川高木遺跡

遺物番号	出土区・層位	種類	種類	法量	形態の特徴	手法の特徴	施土	地皮	色調	備考	Fig.-PL.
P 141	第6号ピット	皿	土師器	口径 9.0 厚さ 1.2	P140に同じ。	底部斜切り、板目	黒褐色 良	赤褐色	24		
P 142	第10号ピット	*	*	口径 8.6 厚さ 1.2		*	黄褐色 良	黄褐色	*		
P 143	第5号ピット	环	*	口径 13.0 高さ 2.5	平坦な底盤から体部	底部斜切り	黄褐色 良	不均	黄褐色	*	
P 144	*	*	*	口径 13.6 高さ 2.7	引き出し、口縁部	底部斜切り、板目	黄褐色 良	普通	黄褐色	*	
P 145	第9号ピット	*	*	口径 12.0 高さ 3.0	内外面彫ナギ、底は	底部斜切り	*	*	*	*	
P 146	第10号ピット	*	*	口径 13.0 厚さ 3.2	表裏を呈すものもある。	底部斜切り、板目	*	*	*	*	
P 147	第5号ピット	培	土師質	口径 6.0 高さ 7.3	丸底の球形塊から口	内外面彫ナギ	黄褐色 砂粒あり	*	*	*	
P 148	第2号ピット	盤 口縁部	*	口径 29.0	縫合する口縁部	内面上部斜ナギ、 板目、外腹凹凸	赤褐色 砂粒あり	赤褐色	*		
P 149	第5号ピット	縫 口辺部	*	口径 34.0	L字型の口縁部、体部	内外面彫毛目	*	*	内表面褐色 外表面褐色	一部焼成着	
P 150	第2号ピット	縫 体部	黑色 上部	口径 16.0	体部内側、口縁部	内表面ナラニク 外縁へア付	灰褐色 良	普通	内 黑色 外 深灰色	*	
P 151	第5号ピット	縫 底板	瓦	底径 6.2 高さ 0.7	体部は内側ある。	外縁はヨコ方向 のウカ削り	暗灰色 良	内深白色 外深灰色	*		
P 152	第6号ピット	*	*	底径 5.0 高さ 0.3	底盤は断面三角形の	内底はジグザグ	灰 良	普通	内暗灰色 外灰白色	*	
P 153	第2号溝	皿	土師器	口径 9.4 厚さ 1.4	低い底盤が付く	にヘア研磨	灰 良	不良	灰褐色	25	
P 154	第3号溝	*	*	口径 7.4 厚さ 1.1	平緩な底盤から縦か く体部を引き出す。	内外面ともナギ、 底部斜切り、板目	黄褐色 砂粒あり	普通	黄褐色	*	
P 155	縫 底部	*	*	底径 6.0 高さ 0.3	底盤から内收しながら	内外面ともヘア 磨き	灰褐色 良	普通	黄褐色 表面の中央 部は黒色	*	
P 156	第2号溝	*	黑色 上部	底径 6.0 高さ 0.3	立ち上かる。張	内外面ナラニク、 灰褐色	暗灰色 良	*	背面黑色	*	
P 157	第3号溝	高台付 环	上鋸面	底径 4.0 高さ 1.0	底盤からやや内側、縫 合部は内付ける場合	内底ナギ、内面 ヘア削り	褐色 良	普通	灰褐色	*	
P 158	第2号溝	縫 高台欠	黑色 下部	口径 14.0	体部は内收しながら のび、口縁部を強く 外寄せる。	体部内外面はヘ ア磨きを施す。	灰褐色 良	*	内 黑色 外 灰褐色	*	
P 159	*	*	*	口径 14.4	底盤はヘア削り、 底盤は立つ。	底盤はヘア削り、 内底は研磨を施 すとき、光沢あ り。P 160は同 底盤を施す。	灰褐色 良	不良	内深黑色 外深灰色	*	
P 160	第3号溝	*	*	口径 17.2	はり掛け高台が立 く。	内底は研磨を施 すとき、光沢あ り。P 160は同 底盤を施す。	灰褐色 良	*	内深黑色	*	
P 161	第1号溝	*	底部	底径 8.2 高さ 0.9	底盤は立つ。	灰褐色 良	普通	内 黑色 外深灰色	*		
P 162	第3号溝	*	*	底径 8.0 高さ 0.8	底盤は立つ。	灰褐色 砂粒あり	*	*			
P 163	第2号溝	縫 底盤欠	土師質	口径 21.5	何か引立す口縁部 底盤は、かくして立	内外面ナギ	灰褐色 良	内深褐色 外深褐色	*		
P 164	井戸・3層	皿	上鋸面	口径 9.4	脛底から底盤へ 向かって立つ。	底盤彫ナギ	灰褐色 良	赤褐色	27		
P 165	*	7層	*	口径 8.0 高さ 1.5	上縁の底盤から内 側へ立つ。	底盤斜ナギ、 底盤斜切り	灰褐色 良	黄褐色	*		
P 166	*	6層	环	口径 11.8 高さ 2.6	上縁の底盤から内 側へ立つ。	底盤斜ナギ、 底盤斜切り	灰褐色 良	普通	内深褐色 外深褐色	*	
P 167	*	3層	*	口径 11.6 高さ 2.2	なく平緩な底盤から 外側寄りに外だ。	底盤斜ナギ、 底盤斜切り	灰褐色 良	普通	灰褐色	*	
P 168	*	*	高台付 环	底径 7.0 高さ 0.8	底盤は立つ。	底盤斜ナギ、 底盤斜切り	灰褐色 良	暗灰色	*		
P 169	*	5層	縫 底盤欠	土師質	何かしらL字形の折 れ出し。	内外面ナギ	赤褐色 砂粒あり	不良	内深褐色 外深褐色	*	
P 170	*	6層	縫 底盤欠	口径 31.5	内底はてのびる体部 から口縁部は内寄 り。	内外面方向の崩 毛目、外腹ナギ 削り	*	*	内深褐色 外深褐色	体部外腹に 焼付着	
P 171	*	5層	*	口径 40.5	多く平緩な底盤から 外側寄りに外だ。	底盤斜ナギ	普通	*	*	*	
P 172	*	3層	縫	口径 25.8 高さ 10.0	底盤から直達的に大 きく立てる。	内底は崩毛目、 5~3本巻位の ヘアによる刃跡 を残す。	灰褐色 良	灰色 灰褐色	鉢	28	
P 173	*	*	*	口径 25.4	口縁部はやや丸味 をなして下がるもの が多い。P 172は半 周底をつくる。	内底は崩毛目、 5~3本巻位の ヘアによる刃跡 を残す。	灰褐色 良	灰褐色 良	*	*	
P 174	*	*	*	口径 26.2		内底は崩毛目、 5~3本巻位の ヘアによる刃跡 を残す。	灰褐色 良	不良	灰褐色	*	
P 175	*	*	*	口径 27.6		内底は崩毛目、 5~3本巻位の ヘアによる刃跡 を残す。	灰褐色 良	*	*	*	
P 176	*	*	底部	底径 12.3		内底は崩毛目、 5~3本巻位の ヘアによる刃跡 を残す。	灰褐色 良	*	*	*	

第3章 A地点の調査

51

Tab. 4 A地点出土陶器一覧

(表印は復原値、単位cm)

遺物 番号	出土区・ 層	器形・部	法 量	形 質	手 法	施 物	粘 土	燒 成	色 調	備 考	Fig.-Pl.
T 1	C-37-4層	杯・底膨大	口径 27.5 高さ 10.3	平底な器部から内寺灰陶にまで上がる。口縁部内側に設けた蓋を認めます。	内面糊ナデ 外面ナデ	口縁下外側に 灰色の跡がな れる。	灰褐色 粗い	普通	内面灰褐色 D-35区3層出土 品と同一	5号ビット、 D-35区3層出土 品と同一	17-
T 2	B-36-4層	杯・	口径 16.5 高さ 9.2	やや上昇した器部から内寺灰陶に立ち上がり、口縁部を内側に反せる。	内面糊ナデ 外面ナデ	灰褐色の吹き き出。	灰褐色 粗い	* 單色褐色		D-40区1層出土 品と同一	-
T 3	B-37-4層 者・1 朱	口沿部	口径 9.0	短く外反する口縁部から内寺灰陶に立ち上り出す。内側には縫をなす。	内面糊ナデ 外面糊ナデ	内面糊ナデ 外面糊ナデに2条の 縫を認めらる。	灰褐色 粗い	不良	单色 褐色		-
T 4	C-41-3層	盆・口沿部	口径 32.0	口縁部を丸く作り返す。 体部は有孔性に仕切られる。		内面糊の跡が 外側にかかる	灰 褐色	*	内面灰褐色 外面灰褐色		-
T 5	C-37-3層 38	杯・	口径 20.5 高さ 9.0	口縁部を丸く作り返す。 外側に張り出し、外側が下げる 底部は高台で盛り立てる。	内面糊ナデ、外面 糊ナデ		灰褐色 精 良	良	单色 色 認めらか	B-35区3層 C-35区3層、 出土品と同一	-
T 6	B-37-3層	杯・底膨大	口径 25.5	口縁部を丸く作り返す。 体部は有孔性に仕切られる。	ナシ調整	内面糊下より 灰褐色の跡 がかかる	灰褐色 粗い	普通	单色 褐色	B-35区5層小 ビット出土品と 同一	-
T 7	D-35-2層 者・1 体	口沿部	口径 20.0	口縁部を外側に折り返し 立てる。口縁部はわず かに内側で中央部が凹む形	内面糊压延、ナデ 外面ナデ、底部に 剥離	外側に触灰褐色 の跡がかかる 粗い	灰褐色 粗い	普通	单色 褐色	普通焼	-
T 8	C-38-2層	杯・	口径 20.0 高さ 7.5	逆し字形の折り返し口縁部。 器身が薄い。	内面糊ナデ 外面糊ナデ、ナデ	口縁下内側上 り秋葉色の跡 がかかる	*	不良	单色 器皿は無い	B-3号住居址、 B-38区小ビット 出土品と同一	18-
T 9	C-36-3層	杯・	口径 18.0 高さ 7.5	逆し字形の口縁部。 器身が薄い。	内外糊ナデ	口縁下より 内面灰褐色の 跡	灰 褐色	*	单色 褐色		-
T 10	B-37-3層	杯・1 体	口径 24.0	外側にやや上がる逆し字 形の口縁部。	内面糊ナデ 糊部は凸凹が 多い。	外側口縁下より 灰褐色の跡 がかかる	灰褐色 粗い	*		B-36区4層、 B-38区3層、D-37区3 層出土品と同一	-
T 11	第2号住居址 者・体	壺	直径 14.5	長脚の壺、製法は泥輪を いくつもめらす。部分 的に輪目を施す。	内面糊ナデ 外面糊ナデ	内面糊下 外側へうずり	灰 褐色	*	内面灰褐色 外面灰褐色		21-
T 12	第2号住居址 者・体	壺	直径 26.0	大きく早い平底 大脚の壺	内外糊ナデ、器皿 は粗雑	内面は灰褐色 の跡、底部は灰 褐色	灰褐色 粗い	*	内面灰褐色 外面灰褐色 外底褐色		-
T 13	第3号住居址 者・口沿部	口沿部	8.0	短かく折り返す口縁部。 内側に細かい新面三形 なるややくぼみを 立てる。	内面糊ナデ 外面糊ナデ	内面灰褐色の 跡、はなめらか	灰褐色 精 良	良	单色 やや光沢あり		21-
T 14	第3号住居址 者・口沿部	山根	直径 13.0	口縁部上りのまろやか な口縁部。内側に輪目を 有し、内側にはつくる 輪の跡。	内面糊ナデ 外面糊ナデ、ナデ	内面糊下より 灰褐色の跡、光沢あり	*	*	外底 褐色 内底 褐色		-
T 15	第3号住居址 者・脚	不	单	外面に二重の横縫と車文 を単位とした押印を施す	内面糊ナデ		*	*	内素 褐色 外底 褐色	延喜古窯系	-
T 16	第4号ビット 器・底膨大	口沿部	口径 18.2 高さ 7.0	短かく外反する口縁部。 内側に輪目を有し、部分的に 輪目を有する。	内面糊ナデ 外面糊ナデ、ナデ	内面糊下より 灰褐色の跡 がかかる	灰 褐色	普通	内素 褐色 外底 褐色	普通	24-
T 17	第5号ビット 器・口沿部	口沿部	口径 13.0	短かく折り返す口縁部。 内側に輪目を有する。	内面糊ナデ 外面糊ナデ	内面糊下より 灰褐色の跡 がかかる	灰 褐色 粗 良	不良	内素 褐色 外底 褐色	B-35区5層出土 品と同一	26-
T 18	第3号壺 器・口沿部	口沿部	口径 21.5	口縁部よりそのまろやか な口縁部。	内面糊ナデ		明褐色 粗 良	普通	内素 褐色 外底 褐色		-
T 19	井戸・5層	井戸	口径 5.5	くの字形を益々やや深い 口縁部、内側はやや粗い 器皿である。	内面糊ナデ、外面 糊ナデ	内面糊下より 灰褐色の跡 がかかる。内側 は部分	灰褐色 粗 良	普通	内素 褐色 内側は無い	井戸・5層出土 品と同一	27-
T 20	井戸・5層	井戸・底部	口径 4.4 高さ 6.5	上面が平均的な折り返し口 縁部、底は上昇した、豊富な 器皿である。	内面糊ナデ、外面 糊ナデ	内面糊下より 灰褐色の跡 がかかる。内側 は部分	灰褐色 粗 良	普通	内素 褐色 内側は無い	井戸・5層出土 品と同一	-

五十川高木遺跡
Tab. 5 A 地点出土磁器一覧

(※印は復原品、単位cm)

准 備 番 号	出土地・層位	器形・部品	器種	法 量	形 数の 特 徴	手法・文様	胎土	焼成	新 調	備 考	Fig.-PL
G 1	D-35・3層	塊・口部部	白磁	口径 14.4	口部を削り返し肥厚させた。	内面ナデ・外側 へク切り	成灰色 精 細	良好	乳白色 不透明	白磁目類 14	*
G 2	D-38・3層	塊	*	口径 14.4 器底 6.4	口部はやや外寄り、 体部はゆるやかにカーブしつつ底部に統く。 窓合は浅く削り出で て、窓の底部欠けた。	内面ナデ・外側 へク切り。内面 に比摩磨めぐらす ものが多い。	灰白色 精 細	*	青乳白色 透 明	白磁目類	*
G 3	D-38・3層	塊・底部欠	*	口径 14.0	窓合は深く削り出で て、窓の底部欠けた。	内面ナデ・外側 へク切り。内面 に比摩磨めぐらす ものが多い。	灰白色 精 細	普通	乳白色 半透明	*	*
G 4	C-37・3層	塊・底部欠	*	口径 14.2	見込みは比摩磨めぐら し、底が中央部が高く なるもの(G 2)と似 い。(G 3)の2種がある。	内面ナデ・外側 へク切り。内面 に比摩磨めぐらす ものが多い。	灰 色 精 細	*	深米色 半透明	*	*
G 5	C-40・3層	塊・底部欠	*	口径 15.4	窓合は深く削り出で て、窓の底部欠けた。	内面ナデ・外側 へク切り。内面 に比摩磨めぐらす ものが多い。	灰 色 精 細	良	深灰白色 半透明	*	*
G 6	C-37・3層	塊・底部欠	*	口径 13.8	窓合は深く削り出で て、窓の底部欠けた。	内面ナデ・外側 へク切り。内面 に比摩磨めぐらす ものが多い。	灰 色 精 細	普通	暗灰白色 不透明	*	*
G 7	D-41・3層	且	*	口径 11.0 器底 3.6	体部は半周底部から 直線的に広がるもの と、やや内寄りしつつ 窓部を外見させるもの がある。	内面への削り 内面ナデ・窓合	成灰色 精 細	良	青白色 半透明	*	*
G 8	D-36・2層	*	*	口径 9.6 器底 1.8	口部の外側は 窓合がかかる、いわゆる いわゆる口窓。	口部の外側は 窓合がかかる、いわゆる いわゆる口窓。	灰白色 精 細	*	青乳白色 半透明	*	*
G 9	B-37・3層	*	*	口径 10.8 器底 3.7	窓合を外見させるもの がある。	内面への削り 内面ナデ・窓合	*	*	*	*	*
G 10	B-37・3層	*	*	口径 9.8 器底 3.0	窓合は深く削り出で て、窓の底部内側は 斜めに比摩磨めぐらす。	内面への削り 内面ナデ・窓合	灰白色 精 細	*	青白色 半透明	*	*
G 11	B-37・3層	塊・底部欠	*	口径 10.8 器底 2.4	窓合に比して若干の大きさ の2種がある。	内面への削り 内面ナデ・窓合	灰白色 精 細	良	乳白色 質入あり	*	*
G 12	B-35・3層	且	*	口径 10.8 器底 3.7	窓合は深く削り出で て、窓の底部内側は 斜めに比摩磨めぐらす。	内面への削り 内面ナデ・窓合	灰白色 精 細	普通	青灰白色 半透明	*	*
G 13	D-38・3層	*	*	口径 10.9 器底 3.2	窓合は深く削り出で て、窓の底部内側は 斜めに比摩磨めぐらす。	内面への削り 内面ナデ・窓合	灰白色 精 細	普通	灰白色 半透明	*	*
G 14	B-36・4層	且・底部欠	*	口径 10.4 器底 2.9	窓合は深く削り出で て、窓の底部内側は 斜めに比摩磨めぐらす。	内面への削り 内面ナデ・窓合	灰白色 精 細	良	青乳白色 半透明	*	*
G 15	B-35・3層	且・底部欠	*	口径 10.8	窓合は深く削り出で て、窓の底部内側は 斜めに比摩磨めぐらす。	内面への削り 内面ナデ・窓合	*	*	乳白色 半透明	*	*
G 16	B-36・4層	且	*	口径 9.0 器底 2.0	やや口付部の底板から内側を削 りこみ、口縁をよくくびらせる。	内面への削り 内面ナデ・窓合	灰白色 精 細	普通	青乳白色 半透明	不 明	*
G 17	B-35・3層	底・底 部	*	底径 6.0	底盤から両端をなして 内側を削りこみ、口縁をよくくびらせる。	内面への削り 内面ナデ・窓合	灰白色 精 細	普通	青乳白色 半透明	白磁目類	*
G 18	B-35・2層	塊・口部部	*	口径 4.4	窓合は直行・口部部は 削り取り・玉縁状をなす。	外腹へク切り・ 内面ナデ	成灰色 精 細	良	乳白色 不透明	不 明	*
G 19	C-36・2層	塊・底 部	*	高台径 6.2	窓合は深く削りこみ、窓合・ 窓合底部を削り取つて窓をなし て窓の底部に沿つて窓をなし	外腹方々口・窓 底面外腹まで窓を	灰 色 精 細	普通	乳白色 半透明	白磁 I類	*
G 20	D-36・2層	塊・底 部	*	高台径 5.2	窓合部が手削りで削りこみ、 窓合・窓合底部を削り取つて窓をなし て窓の底部に沿つて窓をなし	見込みに丸縫 窓面カキモ	灰 色 精 細	普通	乳白色 半透明	白磁目類	*
G 21	D-36・2層	塊・底 部	*	高台径 5.8	窓合部は底面を削りこみ、 窓合・窓合底部を削り取つて窓をなし て窓の底部に沿つて窓をなし	窓裏は底面下端 精 細	灰白色 精 細	普通	乳白色 半透明	白磁 I類	*
G 22	B-35・4層	塊・底 部	*	高台径 6.0	窓合部は底面を削りこみ、 窓合・窓合底部を削り取つて窓をなし て窓の底部に沿つて窓をなし	窓裏の窓が大き く、底面を削りこみ、 窓合部をよどらせる。	灰白色 精 細	普通	乳白色 半透明	白磁目類	*
G 23	D-35・3層	塊・底 部	*	高台径 6.0	窓合部は底面を削りこみ、 窓合・窓合底部を削り取つて窓をなし て窓の底部に沿つて窓をなし	外腹へク切り・ 窓裏に丸縫	成灰色 精 細	普通	乳白色 半透明	白磁目類	*
G 24	B-36・4層	塊・底 部	*	高台径 4.8	窓合部が厚くかかる、 窓合・窓合底部を削り取つて窓をなし て窓の底部に沿つて窓をなし	窓裏が厚くかかる 窓裏に丸縫	成灰色 精 細	良	青乳白色 半透明	白磁目類	*
G 25	C-39・3層	塊・底 部	*	高台径 6.4	窓合部が厚くかかる、 窓合・窓合底部を削り取つて窓をなし て窓の底部に沿つて窓をなし	外腹へク切り・ 窓裏に丸縫	成灰色 精 細	普通	乳白色 半透明	白磁 I類	*
G 26	B-35・3層	塊・底 部	青磁	高台径 6.0	窓合は机く垂直に立つ 窓裏部は底面から内側を 削り取り、窓の底部に沿つて窓をなし	外腹へク切り・ 窓裏に丸縫	成灰色 精 細	普通	灰白色 半透明	*	*
G 27	B-35・3層	塊・底 部	*	高台径 6.2	窓合部が厚くかかる、 窓合・窓合底部を削り取つて窓をなし て窓の底部に沿つて窓をなし	外腹へク切り・ 窓裏に丸縫	成灰色 精 細	普通	灰白色 半透明	白磁 I類	*
G 28	B-35・3層	塊	*	口径 16.8 高台径 5.0 窓合径 2.0	窓合は低く垂直に立ち 窓の底部が厚い。	いずれも外腹に 窓裏を削り対称 窓のもの。	成灰色 精 細	普通	青乳白色 半透明	*	15
G 29	B-35・2層	塊・底部欠	*	口径 16.4 器底径 6.8	窓の底部は底面から内側を 削り取り、窓の底部に沿つて窓をなし	窓のもの と複数のもののが あり、窓裏の形 態も変化が認め られる。	成灰色 精 細	普通	青乳白色 半透明	*	*
G 30	B-35・3層	塊	*	口径 17.4 高台径 6.0	窓の底部は底面から内側を 削り取り、窓の底部に沿つて窓をなし	*	成灰色 精 細	普通	青乳白色 半透明	*	*
G 31	B-37・3層	*	*	口径 18.2 高台径 5.9 窓合径 2.0	窓の底部は底面から内側を 削り取り、窓の底部に沿つて窓をなし	*	成灰色 精 細	普通	乳白色 半透明、厚い	*	*
G 32	B-37・3層	塊・底部欠	*	口径 17.3 窓合径 5.0 器底径 6.4	窓の底部は底面から内側を 削り取り、窓の底部に沿つて窓をなし	*	成灰色 精 細	普通	乳白色 半透明	*	*
G 33	B-35・3層	塊	*	口径 16.4	窓の底部は底面から内側を 削り取り、窓の底部に沿つて窓をなし	*	成灰色 精 細	普通	灰白色 半透明	*	*
G 34	D-35・3層	塊・口部部	*	口径 16.4	窓の底部は底面から内側を 削り取り、窓の底部に沿つて窓をなし	*	成灰色 精 細	普通	黄乳白色 半透明	*	*
G 35	C-37・3層	塊・口部部	*	口径 15.8	窓の底部は底面から内側を 削り取り、窓の底部に沿つて窓をなし	*	成灰色 精 細	普通	青乳白色 半透明、質入?	*	*

第3章 A地点の調査

53

番号	出土区・層位	断面・器部	形態	法量	形態の特徴	手法・文様	胎土	焼成	釉調	備考	Fig.-Pl.
G36	C-37・3層	碗・口沿部	青磁	口径直13.4	体部ののがままに輪郭をとめる。G37はやや口部が肥厚する。	外側に施文を施す。厚く焼けた外壁にへら形の凹凸がある。	灰色 焼成	白	灰 半透明	青磁I類	15-
G37	D-42・4層	碗・口沿部	青磁	口径直16.4		外側にへら形の凹凸がある。	灰色 焼成	白	灰 半透明		15-
G38	B-37・3層	碗・底部	青磁	高台径5.4	厚く低い削り出し高台	外側に施文を施す。厚く焼けた外壁にへら形の凹凸がある。	灰色 焼成	白	黄 半透明		15-
G39	B-35・3層	碗・底部	青磁	高台径5.8	厚く低い削り出し高台	外側にへら形の凹凸がある。	灰色 焼成	白	黄 半透明		15-
G40	C-36・2層	碗・底部	青磁	高台径5.6	厚く低い削り出し高台	外側に施文を施す。厚く削り出された高台	灰色 焼成	普通	淡黄 半透明		15-
G41	D-39・3層	合子・半欠	青白磁	口径直6.4	低い平底の合子で、底面はやや上反	青白磁は青白磁をもつて焼けます。底面はやや上反	白色 焼成	白	白色 半透明		15-
G42	B-37・3層	高台付碗	青磁	口径直8.4 高台径3.2 高さ3.0	削り出された高台、底部から内側に凹凸がある。	青白磁は青白磁をもつて焼けます。底面に凹凸がある。	白色 焼成	白	青白 半透明	青磁I類	15-
G43	D-38・3層	高台付碗・一体部	青磁	口径直11.2	低い舟形をもつた高い高台	青白磁は青白磁をもつて焼けます。底面に凹凸がある。	白色 焼成	白	黄 半透明		15-
G44	B-37・3層	高台・底部・付足	青磁	高台径5.4	底部は底盤から外広し、上部は平面面をつくる	外側に施文を施す。底盤から上部にかけて	灰色 焼成	白	青 半透明		15-
G45	B-37・3層	碗・底部	青白磁	高台径6.4	厚く低い削り出し高台	見込みにへら形の凹凸がある。	白色 焼成	白	深青 半透明	青白磁I類	15-
G46	B-36・4層	碗・底部	青白磁	高台径6.2	体部は底盤から外広し、つづいて上部もある	外側に施文を施す。底盤から上部にかけて	白色 焼成	白	青 半透明	青白磁II類	15-
G47	C-36・3層	碗・底部	青白磁	高台径5.5	底盤に出た合子の底盤から底盤まで内側はくび	外側に施文を施す。底盤から上部にかけて	白色 焼成	白	透青 半透明	不 用	15-
G48	B-35・3層	碗・底部	青白磁	口径直16.4	底部から内方気泡に立ち、口縁はやや外少し、口縁をえぐる	外側にへら形の凹凸がある。	灰色 焼成	普通	青白 半透明	青白磁II類	15-
G49	B-40・3層	碗・底部	青白磁	口径直18.8	底盤はやや外少し、口縁をえぐる	外側にへら形の凹凸がある。	灰色 焼成	白	青 半透明		15-
G50	B-36・3層	碗・底部	青白磁	口径直16.8	底盤から内方気泡に立ち、口縁はやや外少し、口縁をえぐる	内面に浅模様と草花文を配す。	灰色 焼成	白	青 半透明		15-
G51	C-43・3層	碗・底部	青白磁	口径直18.6	厚くべったりした削り出し高台、体部は内方気泡に立ち上りがあり、口縁をえぐる	外側にへら形の凹凸がある。	白色 焼成	白	青白 半透明	青白磁I類	15-
G52	C-36・4層	碗	青白磁	口径直16.4 高台径7.6 高さ5.7	底盤から内方気泡に立ち上りがあり、口縁をえぐる	外側にへら形の凹凸がある。	白色 焼成	白	青 半透明		15-
G53	B-35・3層	碗・底部	青白磁	高台径5.8	底盤から内方気泡に立ち上りがあり、口縁をえぐる	外側にへら形の凹凸がある。	白色 焼成	白	青 半透明		15-
G54	B-36・3層	碗・底部	青白磁	高台径6.4	底盤から内方気泡に立ち上りがあり、口縁をえぐる	外側にへら形の凹凸がある。	白色 焼成	白	青 半透明		15-
G55	B-35・3層	碗・底部	青白磁	高台径8.6	やや上反の底盤の外縁を削り出す	外側にへら形の凹凸がある。	灰色 焼成	白	青白 半透明	青白磁II類	15-
G56	D-36・3層	碗・底部	青白磁	口径直7.8	いわゆる船の底盤の外縁を削り出す	外側にへら形の凹凸がある。	灰色 焼成	白	青白 半透明		15-
G57	B-35・3層	皿・半欠	青白磁	口径直13.0 底盤径8.9 高さ5.9	突起の高い底盤から内方気泡に立ち上りがあり、口縁をえぐる	見込みにへら形の凹凸がある。	白色 焼成	白	青 半透明	青白磁III類	15-
G58	B-35・3層	皿・底部	青白磁	口径直5.0	内縁をえぐって立ち立ちある口縁	内縁にえぐる花文を描く。	灰色 焼成	白	青 半透明		15-
G59	D-42・4層	皿・半欠	青白磁	口径直12.4 底盤径4.2 高さ3.9	底盤から内方気泡に立ち上りがあり、口縁をえぐる	内底全面に草花文を施す。	白色 焼成	白	青 半透明		15-
G60	第1号住居址	碗・底部	青白磁	高台径7.6	底盤の高い目高台、見込みにえぐる花文	内底全面に草花文を施す。	灰色 焼成	白	青 半透明	青白磁IV類	20-
G61	第1号住居址	碗	青白磁	口径直14.4 底盤径9.4 高さ4.9	今比田の高い出目高台で、底盤はくび	内底全面に草花文を施す。	灰色 焼成	白	青 半透明		15-
G62	第2号住居址	碗・口沿部	青白磁	口径直16.2	底盤から内方気泡に立ち上りがあり、口縁をえぐる	外側にへら形の凹凸がある。	灰色 焼成	白	青 半透明	青白磁I類	21-
G63	第2号住居址	碗・底部	青白磁	口径直16.0 高台径9.8	底盤の高い目高台、見込みにえぐる花文	内底全面に草花文を施す。	灰色 焼成	白	青 半透明		15-
G64	第3号住居址	碗・口沿部	青白磁	口径直17.4	体部は内方気泡に外広し、口縁をえぐる	内面にへら形の凹凸がある。	灰色 焼成	白	青 半透明	青白磁IV類	23-
G65	第3号住居址	碗・口沿部	青白磁	口径直14.2	底盤から内方気泡に立ち上りがあり、口縁をえぐる	内面にへら形の凹凸がある。	灰色 焼成	白	青 半透明		15-
G66	第3号住居址	碗・底部	青白磁	口径直14.6	底盤から内方気泡からあいたら底盤をそのままおこめる。	外側にへら形の凹凸がある。	灰色 焼成	白	青 半透明	青白磁I類	15-
G67	第3号住居址	碗・底部	青白磁	口径直14.9	底盤から内方気泡からあいたら底盤をそのままおこめる。	内底全面に草花文を施す。	灰色 焼成	白	青 半透明	青白磁II類	15-
G68	第3号住居址	碗・底部	青白磁	口径直9.4	底盤から内方気泡からあいたら底盤をそのままおこめる。	内底全面に草花文を施す。	灰色 焼成	白	青 半透明	青白磁IV類	15-
G69	第3号住居址	皿・半欠	青白磁	口径直10.8 高さ2.0	内底全面に草花文を施す。	内底全面に草花文を施す。	灰色 焼成	白	青 半透明	青白磁II類	15-
G70	C-39・ビット	碗・底部	青白磁	口径直16.0	内底全面に草花文を施す。	外側にへら形の凹凸がある。	灰色 焼成	白	青 半透明	青白磁III類	25-

五十川高木遺跡

番号	出土区・層位	器種・部類	種類	法 番	形 勢 の 特 徴	手法、文様	動 土	地 盆	輪 物・軸頭	備 考	Fig.-PL
G 71	B-39・小ピット	塊・高台火	青磁	口径直16.0 底高6.0	底部からやや直線的に外広し、口縁部をえぐりあわめる。	内面にうろこ型、内面に草花文等を施す	油灰色 堅 痛	白	茶緑色 半透明	青磁直頸	25・
G 72	敷4号ピット	塊	・	口径直17.0 底高6.5	高台は低く、へったりしており、底が厚い	外腹にカキ目、内面は草文と頭面文様				青磁直頸	・
G 73	・	塊	・	口径 16.4 器高 7.2		内面と外底に草花文を施す	灰褐色 堅 痛	井通	深緑色 不透明	青磁直頸	・ 19
G 74	第7号ピット	塊・底 部	・	裏台深 6.2 底高 6.9	やや外に張る頬り出し、内底に凹凸があり。	内底に「金玉彌」の焼物あり	灰 色	・	淡緑色 半透明	・	・
G 75	第2号ピット	・・	其部欠	口径直17.0	窓い器底、口縁部や内側に外舟	へら削り、ナデ	灰褐色 堅 痛	・	暗灰褐色 不透明	青磁半頸	・
G 76	・	体一部 基 部	・	裏台深 6.8 高台高 0.4	浅く唇り出し少し高台	へら削り、ナデ見込みに白粉付着	・	良	茶緑色、堅 部分的に剥落	・	・
G 77	第5号ピット	・・	口縁部	口径直16.6	厚く唇り底部から内側向外に張り出る、口縁部を特に外反させると外反させる。	へら削りの邊縁を施す	灰 色	・	淡黄緑色、半 青磁、直人あり	青磁直頸	・
G 78	・	口縁部	・	口径直16.2		へら削りの邊縁を施す	灰褐色 堅 痛	・	淡茶緑色 半透明	・	・
G 79	B-39・小ピット	塊・底 部	・	裏台深 6.0 高台高 0.8	高台は低く、底より大きく外反する。	へら削りの邊縁を浅く施す	乳白色	香通	濃茶緑色 不透明	・	・
G 80	第5号ピット	塊	白磁	口径 12.0 器高 3.9	(断面)にして裏面が低い、あるいはややむきあつた。口縁部に白粉付着	内面に輪郭線などない、むきあつた。	灰 色	良	乳白色 不透明	白磁直頸	・ 17
G 81	第3号ピット	直・底部欠	・	口径直10.8	やや上げた後の底部から外反し、口縁部を外反させ、内底に斜線をつくる	外底へうねり割 内面ナギテ	浅灰色 均 勝	普通	乳黄色 不透明	・	・
G 82	第9号ピット	直・底部欠	・	口径直12.4 器高 2.8	底部はいわゆる輪郭線がある。	口縁部はいわゆる輪郭線がある。	灰 色	良	原色 不透明	・	・ 18
G 83	第6号ピット	直・牛 欠	・	口径直 9.6 器高 1.9	平底なら直底の外に凹し、輪郭線をつくる。	輪郭線は底部下まである。 輪郭線をつくる。	黄褐色 均 勝	普通	乳白色 直人あり	不 明	・
G 84	B-39・小ピット	直・底 部	・	底径直 7.0	やや上げた外底の内側に斜線をつくりながら外反する。	輪郭線へら削りの邊縁を施す	灰褐色 均 勝	・	灰白色 不透明	白磁直頸	・
G 85	第5号ピット	直・牛 欠	青磁	裏台深 2.3	小さいうねりの直底の斜線をつくりながら外反する。	輪郭線へら削りの邊縁を施す	灰褐色 均 勝	・	乳茶緑色 不透明	青磁直頸	・
G 86	第5号場	塊・口近部	白磁	口径直17.2	青磁がうねりの直底の斜線をつくる。	内面にへら削りを施す。	灰褐色 均 勝	・	青灰色 半透明	白磁直頸	26・
G 87	第2号場	塊・一歩足	青磁	口徑直14.8	底部から内側に向いて傾き度をもつて直底の斜線をつくる。	内面に部的に直底の斜線をつくる。	暗灰色 均 勝	普通	青磁直頸	・	・
G 88	第3号場	塊・直 横	青磁	高台径 7.0 裏台高 6.0	底高く傾いて直底の裏台高見込みに白粉付着	裏台底は底下半までかかる。	・	・	茶褐色 不透明 物の混在あり	・	・
G 89	井戸・7層	塊・牛 欠	・	口徑直16.8 裏台高 3.9	やや内側へのうねりの直底の斜線をつくりながら外反する。	外底に二片割り 裏面に織入る。	茶灰色 均 勝	良	茶褐色 不透明	青磁直頸	29・
G 90	井戸・5層	塊・直 横	・	口徑直15.4	底部かららかにカーブをえぐしながら外反し、口縁部をそのままひくおさめる。	外曲に葉文を施す。	灰褐色 均 勝	・	茶褐色、半 青磁、直人あり	・	・
G 91	井戸・3層	塊・底部欠	・	口徑直14.3 裏台高 6.1	厚い底部に直底の斜線をつくる。	外曲にへら削りの邊縁を施す。	灰褐色 均 勝	・	茶褐色、半 青磁、直人あり	・	・
G 92	井戸・4層	塊・底 部	・	高台径 5.0 裏台高 0.8	厚い底部に直底の斜線をつくる。	外曲にへら削りの邊縁を施す。	灰褐色 均 勝	・	茶褐色 半透明	・	・
G 93	井戸・7層	塊・直 横	白磁	口徑直14.4	やややかに内側に向いて傾き度をもつて直底の斜線をつくる。	内面に直底の斜線をつくる。	灰褐色 均 勝	普通	乳白色 直人あり	白磁直頸	・
G 94	井戸・6層	塊・直 一部	・	口徑直14.4	内底に直底の斜線をつくる。	内面に直底の斜線をつくる。	灰褐色 均 勝	・	灰白色 不透明	・	・
G 95	井戸・3層	直・底部欠	・	口徑直12.0 裏台高 3.9	やややかに内側に向いて傾き度をもつて直底の斜線をつくる。	内面に北朝式 口端は口直	茶褐色 均 勝	良	乳白色 不透明	・	・ 18
G 96	井戸・5層	塊・直 一部	・	口徑直12.4	やややかに内側に向いて傾き度をもつて直底の斜線をつくる。	外底部下半は直底なし。	灰白色 堅 痛	・	茶褐色 不透明	白磁直頸	・
G 97	井戸・3層	塊・直 横	・	裏台深 6.6 裏台高 0.8	厚く傾いた直底の斜線をつくる。	底部下端部直底斜線に輪郭線がある。	灰褐色 均 勝	・	茶褐色 不透明	・	・
G 98	井戸・4層	塊・直 一部	青磁	裏台深 6.3 裏台高 0.9	やや外側に傾いた直底の斜線をつくる。	内底に輪郭線 花文を施す。	灰褐色 均 勝	・	茶褐色 半透明	青磁直頸	・
G 99	井戸・5層	塊・底 部	・	裏台深 6.2 裏台高 0.8	低い傾いた直底の斜線をつくる。	内底にへら削り 花文を施す。	・	・	茶褐色、半 青磁、直人あり	・	・
G 100	井戸・9層	塊・直 横	・	高台径 6.3 裏台高 0.9	低い傾いた直底の斜線をつくる。	底部下端部直底斜線に輪郭線がある。	灰褐色 均 勝	・	茶褐色 不透明	・	・
G 101	井戸・5層	塊・直 横	・	高台径 6.2 裏台高 0.8	低い傾いた直底の斜線をつくる。	内底に輪郭線 花文を施す。	灰褐色 均 勝	・	茶褐色 半透明	・	・
G 102	井戸・5層	塊・底 部	・	高台径 6.8 裏台高 0.8	低い傾いた直底の斜線をつくる。	内底にへら削り 花文を施す。	・	・	茶褐色 半透明	・	・
G 103	井戸内鉢	塊・直 一部	・	裏台高 0.8	低い傾いた直底の斜線をつくる。	内底にへら削り 花文を施す。	茶褐色 均 勝	・	茶褐色 不透明	・	・
G 104	井戸・3層	直・牛 欠	・	口徑直10.8 器高 2.0	低い傾いた直底の斜線をつくる。	底部下端部直底斜線に輪郭線がある。	灰褐色 均 勝	・	茶褐色 半透明	青磁直頸	・
G 105	井戸・5層	直・牛 欠	・	口徑直 14.0 器高 2.0	低い傾いた直底の斜線をつくる。	内底に輪郭線 花文を施す。	灰褐色 均 勝	・	茶褐色 半透明	青磁直頸	・
G 106	井戸・3層	塊・直 部	・	高台径 4.4 裏台高 0.7	低い傾いた直底の斜線をつくる。	底部下端部直底斜線にへら削りを施す。	灰褐色 均 勝	・	茶褐色 半透明	青磁直頸	欠・ 20
G 107	井戸・6層	・	・	高台径 3.8 裏台高 0.7	低い傾いた直底の斜線をつくる。	外底部直底斜線にへら削りを施す。	灰褐色 均 勝	・	茶褐色 半透明	・	・

第3章 A地点の調査

Tab. 6 A地点出土石製品一覧

(※印は復原値、単位cm)

番号	出土区・層位	器種	石材	法量	形態・手法の特徴	色調	備考	Fig.-PL
S 1	B-35・3層	硯?・半切	滑石	長 4.8 幅 4.7 厚 0.8	表面中央部を平面に削り、器に平行に傾斜させる。内側に断面V形の縁をつくり出す。表面は中央部を削り、凹ませる。	明灰褐色		18-
S 2	D-41・3層	有孔円板	*	径 × 6.0 厚 0.6	平底な石片を円形に削り、中央部に孔を穿つ。表面の縁部は角をつくらす。丸く仕上げる。	暗灰色		19-
S 3	B-37・4層	有孔板状品	*	厚 2.5	厚い方形の石材両面を平面に磨き、孔を穿つ。	器側黒色 器底褐色		20-
S 4	C-37・3層 38	有孔板状品	*	長 11.0 幅 6.4 厚 1.5	平面形はわらじ形を呈す。表面は魚甲状に削り、裏面は平面に磨く。5ヶ所に穿孔。その内3ヶ所に鉄針跡の付着がある。	暗灰色	石端二次加工	21-
S 5	C-36・3層	有孔板状品	*	長 7.7 幅 4.8 厚 1.1	平面形はわらじ形。表面は魚甲状を呈し、裏面はノミ状は中央部を抉り、縁部をつくる。穿孔あり。	表面黒色 裏面灰色	石端二次加工	22-
S 6	第2号住居址	石塊	*	口径 × 27.0 厚 1.5	口縁上部は平出で、直下に断面V形のつばを削り出す。内面は施されているが、外側はノミ状が残る。	内面黑色 外側黑色		23-
S 7	第3号住居址	有孔环形品	*	口径 × 5.0 高 1.8	平底な石片を四角に削り、片面より抉り、环の形にしている。1ヶ所にこね抜の突起をつくり、孔が穿たれている。	浅黄色	器裏面はよく磨かれている	24-
S 8	第11号ピット	石塊	*	口径 24.2 高さ 11.0	口縁部を平面に削り、直下に低い斜面に三角形のつばを削めぐらす。体部はハーフドームにすさまよ。内面は磨き、外側はノミ状を残すも、なめらかに磨く。	内面褐色 外側黑色		25-
S 9	井戸・3層	*	*	口径 × 39.0 厚 1.5	口縁部・上端はなめらかな平面形をつくり、口縁直下にやや狭長な断面台形のつばをめぐらす。内面はしていないに磨かれ、外側ノミで整形後磨いているが、わずかにノミの痕を残している	*		26-
S 10	*	*	*	口径 × 30.0 厚 1.0	口縁部・上端は平出で、口縁直下に断面三角形のつばを削り出す。施世は施されていない。	*		27-
S 11	*	*	*	口径 × 33.0 厚 1.0	表面 4.0 × 3.9 厚 0.8 最高 2.3	内面黑色 外側黑色		28-
S 12	* - 7層	有孔板状品	*	表面 4.0 × 3.9 厚 0.8 最高 2.3	いずれももろ崩れの部分の端部を再加工したもので、つばの両端を削り、縁をつくりしている。裏面は平面に磨いている。S12は有孔の縁をもつものと見えられ、S13は、その裏面跡の加工跡から知れない。	暗灰色	石端二次加工	29-
S 13	* - *	*	*	表面 4.0 × 3.9 厚 1.2 最高 3.2	表面黑色 裏面黑色	石端二次加工		30-
S 14	* - 1層	砥石	硬質砂岩	長さ 13.2 幅 6.0 厚さ 8.5	いずれも範囲ばかりがあり、全形は知りえないが、長方形を基本にした素材を利用している。	暗灰色		31-
S 15	* - 2層	*	*	長さ 14.6 幅 8.8 厚さ 6.8	裏面 2面あるいは3面を使用しており、中央面が磨かれてしているものが多い。	*		32-
S 16	* - 3層	*	*	長さ 9.7 幅 9.2 厚さ 3.3		*		33-
S 17	* - 4層	*	粘板岩	長さ 7.0 幅 3.5 厚さ 0.8	長方形の扁平な石片を使用している。裏面裏面に使用痕が認められる。	淡灰色		34-
S 18	* - 5層	*	硬質砂岩	長さ 10.5 幅 5.5 厚さ 6.0	今形を知りうるものはないが、厚い長大な素材を利用し、2面あるいは3面を使用しており、その面は中央部が磨耗している。	暗灰色		35-
S 19	* - 6層	*	*	長さ 10.1 幅 7.7 厚さ 3.5		*		36-
S 20	* - 7層	*	砂岩	長さ 10.8 幅 8.0 厚さ 3.0		灰 色		37-
S 21	* - 8層	*	*	長さ 13.8 幅 5.6 厚さ 6.8		*		38-

第4章 B地点の調査

1. 発掘区 (Fig. 33)

新幹線路線の中心軸を利用して、 $4\text{m} \times 4\text{m}$ のグリッドを設定した。グリッドは西から東へA～Dの4列、北から南へ1～35列を設定したが、新幹線路線がわずかにカーブしているため北端の農道から畝2枚目までをI区(1～10)、畝3枚目をII区(11～17)、農道を越えて畝4枚目までをIII区(18～26)、5枚目をIV区(27～35)として分けていた。グリッドの呼称はたとえばC-15区はC列と15列交点の東南区画を示すようにした。

発掘は $4\text{m} \times 4\text{m}$ のグリッドをさらに $2\text{m} \times 2\text{m}$ に区画し、I区からIV区へと千鳥状に掘ってゆき、図示するように東西最大16m、南北138mの範囲にわたってくまなく掘ることとなった。



2. 層位 (Fig. 34)

B地点は発掘着手以前から、表面に弥生から中世にいたる遺物が散布しており、何らかの遺構の存在が予想されたが、発掘の結果は、全く異なるものとなった。

I区の層位は、15～20cmの厚さの表土層の下に20～30cmの厚さで有機質を含んだ暗褐色の粘質土層があり、耕作の基盤土と考えられるものである。この層の下は砂礫層となっており、土師器、須恵器などの遺物を含ん

Fig. 33 B地点発掘区平面図 (縮尺 1/1,000)

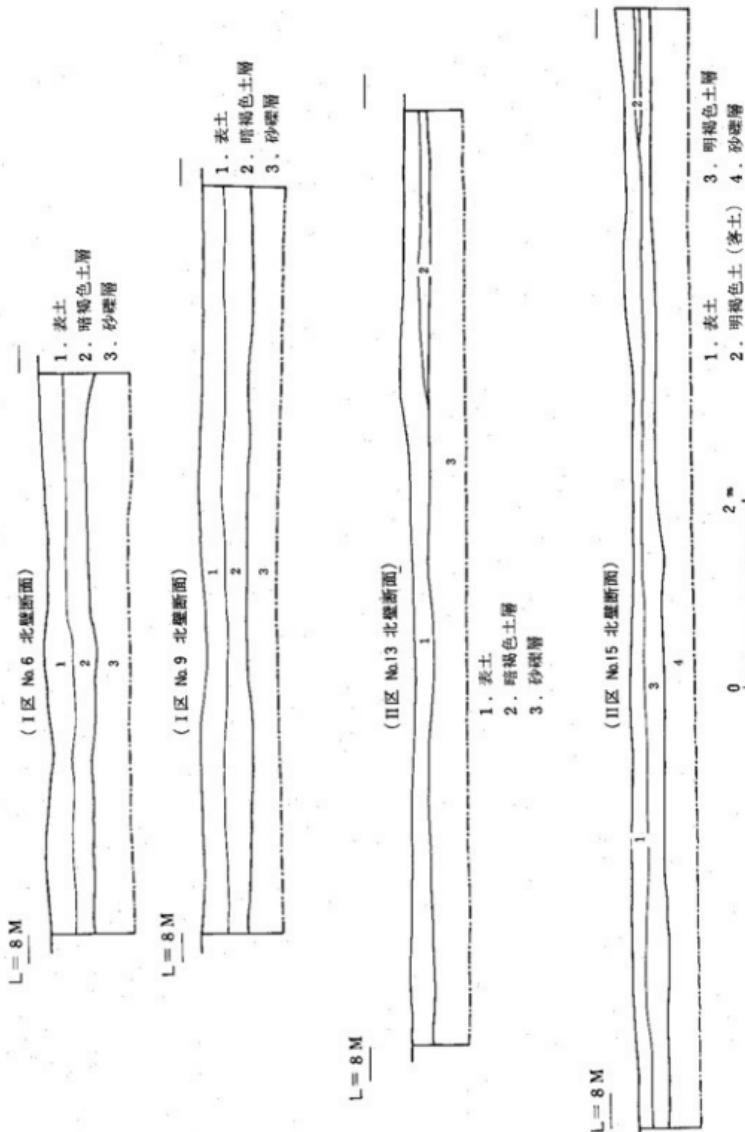


Fig. 34 B 地点土层图 (比例尺 1/60)

でいる。この砂礫層上面より 1 m ほど部分的に掘り下げた結果、この層は下部まで続いている。しだいに遺物を含まなくなる。

II 区から IV 区に至る土層も I 区と全く同様の状態であり、層位は大きく 3 つに分れ、2 層目が客土などを混じえることと、砂礫層に青灰色の粘土ブロックを混じえる部分のあることなどの変化でしかない。この砂礫層には、弥生土器、土師器、須恵器、磁器、石器などが混在して認められ、二次的な流入遺物であることが知られる。

3. 出土遺物 (Fig. 35~36)

各調査区の砂礫層（第 3 層）より、土器、磁器、石器など各時代の遺物が出土しているが、ローリングのため磨滅が著しい。主要なものは次のとおりである。

a. 土器および磁器 (Fig. 35)

弥生土器 (Fig. 35 の 1) 脊の底部片で底径 7.0 cm、胸部へ向かっての立ち上がりがやや高く、平底である。磨滅が著しく、砂粒が表面に浮き出している。内面黄褐色、外面赤褐色を呈す。土師器 (Fig. 35 の 2~3) 2 は壺のほぼ完形品で、口径 10.8 cm、器高 2.2 cm を測る。体部は平坦な底部から外広し、いたん鈍い稜をつくりながら立ち上がり、口縁部をおさめる。体部はナデ、底部は範切りと考えられる。胎土は精良で器面は淡い黄褐色を呈す。3 は壺の破片で、口径 12.6 cm を測り、球形の胴部から、外彎してのびる口縁部をもつ。外面は範磨き、内面はナデ調整し、肩部外側に横目が部分的に認められる。胎土は精良で施成もよく、器面の色調は淡い黄褐色を呈す。

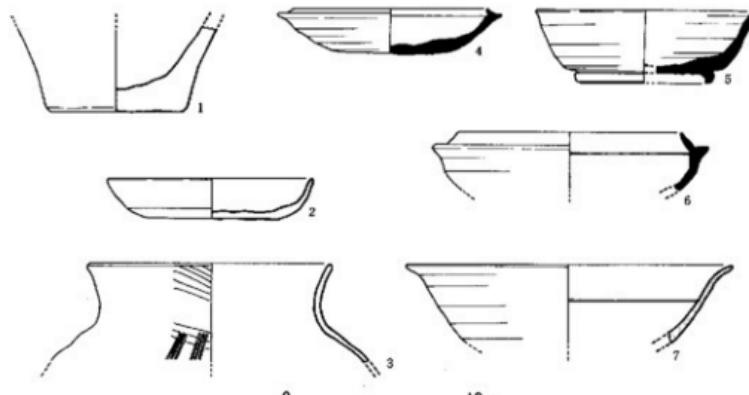


Fig. 35 B 地点出土器実制図 (縮尺 1/3)

須恵器 (Fig. 35の4～6)

4と6は蓋受けをもつ壺の身であり、5は高台付の壺である。4は口径10.3cm、器高2.4cm、蓋受けの高さは0.3cmを測る。6は口径が11.8cmと大きく蓋受けの立ち上がりが高い。5は口径11.6cm、器高3.9cmで、やや高いはり付け高台をもつ。4と5は焼成良好で固くしまる。

磁器 (Fig. 35の7)

白磁塊の破片で、口径17.0cmを測り、内面に1条の沈線をめぐらす。内縁する体部より口縁部を引き出して外反させる。胎土は灰白色、澄んだ乳白色の釉がかかる。

b. 石器 (Fig. 36)

1・2の石器は、A地点の井戸からの出土遺物である。1はSide-scraperであり、石材は黒曜石で扁平な縦を下位からの剥離によって削ぎ取り、その後側辺に二次加工を加えてSide-scraperに仕上げている。2は、細石縫の箇中に組み込まれる黒曜石製の石針である。3から10は、B地点の砂屑出土の石器である。3～6は、石針である。3は、大型の範中に組み込まれるので、脚部抉込部が三角形を示し、脚部に抉込部のある形態を持つ。4は、脚部の抉込部がない三角形の形態を持つ石針である。5は、剥片縫と称せられる石針で側辺部・先端部のみに加工がある。6は、脚部抉込部が梢円形の形態を持ち、脚部と脚部の接点に抉込がある石針。7は、ナイフ形石器である。先端部は破損しているが、bluntingの剥離方向は、主要剥離面側からで、背の部分のみに加えられている。8は、石器で、横型の形態を持つ。横剥ぎ剥片を素材とし、末端部の鋭利な部分をそのまま利用している。つまみの部分は、梢円形の形態を示すことから画面からの加工を持つ。9は、打撃方向の一定している縦長剥片を素材とし側辺部に細かな剥離痕のある二次加工石器。10は、整形と敲打と局部磨製のある柱状抉込片万石斧である。先端部は破損。3から5・7・9は黒曜石。6・8は、サスカイト質安山岩。10は、粘板岩。

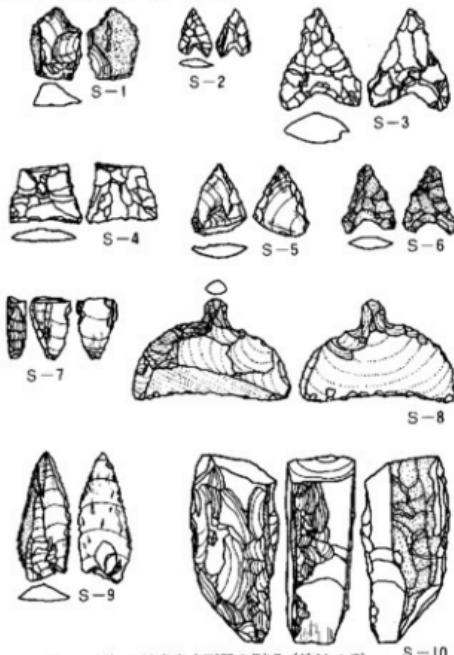


Fig. 36 B地点出土石器実測図 (縮尺 1/2) S-10

第5章 まとめ

これまで各地点の発掘結果を報告してきたが、最後に遺跡の問題点を整理したい。B地点については那珂川の氾濫による二次的な遺物の堆積ということができる、A地点にしほって遺跡の問題点を整理したい。

調査区が限定されていたため、遺跡の全体的なまとめを把握することができなかつたが、検出された遺構は住居址3棟、溝7条、井戸1基、大小のピット群、柱穴遺構、溝状遺構などがあり、調査区西側および北側は段をなして水面に落ちることから、なお台地の東南へ広がる集落遺跡の一部であることが知られる。出土した遺物には須恵器、土師器、土師質土器、黒色土器、瓦器、瓦質土器、瓦、土鍤、陶器、青磁・白磁、古錢、木製品、鉄片があり最近調査例が増加しつつある古代～中世遺跡より出土する遺物の組合せを示している。この中で最も多く出土する什器は土師器の皿、壺類で、壺は量的に少なく黒色土器、瓦器が混じっている。須恵器は土師器に比較してきわめて少なく、青磁・白磁など輸入磁器の占める量が大きい。これらの遺物は包含層中より出土するものが正側的に多いが、後世の攪乱を受けていたために層位的に分離することはできない。確実に遺構に伴なうと考えられる遺物によって本遺跡の年代を推定すると、量的に最も多く土師器の皿、壺類の手法上の特徴から、大きく2時期に分けられよう。すなわち、本遺跡より出土するものは笠切りのものと、糸切りの両者が認められるが、前者は第1号住居址および第2号ピット、1～3号溝に認められ、後者は他の遺構に普遍的に認められる。特に第1号住居址は第5層下の地山を切り込んでおり、層位的に他の住居址の切り込み面より下層にある。出土する土師器は壺、壺類で底部は笠切りであり、器面の調整を見ると壺は笠磨き、壺類は横ナデのものでこれに伴なって黒色土器、越州窯青磁が出土している。第2号、第3号住居址においては、土師器の皿、壺類はすべて糸切りのものである。伴出する遺物も龍泉窯系青磁を主とする輸入磁器、宋銭、常滑焼、瀬美古窯系などの国産陶器滑石製品が認められ、第1号住居址の遺物の組合せと異なる。溝については、第1～3号溝では糸切り底の土師器皿と共に笠切りの高台壺、笠磨きを施す断面三角形のはり付け高台をもつ土師器壺、黒色土器、越州窯系青磁、白磁、土師質土器、陶器が混じっている。井戸については、第5層中より多量

の古瓦片、瓦質土器、滑石製品、砥石、土師質土器と共に糸切りの土師器皿が包含されているが攪乱によるものである。井筒内からは龍泉窯系青磁が出土している。第2号ピット以外の性格不明のピットの遺物は、第2号、第3号住居址の遺物の組合せを示している。

以上のように本遺跡の遺構と遺物の関係を土師器の皿、壺類の底部切り離し技法の範切りと糸切りの相違によって見たが、前者と共に伴するものは黒色土器、越州窯系青磁などであり、後者は、他の遺物と共に伴する。ただ、第2号、第3号溝の場合、糸切りのものと黒色土器、越州窯系青磁、陶器が混じっているが、これについては検討の余地を残している。これまでの調査例から、範切りのものは糸切りのものに先行することが確認されているとはいえ、その転換時期については必ずしも明らかではないが、北部九州地方においては、その時期は大宰府政府の廃絶期のはば12世紀頃と推定されている。一方、本遺跡でこれと共に伴する黒色土器の編年については九州地方においては未だ明らかではなく、畿内においてもA類（体部外面炭素吸着）の開始が8世紀中頃以降で、最盛期が9～10世紀頃であり、B類（両面炭素吸着）と次の段階の瓦器への移行の年代については10世紀末頃と推定されているだけである。以上のことから第1号住居址を中心とする年代は、12世紀をあまりさかのぼらないと考えるべきであろう。第2号、第3号住居址は同時期と考えられるが、第1号住居址より新しく13世紀を中心とする年代を考えたい。井戸についても土層状態より短期間に廃絶されたことが考えられればほ同様の時期を考えることができよう。第3号住居址に切られている第6、第7号溝の年代は遺物を欠くため明確ではないが、第1号住居址とほぼ同様の時期と考えられ、第2、第3号溝についても、第1号ピットの掘り込み面より下層に掘られていることから、第1号住居址と同時期と考えられる。

したがって、本遺跡の年代は12世紀～13世紀にかけて営まれたと考えるわけであるが、特に上師器、黒色土器、瓦器の編年位置づけの問題が報告者には不分明であり、今後厳密に再検討する必要がある。さらにまた、本遺跡では古代～中世の集落構造の問題や、個々の遺物における交通関係の問題が提起されているが、それは諸研究者にゆだねたい。

主要関係文献

- 草戸千軒町遺跡学術調査団『草戸千軒町遺跡遺跡編』福山市教育委員会 1965年
草戸千軒町遺跡学術調査団『草戸千軒町遺跡遺物編』福山市教育委員会 1965年
草戸千軒町遺跡発掘調査団『草戸千軒町遺跡1968年度発掘調査概報』広島県教育委員会 1969年
草戸千軒町遺跡発掘調査団『草戸千軒町遺跡1969年度発掘調査概報』広島県教育委員会 1970年
草戸千軒町遺跡発掘調査団『草戸千軒町遺跡1970年度発掘調査概報』広島県教育委員会 1971年
草戸千軒町遺跡発掘調査団『草戸千軒町遺跡1971年度発掘調査概報』広島県教育委員会 1972年
草戸千軒町遺跡発掘調査団『草戸千軒町遺跡1972年度発掘調査概報』広島県教育委員会 1973年
草戸千軒町遺跡発掘調査団『草戸千軒町遺跡1973年度発掘調査概報』広島県教育委員会 1974年
福岡県教育委員会『大宰府史跡明和四十三年度調査概要』1969年

- 福岡県教育委員会『大宰府史跡昭和四十四年度発掘調査の概要』1970年
 福岡県教育委員会『大宰府史跡第四次発掘調査概要』1970年
 福岡県教育委員会『大宰府史跡第五次発掘調査概要』1970年
 福岡県教育委員会『大宰府史跡昭和四十五年度発掘調査の概要』1971年
 福岡県教育委員会『大宰府史跡第九・十・十一次発掘調査概要』1971年
 福岡県教育委員会『福岡縣文化財調査報告書第45集』1970年
 福岡県教育委員会『九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告一』1971年
 福岡市教育委員会『福岡市と白鳥郡発掘調査報告書 福岡市埋蔵文化財調査報告書第18集』1971年
 福岡市教育委員会『福岡市多く良遺跡発掘調査報告 福岡市埋蔵文化財調査報告書第20集』1972年
 福岡市教育委員会『下山門遺跡 福岡市埋蔵文化財調査報告書第23集』1973年
 福岡市教育委員会『九州縦貫道関係埋蔵文化財調査報告 福岡市埋蔵文化財調査報告書第33集』1975年
 防府市教育委員会『周防の田衝』1967年
 九州古代史研究会『永大丸遺跡 九州古代史研究第1号』1973年
 中山平次郎「口禿を有せる一種の白磁」(『考古学雑誌第6卷8号』) 1916年
 小田富士雄「筑後堂ノ平経塚と出土瓦」(『史跡と美術309号』) 1960年
 小山富士夫「陶器講座第6卷中国II・宋」1971年
 蛯井明徳「九州出土の宋・元代陶磁器の分析—大宰府出土品を中心として—」(『考古学雑誌第58卷4号』) 1973年
 小田富士雄・轟久彌郎「防長地方の中世土器」(『九州考古学15号』) 1962年
 八重津輝勝「肥前国雪ノ浦遺跡調査報告」(『考古学雑誌第14卷14号』) 1923年
 下川達弥「滑石製石鍋考」(『昭和48年度長崎県立美術博物館研究紀要第2号』) 1974年
 横崎彰一「猿投窯陶器全集31」1966年
 関崎敏「福岡市(博多)壱福寺発見の遺物について—大陸舶載の陶磁と銀鉢—」(『九州文化史研究所紀要第13号』) 1968年
 赤星直忠「鎌倉出土の菊花文瓦製品について」(『考古学雑誌第26卷3号』) 1936年
 田中源「(4)畿内」(『日本の考古学VI』歴史時代上) 1967年
 小田富士雄「(8)九州」(『日本の考古学VI』歴史時代上) 1967年
 森田勉「九州地方の瓦器碗について」(『考古学雑誌第59卷2号』) 1973年
 日本史研究会「日本史研究136」1973年

弥 永 遺 跡

第1章 遺跡の環境	63
1. 地理的環境	63
2. 周辺の遺跡環境	63
第2章 調査の概要	66
第3章 A地点の調査	68
1. 発掘区	68
2. 層位	68
3. 出土遺物	69
第4章 B地点の調査	74
1. 発掘区	74
2. 層位と遺構	75
3. 出土遺物	76
第5章 C地点の調査	98
1. 発掘区	98
2. 層位	98
3. 出土遺物	100
第6章 まとめ	101



弥永遺跡

第1章 遺跡の環境

1. 地理的環境

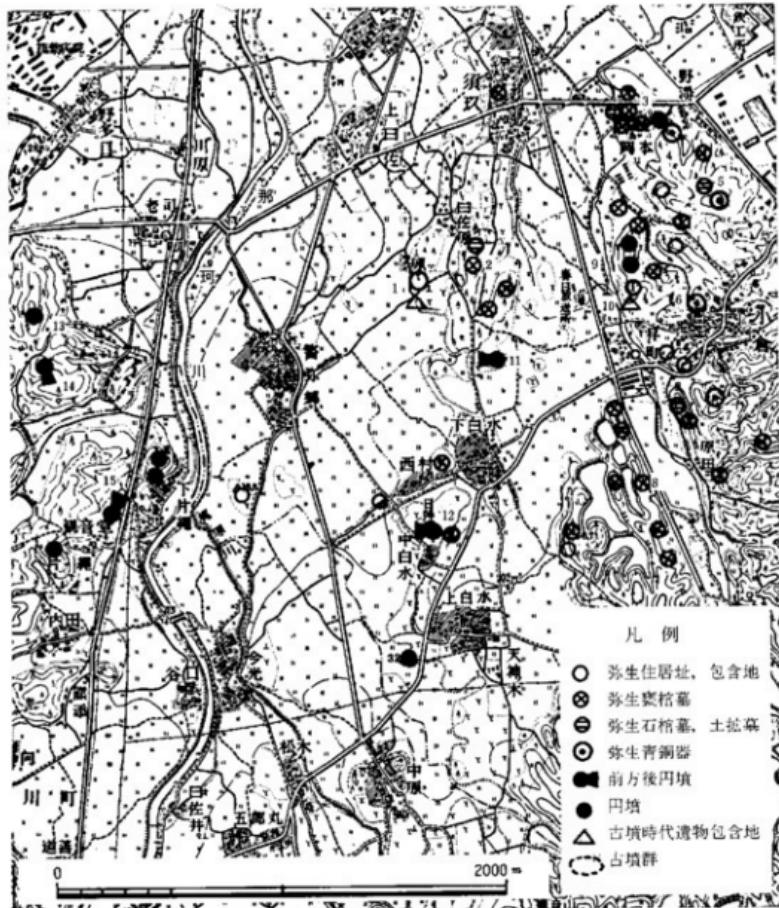
本遺跡を中心とする地域は、地形的に福岡平野中部地域に属しており、背振山地東部から北方へのびる鴻ノ巣山丘陵と、山郡山地西端より派生し北方へのびる低平な春日丘陵に挟まれ、背振山地東北麓に源を発した那珂川が、那珂川町安徳付近で流路を北に変えて平野部を形成するところであり、福岡平野の南東部にあたる。

本遺跡は那珂川右岸の沖積地に立地しており、那珂川を越えた西方には、油山山塊東端より派生する安徳、老司の丘陵をひかえ、東方はすぐ春日丘陵をひかえている。

2. 周辺の遺跡環境 (Fig. 37)

本遺跡を中心とする周辺一帯は北部九州で最も濃密な遺跡分布を示す地域の一つであり、戦前、戦後を通じて、個人的、組織的な調査・研究が数多く行われているところである。特に弥生時代から古墳時代にわたる遺跡の豊富なことは頗著であり、本遺跡東方の日佐の段丘上や、すぐその東側にあり北方へ突出する春日丘陵の基部から端部全城にわたってこの時代の遺跡が多い。また西方へのびる安徳から老司にかけての丘陵部にも古墳などが多く分布している。これらたち主要なものを概観してみよう。

本遺跡東北方にある日佐の丘陵上には、弥生時代後期の集落址として著名で小形彷彿鏡やガラス製勾玉の溶範を出土した弥永原遺跡、同じく弥生時代終末期から古墳時代の移行過程を示す墳墓地として知られる日佐原遺跡などがある。その東側にのびる春日丘陵は最も濃密な遺跡分布を誇っており、その北端には、明治32年に大石下より32面の中国鏡を出土し、戦前戦後の連続の調査で豊富な副葬品をもつ豪棺の出土地として有名な須玖岡本遺跡があり、そこより南方へかけて、国産青銅利器の埋蔵遺跡として知られるバンジョク遺跡、辻遺跡、西方遺跡、九州地方で唯一の銅鐸出土地として知られる大南遺跡などがある。図示されないが、さらにその東側の丘陵には、弥生時代前期初頭以来の墳墓地として著名な伯玄社遺跡や、前漢鏡や銅鏡を副葬した立石遺跡、平塚遺跡などが知られる。集落遺跡としては春日放送所東方の台地に古墳時代初期の住居址を出した竹ヶ本遺跡がある。また、この丘陵より西側に並んで突出する小丘陵には、内行花文鏡を出した宮下遺跡や一の谷遺跡が先端部にあり、その南方には数多くの豪棺遺跡があり、春日市と那珂川町にまたがって建設される新幹線車輛基地敷地内には各時代の



- | | | |
|------------|------------|-------------|
| 1. 弥永原遺跡 | 6. 西方遺跡 | 11. 下白水大塚古墳 |
| 2. 日佐原遺跡 | 7. 大南遺跡 | 12. 日拌塚古墳 |
| 3. 須羽遺跡 | 8. 一の谷遺跡 | 13. 卵内尺山墳 |
| 4. パンジャク遺跡 | 9. 竹ヶ本大塚古墳 | 14. 老司古墳 |
| 5. 汗遺跡 | 10. 竹ヶ本遺跡 | 15. 観音堂古墳 |

Fig. 37 弥永遺跡周辺図 (縮尺 1/25,000)

遺跡が分布している。

一方この地域の主要な古墳を見ると、本道跡東南1kmの中白水の段丘上には古墳時代後期の前方後円墳として著名な日押塚古墳があり、東方1kmの日佐へのびる段丘上には同じく前方後円墳の下白水大塚古墳が知られ、春日丘陵西端部には竹ヶ木大塚古墳が立地している。

那珂川左岸の安徳から老司に至る丘陵上には前方後円墳を含む古墳群が分布しており、娘音堂古墳や老司古墳が著名である。特に老司古墳は昭和42年から44年の3年次にわたる調査が行われ、その豊富な副葬品と共に、石室の構造において横穴式石室の初源的な姿を示す古墳として知られている。

第2章 調査の概要

1. 調査地点について

博多駅を終着駅とする新幹線は、那珂川町と春日市にまたがる広大な台地に車輛基地を設けており、調査した地点は、そのすぐ手前の3つの地点である。

序説で述べたように、福岡県教育委員会による分布調査の地点番号と照合すれば、A13地点がA地点、A14地点がB地点、A15~17がC地点となる。

A地点 那珂川東岸約0.8kmの位置にあり、警弥郷の住宅が密集するところで、警弥郷バス停そばの背振神社東隣の畑地と、その南側に1段落ちた水田を含んでいる。この住宅の密集する地域は周囲の水田面より比高が高く、南北に長い独立丘状を呈しており、発掘調査着手以前においては、何らかの遺構の存在が予想されたところである。

B地点 A地点の南方約500mの位置にあり、標高17mを測る畑地と水田である。分布調査番号14番地点が調査予定地であったが、発掘の過程で新たに農道を越えた北側の水田をも調査することになった。

C地点 B地点のさらに南方約500mの位置にあり、標高18mを割る水田である。この地点は車輛基地に最も近いところで、すぐ南方は福岡市と春日市との境をなしている。

以上のようにこれら3つの地点は地形的、距離的にそれぞれ独立しており、それぞれ別個の遺跡として取り扱うのが適当であると思うが、新幹線路線幅に限定されていることもあり、これら3地点を合わせて弥永遺跡と呼称することにした。

2. 調査経過

弥永遺跡の発掘調査は、五十川高木遺跡の調査を終了した後、昭和47年3月より着手した。発掘は3月11日よりC地点から開始し、約1ヶ月間調査を行なった。続いて4月13日よりB地点の調査に入り、I区の発掘より始めた。この過程で豊富な出土品と遺構が検出されたため、国鉄関係者に要請して、農道を越えた北側隣接地の地権者から発掘承諾を得、これをII区として5月22日より発掘にかかった。B地点を終了後A地点の調査に移り、7月中旬に弥永遺跡すべての発掘調査を終了した。

以上のように弥永遺跡の調査はC地点～A地点の順で行なったが、以下の報告ではA地点から順次、述べることにする。



Fig. 38 弥永遺跡調査地点図(縮尺 1/5,000)

第3章 A 地点の調査

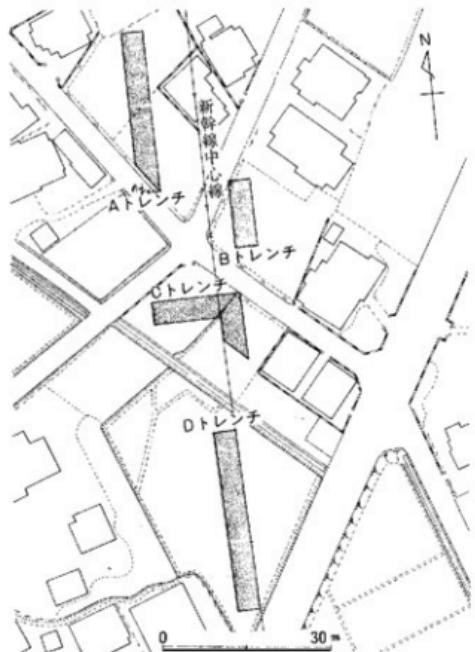
1. 発掘区 (Fig. 39)

発掘地点が市道によって3ヶ所に区分されているため、最も北側の畑地をI区、東側をII区、南側をIII区とし、そこより一段落ちた南側の水田面をIV区とした。

I区には新幹線中心線の西側8mの位置に、路線と平行に幅4m、長さ28mのトレンチを設定し、II区は中心線の東側4mの位置にトAレンチと平行に幅4m、長さ12mのトレンチを設定した。III区は東西16m、南北12m、幅各々4mの鍵手状のCトレンチを設定し、さらにIV区には水田中央部にあたる新幹線中心線に沿って幅4m、長さ32mのDトレンチを設定した。

調査はまずBトレンチより開始し、続いてCトレンチの調査を行なった。Cトレンチの調査終了後、Aトレンチ、Dトレンチの順に掘ってゆき、A地点の調査を終了した。

2. 層位 (Fig. 40)



Aトレンチ

地表下10~20cmの厚さで耕作土があり、2層目は須恵器、土師器の細片を若干含んだ、砂を多く混じえる暗褐色土層が80~100cmの厚さで堆積し、その下は部分的に黄褐色粘質土層が帶状に入る。4層目は砂を混じえる黄褐色粘質土層が厚さ70~100cmで堆積している。これらの上層までは後世の擾乱を受けている。この層の下は砂層となり弥生土器を含んでいるが、下部は砂層が続いている。

Bトレンチ

第3層目まではAトレンチと同様であるが、その下の層は非常に乱れており、擾乱を受けたことが知られる。4層以下に弥

Fig. 39 A地点発掘区平面図 (縮尺 1/1,000)

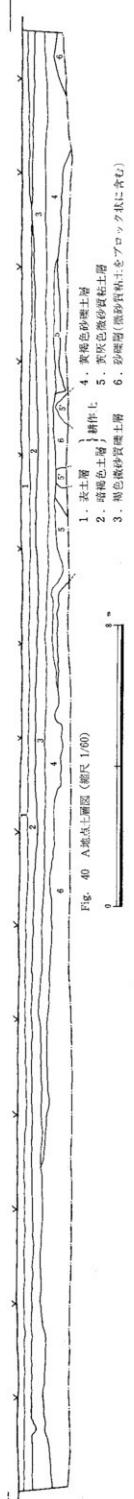
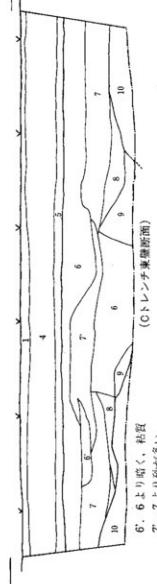
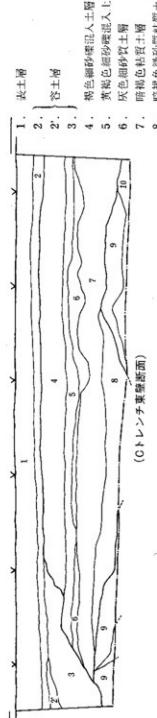
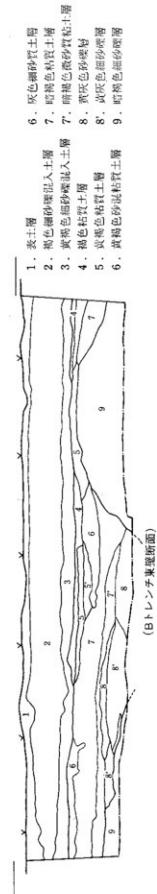
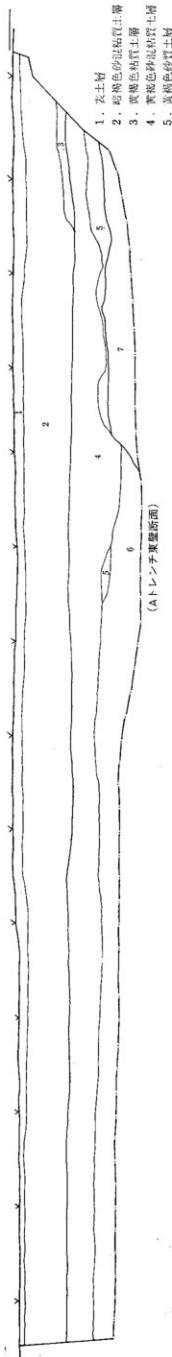


Fig. 40 A地帯土壤剖面(標尺 1/60)
0 8 "

生土器片を含み、8層が最も多い。

Cトレンチ この地点は中央部より西側は畑面より30cmほど高くなっている、倉庫が建てられていた。北壁土層断面図の1、2層がその際の客土を示す。4層がA、Bトレンチの第2層に相当し、第3層は西側々溝のかたっての掘り方に堆積した土層である。4層に磁器、土師器の細片を含み、6層以下に弥生土器片を包含する。

Dトレンチ この地点は他の3地点に比べ地表面が低く（標高16m）、地表下約50cmで砂礫層に達し、地表下80cmで湧水を見た。他のトレンチに比べ遺物の包含がきわめて少なく、砂層中に若干の弥生土器片を含んでいる。

2. 出土遺物

a. 弥生土器 (Fig. 41~43, Tab. 8)

各トレンチの砂層を主として弥生土器が出土したが、特にCトレンチからの出土が多い。いずれも破片で完形となるものはない。器種は壺が多く、壺がこれにつぐ。高壺の脚部が1点出土している。形態的にはいずれも弥生時代前期前半から中期中葉の時期に含まれるものばかりであり、後期まで下るものは検出されない。出土層位は擾乱が激しくこれらの土器の型式推移を附位的に辿ることはできないようである。

b. 石器 (Fig. 43)

S1は、縦長剥片を折断し、素材の頭部に近い部分にblunting加工を加えている台形様石器である。刃部は、二次加工が両面に加えてある。刃部は、右に22度の傾きを持つ。S2は、横長剥片を素材として、側刃部の一端（表面における剥離の稜を中心にして形成している）を表面からの二次加工によって刃部を形成し、断面形態は、三角形を示す。S3は、一方による剥離面を持つ縦長剥片を素材としたSide-scraperである。素材の一側辺に主要剥離面側からの打撃によって刃部を形成している。S5は、両面の横からの剥離によって刃部を形成しているSide-scraperであろう。自然面を持ち、素材が何によるものかは不明である。S7も同様にSide-scraper的要素を持つ石器である。縦長剥片を素材として側辺に二次加工があるが、一方の側辺には、使用痕の細部剥離がみられる。S6は、円形の形態を持ち、刃部と思われる側刃部は、銳利であり、これをRound-scraperとして規定することは、多少疑問がのこる石器である。ただ側刃部には細かな剥離が認められることから一応、Round-scraperとしておきたい。S4は、側面の断面が、長方形を持ち、使用面は、両面である。その両面の周辺部には、二次加工が加えてある。S8は、器種名不明の石製品である。上端部の中央に穿孔があり、その穿孔は、左側の孔が右側より大である。末端部は破損しているため、その形態判断ができない。S9は、蛇紋岩製の始刀石斧である。先端部は、破損しているが、その他は、全面磨製である。刃部に一部分破損がみられる。石材は、1から3・5・7は黒輝石、4は粘板岩、6は硬質砂岩、8は砂岩である。

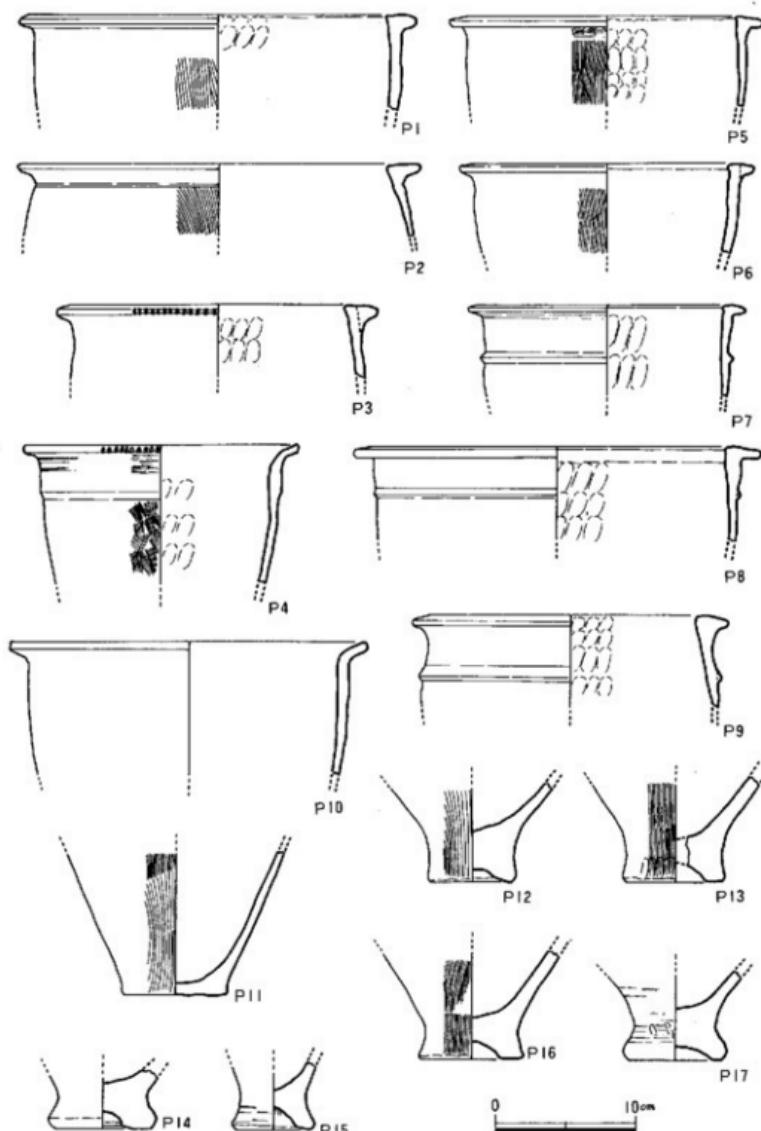


Fig. 41 A地点出土土器実測図 I (縮尺 1/4)

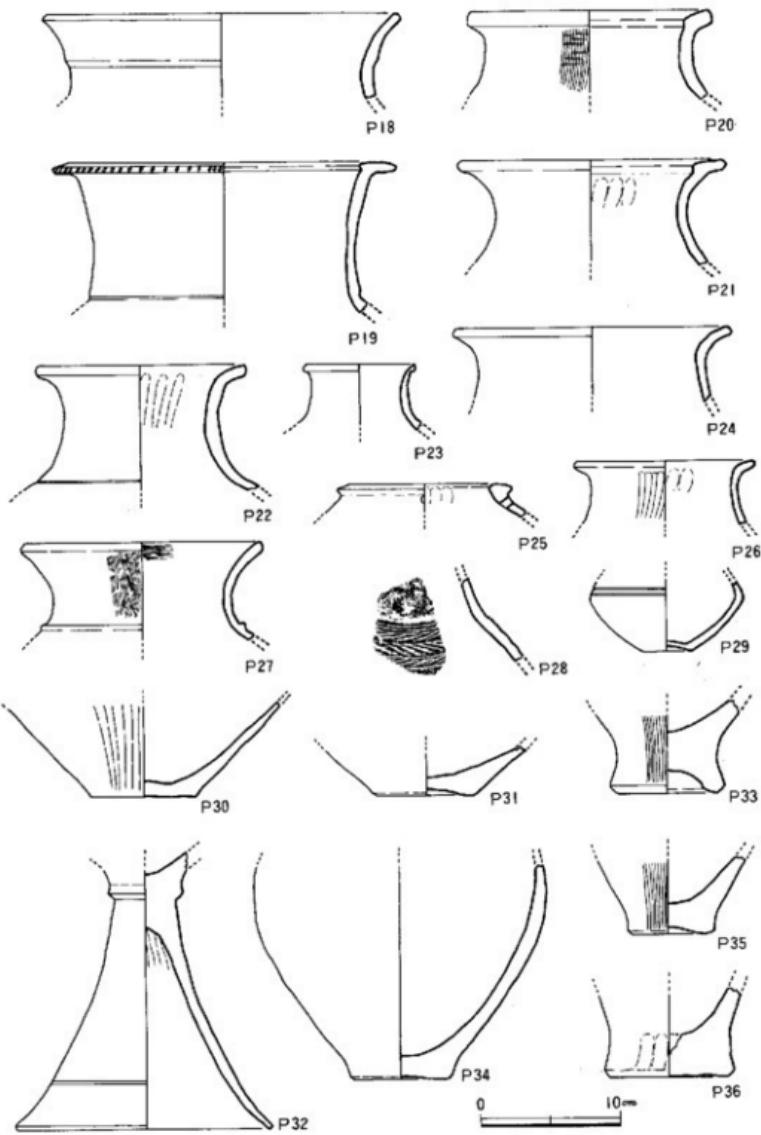


Fig. 42 A地点出土上器実測図 II (縮尺 1/4)

Tab. 7 A 地点出土器一覧表

(表印は復原値、単位cm)

遺物 番号	トレンチ・部位	器 種	法 蓋	形 態	特 徴	手 法の特徴	精 度	成 形	色 調	器 名	Fig. PL
P 1	Bトレンチ・7層	甕	口径24.0	口界面が断面二角形、 沿い字型を呈す。	内面部ナデ	粗い砂粒を 含む	普通	内灰褐色 外黄褐色		41	
P 2	× - B層	口径23.8		P 2はやや側面丸り、 P 3は口部に斜面を 呈す。	外面部・肩毛目	細かい砂粒 を含む	*	暗褐色		×	
P 3	× - ×	口径18.0			内面部ナデ 外面部ナデ	粗い砂粒を 含む	*	黄褐色		×	
P' 4	× - 7層	口径19.2		如意形口縁、口下縁 肥厚、口部に斜面	内面部ナデ・ 外面部ナデ	粗い砂粒を 含む	良好	淡黄褐色		×	
P 5	Cトレンチ・6層	口径28.5		口界面が断面二角形を 呈す逆字形平底。	内面部に強度 な側面丸り	細かい砂粒 を含む	普通	内灰褐色 外黄褐色	複合層	×	
P 6	× - 7層	口径17.3		P 7は断面二角形の実 際をめぐらす。	毛目	粗い砂粒を 含む	良好	淡黄褐色		×	
P 7	× - 6層	口径16.5			内面部压痕 外面部ナデ	粗い砂粒を 含む	*	内灰褐色 外褐色		×	
P 8	× - ×	口径24.0		口部が長い逆字形 口縁、口壺あり	内面部压痕 外面部ナデ	粗い砂粒を 含む	*	赤褐色		×	
P 9	× - 7層	口径17.8		厚い断面二角形の口唇部。 深い突唇をはり付ける。	内面部压痕 外面部ナデ	粗い砂粒を 含む	*	淡黄褐色		×	
P10	× - 10層	口径25.1		如意形口縁、腹は張ら ず、その上さまはまる	内面部ナデ 外面部ナデ	粗い砂粒を 含む	普通	内灰褐色 外黄褐色		×	
P'11	× - 6層	底径 7.4		やや薄い平底、底部か らの立ち上がりが高い	内面部ナデ 外面部毛目	細かい砂粒を 多く含む	*	灰褐色		×	
P12	× - ×	底径 5.8		いずれも上部を呈し 底部が厚い。外底縁に 古い部分からなるやか に凹むものと、中央部 分に新しい位置より鋭く 凹むものがある。	内面部ナデ 外面部細かい崩毛目	粗い砂粒を 多く含む	*	灰褐色		いずれも底部 の底盤表面は 磨耗が激しく 内面は砂粒が 浮き出る	×
P13	× - ×	底径 6.5			ナデ	細かい砂粒 を多く含む	不良	内灰褐色 外黄褐色		×	
P14	× - *	底径 7.0			外面部ナデ	細かい砂粒を 多く含む	普通	赤褐色			
P15	× - ×	底径 5.4			外面部ナデ?	粗い砂粒を 多く含む	不良	内灰褐色 外赤褐色			
P16	× - 7層	底径 7.0			外面部細かい崩毛目	粗い砂粒を 多く含む	*	内灰褐色 外黄褐色			
P17	× - ×	底径 6.7			外面部方向の崩毛目	粗い砂粒を 多く含む	普通	赤褐色			
P18	Bトレンチ・8層	甕	口径24.5	頭部より外寄する口縁 部、下部下に段差がある。	ナデ調整	細かい砂粒 を含む	良好	赤褐色			
P19	Cトレンチ・6層	口径19.0		瓶口部での内縫に灰 色、腹部は長く扁平	内面部にヘラナデ 外面部にヘラムガキ	精良	*	黄褐色			
P20	× - 7層	口径25.0		頭部より外寄する口縁 部をつくる。P20は底 部を厚壁な砂粒をつくる。 P21は底盤上面は 平坦であり、頭部口縁 部に近い。	内面部ナデ 内面部压痕毛目	粗い砂粒を 多く含む	*	*			
P21	Dトレンチ・4層	口径18.5			内面部压痕 外面部ナデ	細かい砂粒 を含む	*	赤褐色			
P22	Cトレンチ・6層	口径14.5			内面部ナデ 外面部ヘラムガキ	細かい砂粒 を少量含む	普通	赤褐色			
P23	× - 7層	口径 7.5		新潟三角の小さく泡か い口縁部をつくる。	内面部ナデ 外面部压痕毛目	粗い砂粒を 多く含む	良好	赤褐色			
P24	× - 10層	口径19.0		頭部からそのまま外寄 する口縁部。	外面部に月牙形窪切を 施す	*	*	赤褐色			
P25	× - 7層	口径 9.1		外板する頭部に厚い三 角形の口縁をつくる	内面部ナデ 外面部ヘラムガキ	粗い砂粒を 多く含む	*	*	口縁部直下に 孔を穿つ		
P26	Dトレンチ・4層	口径12.5		ゆるく外寄する口縁、 頭部からそのまま外寄 する口縁部。	内面部ナデ 外面部压痕毛目	粗い砂粒を 多く含む	普通	淡黄褐色			
P27	Cトレンチ・7層	口径16.5		頭部よりそのまま外寄 し、口縁部となる。	内面部ナデ 外面部ヘラムガキ	粗い砂粒を 多く含む	*	赤褐色			
P28	× - 6層	不 明		上口底を呈し、頭部が 厚壁な頭部に3つの充満	内面部ナデ 外面部ヘラムガキ	粗い砂粒を 多く含む	精良	赤褐色	輪形に貝殻で 腰紐を施す		
P29	× - 5層	底径 3.5		下口底を呈し、頭部が 厚壁な頭部に3つの充満	内面部ナデ 外面部ヘラムガキ	粗い砂粒を 多く含む	*	普通	赤褐色		
P30	× - 6層	底径 7.4		下口底を呈し、大きくて へんげて立ち上がる	内面部ナデ 外面部ヘラムガキ	粗い砂粒を 多く含む	*	良好	赤褐色		
P31	× - 10層	底径 6.8		上口底を呈し、頭部が 大きくて立ち上がる	内面部ヘラムガキ	砂粒を多く 含む	不良	内灰褐色 外赤褐色			
P32	× - 2層	高 环	17.7 - 16.2	頭部に向かってラップ 式に外板する。	内面部ナデ 外面部ヘラムガキ	粗い砂粒を 多く含む	普通	赤褐色	複合形状に複 数の窓孔がある		
P33	Dトレンチ・4層	甕	底径 8.2	早い阶段で、頭部から 大きく側面丸らる	内面部ナデ 外面部毛目	粗い砂粒を 多く含む	*	*			
P34	× - 5層	底径 7.0	底径約23.8	早い阶段より立ち上がり 頭部最大径は早い段階	内面部ナデ 外面部ナデ	粗い砂粒を 多く含む	*	不良	*	磨耗が激しい	
P35	× - 4層	甕	底径 6.5	やや上口底を呈す。	内面部ナデ 外面部毛目	粗い砂粒を 多く含む	*	普通	*		
P36	× - 6層	甕	底径 9.2	深くて大きい上口底を 呈す	内面部ナデ 外面部毛目	粗い砂粒を 多く含む	*	不良	赤褐色		

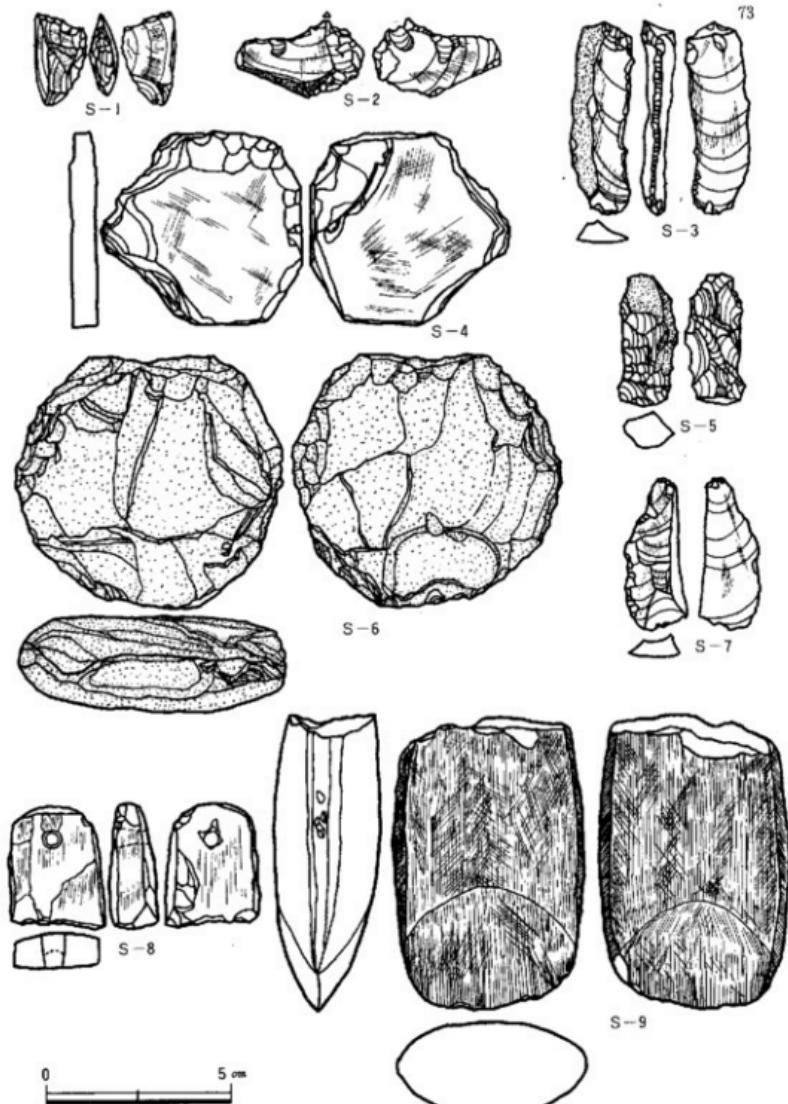


Fig. 43 A地点出土石器实测图 (缩尺 1/2)

第4章 B 地点の調査

1. 発掘区 (Fig. 44)

新幹線路線の中心線を主軸とし、東西20m、南北28mの範囲に4m×4mのグリッドを、主軸より西側は3列、東側は2列、南北に7列として35個設定した。グリッドには北西隅より東側に2~7の数字を、南側にLからEのアファベットを付し、各グリッドの呼称は、たとえばF-3区というように東南側の区画を示すようにした。調査区は西側が路線幅、北東から南側にかけては道路で境されているため、発掘はFig. 44のアミ目の部分を行なった。発掘調査の過程で、道路を越えた北側の水田を新たに発掘する必要が生じたので、本調査区をI区とし、追加地点をII区として調査を行なうこととした。II区は調査区が狭長なため、トレーニングによる発掘を行なった。

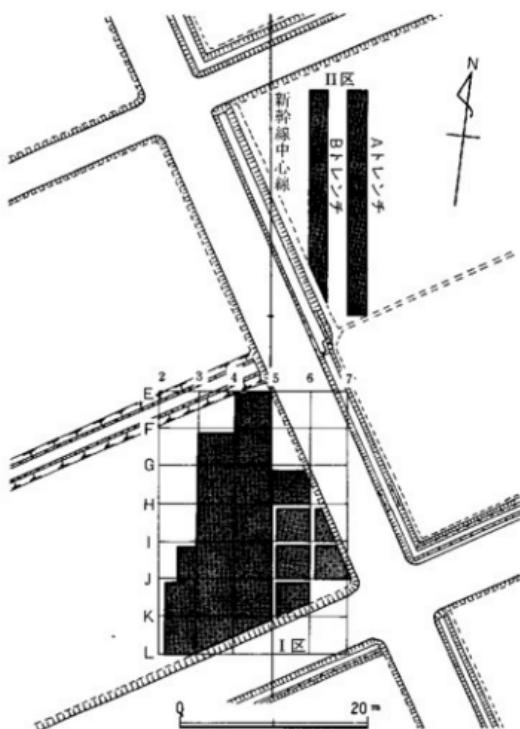


Fig. 44 B地点発掘区平面図 (縮尺 1/600)

I区の主軸を延長し、それより東側8mの位置に幅2m、長さ24mのAトレーニングを主軸と並行して南北にAトレーニングを設定しこれを発掘した後、2m西側の位置から同じく幅2mのトレーニングを水田南側の畔の位置まで設定して発掘を行なった。

B地点は他の地点に比べて出土遺物が豊富であり、遺構も検出されたが調査範囲が限定されていたため、全貌を把握することができなかった。しかしながら以下に報告するように重要な遺物の出土もあり、今後、この付近の精査が望まれよう。

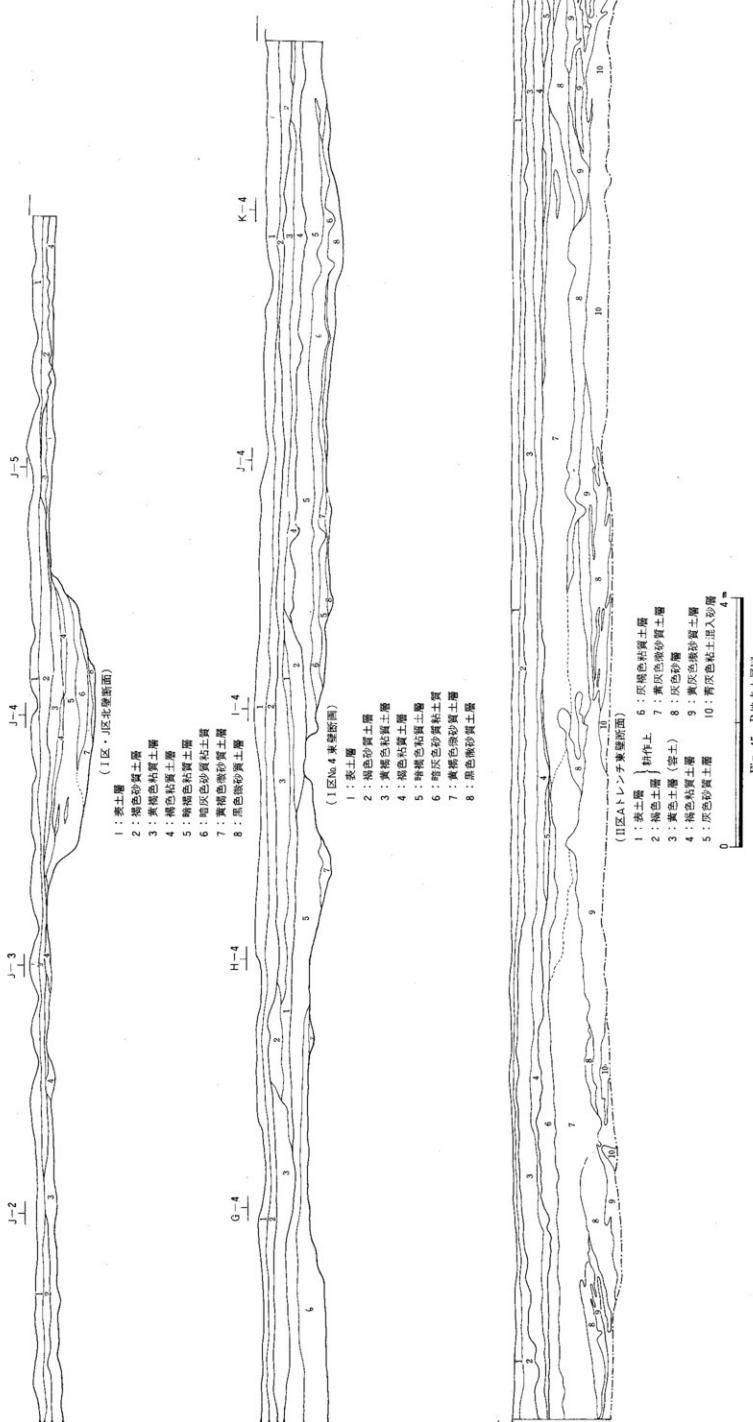


Fig. 45 B地方式剖面図

2. 層位と遺構

a. I 区

発掘着手以前の状況は諫業が植えられていたが、これは水田を転用したものである。地表下20~30cmの厚さで耕作土があり、この層は2層に分れる。3層目は黄褐色の粘質土がうすく帶状に入り、この地点がかつて水田であったことが知られる。この下は弥生土器を包含する褐色土層となるが、第3層が切れているところでは、耕作土のすぐ下に出ている。第4層の下は黄灰色を呈する微砂質粘土の地山となっており下部は砂層になる。この地山は発掘区ほぼ中央部で東西に幅4mから5m、深さ0.7mから0.8mで落ち込んでおり、南から北へ走る溝状を呈する。この溝状の落ち込みは、発掘区中央部より北側が東西に大きく開き、しかもゆるやかな傾斜となって消滅している。この落ち込みへの堆積土層は弥生時代の遺物を多量に包含する暗褐色土層（第5層）が20~40cmの厚さで堆積しており、6層目が砂質を帯びた暗褐色の粘質土となり、7層目に黄褐色を呈する微砂質土がうすく堆積し、最下層が黒色微砂層となっており、弥生時代の遺物を包含する。

この土層状態は発掘区北半部のI-4区からF-4区にかけてもほぼ同様であるが、ただ第8層の黒色微砂質土はI-4区よりも北側には認められない。

第1号ピット

J-2区、J-3区北側に地山を掘り込んでいる。東側に傾斜が大きく底はほぼ平坦である。平面形は北側がやや突き出した東西に長い不整梢円形を呈す。長径340cm、短径160cm、深さは40cmを測り、弥生時代中期の土器および石器を出土する。

第2号ピット

G-5区西南隅に地山を掘り込んでいる。長軸をほぼ南北にとる梢円形のプランで、底はやや船底状を呈す。長径162cm、

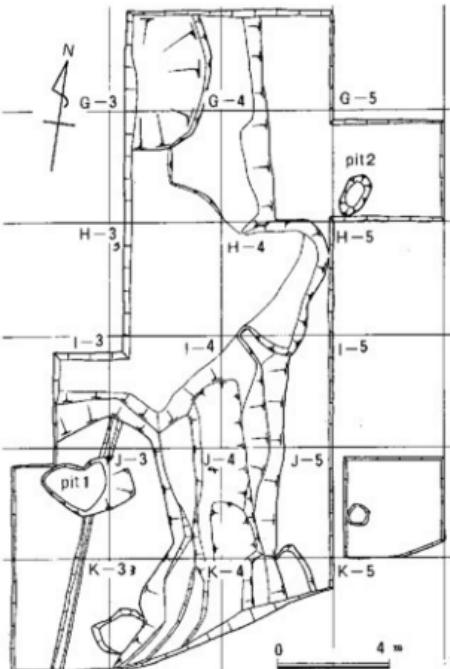


Fig. 46 I区遺構平面図 (縮尺 1/200)

短径84cm、深さ50cmを測り、弥生土器を出土する。

b. II 区

A トレンチ

地表下30cmは耕作土があり、この層の下半部は水田の基盤層となるものである。3層目は黄色土が厚さ25~30cmで認められるが、これは客土されたものである。この層の下に弥生土器を包含する褐色粘質土が堆積しており、薄いところで10cm、厚いところで35cmにわたっている。5層目には灰色の砂質土層が5~10cmの厚さで部分的に帯状を呈して認められ、6層目は弥生土器などを包含する灰褐色粘質土がトレンチ北半に30cm前後の厚さで、南側は薄く堆積している。この層の下は最も多くの遺物を包含する黄灰色の微砂質土層となっており、60cm前後の厚さで認められる。この7層目以下は基本的には砂層であるが、トレンチ断面による観察では層位的に区分することができ、8層目が灰色を呈す細砂層、この中に黄灰色を呈する微砂質土層がブロック状に入っており、この下にやや粗い砂層があり(10層)、この層は青灰色粘土をブロック状に挟んでいる。10層上面は地表下約2mの深さであり、遺物の包含は深くなるにつれて少なくなり、次第に遺物を含まない砂礫層と変化する。A トレンチの土層状態は以上の如くであり、第6層目までの間で遺構は存在しない。

B トレンチ

A トレンチに近接しているため、B トレンチの土層状態も基本的にはA トレンチと同様である。ただ、個々の上層の厚さの変化が認められる程度である。

3. 出土遺物

I区、II区を通じて多量の土器、土製品、石器などが出土した。土器は弥生土器がほとんどであり、繩文土器はII区から3点出土している。石器は打製石器の他、未製品を含め磨製石器が多く出土し、本地点も弥生時代の遺物が主である。

a. 繩文土器 (P85~P87)

いずれもII区A トレンチ10層より出土した。口辺部の破片で全形は知りがたいが、深鉢となるものである。P85は口縁端部に刻日を施すのが特徴で後期に位置づけられよう。P86とP87は口縁部から外反しつつのび、といったん段をなして底部へすぼまると考えられるもので、器面は条痕文を施しており、晩期に属するものである。

b. 弥生土器 (P1~P84, P85~P131)

本遺跡で最も多い遺物であるが完形となるものは少なく、接合しない破片が多い。器種は甕が最も多く、甕がそれに次ぎ、高杯、溜台、鉢、甕が若干出土し、手すくねの甕形、壺形の上器が混じる。

甕I類

口縁部を逆し字形に折り、上面を平坦あるいはやや垂れ気味にするもので、頸部は直線的に下降するかやや膨らむものである。口縁直下に小さな断面三角形の突帯をはり付けるものが多い。外面は刷毛目、内面はナデ調整する。底部は端整な平底あるいは、中央部が丸く窓むものである。弥生時代中期中葉のもので、I区の第1号ピット、第2号ピット、第4層、II区Aトレンチ第4層、第6層、第7層、Bトレンチ第6層、第7層に包含されている。

甕II類

口縁部断面三角形の突帯をはり付けるもの、あるいは口縁部を短く折り断面三角形をなすもので、口縁直下に突帯または沈線をめぐらす。外面は刷毛目、内面はナデ調整で、底部は厚く細身で上げ底となるものである。弥生中期前半に位置づけられる。

甕III類

直行する口縁に断面三角形の突帯をはり付け口唇となして刻みを施すもの、あるいは直行する脇部から脇をなして口縁を外反させるもので、脇部に刻目突帯をもつものがある。底部は下端が外に張り出す厚手のもので平底あるいは上げ底のものである。I区砂層、II区の第7層、第10層に認められる。弥生前期後半～終末に位置づけられよう。

甕IV類

口縁を外反させ、いわゆる如意形口縁と称される口縁部の裏で口唇に刻目を施すものが多い。底部は平坦な平底、やや厚手の上げ底を呈すもので、脇部に沈線、刻目突帯を施す。II区10層より多く出土する。弥生前期前半に位置づけられる。

壺I類

頸部が朝顔形に開き、いわゆる鉤形口縁をなすもので、脇部は丸く断面梯形の突帯をめぐらすもので、底部は平坦な平底を呈す。外面は荒研磨やナデ調整を施す。II区各トレンチの第4層から多く出土し、第7層からも出土している。

壺II類

口径11cm前後の小形の壺で、外反する口縁部からそのまま肩が張り丸い脇をなすもので、口縁部に穿孔する。弥生中期中葉に位置づけられよう。

壺III類

肩が張る丸い脇部から大きく外反する頸部をつくり、口縁部をそのままおさめるもの、あるいは内側を平坦にし段をなすもので、肩部に小さな三角突帯を施すものもある。底部は小さくおさめ上げ底を呈す。外面は荒研磨を施し、端整なつくりのものである。I区第1号ピット、4層、II区各トレンチ第6層、第7層中より出土する。弥生中期初頭～前半に位置づけられる。

壺IV類

肩が張る脇部から沈線によって境をなし、外縁気味にすぼまる頸部に外反する口縁部をもつもので、口縁部は内側が肥厚し段をなすもの、あるいは外側が肥厚し段をなすものがある。底部は円板はり付けの段をなすものである。器面は荒で調整しなめらかである。II区第10層中に

多く出土する。弥生前期前半～後半に位置づけられよう。

高 塚

II区Aトレント第10層より完形品と塊部の破片が出土した。P94は完形品で塊部は如意形の外彌する口縁を持ち、体部はゆるやかに内彌しつつ底部へすぼまる。小さな三角尖帯によって脚部と接合部をなし、脚裾は外彌気味にラッパ状に開く。外面および塊部内面は丁寧に荒研磨されている。P89も形態および手法の特徴はP94に類似し、これらの高塚は弥生前期前半の時期に位置づけられよう。

器 台

細長い鼓形を呈し胸部中位がすぼまるもので、内面両端近くに鈍い棱をつくるものがある。外面刷毛目、内面ナデ調整されている。弥生中期中葉頃に位置づけられよう。

その他の土器、土製品

蓋、手すくねの鉢、壺、紡錘車などがある。P93は平底の外に張り出す底部からラッパ状に開き、口縁付近で内彌するものである。蓋とするにはやや疑問が残る。底部の特徴から弥生前期のものであろう。P14は口縁内端が内側に張り出し、外側口縁下および胴部に浅い沈線によって隆起帯をつくるもので弥生中期前半～中葉の時期に位置づけられよう。P91は鉢の底部でP92は壺形土器の完形品である。これらの土器は弥生前期に属すると考えられる。紡錘車は大小2種があるが、いずれも厚手のものである。

b. 石 器

打製石器 (Fig. 56)

1は、定型石核である。一方から剥離により背面が自然面を持つ、角柱状に近い形態を持つ。打面は、平坦打面から剥離する直前に調整する技法を持つ。2・3は、ナイフ形石器と考えられる。2は、背の部位3は基部の部位のみにbluntingを加えている。4・6・7は石鏃である。6・7の脚部は特徴があり6も7と同様に先端部の尖がる形態を持つと思われる。4は、先端部・脚部が丸みを持つ形態。5は剥離方向が一方向を持つ縦長剥片である。8と21はEnd-scraperに近い形態を持つ。8は、横長剥片。21は、縦長剥片を素材とし、下位に二次加工を持つ石器である。9から11・14・17・19は、Side-scraperとも考えられる石器であるがここでは一応これらの石器を二次加工石器としてとらえておきたい。素材は縦長剥片が9・11・14・17・19、横長剥片が、10・15である。Side-scraperは、12・15・18の3点である。12・18は、縦長剥片、15は横長剥片が素材である。13は、尖頭器の要素を持つ石器である。厚手の縦長剥片を素材とし、先端・末端からの二次加工が主体をしめる。16は、横長剥片を素材とした彫器である。20・22・23は、石核である。これらの石核は、連続的に回転して剥離する技法を持つ。20は平坦打面、21は平坦打面であるが、剥離直前に調整を行なってゆく打面、23は、2方向からによる平坦打面である。4・12・22は、サヌカイト質安山岩、他は、黒耀石を石材としている。

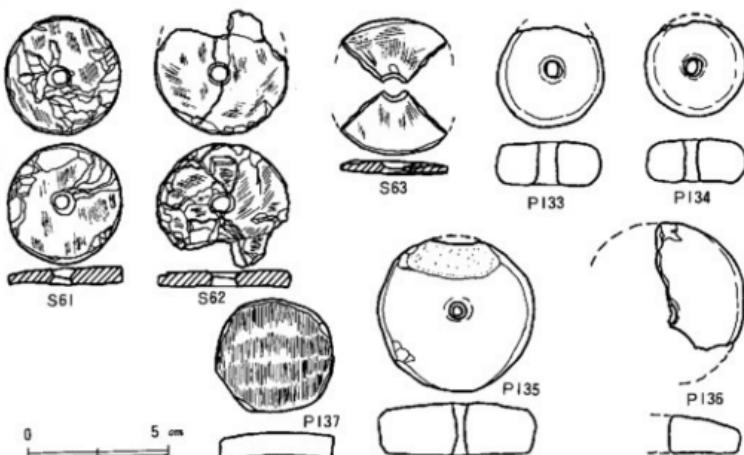


Fig. 47 B地点出土石器実測図（縮尺 1/2）

磨製石器 (Fig. 47-57~Fig. 59)

磨製石器類には太形蛤刃石斧、蛤刃石斧、抉入片刃石斧、方柱状片刃石斧、石包丁、石鎌、石剣、石鐵、そして紡錘車、砥石など多様な器種が出土している。完成品の破片が多いが、抉入片刃石斧、石鎌に未製品が認められる。

蛤刃石斧は玄武岩を主たる石材として利用しており、特に S25は今山産の太形蛤刃石斧と考えられるものである。抉入片刃石斧は大形と小形の 2種類あり、S39は完成品であり、S26は未製品である。前者は I区 I—3区砂層、後者は II区 Aトレンチ第 7層より出土しており、弥生前期に位置づけられよう。石包丁は比較的多く出土したが完成品は無い。I区 J—3区 4層より出土した S36は形態的に弥生前期のものに近いと考えられる。石鎌は未製品の S34のみであり、I区 G—3区砂層中より出土したもので、共伴する土器より弥生中期までは下らないと考えられる。石剣はいずれも鉄劍形石剣で、断面菱形の鋼をもつものと背部が平坦なもの 2種がある。特に S50は破損面を 2次的に研磨しており興味深い。S51は、銛の破片であり、あるいは石戈となるかも知れない。石材は立岩産のものと酷似するものである。紡錘車は I区より 2点、II区より 1点出土した。以上の他に II区 Aトレンチより石皿が出土し、I区 II区より砥石が出土している。

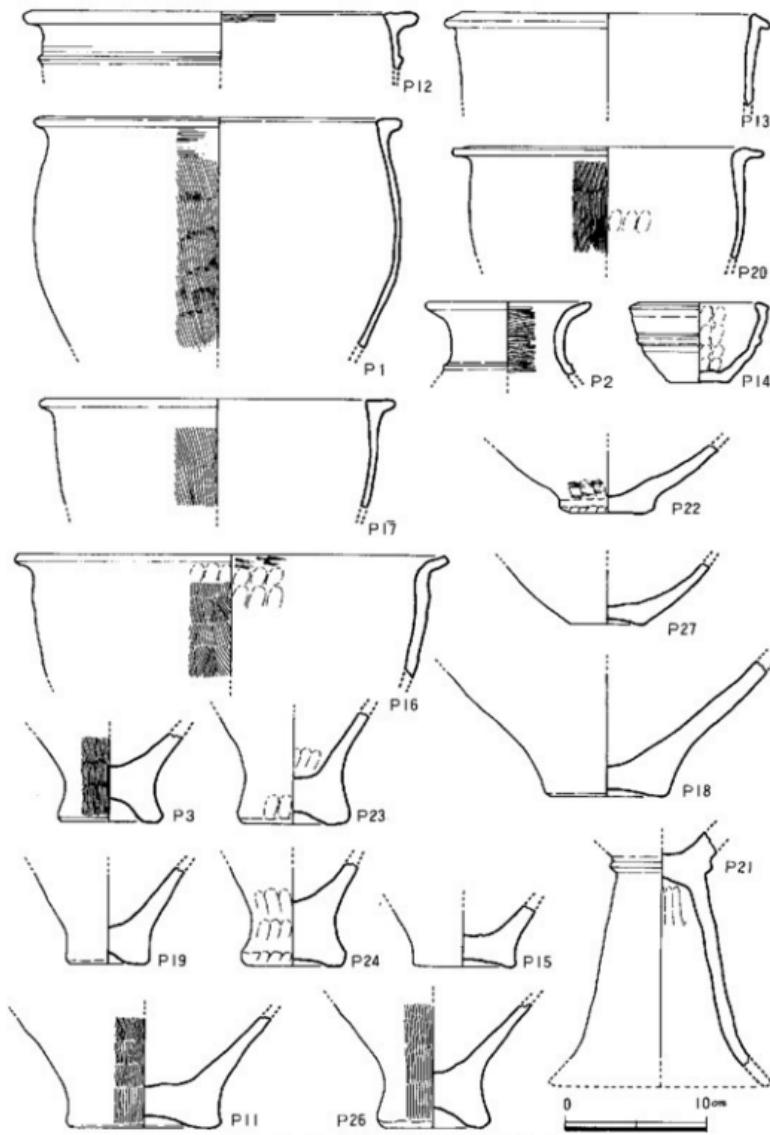


Fig. 48 I区出土上器尖端图 I (縮尺 1/4)

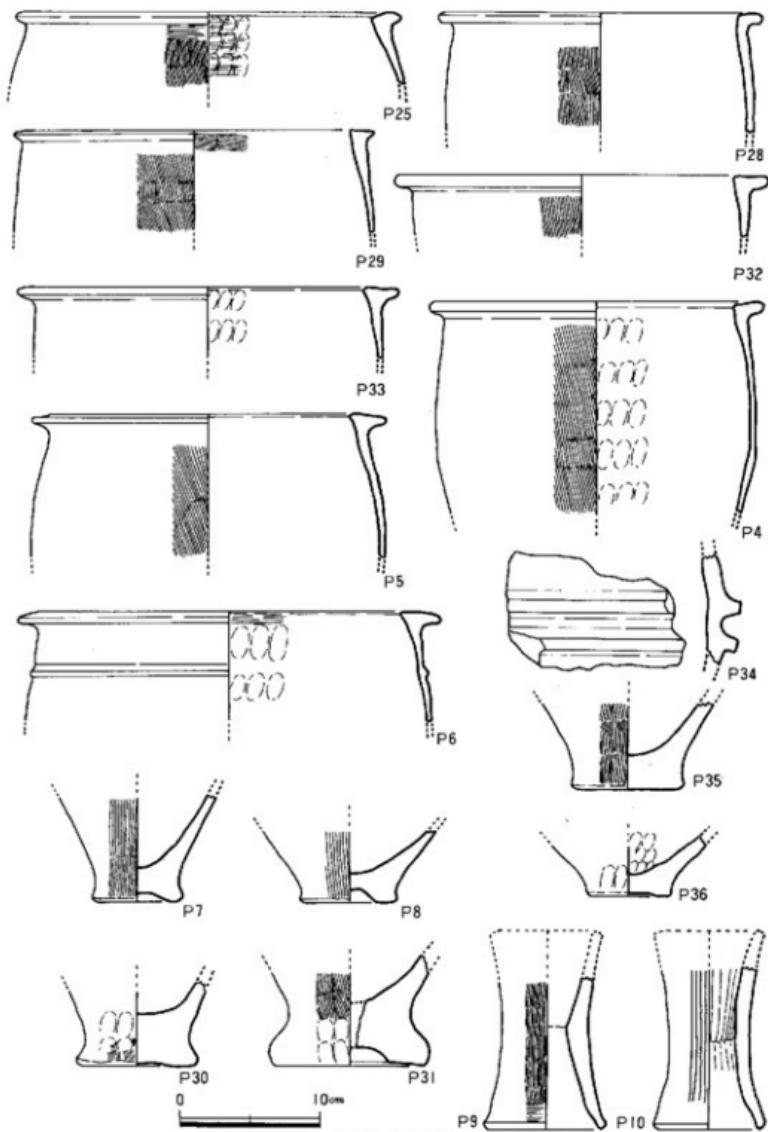


Fig. 49 I区出土土器実測図Ⅱ (縮尺 1/4)

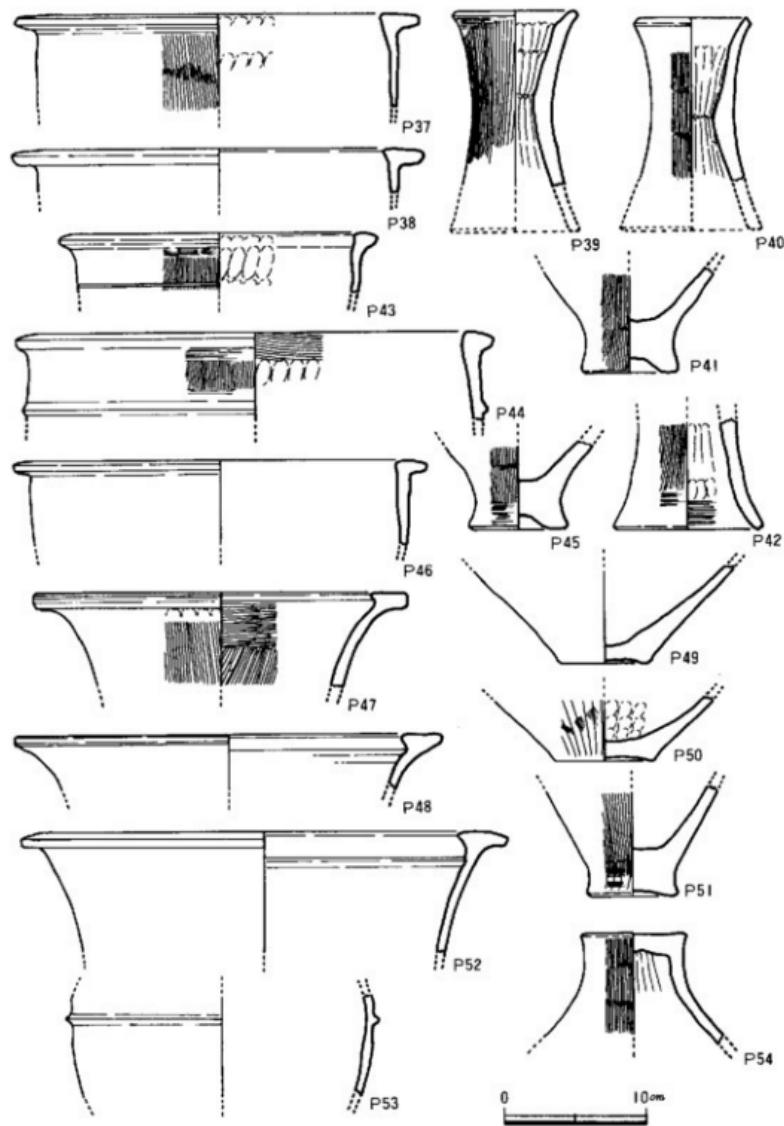


Fig. 50 II区Aトレンチ出土上器実測図 I (縮尺 1/4)

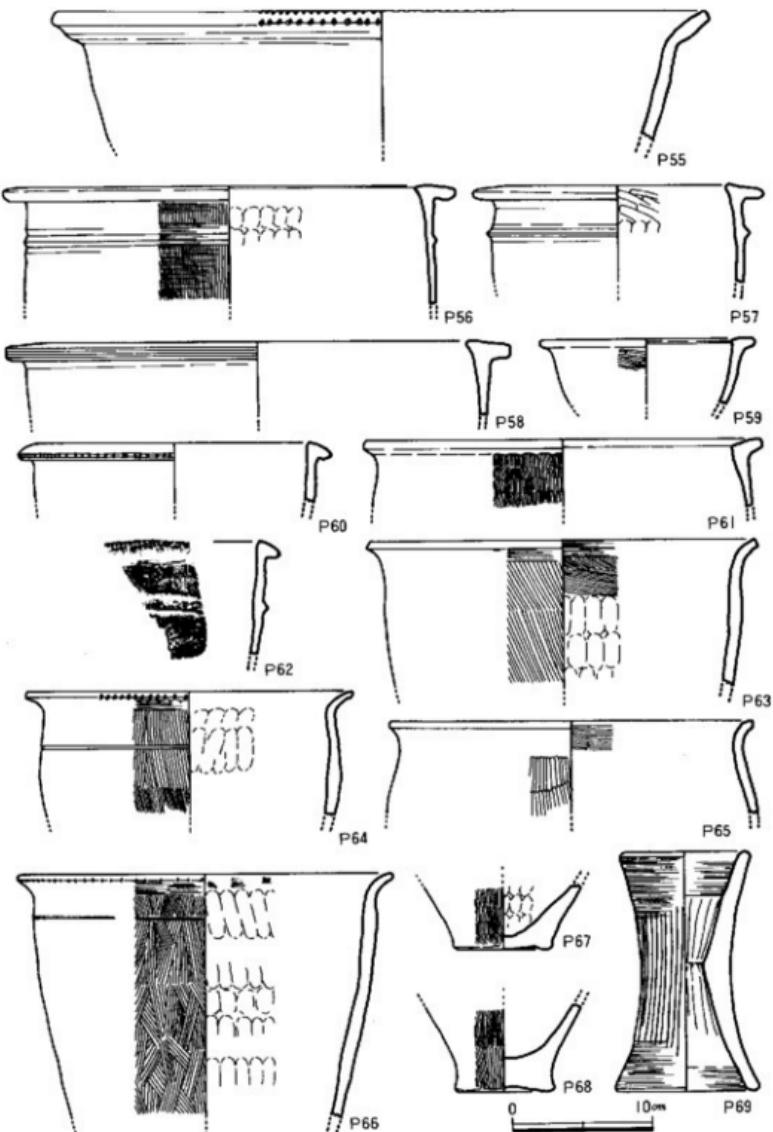


Fig. 51 III A トレンチ出土 壺実測図 II (縮尺 1/4)

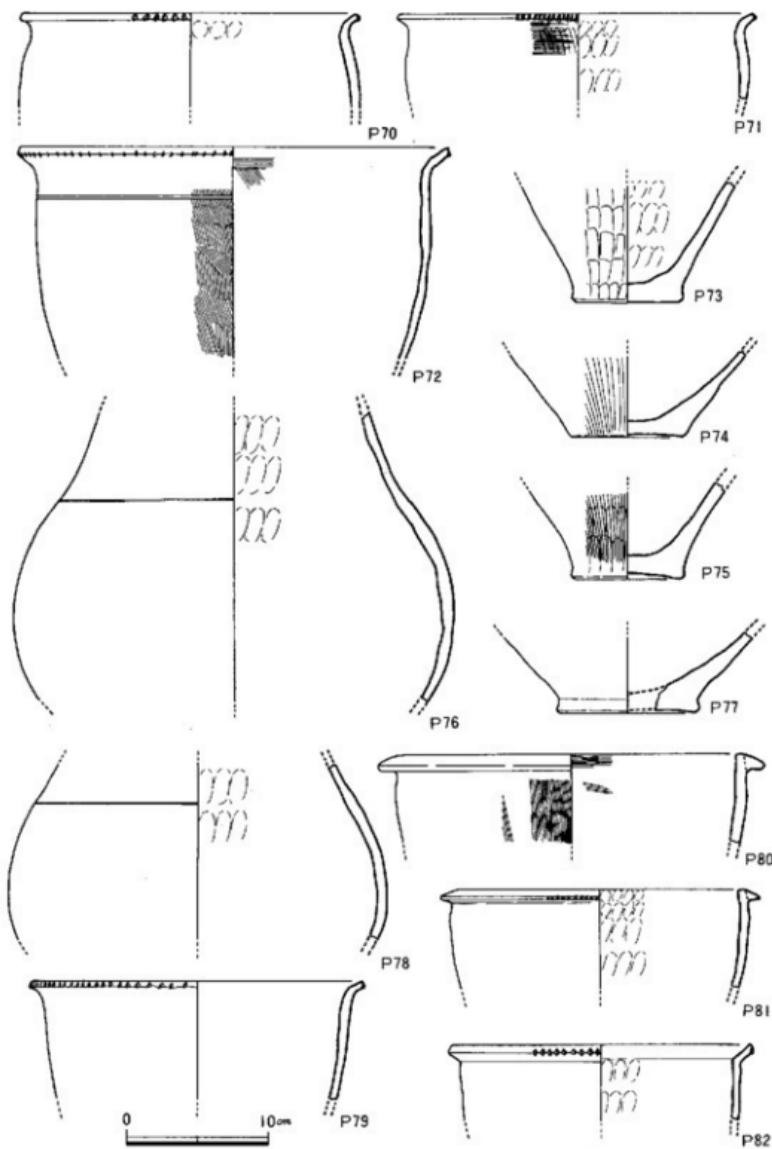


Fig. 52 III区Aトレンチ出土土器実測図III (縮尺 1/4)

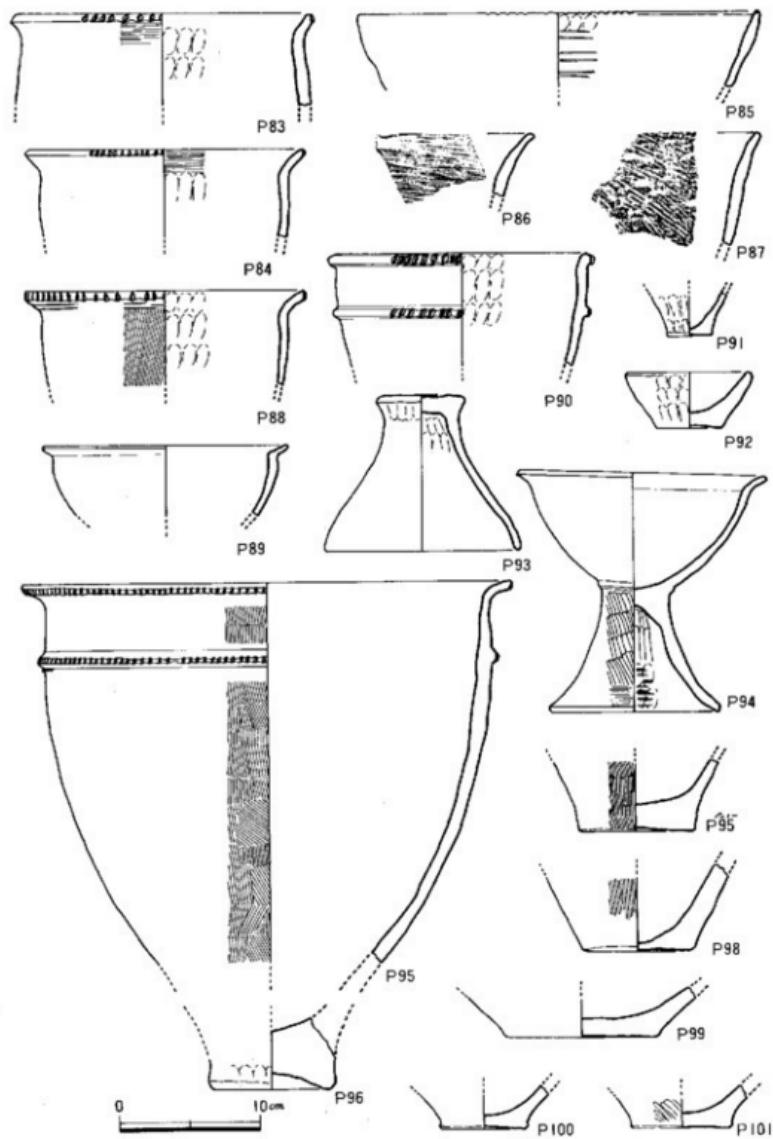


Fig. 53 II区Aトレンチ出土土器実測図IV (縮尺 1/4)

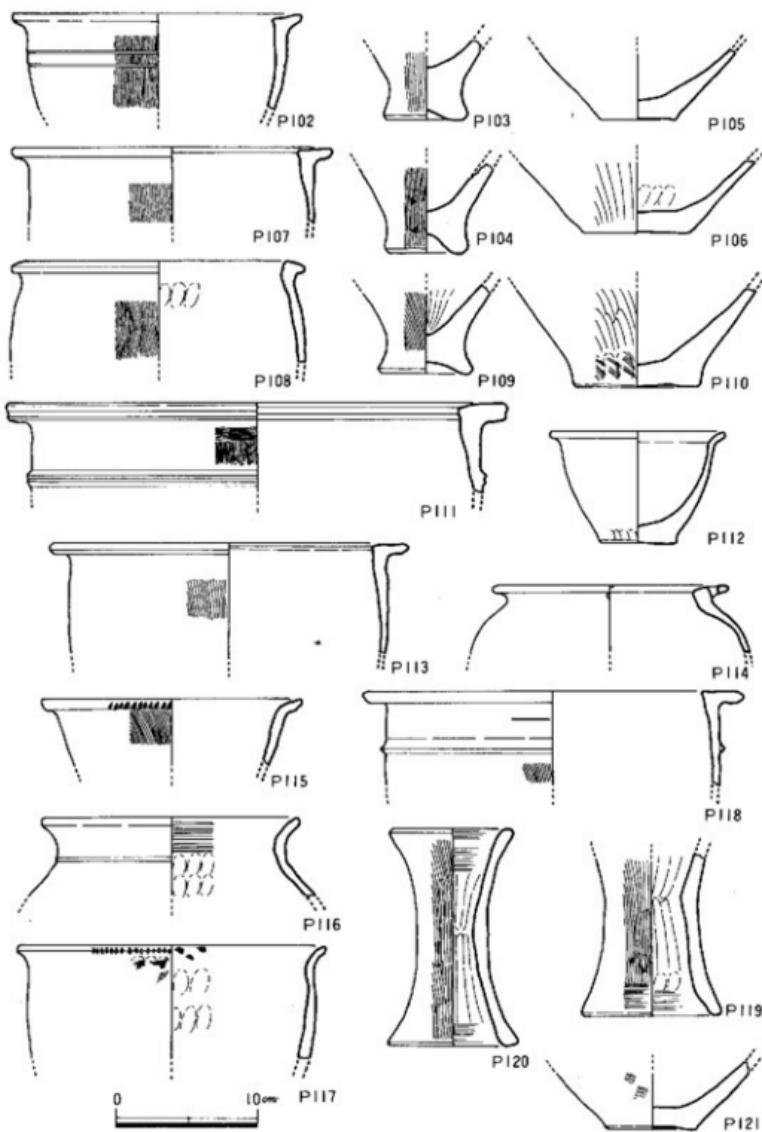


Fig. 54 II区Bトレンチ出土土器実測図 I (縮尺 1/4)

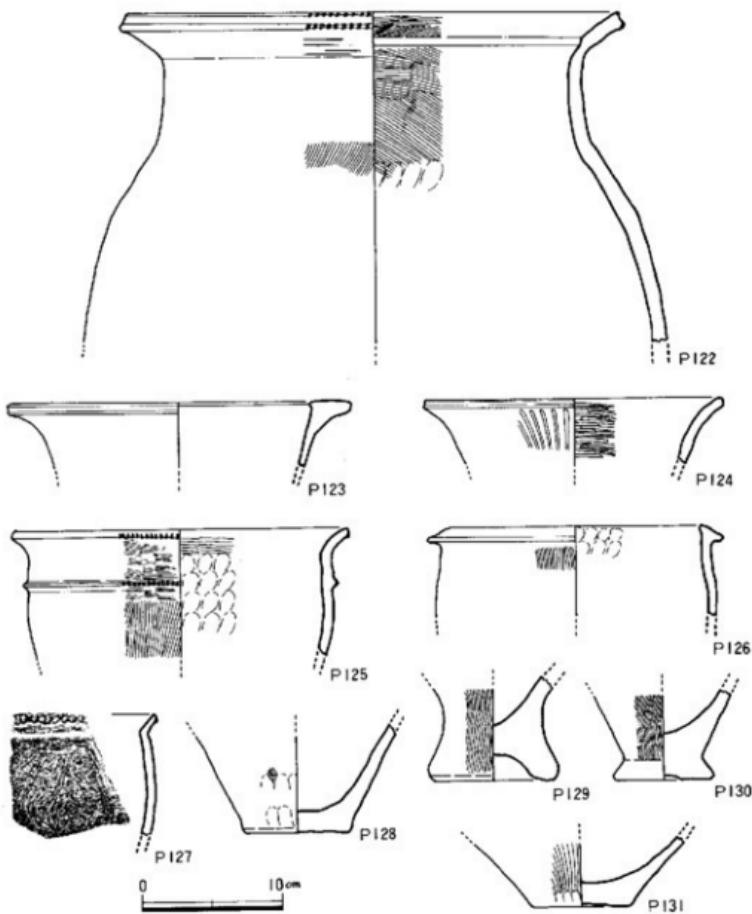


Fig. 55 II区Bトレンチ出土上部実測図II (縮尺 1/4)

弥永謙
Tab. 8 B 地点出土土器・土製品一覧 (※印は復原値、単位cm)

遺物番号	出土区・層位	特徴	法番	形態の特徴	手法の特徴	胎・土	地成	色調	参考	Fig. PL
P 1	第1号ピット	焼	口徑26.0	は形態が似て逆L字形に、口縁上部が外側をもつ。基部が弧状。	内面滑ナメ 外表面毛目	黒褐色、重い砂粒を含む	良好	黄褐色		48
P 2	〃	煮	口徑21.4	瓶部より口方に、口縫部をそのままつくる。	内外面ともヘラみつき	黄褐色、稍良	※	黄赤褐色	肩部に三角突起	〃
P 3	〃	焼	底径 7.2	外底面直くから深い上げ底となる。	内面滑ナメ 外表面毛目	黒褐色、重い砂粒を含む	不良	内灰褐色 外黄褐色		〃
P 4	第2号ピット	※	口徑 24.0	逆L字形口縫でやや弱が進る。P 4と口縫部がぐぐりかかる。P 5は口縫下に三角窓をめぐらす。	内面滑直江 外縫方向の刷毛目	黒褐色、重い砂粒を含む	良好	赤褐色		49
P 5	〃	※	口徑25.0	は	内面滑直江 外縫方向の刷毛目	黒褐色、細かい砂粒を含む	普通	※		〃
P 6	〃	※	口徑24.4	は	内面滑直江 外縫方向の刷毛目	黒褐色、細かい砂粒を含む	※	内赤褐色 外黄褐色		〃
P 7	〃	※	底径 5.5	いずれも口縫を失す。P 8は底部からの立ち上がりゆるやかである。	内面滑ナメ 外縫方向の刷毛目	黒褐色、細かい砂粒を含む	※	内棕褐色 外黄褐色		〃
P 8	〃	※	底径 6.8	は	内面滑ナメ 外縫方向の刷毛目	黒褐色、細かい砂粒を含む	不良	内灰褐色 外赤褐色		〃
P 9	器台	底径 8.0	焼形を呈し、瓶部中位がくびれ上口斜面をなす。	内面中位しばり 底高さ14.0	黒褐色、細かい砂粒を含む	良好	黄褐色			〃
P 10	〃	※	底径 8.0	は	内面中位しばり 底高さ14.0	黒褐色、細かい砂粒を含む	※	内灰褐色 外赤褐色		〃
P 11	I-3-4層	甕	底径 10.5	やや上げ底を呈す。	内面滑ナメ、外縫方向の刷毛目	黒褐色、重い砂粒を多く含む	不良	黄褐色	底部が苦し	48
P 12	〃	砂器	口徑23.0	逆L字形口縫、上面は平底	内面滑ナメ	黄褐色、稍良	普通	※	口縫底下に突出	〃
P 13	I-4-3層	※	口徑20.5	瓶形の口縫部が下げる 体部は直線的にすぼまる	内面滑ナメ 外縫方向の刷毛目	黒褐色、重い砂粒を多く含む	※	黄赤褐色	底部が苦し	〃
P 14	〃	焼	底径 5.5	逆L字形口縫部に開窓、口縫に丸く口縫は空巣を呈す。	内面滑直江 内面滑ナメ 外縫方向の刷毛目	黒褐色、細かい砂粒を含む	※	单褐色		〃
P 15	〃	焼	底径 7.2	外底面より上げ底となる。	内面滑ナメ 外縫方向の刷毛目	黒褐色、重い砂粒を含む	不良	内灰褐色 外赤褐色	底部が苦し	〃
P 16	J-2-2層	※	口徑20.2	初期口縫部、瓶部より奥部へそのまままる	内面滑ナメ、外縫方向の刷毛目	黒褐色、重い砂粒を含む	※	内灰褐色 外赤褐色		〃
P 17	J-3-3層	※	口徑21.0	逆L字形口縫、上面は平底	内面滑ナメ、外縫方向の刷毛目	黒褐色、重い砂粒を含む	普通	黄褐色	底部が苦し	〃
P 18	〃	甕	底径 8.5	やや平底の底部からゆるやかに立ち上がる	内面滑ナメ 外縫方向の刷毛目	黒褐色、重い砂粒を含む	不良	※	※	〃
P 19	〃	焼	底径 5.5	小さく焼形より急な立ち上がりを呈す。外底は強いて逆L字形	内面滑ナメ 外縫方向の刷毛目	黒褐色、細かい砂粒を含む	※	内灰褐色 外黄褐色		〃
P 20	〃	※	口徑19.5	逆L字形口縫、内底は丸底をもつ。やや削振り	内面滑ナメ、外縫方向の刷毛目	黒褐色、細かい砂粒を含む	普通	黄褐色		〃
P 21	J-4-3層	高杯	底径16.0 高さ16.0	ラップに開窓が広がる傾合部に突出する。	内面滑ナメ 外縫方向の刷毛目	黒褐色、重い砂粒を含む	良好	黄赤褐色		〃
P 22	H-3-3層	甕	底径 6.5	瓶形に下りけの底部から大きくなり外する体部	内面滑ナメ 外縫方向の刷毛目	黒褐色、重い砂粒を含む	普通	内灰褐色 外赤褐色		〃
P 23	〃	甕	底径 7.4	底部はやや外に盛り、外底の内側が丸く凹む。山あつ立底部である。	内面滑ナメ 外縫方向の刷毛目	黒褐色、重い砂粒を含む	不良	黄赤褐色		〃
P 24	〃	甕	底径 7.0	丸底をもじて瓶形三角窓の口縫部より半球が張り出す。	内面滑ナメ 内面滑直江	黒褐色、重い砂粒を含む	普通	黄褐色		〃
P 25	K-2-3層	※	口徑23.0	瓶形の底部でなく、外底は直し上げ底となる。	内面滑ナメ 内面滑直江	黒褐色、重い砂粒を含む	※	黄褐色		49
P 26	〃	4層	底径 7.5	瓶形の底部でなく、外底は直し上げ底となる。	内面滑ナメ 内面滑直江	黒褐色、重い砂粒を含む	不良	内灰褐色 外黄褐色	底部が苦し	48
P 27	K-3-3層	※	底径 5.0	上げ底の底部から内側気味に立ち上がる瓶形	内面滑ナメ 外縫方向の刷毛目	黒褐色、重い砂粒を含む	※	内灰褐色 外灰褐色	※	〃
P 28	〃	焼	口徑19.5	逆L字形の平底な直行瓶、瓶はやや突出している。	内面滑ナメ 外縫方向の刷毛目	黒褐色、重い砂粒を含む	※	黄赤褐色	※	轉
P 29	〃	※	口徑22.0	短く、内側三角窓の口縫をつくり、瓶部はやや圓く、瓶はやや突出している。	内面滑ナメ 外縫方向の刷毛目	黒褐色、重い砂粒を含む	※	内灰褐色 外黄褐色	※	〃
P 30	F-3-3層	※	底径 8.0	やや上部が氣味、瓶部への立ち上がりが急である。	内面滑ナメ 内面滑直江	黒褐色、重い砂粒を含む	※	内灰褐色 外黄褐色		〃
P 31	〃	甕	底径 10.5	底部は外に張り出し、外底は高台性中央部が内凹	内面滑ナメ 外縫方向の刷毛目	黒褐色、重い砂粒を含む	※	内灰褐色 外黄褐色		〃
P 32	G-3-3層	※	口徑22.0	上面が平底な逆L字形口縫には張らず底部に横く	内面滑ナメ 外縫方向の刷毛目	黒褐色、重い砂粒を含む	普通	黄赤褐色		〃
P 33	〃	※	口徑22.0	瓶形平底の横口で、断面梯形の欠損が2箇めぐる	内面滑ナメ 外縫方向の刷毛目	黒褐色、重い砂粒を含む	※	灰灰褐色		〃
P 34	〃	甕	小	瓶形平底の横口で、断面梯形の欠損が2箇めぐる	内面滑ナメ 外縫方向の刷毛目	黒褐色、重い砂粒を含む	良好	赤褐色	外壁に内底の底あり	〃

植物番号	出土地区・層位	鉢種	計量	形態の特徴	手形の特徴	新十	液波	色調	備考	Fig.-PL
P35	G-3・3層	葉	底径 8.0	半圓な葉型よりやや急に斜角へ立ち上がる。	内面ナデ 外曲脚毛目	緑褐色、長い砂粒を含む	不直	内 黒褐色 外 赤褐色		49.
P36	***	茎	底径 5.5	平らな葉面よりゆるやかに立ち上がる。	内曲脚毛目 外曲脚ナデ	灰褐色、長い砂粒を含む	*	内 黑褐色 外 天褐色		**.
P37	Aトレンテ-4層	葉	口徑 23.0	逆S字形に縁、斜部はあまり開かずして底辺に続く。	内曲脚ナデ 外曲脚毛目	赤褐色、細かい砂粒を含む	普通	黄褐色	外在底付着	50.
P38	***	口徑 23.5			内面暗ナデ、外 曲脚細い毛目	*	*	黑褐色		**.
P39	***	茎	口径 6.0 器底 15.7	葉形を呈し、斜部中央がすり開き、上部は上下細胞をなす。	内面中間はぼり の凹、下凹部は 厚ナデ、基脚毛目	赤褐色、細かい砂粒を含む	良好	黄褐色		**.
P40	***	茎	口径 7.6 器底 15.0	葉形を呈す。	黄褐色、精良	*	明褐色			**.
P41	***	葉	底径 7.0	外斜中央が丸く四つ上げ底	内曲脚ナデ 外曲脚毛目	灰褐色、砂粒を多く含む	不直	内 黑褐色 外 黄褐色		**.
P42	***	器台	底径 10.0	P39、P40と同式型の裏盤片。	内曲脚ナデ、 外曲脚毛目	灰褐色、長い砂粒を多く含む	良好	褐色		**.
P43	*** 6層	葉	口徑 19.0	上面が丸足をもつ船形二角形の白線部	内面沿直毛目	赤褐色、砂粒を多く含む	普通	黄褐色	側面に1条の 先端からぐる	
P44	***	口徑 20.8		新規二角形の口部、 底底 10cm 三角空洞。	内面沿脚毛目 外曲脚細い毛目	灰褐色、砂粒を含む	不良	内 黑褐色 外 黄褐色		**.
P45	***	葉	底径 7.0	底辺やや張り出し、外縫は中央部がだみ下垂。	内面暗ナデ、外 曲脚細毛目	灰褐色、砂粒を多く含む	*	内 黑褐色 外 黄褐色		**.
P46	***	口徑 25.0		上面が丸足をもつ逆S字形 の口縁部	内面暗ナデ 外曲脚ナデ	黄褐色、砂粒を多く含む	普通	黄褐色		**.
P47	***	茎	口徑 21.4	上面の平面的な船形口縁、葉 幅がなるべく内側しながらす ばまる。	内面暗方向へ うさぎ形、外面 毛目、ナデ	灰褐色、砂粒を含む	不良	内 黑褐色 外 黄褐色		**.
P48	*** 7層	葉	口徑 24.8		内面ナデ、外 曲脚ナデ	灰褐色、砂粒を少 し含む	不直	内 黑褐色 外 黄褐色	葉底が黒い	**.
P49	*** 6層	*	底径 6.0	浅い上げ底を呈す。 葉形にゆるやかに立ち上が る。	内面底近正円、外 曲脚ナデ	灰褐色、砂粒を少 し含む	普通	内 黑褐色 外 黄褐色		**.
P50	***	*	底径 7.0	浅い上げ底、底辺からの方 ち上上がりはやや危。	内面底近正円、外 曲脚ナデ	灰褐色、砂粒を少 し含む	普通	内 黑褐色 外 黄褐色		**.
P51	***	葉	底径 6.0	上面が丸足をもつ船形口縁、 内面に突筋をつくる。	内面ナデ 外曲脚ナデ	灰褐色、砂粒を 多く含む	不良	黄褐色		**.
P52	*** 7層	立	口徑 27.5	球形の球形中位に三角空洞 をはり付ける。	内面暗ナデ 外曲脚ナデ	灰褐色、精良	*	暗褐色		**.
P53	***	不	明	半圓な葉面から外さしつつ 外伸する。	内面暗ナデ 外曲脚ナデ	灰褐色、精良	良好	黄褐色		**.
P54	***	葉	底径 7.4	半圓な葉面から外さしつつ 外伸する。	内面暗ナデ 外曲脚毛目	灰褐色、長い砂 粒を含む	普通	内 黑褐色 外 黄褐色		**.
P55	***	葉	口徑 26.0	如意形を浅い口縁で、下縁 が肥厚する。	内面暗ナデ 外曲脚毛目	灰褐色、細かい 砂粒を多く含む	*	黄褐色		51.
P56	***	*	口徑 26.4	口縁部を逆S字形に呈し、 駆輪があまり別れない。	内面暗ナデ 外曲脚毛目	灰褐色、細かい 砂粒を多く含む	*	黄褐色		**.
P57	***	*	口徑 25.4	P56、P57は三角空洞が ある。	内面暗ナデ 外曲脚ナデ	灰褐色、精良	*	淡黄褐色		**.
P58	***	*	口徑 29.8		内面ナデ 外曲脚ナデ	灰褐色、精良	不直	黄褐色		**.
P59	***	跡	口徑 32.0	半圓な逆S字形の口縁より ゆるやかにカーブして口底ま で伸びる。	内面暗ナデ、外 曲脚へラグマ	灰褐色、精良	良好	黑褐色		**.
P60	***	葉	口徑 28.8	逆S字形に浅い口縁を有す る葉が盛れる。	内面暗ナデ 外曲脚ナデ	灰褐色、長い砂 粒を含む	普通	暗 黄褐色	口縁間に斑点	**.
P61	***	*	口徑 24.0	逆S字形に縁で、割がやや 深まる。	内面暗底正円、外 曲脚細毛目	灰褐色、長い砂 粒を多く含む	*	黄褐色		**.
P62	***	*	不	新規三角形のはり付け口縁 は唇形が盛れる。	内面暗ナデ、外 曲脚ナデ	灰褐色、長い砂 粒を多く含む	不直	内 黑褐色 外 黄褐色	日本国内に 中国に見出	**.
P63	***	*	口徑 27.4	直立形口縁、口縁感よりそ の主空洞へすばるが、	内面暗ナデ、外 曲脚毛目	灰褐色、長い砂 粒を多く含む	普通	黄褐色		**.
P64	***	*	口徑 23.0	P65はやや削がある。	内面暗ナデ、外 曲脚毛目	灰褐色、長い砂 粒を含む	*	内 淡黃褐色 外 黑褐色		**.
P65	***	*	口徑 25.8	P66は口縁下端に削れると は縦筋で口縁をめぐらす。	内面暗ナデ、外 曲脚毛目	灰褐色、精良	良好	黄褐色		**.
P66	***	*	口徑 25.5		内面暗底正円 外曲脚毛目	灰褐色、砂粒を 多く含む	普通	供 色	外曲脚付帯	**.
P67	***	*	底径 6.4	半圓な葉面からそのまま立 ち上がる。	内面暗底正円 外曲脚毛目	灰褐色、砂粒を 多く含む	*	黄褐色		**.

弥永遺跡

番号	地名・層位	断面	法 線	形 状 の 特 徴	手 法 の 特 徴	断 上	横成	色 調	考 察	Fig・PL
P 68	Aトレンチ・7層	壁	底径	7.0 やや上げ度、底部よりやや内側側面に立ち上がる。	内面滑ナダ、外面 細かい刷毛目				51	
P 69		壁	口径	8.3 直角に軸部中段がすぼまる。 内面、中央より内側は後方に	内面滑ナダ、ナナメ、外 面滑ナダ			刷毛目は粗 く粗い		
P 70		壁	口径	23.8 細長い円柱状を呈する。 P70 P71はやや斜めであるかP72 はそのままである。いわ ん口唇に剥離を施すが、 P72は下端部につけて、口輪 底に1条の沈線を施す	内面滑ナダ、柱ナダ、 外面ナダ、口輪付 近は擦ナダ				52	
P 71		壁	口径	25.0 内面、中央より内側は後方に	内面滑ナダ、一部 刷毛目、外面部毛目					
P 72		壁	口径	30.5 直角に1条の沈線を施す	内面滑ナダ、一部 刷毛目、外面部毛目					
I' 73		壁	直径	8.0 平直な円柱からそのまま 脛へ立ち上がる。	内面滑ナダ、柱ナダ 内面へ彫り直す					
P 74		蓋	直径	8.0 やや上げ度の直角よりゆる やかに脚部へ立ち上がる。	内面滑ナダ、外面 へラミガキ					
P 75		壁	底径	8.0 やや上げ度の直角から外側 気味に立ち上がる。	内面滑ナダ、ナナメ、外 面滑ナダ					
P 76		蓋	直径	31.5 長さ14センチの無底、沈線を複 数に削り、丸く彫りこむ	内面滑ナダ、柱ナダ、直 面へラミガキ					
I' 77		壁	口径	10.0 平直な円柱はラウンド削、外 部から中央に立ち上がる。	内面滑正斜 外面へラミガキ					
P 78		壁	口径	27.0 あらじ葉と強めずい削りつ くり、被覆(底)は下半部・被覆	内面滑ナダ、外 面滑ナダ、外 面滑正斜へラミガキ				脣部に1条 の沈線	
P 79		壁	口径	23.5 矩形口縁、口輪部よりそのよ うに削る。 口唇部はやや下がり。	内面滑ナダ、柱ナダ 外面部ナダ					
P 80		壁	口径	23.5 直角・無形の刃付で口輪 口唇部はやや下がり。 P81 は底面を施す	内面第一刷毛目 外面部毛目					
P 81		壁	口径	22.0 底面についての削除に外れる、以 降部分から直角削に仕まる	内面滑正斜 外面部ナダ	褐色、粗い 砂粒を含む	不良	暗褐色		
P 82		壁	口径	21.2 底面についての削除に外れる、以 降部分から直角削に仕まる	内面滑ナダ 外面部ナダ				口唇下端に 剥離	
P 83		壁	口径	20.5 矩形口縁、口輪部に削目 を施す。 P83はやや粗削り で直角の外角は少ない	内面滑ナダ、 外面部ナダ、口輪部付 近は粗ナダ					53
P 84		壁	口径	19.6 丸く丸めた口縁にそのままばね たる、口輪部削除。	内面滑正斜 外面部ナダ					
P 85		壁	口径	28.0 丸く丸めた口縁にそのままばね たる、口輪部削除。	内面滑正斜へラミ 外面部ナダ				縦文後期	
P 86		不 明	不 明	いわせらし剥離より外コシし そのままでそのままの口輪部削 除部は後がくつと考えら れる。	内面滑ナダ、外面 滑正斜の直角 削除部の直角				縦文後期	
P 87		不 明	不 明	矩形口縁、口輪部に削目 をもつ	内面滑ナダ、 外面部ナダ					
P 88		壁	口径	19.8 矩形口縁、口輪部に削目 をもつ	内面滑正斜 外面部正斜					
P 89		高杯	口径	17.0 直角の底面に削れ部を施す 内面滑正斜へラミがき	内面滑正斜とも直角 向のへラミがき					
P 90		壁	口径	17.5 直角の底面に削れ部を施す、削部 はカーブへラミがき	内面滑正斜 外面部ナダ				口唇部と 脣部に大きな凹	
P 91		小盤	直径	3.0 平面に削をつくす。そのま ま直に立ち上がる。	内外面とも滑削				手培土器	
P 92		小盤	口径	8.5 やや上部の直角部からやや字型に 立ち上げ、口唇をさめる。	内面正斜へラミ 削部を厚くくる				手培土器	
P 93		蓋	口径	13.5 直角の平面から外側気味に開け て口唇は直角へラミがき	内面滑正斜、柱ナダ 外面部ナダ					
P 94		高杯	口径	18.7 加熱形から直ぐに内削して はまり、底はラウンドに外す	内面滑正斜へラミがき 内面滑正斜へラミがき				脚部全面に 三脚窓、支脚 内面滑正斜へラミがき	
P 95		壁	口径	34.5 直角の底面に削れ部を施す、削部 はカーブへラミがき	内面滑ナダ 外面部毛目				口唇と支脚 に平行に通す	
P 96		壁	底径	8.3 ふかい直で外削れ部を削部よりそ の主流へ上昇する。	内面滑ナダ 外面部正斜				脚部と同一傾斜 かどうか不明	
P 97		壁	底径	8.0 直角の底面から直ぐに内削して はまり、底はラウンドに外す	内面滑正斜へラミ 外面部正斜				外壁に削れ あり	
I' 98		壁	底径	8.0 直角の底面から直ぐに内削して はまり、底はラウンドに外す	内面滑ナダ 外面部毛目					
P 99		盖	底径	11.0 平面を底部からなるべく内削して はまり、底はラウンドである。	内面ナダ					
P 100		盖	底径	6.0 内側部へ向かう。 P99は人形 の型の底部である。	内面滑ナダ 外面部滑正斜					
P 101		壁	底径	7.0 直角の底面をもつとする	内面滑正斜 外面部滑正斜					
P 102	Bトレンチ・5層	壁	口径	16.5 直し字形に近く外反する口輪部、 削部をもつとする	内面滑ナダ、口輪部毛 目、外面部滑正斜				54	

第4章 B 地点の調査

91

番号	当土区・層位	器種	法量	形態の特徴	丁法の特徴	粒土	塊度	色調	備考	Fig. B.
P103	Bトレンチ・5層	葉	底径 6.0	ふわつく、やや外反する葉形、外縁は中央部に向かって丸く曲む	内面指痕、指ナジ、外縫痕毛目					54
P104	〃	〃	底径 6.0							〃
P105	〃	葉	底径 5.2		内面指痕ナメ、外縫痕毛目					〃
P106	〃	〃	底径 7.0	平坦な平底で、やや厚い、裏面からそのまま外広いつつ腹面はゆるやかに立ち上がる。	内面指痕ナメ、外縫痕ナメ					〃
P107	〃	葉	口径 18.0	上面がやや中間で浅字形口縁	内面指痕ナメ、外縫痕毛目、横毛目					55
P108	〃	〃	口径 18.0	裏面はやや中間で浅字形に外反させ、やや堅いがくらむ	内面指痕ナメ、外縫痕毛目					〃
P109	〃	葉	底径 6.5	外に強引に出字形口縁、外縫痕より丸く上げ底となる	内面指痕ナメ、外縫痕毛目					〃
P110	〃	葉	底径 9.0	厚く大きな平底からなるやや中に断面へ立ち上がる。	内面指痕ナメ、外縫痕ナメ					〃
P111	〃	葉	口径 29.0	浅字形の大きな口縁	内面指痕ナメ、外縫痕ナメ					口縫内層に 比較を施す。
P112	〃	葉	底径 12.2	底面形状は中間からなるややにかづいて平底の表面へすばまる。	内面指痕ナメ、外縫痕ナメ、横毛目					〃
P113	〃	葉	口径 20.5	浅字形口縁、茎は張らずに成形部へ続く。	内面指痕ナメ、外縫痕ナメ、横毛目					〃
P114	〃	葉	口径 11.5	口縁部は大きく外反し、周縁部は膨らむ。口縁部に穿孔する。	内面指痕ナメにナメ					〃
P115	〃	葉	口径 18.4	側面形口縁、山根等から極端に下がる。口唇下に凹角	内面指痕ナメ、外縫痕ナメ					方向の羽目
P116	〃	葉	口径 18.0	裏面が僅少で、縫縫痕と側面とによって幾筋か、くろ毛目に外縫痕毛目	内面指痕ナメ、外縫痕ナメ					〃
P117	〃	葉	口径 21.5	如意形口縁、やや今朝が頬張る口唇下部に刻目	内面指痕ナメ、外縫痕ナメ					〃
P118	〃	葉	口径 21.2	通字形口縁で、茎部は直線的、口唇直上に三筋突起	内面指痕ナメ、外縫痕ナメ					〃
P119	〃	葉	底径 10.0	新葉半段が裂形にすばまる	内面指痕ナメ、外縫痕ナメ					〃
P120	〃	葉	口径 8.5 基高 15.2	P 126はぐく細胞である。	内面指痕ナメ、外縫痕ナメ					〃
P121	〃	葉	底径 6.4	厚い平底、軽部はゆるやかに立ち上がる	内面指痕ナメ、外縫痕ナメ					〃
P122	〃	葉	口径 35.0	平行な葉縫からなる平行に複数ある口縁部は僅筋的にすまると、内縫痕毛目	内面指痕ナメ、外縫痕ナメ					口唇下開 通に羽目
P123	〃	葉	口径 18.5	口縫部が四回り難か外反し、つづつ下がる	内面指痕ナメ、外縫痕ナメ					55
P124	〃	葉	口径 21.0	口縫部が四回り難か外反し、つづつ下がる	内面指痕ナメ、外縫痕ナメ					〃
P125	〃	葉	口径 23.5	如意形口縁、茎部は必ずしも下がる。にじみ出と矢張に切目	内面指痕ナメから難か、外縫痕ナメ					〃
P126	〃	葉	口径 17.8	山根部が黒い。角形の口縁、やや筋張りの底縫	内面指痕ナメ、外縫痕ナメ					〃
P127	〃	葉	不 告	貫する網状から後になじみていくの字形に外反する口縫	内面指痕ナメ、外縫痕ナメ					口唇下筋に 刻目を施す
P128	〃	葉	底径 7.5	平底な平底で底縫は柔らかに翼状へ立ち上がる。	内面指痕ナメ					〃
P129	〃	葉	底径 8.2	ふわつく高い裏縫で縫縫部が張る。深い凹みをもつ外縫	内面指痕ナメ、外縫痕毛目					〃
P130	〃	葉	底径 7.0	平底な平底はリットルの底縫	内面ナメ、外縫痕ナメ					外縫中央部が やや丸く出む
P131	〃	葉	底径 7.0	やや上部の平底な裏縫からそのままで輪郭へゆるやかに立ち上がる	内面指痕ナメ、外縫痕ナメ					〃
P132	J-3・3・3 層	植物	根付 枝葉	小形で厚い結葉車。わざかに棘を一部欠損	淡褐色、穢い 根付を含む	小丸	暗褐色			47
P133	Bトレンチ・6層	植物	根付 枝葉		*	*	*			〃
P134	Aトレンチ・8層	植物	根付 枝葉	ぬるいカーブを呈し、穿孔されていない。	黄褐色、穢か 根付を含む	青緑	黃褐色			〃
P135	Bトレンチ・7層	植物	根付 枝葉	大型の結葉車である。 P136は全分の3分の2を欠ける。	黄褐色、穢い 根付を含む	小丸	淡褐色			〃
P136	〃	植物	厚さ 0.13		*	*	*			〃



Fig. 56 B地点出土石器实测图 I (前尺 3/5)

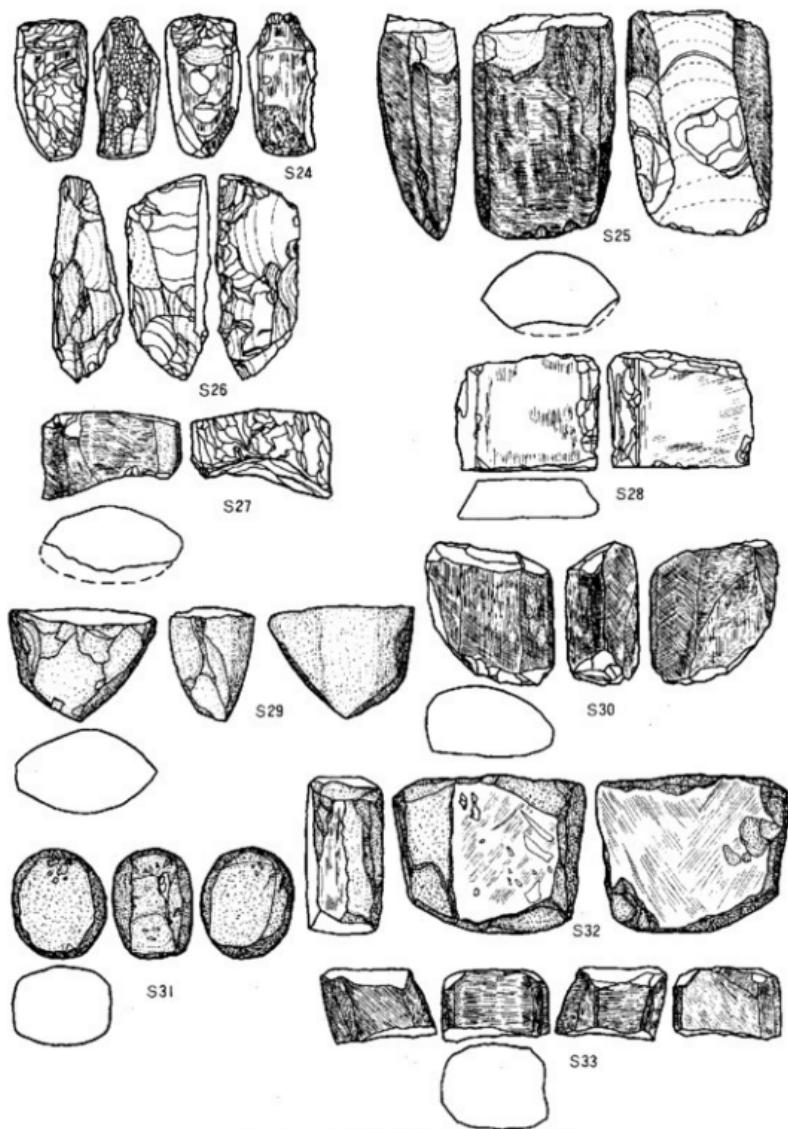


Fig. 57 B地点出土石器实测图III (缩尺 1/2)

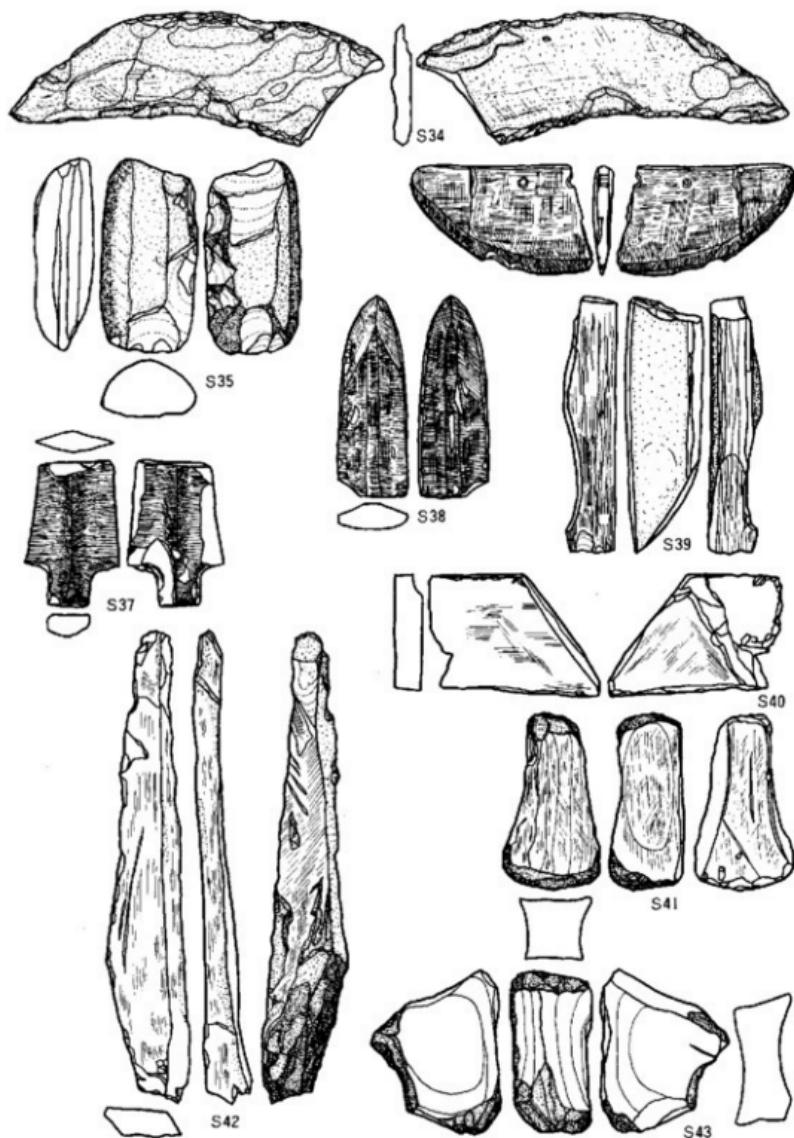


Fig. 58 B地点出土石器实测图Ⅲ (粗尺 1/2)

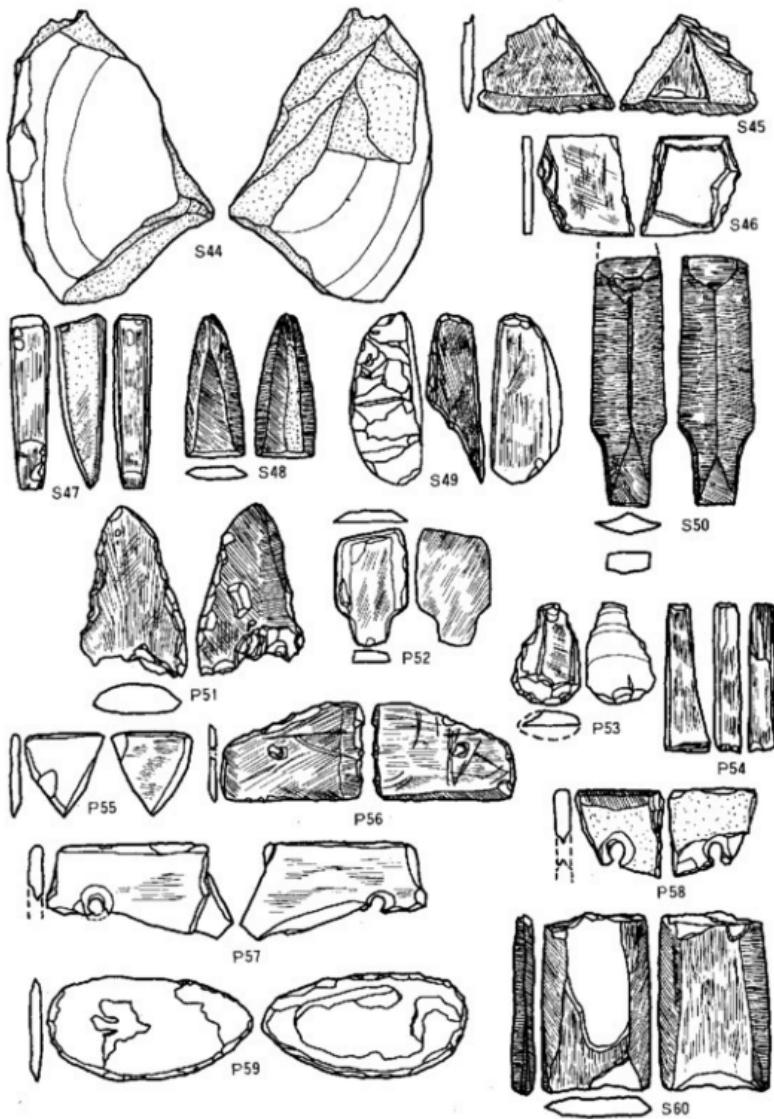


Fig. 59 B地点出土石器实测图IV (缩尺 2/3)

弥永遺跡

96

Tab. 9 B地点出土石器一覧表

遺物 番号	種 類	出 土 位 置	形 態	材 質	新 舊	先 史 期	基 本 部	大型 小 型	石 質	二 次 加 工 部	重 量 P at in a	時 間 角 度	磨 製 部 分	方 部	打 削 形 成	自 然 面	備 考	
上 下 部 部 分	上 下 部 部 分	上 下 部 部 分	上 下 部 部 分	上 下 部 部 分	上 下 部 部 分	上 下 部 部 分	上 下 部 部 分	上 下 部 部 分	上 下 部 部 分	上 下 部 部 分	上 下 部 部 分	上 下 部 部 分	上 下 部 部 分	上 下 部 部 分	上 下 部 部 分	上 下 部 部 分	上 下 部 部 分	
S1 石 核	B1レンチ 6 個	半円形 角形	角形	なし	-	平 頭	尖がる	小 型	黒曜 石	-	-	遠んで いない	-	-	-	調整 有	黒曜石は 一方のみ	
S2 knife scraper	J-3区 3 個	b I 形	縦長 削り	有 者	下 cut	尖がる	尖がる	小 型	x	blunting はback'le'v	-	-	-	-	二次加 工有	有	bluntingは 一方からのみ	
S3 Scraper	J-2区 1 個	end- scraper	縦長 削り	なし	下 cut	*	平 頭	小型	x	端刃部と end'に加工	-	遠んで いない	-	なし	end out	有	尖端的な形態 をもつ	
S4 小 型 尖端 器	G-3区 6 個	三角形	-	-	-	丸み	丸み	中型	x	端刃部から の剥離	-	遠んで いない	-	なし	両面	-	なし	
S5 縦長削り	K-3区 4 個	幅 長	-	なし	上 有	平	平	中型	x	端刃部の剥 離	-	遠んで いない	90°	-	調整 有	側面方向が一定		
S6 石削?	I-3区 4 個	斜 刀	斜 削り	-	上 cut	研磨	尖がる	中型	x	端刃部のみ に加工	-	-	-	-	なし		側面が特徴的な形 状scraperか?	
S7 石 核	G-3区 7 個	三角形	-	-	-	尖がる	平坦	中型	x	端刃部に研 磨をかね加工	-	遠んで いない	-	-	両面	-	なし	
S8 Scraper	F-3区 3 個	end- scraper	縦長 削り	なし	準位 est	平頭	丸み	小型	x	端刃部に研 磨をかね加工	-	遠んで いない	-	-	片面	out	有	
S9 二次加工 石器	J-3区 4 個	side- scraper	*	*	上 est	尖がる	平頭	小型	x	側面に	*	-	-	side	-	有	side- scraper	
S10 scraper	H-3区 4 個	end- scraper	縦長 削り	有	上 有	平頭	丸み	小 型	x	endとside に	-	遠んで いない	-	-	end	-	なし	
S11 二次加工 石器	J-3区 3 個	side- scraper	縦長 削り	なし	上 丸み	*	*	*	x	側面	*	-	-	side	-	*		
S12 scraper	J-3区 3 個	side- scraper	縦長 削り	なし	準位 est	平頭	丸み	小型	x	下面に 加工	-	遠んで いない	-	-	両面	cut	有	
S13 二次加工 石器	H-3区 4 個	round scraper	縦長 削り	-	下 丸み	丸み	*	*	x	上・下に 加工	-	*	-	-	丸み	-	有	
S14 二次加工 石器	K-3区 3 個	丸 長	横長 削り	なし	上 丸み	丸み	平頭	中型	x	先端部	-	遠んで いない	不明	-	先端部	cut	有	
S15 Scraper	I-3区 3 個	side- scraper	縦長 削り	なし	下 有	平頭面	平頭面	小型	x	リヲチ有	-	遠んで いない	100°	-	side	調整 有	側面の技術	
S16 Scraper or drill	I区領土 3 個	site scraper or drill	縦長 削り	切断	横位 est	尖がる	平頭	小型	x	側面 side'にリヲチ	*	-	-	side	-	なし	site'によるリヲチ と側面によるリヲチ	
S17 二次加工 石器	J-3区 3 個	範 模	横長 削り	なし	上 有	平頭	平頭	小型	x	side'に 側面から リヲチ	*	120°	なし	side	自然 面	有	側面が合併、剥 離は一方から	
S18 *	J-3区 4 個	*	横長 削り	なし	対位 est	尖がる	平頭面	*	x	side'に 二次加工	*	-	*	*	*	*	*	
S19 無加工した 石器	A1レンチ 7 個	site scraper or drill	横長 削り	不完全	上 上	平頭	平頭面	小型	x	side'に リヲチ有	-	遠んで いない	-	side	調整 有	なし	主要剥離はから れり取る	
S20 石 核	A1レンチ 10 個	柱状 形	柱状 形	不完全	柱状 形	柱状 形	柱状 形	大型	x	柱状の剥離を主とする石核で、打削面は柱状 面と正反対性を示す。三方向の剥離方向を持つ。	ただ剥離は、一向向かのものでありこれが正反対で あれば二つの定型石核とも思われる	-	-	-	-	-	なし	
S21 Scraper	A1レンチ 10 個	end- scraper	柱状 形	なし	上 柱状	平坦	平坦	小型	x	side'end に	遠んで いない	-	-	下面と 側面	-	なし		
S22 石 核	A1レンチ 6 個	柱状 形	柱状 形	柱状 形	柱状 形	柱状 形	柱状 形	柱状	x	剥離工場は、大体から中央へと繋ぎを持ち、その剥離を上下 にくり返す。自然面を持ち、Patinaは進んでいる。	剥離工場は、大体から中央へと繋ぎを持ち、その剥離を上下 にくり返す。自然面を持ち、Patinaは進んでいる。	-	-	-	-	-	鬼怒山産	
S23 石 核	B1レンチ 10 個	不完全 石核	柱状 形	多く打痕を待ち進続的剥離を行った形跡を 持つ。	柱状 形	柱状 形	柱状 形	柱状	x	柱状は剥離である。剥離方向は5つの方向により 石核を剥離する。	-	-	-	-	-	-		
遺物 番号	種 類	出 土 位 置	形 態	材 質	破 損 形 態	破 裂 分 上 下	製作 工 程	刀 部	芯 部	石 質	磨 製 部 分	磨 製 度 合 成	長 さ × ウ × 厚 さ	自 然 面	重 量	備 考		
S24 石 核	B1レンチ 6 個	柱状 形	柱状 形	丸み	4	破打 が 大部分	直 角	直 角	直 角	直 角	側面のみ	直 角	7.5×3.7×3.5	なし			太製品	
S25 石 核	A1レンチ 7 個	太方 形	方 形	5	破 打	丸 頭	丸 頭	丸 頭	丸 頭	丸 頭	片面6合の 5枚板	4	11.9+e×7.5×3.7+a	*			今山産	
S26 石 核	A1レンチ 7 個	柱状 形	柱状 形	なし	2	整 形	*	なし	-	-	10.7×4×3.5	2	7.8×5.8×4.5	なし		未製品		
S27 石 核	B1レンチ 7 個	太方 形	方 形	のみ	5	破 打	丸 頭	丸 頭	丸 頭	丸 頭	全面に剥離 されたものと思 われ	5	6.5+e×7.3×3.5+a	*				
S28 石 核	A1レンチ 7 個	長方形	長方形	なし	-	-	-	-	-	-	6×7.5×2	-	なし					
S29 石 核	A1レンチ 10 個	太方 形	柱状 形	先端部 有	3	作成中	直 角	直 角	直 角	直 角	一部裏面に	2	7.8×5.8×4.5	なし		側面面有 利利用か		
S30 石 核	A1レンチ 10 個	太方 形	柱状 形	先端部 有	5	破 打	直 角	直 角	直 角	直 角	一部に剥 離した部分 有	6.5×4×3.7	なし					

第5章 C 地点の調査

1. 発掘区 (Fig. 60)

C地点は車輪基地に近く、新幹線路線幅が55mに広がるところで、標高18mを測る水田となっている。発掘区はこの路線に直交し北から南へ向かってAからDまで4つのトレンチを並行して設定した。Aトレンチは幅2.5m、長さ25mで、BトレンチはAトレンチ南側10mへだてた位置に同じく幅は2.5m、長さ50mの規模で設定した。さらにBトレンチ南側5m離れた位置に幅2.5m、長さ40mのCトレンチを設定し、DトレンチはCトレンチ南側10m離れて幅2.5m、長さ17.5mのものを設定した。また、調査区東隅、Bトレンチ西端北側、調査区西南隅に各々I区～IV区の5m×5mの坪掘り区を設け、調査の過程でAトレンチ西側とBトレンチ西側の間を幅7.5mにわたって拡張しIV区とした。

2. 層位 (Fig. 61)

Aトレンチの土層について見ると、地表下10～15cmまでは現水田の耕作上層となっており、鉄分を含んだ黄褐色上層が2層目にベルト状に堆積し水田の床土なっている。3層目は暗褐色と

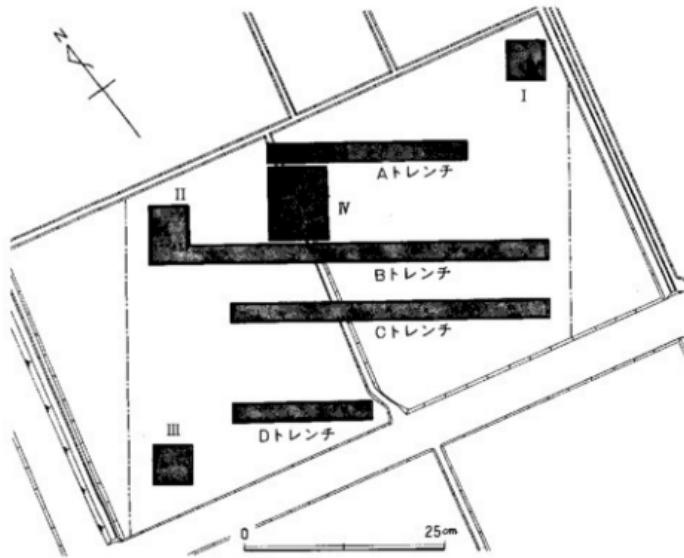


Fig. 60 C地点発掘区平面図(縮尺 1/700)

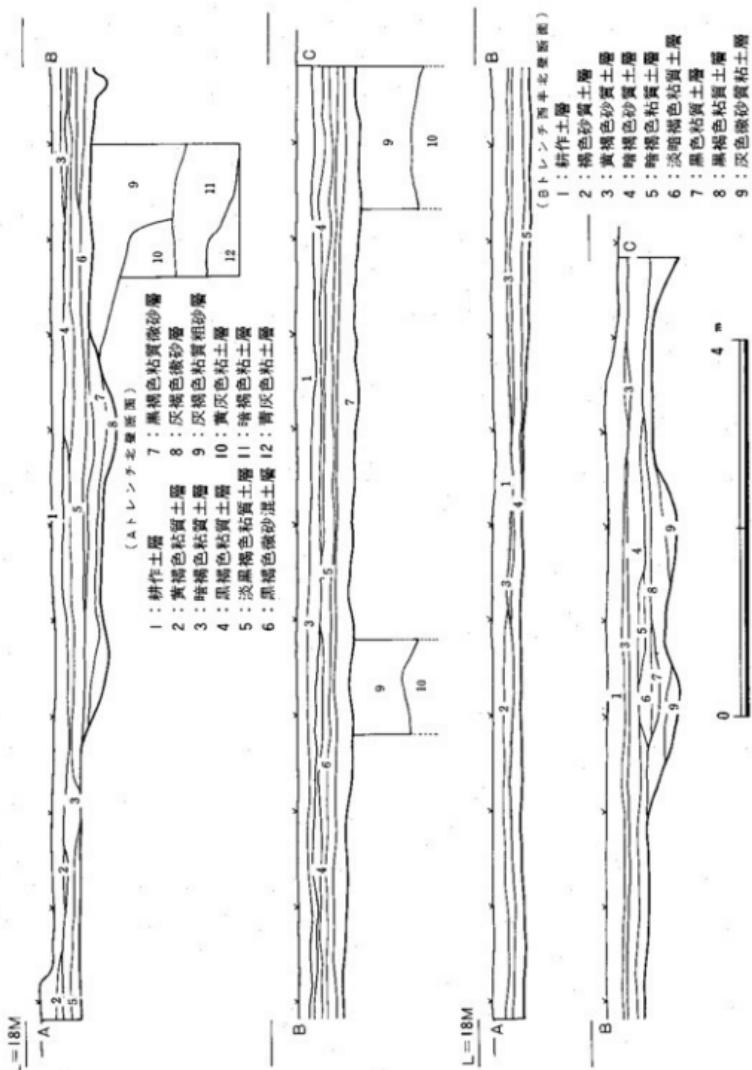


Fig. 61 C 地点土壤圖 (縮尺 1/50)

粘質土層が5~10cmの厚さで認められ、第4層は3層にもぐり込むように入っている。この層まで客土されたものである。5層目は10~15cmの厚さで堆積し、下部に弥生土器の細片を少量含んでいる。この5層の下は、西側では黄灰色の粘土層となるが、幅4mの断面浅皿状を呈す水路の跡より東側は砂粒子を多く含む土層が堆積しており、粘土層は急激に東側へ傾斜している。この粘土層の下には、流木、木の葉を含む暗褐色微砂質土が入っており、その下は青灰色粘土層となっている。その他のトレンチの土層も大略同様であり、南側に行くにしたがって黄灰色粘土のレベルが高くなるという傾向を示すが、この面に遺構は検出されない。Aトレンチで検出された水路の跡はBトレンチまで続くが、人工的なものとは考えにくく、自然地形によるものであろう。また第11層中の流木、木の葉を含む土層中にも人工的な遺物は全く認めることができなかった。

3. 出 土 遺 物

表土から第4層までの間に弥生~歴史時代の土器、磁器片の散布が認められた他、第5層中より少量弥生土器の細片が認められたのみである。C地点に近接した位置に遺構および包含層が存在することを思わせる。

第6章 まとめ

これまで弥永遺跡の3つの地点の発掘結果を報告したが、最後に本遺跡の問題点を整理してみたい。本遺跡周辺は第1章で述べたように弥生時代から古墳時代の遺跡が濃密に分布しており、しかも調査地点近郊が耕地整理された際、弥生時代前期から古墳時代初期にかけての遺物が多數採集されていたこともある。何らかの遺構の存在を予測させたが、調査区が限定されていることもあり、確定的な遺構は検出されなかった。ただ、A地点とB地点において比較的豊富かつ多様な遺物が出土している。その中で特にB地点より出土した弥生土器と石器を中心的に整理する。

1. 弥生土器について

A地点、B地点より出土した弥生土器は、前期から中期までのものを含み後期のものは検出されていない。出土した弥生土器の型式と時期的推移の関係は、B地点において認めることができるが、同一土層に型式のまたがるものが同時に出土しており、それはあくまで量的推移に基づくものである。これらの中で、比較的多量に認められる壺と壺について述べる。

壺I類は口縁部が逆L字形に外反し内側にやや張り出るもので、胴部はゆるやかにカーブしつつ端整な平底の底部へすばまる。北部九州弥生土器の編年で須玖式土器と称される型式に該当する。壺II類は口縁部に断面三角形の突帯をはり付けるもの、あるいは短かく折り返し口唇をつくるもので底部は厚く上げ底を呈す。城の越式土器とされるものである。壺III類は直行する口縁外側に刻目突帯を施すもの、あるいは短かく口唇をくの字形に外反させ刻目を施すもので、底部は厚く外に張り上げ底をなす。壺IV類は如意形口縁をなし口唇に刻目を施すものであり、外彎度がやや大きく、刻目も口唇下端に施すものが多い。底部に接合するものはないが厚手の平底となるものである。III類とIV類はII類を全く混じえないII区第10層中で共伴出土しており並行する時期のものと考えられる。III類は「亀の甲タイプ」の呼称で流布されているもので、IV類は板付II式に該当する。

壺形土器を見ると、I類およびII類が須玖式土器に該当し、III類は城の越式に比定しうるものである。IV類は板付II式のものである。これらの壺形土器、壺形上器の各型式に対応する他の器種は確実に把握されないが、II区第10層中より出土した完形の高環形土器は板付II式の好資料となるものである。

本遺跡出土の壺形土器と壺形土器をセットとして見ようすると、共伴する壺形土器III類（亀の甲タイプ）とIV類（板付II式）との間の形態的・手法的な隔たりが何を示すものなのか、あるいは壺形土器にどのように投影されるのか判然としない。つまり、板付II式に共伴する「亀の甲タイプ」の壺形土器とセットをなす壺形土器がどのようなものか、あるいは「亀の甲タ

イブ』を一つの土器型式として設定しうるのかという疑問が残る。この亀の甲タイプと称される變形土器については再検討されねばならないだろう。

2. 石器について

比較的豊富な石器が出土したが、個々の器種の製作技術上の変化を時期的に明らかにしうるものではない。共伴する土器から中期に属するものが多数を占めているが、I区の砂層、II区の第10層より出土するものは前期に属すと考えてよい。

弥生時代の石器については、その出現および石器から鉄器への移行過程の社会経済的问题が主要な課題とされているが、一方には石器の製作について技術上および製品の分布などの分析から当時の社会の分業と交通の問題に迫ろうとする視点がある。特に北部九州においては、福岡市今山遺跡の玄武岩製太形石刀石斧や、飯塚市立岩遺跡の輝緑凝灰岩製石包丁、石劍、石戈などの分布が問題にされており、本遺跡からも両者のものと考えられる石器が出土している。B地点S25は今山産と考えられ、S51は立岩産の石劍と考えられる。両者ともに中期前半と考えてよい。その他、B地点I区砂層より出土した石鎌の未製品(S34)、II区Aトレンチ第7層より出土した抉入片刃石斧の未製品(S26)などがあり、注目される遺物であろう。

以上、弥永遺跡の問題を簡単に述べたが、本遺跡の内容に關係する主要な文献を掲げて、参考に供する。

主 要 関 係 文 献

- 森貞次郎・岡崎敬『福岡県板付遺跡』『日本農耕文化の生成』1961年
- 鏡山猛・杉原莊介・渡辺正気・大冢初重『福岡県城ノ越遺跡』『日本農耕文化の生成』1961年
- 亀の甲遺跡調査団『亀の甲遺跡』八女市教育委員会 1961年
- 森貞次郎『九州』『日本の考古学』『弥生時代』和島誠一編 1963年
- 小林行雄・杉原莊介編『弥生式土器集成本編』日本考古学協会弥生式土器文化綜合研究特別委員会 1964年
- 福岡市教育委員会『宝台遺跡』日本住宅公團 1970年
- 福岡市教育委員会『福岡市板付遺跡発掘調査報告書』福岡市埋蔵文化財調査報告書 1970年
- 九州大学考古学研究室『鹿部山遺跡』日本住宅公團 1973年
- 福岡市教育委員会『津泉寺遺跡』東洋開発株式会社 1974年
- 熊本県教育委員会『江津湖南代津遺跡』熊本県文化財調査報告第15集 1974年
- 高島忠平『土器の製作と技術』『古代史発掘4 稲作の始まり』佐原寅・金沢忍編 1975年
- 中山平次郎『今山の石斧製造所』『福岡県史跡名勝天然紀念物調査報告書第8輯』1931年
- 中山平次郎『飯塚市立岩焼ノ正の石包丁製作所』『福岡県史跡名勝天然紀念物調査報告書第9輯』1935年
- 藤田等『農業の開始と發展』『私たちの考古学9号』1960年
- 藤田等『大陸系石器一とくに磨製石鎌について』『日本考古学の諸問題』考古学研究会 1964年
- 福岡市教育委員会『福岡市今山遺跡』1974年
- 酒井龍一『石包丁の生産と消費をめぐる二つのモデル』『考古学研究82』考古学研究会 1974年
- 下条信行『石器の製作と技術』『古代史発掘4 稲作の始まり』前掲

多々良・津屋地区の遺跡

第1章 多々良・津屋地区の環境	103
第2章 多々良込田遺跡	104
1. 調査経過	104
2. 層位と遺構	104
3. 遺構について	105
4. 出土遺物	106
第3章 多々良蔵ノ元遺跡と多々良古川地点の調査	132
1. 調査経過	132
2. 層位	132
3. 出土遺物	132
第4章 多々良地区小結	133
第5章 津屋井田遺跡	135
1. 調査経過	135
2. 層位と遺構	135
3. 出土遺物	135
第6章 津屋方才田遺跡	139
1. 調査経過	140
2. 層位と遺構・出土遺物	140
第7章 津屋楠田遺跡	141
1. 調査経過	141
2. 層位と遺構・出土遺物	141
第8章 津屋道田地点の調査	142
第9章 津屋地区小結	143



多々良・津屋地区の遺跡

第1章 多々良・津屋地区遺跡の環境

多々良・津屋地区は福岡市の東部・多々良平野にある。多々良平野は源を立花・犬鳴の各山塊に発する久原川・猿栗川と四干寺・若杉の各山塊に源を発する須恵川・宇美川の流れを集め多々良川によってつくられる。本地区は多々良平野をつくる多々良川とその川に合流する須恵川の間にある。

多々良・津屋地区の遺跡環境は元来福岡東部地区の遺跡数の少ないと伝って、調査例はここ数年に為されたものを数える程度である。本地区遺跡以外の調査例として上げられる遺跡は

- 多々良遺跡（現在流逝センター）一福岡市大字多々良字宗原一昭和46年福岡市調査 ①
- 西尾山1～3号墳（現在九州縦貫道）一柏原郡柏原町大字西尾山一昭和48年福岡県調査 ②
- 辻畠遺跡（現在九州縦貫道）一柏原郡柏原町大字西尾山一昭和48年福岡県調査 ②
- 蒲田遺跡（現在九州縦貫道福岡東インターチェンジ）一福岡市東区大字蒲田一昭和47年・48年福岡市調査（先土器～古代中世） ③
- 等があり、遺跡分布調査によって知られる重要な遺跡として
- 戸原遺跡（先土器時代）一柏原郡柏原町
- 部木八幡宮古墳群（内一基前方後方墳）一福岡市東区大字蒲田字部木 ④
- 内橋坪見遺跡一柏原郡柏原町大字内橋（廃寺とする説があり南門と推定される地点に多くの古瓦を見るといわれる） ⑤
- 等が上げられる（付図2参照）。

本地区的周辺の遺跡環境に付いて詳しい研究報告①があるので参考にされたい。

さて多々良・津屋地区の調査の発見はこの地から柏原郡一帯にかけて存する条里造構について昭和10年鏡山猛氏によって指摘されたことにより、本地区的調査目的は条里地割を示す造構の検出によって、造構の築造時期と造構の使用された時期等を決定し、地域の条里研究を深める為、古代条里研究者に実証的史料を提供するところにある。

参考文献

- ① 福岡市教育委員会編「多々良遺跡調査報告書」福岡市埋文報告書第20集 昭和47年
- ② 福岡県教育委員会編「九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財報告書一IV」に指摘 昭和48年
- ③ 福岡市教育委員会編「福岡市埋蔵文化財遺跡地名表一総集編」福岡市埋文報告書第12集 昭和45年

第2章 多々良込田遺跡

1. 調査経過

本遺跡は現在の地形図から見ると多々良川氾濫源の西端にあたり、おそらく本遺跡からは古代・中世期に、農耕生産もしくは生活の場としての活用が行なわれたという仮定により調査地点に選ばれ、福岡市東区大字多々良字込田に在る（付図2）。

調査区は東北から南西に抜ける新幹線を基軸に平行に沿って巾2m・長さ56mのBトレンチを設けた。Bトレンチ調査の結果、古式土師器、古代瓦およびそれに伴う須恵・土師等の遺物をもつ遺構のあることを認め、縦としての調査では遺構の性格等を判断するには困難と考え、面としての調査に切り換えるに至った。

発掘区はBトレンチの北西面を基線として両側に各8m設け、Bトレンチ北東端より7mの点から48mまでを8mの区画で6区設け、北西、南東線を北西よりA・B、北東・南西線を北東より1～6として、計12区を設定し調査を進めた。

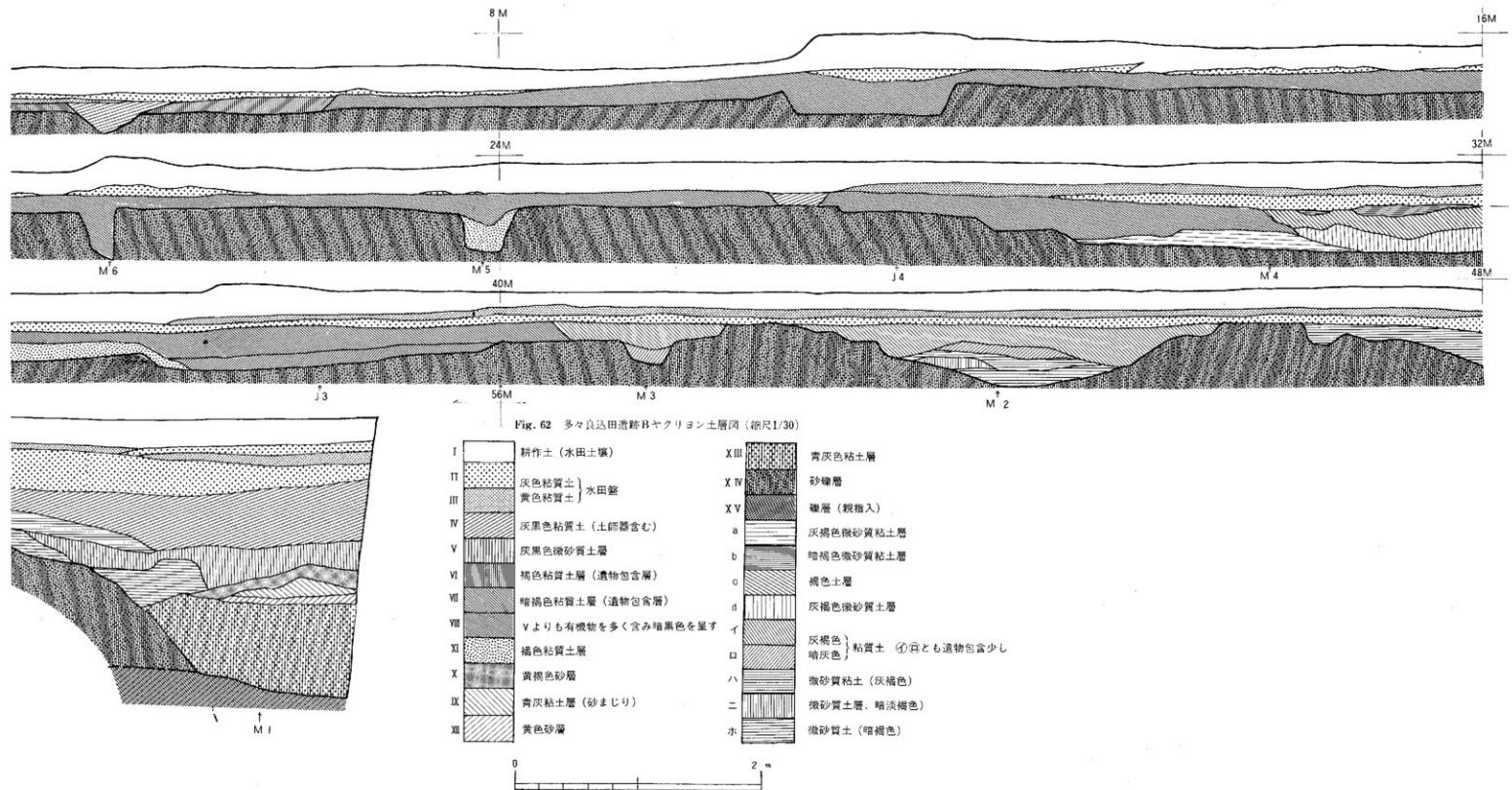
調査の結果、調査の主目的である条里地割の遺構と思われる溝4本と弥生時代終末から古墳時代初頭に設けられ使われたと思われる住居址6軒と溝2本を検出した。

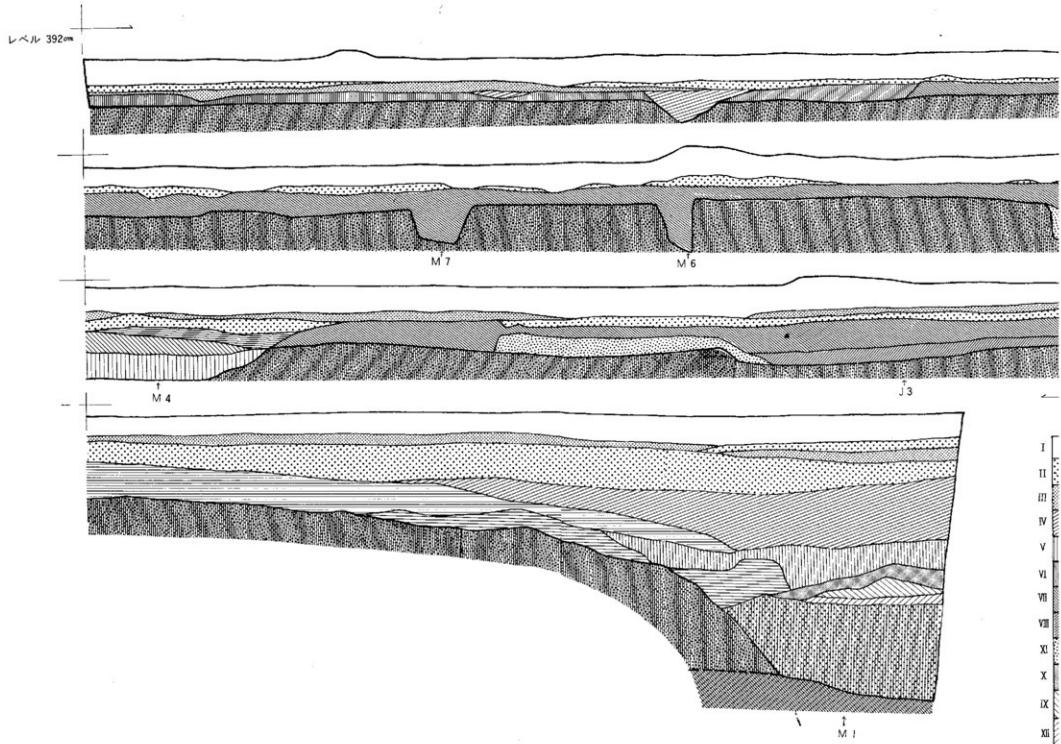
2. 層位と遺構

本遺跡を包含する層（Fig. 62参照）は大きく見て17層を数える。I層からⅩ層までは現在の水田耕作に必要な層序でその下層がこの遺跡を遺跡たらしめる層序である。しかし現在の水田構築時に遺構の基盤（Fig. 62XIV層）である礫層をも削平されているが為、各層と遺構との関係は厳密な意味に於いてのべることは出来ない。然るにFig. 62の層序観察はそれが包含するところの遺構が現在まで残されていないことを証明する事と各遺構の先後関係を若干分らしめる程度と御理解願いたい。

全般的に層序と遺構との関係を見て行くと、弥生終末期から古墳時代初頭にかけて生活地点と多々良川の砂洲地とを分つ大きな溝と、奈良時代に入つて設けられた条里の地割により設けられた溝とが併存し、弥生時代終末から古墳初頭にかけて設けられた溝が消滅しても奈良時代の溝は残って行く事が分る。

Fig. 62と付図4を比較して見ると第1号溝は弥生終末期に設けられ奈良・平安時代まで存続した可能性を有するが、第2号溝は古墳時代初頭に築造・使用され、奈良時代には自然に消滅したかも知れない。





3. 道構について

第1号溝（付図4-M1）について

本遺跡発掘区の北東端にあって、現在の地表下215cmがその底部にある。木遺跡の北東端からなだらかに降りて溝を呈する。本溝の壁が余りにもなだらかな故に入為によって設けられた溝というより自然作用によって集成された小川かも知れない。時期は確かな遺物を出土し得ないが、古墳時代初頭・本遺跡編年でいう多々良II式を本溝上部で検出することによりそれより遡ることは考えてよいであろう（Fig.65-26・27）。なお方位は北から西へ振る事50°（N50°W）であるが、何せ巾2mのトレンチ範囲で計り知ることは軽率であろう。

第2・3号溝（付図4-M2・3）について

発掘区A-1区・B-1区を横切る溝である。第2号溝の表土よりの深さ75cm、巾約2.5m、方位N41°Wを計り4号～7号溝より方位は異にする。時期は溝の性格からして厳密には言い難いが古墳時代前期本遺跡編年でいう多々良込田Ⅱ～Ⅲ式期に比定される（Fig.65-33～40）。第3号溝の性格も2号溝とそう異にするものでないだろう。

第4・5・6・7号溝（付図4-M4・5・6・7）について

本溝は本遺跡のはば中央部に位置する。方位は第4号溝N71°W、第5号溝N70°W、第6号溝N70°W、第7号溝N72°Wを計り、現在の地図に認められる条里の地割方向と一致するところから、大々性格は全般的に同一であろうから4号溝についてのみ明記したい。第4号溝は地表よりの深さ75cm、巾2.28mを計り、第4号住居址を若干切り崩して北西の方向へ進む。出土遺物は他溝に比して多種多様（Fig.74～84）で遺跡の時代と性格を彷彿とさせる。時期はその出土遺物から奈良時代末期から平安時代としておこう。この溝より内陸には大小の柱穴が散在する。どの様な建物が存したかは定かではない。

第1・2号住居址（付図4-J1・2）について

本住居址はA-2区に在って、第1号住居址が第2号住居址を切り込んでいる。第1号住居址1辺3.4m平方・方位N60°W、第2号住居址1辺3.7m平方・方位N62°Wを計測し、第2号住居址にはベッド状の道構をもつ。柱穴は定かでなく、柱を地表に立てる柱も考えねばなるまい。時期は古墳時代前期後半・木遺跡編年でいうと多々良込田Ⅲ式期（Fig.66・67）に設けられ、生活されたと言えるであろう。

第3号住居址（付図4-J3）について

本住居は3.1m×5.3mの広さにあって、方位N50°Wをもつ。柱穴は不均等に存在する。時期はその出土する遺物（Fig.68）から弥生式時代終末から古墳時代初頭・多々良込田Ⅲ式期と考えられる。

第4号住居址（付図4-J4）について

本住居址はB-3区に在って3.6m×4.2m平方の面積を有し、N62°Wに方位を示す。本遺

構の特徴とするところはバラエティに富んだ土器形態 (Fig. 69~72) にある。炉址と思われる焼土が3ヶ所にあるところからかなり建てかえられ、住民の苦労が思われる。時期は古墳時代中期前半・本遺跡編年でいう多々良込田IV式期と考えられる。

第5号住居址 (付図4-J5)について

本遺構はA-1区に在って、前後左右を切り崩され、わずかに堅穴の壁と炉址と思われる焼土を残すに過ぎない。故に面積は不詳、その方位 N50°Wに示すを知るにとどめる。時期はその出土土器 (Fig. 69, 64) から古墳時代中期前半・多々良込田IV式期に比定されよう。

第6号住居址 (付図4-J6)について

この遺構は第5号住居址よりは保存状態を良好に保つ。故に面積不詳にして、方位を N50°Wを示すを知るに過ぎない。時期をその出土遺物 (Fig. 73) から引き出すには少々乱暴すぎると思われる。何故なら、瀬戸内地方、それも中国地方に多く類例を見る出土土器の調査者の悩みがある。然し、小形丸底罐等、一連の北部九州出土の上器を共伴するところから、古墳時代前期後半・本遺跡の編年・多々良込田III式に比定することが出来よう。

4. 出土遺物

◎古式土師器について

Fig. 65~Fig. 73, Tab 8~Tab 11を参照されたい。

◎古代須恵器・土師器について

Fig. 74~Fig. 76~83・Tab 11を参照されたい。特徴をあげるとFig. 74~18の土師器1点のみが糸切り底で、他は全てヘラ切り底である。時期は奈良時代末~平安時代に比定出来、Fig. 74~18がその時代より少々下ると考える。

◎ふいごの羽口について (Fig. 75~23, P L. 80~5 参照)

第5号溝より出土し、孔径1.8cm、羽口径5.4cm時期は第5号溝が第4号溝と性格を同一にするところから奈良時代末から平安時代であろうか。

◎筋縫車・石鍤・土鍤については Fig. 75とTab 12~19~22を参照されたい。

◎瓦類について (Fig. 84, Fig. 85, P L. 71, 72)

いわゆる羽臙笠式 (Fig. 84-1, 2) と称されるものと長者原式系 (Fig. 84-3~4, 85-5~6) と称されるものがあり、第4号溝より出土した。文様壺 (Fig. 85-7) は太宰府天満宮蔵の太宰府史跡伝学校院出土の例と太宰府史跡政府出土のそれと同様であり、同じく第4号溝より出土した。

◎越州窯系青磁 (Fig. 86-1~8・P L. 73-4~11)・綠釉陶器 (Fig. 86-9~10・P L. 73-1~3)・ガラス器 (P L. 73-2)について

青磁は蛇の目高台 (5~7) のものと平底 (2~4) のものとがあり、綠釉陶器は2例とも胎土は土師質で、糸切り底 (9) と底部高台 (10) とがある。ガラス器片 (P L. 73-2) は胎中に大小の気泡を無数にもち、色調はスカイブルーであざやかである。全て第4号溝出土である。

第2章 多々良込田遺跡

Table. 10 多々良地区遺跡出土土器一覧 (注: 出土区・層位の末 M は墓、J は住居址を意味する)

107

遺物名	出土区・層位	鉢形・基部	法 量	形 異 の 特 性	手 法・調 烷	胎 土	地 形	色 調	備 考	F1&PL
1 多々良東ノ元 A トレンチ第4層	高环形土器 脚部	脚高約15cm 脚径約11.8cm	脚底近くに等間隔の孔があ る。脚底に凹部をぬける	内ヨリ下部と脚部、下足は ハニカム状 外ヨリ下部	かたくしまり 砂粒子含	良好	暗赤褐色	63. *		
2 多々良東ノ元 A トレンチ第4層	直形土器 脚部	口幅径13.4cm	(くの字)縦	口唇部・口縁部外側平行切 き目と交叉する子口式	崩くしまり 砂粒子含	良好	暗褐色	63. *		
3 多々良東ノ元 A トレンチ第4層	盤合形土器 上半部	盤合部径12.8cm 脚部	肉口でどっしきした感をも える。	外周一面広い脚ハケ 内周一面広い脚ハケ	かたくしまり 砂粒子含	良好	暗褐色	63. *		
4 多々良東ノ元 A トレンチ第4層	脚立 脚部	脚立13cm	脚底近くに等間隔の孔(4つ 孔)があり脚底に凹部	内ヨリ脚の内側のあたて、右 内ヨリ脚の外側のあたて 外ヨリ脚の内側	崩くしまり 砂粒子含	良好	暗褐色	F1&G5-8 F10-12	63. *	
5 多々良東ノ元 A トレンチ第4層	脚台右下部 上半部	脚台部径16.8cm 脚高不明	肉口でどっしきしている	内周一面広い脚の内側のあたて、右 内ヨリ脚の外側のあたてのコナラ 内ヨリ脚の内側	かたくしまり 砂粒子含	良好	暗褐色	63. *		
6 多々良東ノ元 A トレンチ第4層	脚形土器 脚部	脚高 6cm 脚径 14cm	口唇部で外反	内周一面広い脚ハケ 内周・口縁部コナラ	しまって 砂粒子含	良好	赤褐色	63. 63-1		
7 多々良東ノ元 A トレンチ第4層	脚形土器 脚部	脚径 17cm	口唇部で大きめ外反	内周一面広い脚ハケ 内周・口縁部コナラ	かたくしまり 砂粒子含	良好	暗褐色	63. *		
8 多々良東ノ元 A トレンチ第4層	脚形土器 脚部	脚径15.5cm 脚高不明	(くの字)縦	内周一面広い脚ハケ 内周・口縁部コナラ	かたくしまり 砂粒子含	良好	暗褐色	63. *		
9 多々良東ノ元 A トレンチ第4層	脚形土器 脚部	脚径 17cm	口唇部で大きめ外反	外周一面広い脚ハケ 内周一面広い脚ハケ	かたくしまり 砂粒子含	良好	暗褐色	63. *		
10 多々良東ノ元 A トレンチ第4層	脚形土器 脚部	脚径13.8cm 脚高不明	脚底から脚部にかけて外反し 脚底不規	内周一面広い脚ハケ 内周・口縁部コナラ	崩くしまり 砂粒子含	良好	赤茶	63. *		
11 多々良東ノ元 A トレンチ第4層	脚形土器 脚部	脚径16.8cm 脚高不明	円孔もしくはダクト開口で底尻 口縁、口唇部に少々肥厚	内周一面広い脚ハケ 内周・口縁部コナラ	崩くしまる 砂粒子含	良好	暗褐色	63. *		
12 多々良東ノ元 A トレンチ第4層	直形土器 脚部	脚高 31.3cm 脚径 6cm	口唇部近くに埋められた1孔有り	全面指揮と思われる	崩くしまり 砂粒子含	良好	暗褐色	63. 63-5		
13 多々良東ノ元 A トレンチ第4層	直形土器 脚部	脚高 9.5cm 脚径 5.7cm	口唇部下に埋められた1孔有り	全面指揮と思われる	崩くしまり 砂粒子含	良好	暗褐色	63. *		
14 多々良東ノ元 B トレンチ第7層	脚形土器 脚部	脚底 21cm	脚底近くに埋められた4孔有 り、火痕・高床跡と思われる	外周一面広い脚ハケ 内周一面広い脚ハケ	かたくしま 砂粒子含	良好	赤褐色	64. *		
15 多々良東ノ元 B トレンチ第7層	直脚土器 脚部	脚底 9.5cm 脚高不明	古脚面に中央に穿たれた 1孔有り	全面指揮	崩くしまり 砂粒子含	良好	暗褐色	64. *		
16 多々良西ノ元 B トレンチ第7層	脚形土器 脚部	脚底16.4cm 脚高不明	脚底部直立	内周一面広い脚ハケ 内周・口縁部コナラ	しままり 砂粒子含	良好	暗褐色	64. *		
17 多々良西ノ元 B トレンチ第7層	脚形土器 脚部	脚底26.7cm 脚高不明	口唇部外反するほど宜しい 脚底不規	内周一面広い脚ハケ 内周・口縁部コナラ	しまって 崩くしまり 砂粒子含	良好	赤・黄 暗褐色	64. *		
18 多々良西ノ元 B トレンチ第7層	脚形土器 脚部	脚底26.6cm 脚高不明	脚底附近に外反する口縁 口唇部やや肥厚	内周一面広い脚ハケ 内周・口縁部コナラ	崩くしまり 砂粒子含	良好	暗褐色	64. *		
19 多々良西ノ元 B トレンチ第7層	脚形土器 脚部	脚底 16cm	脚底附近に外反する口縁 口唇部やや肥厚	内周一面広い脚ハケ 内周・口縁部コナラ	崩くしまり 砂粒子含	良好	暗褐色	64. *		
20 多々良西ノ元 B トレンチ第7層	脚形土器 脚部	脚底 17.5cm	脚底附近に外反する口縁 脚底不規	内周一面広い脚ハケ 内周・口縁部コナラ	崩くしまり 砂粒子含	良好	暗褐色	64. *		
21 多々良西ノ元 B トレンチ第7層	直脚土器 脚部	脚底 8.5cm 脚径 10.5cm	脚底直立	内周一面広い脚ハケ 内周・口縁部コナラ	崩くしまり 砂粒子含	良好	赤褐色	64. 63-4		
22 多々良西ノ元 B トレンチ第7層	直脚土器 脚部	脚高 4.5cm 脚径13cm	脚底直立	内周一面広い脚ハケ 内周・口縁部コナラ	崩くしまり 砂粒子含	良好	暗褐色	64. *		
23 多々良東ノ元 A トレンチ第4層	直形土器 脚部	脚高 5cm 脚径10.3cm	脚底直立	内周一面広い脚ハケ 内周・口縁部コナラ	崩くしまり 砂粒子含	良好	暗褐色	64. *		
24 多々良東ノ元 A トレンチ第4層	直形土器 脚部	脚高 4cm 脚径12.7cm	脚底直立	内周一面広い脚ハケ 内周・口縁部コナラ	崩くしまり 砂粒子含	良好	暗褐色	64. *		
25 多々良東ノ元 A トレンチ第4層	直形土器 脚部	脚高 3.5cm 脚径14.4cm 脚底直立	脚底直立	内周一面広い脚ハケ 内周・口縁部コナラ	崩くしまり 砂粒子含	良好	暗褐色	64. 63-2 64. 70-4		
26 多々良東ノ元 A-1層 トレンチ第7層	高环形土器 脚部	脚底21.3cm 脚底直立	赤みがかり意がれた土器	内周背面ヨコナラのあとハニカ ム、内周一面広い脚ハケ 内周・口縁部コナラ	崩くしまり 砂粒子含	良好	暗褐色	65. 57-7 63-1		
27 多々良東ノ元 A-1層 トレンチ第7層	高环形土器 脚部	脚底14.5cm 脚底直立	長く外反する口縁	内周一面広い脚ハケ 内周・口縁部コナラ	崩くしまり 砂粒子含	良好	暗褐色	65. 57-7 63-2		
28 多々良東田 A-4层7層	直脚形土器 脚部	脚底12.8cm 脚高不明	せんざいな感覚をもえる 等間隔に穿たれた4つの孔	外周一面とヨコハケ 内周一面とヨコハケ	崩くしまり 砂粒子含	良好	暗褐色	65. *		
29 多々良東田 A-4层7層	合脚形土器 脚部	脚底11.8cm 脚底直立	等間隔に穿たれた4つの孔 脚底不規	内周一面とヨコハケ	崩くしまり 砂粒子含	良好	暗褐色	65. *		
30 多々良東田 M 2	高环形土器 脚部	脚底12.2cm 脚底直立	崩くしまり意がれた土器	内周一面とヨコハケ	崩くしまり 砂粒子含	良好	暗褐色	65. *		
31 多々良東田 M 2	直脚形土器 脚部	脚底16cm 脚底直立	ガツツである					65. 63-3		
32									61の断面図	65. *
33 多々良込田 M 2	直脚形土器 脚部	脚底21.3cm 脚底直立	丸い側に外反する口縁、 口縁部直立して肥厚	不詳	崩くしまり 砂粒子含	良好	暗褐色	65. *		
34 多々良込田 M 2	直脚形土器 脚部	脚底14.7cm 脚底直立	丸い側にや・外反する複合 口縁部	不詳	崩くしまり 砂粒子含	良好	暗褐色	65. *		
35 多々良込田 M 2	直脚形土器 脚部	脚底21.7cm 脚底直立	丸い側にくびれた外反する 口縁、口縁部直立1条の走査	不詳	崩くしまり 砂粒子含	良好	暗褐色	65. *		

Tab. 多々良・津屋地区の遺跡

遺物 番号	出土区・層位	基盤部	法 量	形 態	の 特 徴	手 法	・ 調 整	柱 土	燒 成	色 調	備 考	Fig. PL
36	第2号住居	漆形土器 刷毛欠	口幅径21.4cm 高さ不明	丸い側に外反する口縁、口唇 は表面になし口内に厚壁	不詳	圓く無い 砂粒子多く含む	良好	暗褐色		65. 無		
37	*	漆形土器 刷毛欠	口幅径16cm 高さ不明	丸い側に外反、底端すら口縁 は表面をなし外に厚壁	*	圓く無い 砂粒子多く含む	良好	暗褐色		65. 無		
38	*	台形漆形土器 刷毛	径高 8cm 口幅径14.4cm	磨かれて飾られる土器の感 口縁は約1.2cm	ハケのあと、ヘラ焼き	著で圓く 砂粒子重	良好	暗赤褐色		65. 62-3		
39	*	漆形土器 刷毛欠	口幅径15cm 高さ不明	磨かれてかわいい上器 口縁は約1.2cm	ハケのあと、ヘラ焼き	密でくしまる 砂粒子少	良好	暗赤褐色		65. 無		
40	*	口付土器	口径 16cm 高さ 9cm	みをむきやすい感を与える 祭光の跡か?	小洋(恐らくヘラ磨か)	密で 砂粒子度	良好	金剛山以北全 域にスコナデ		65. 62-1.2		
41	第1号住居址	漆形土器 刷毛欠	口幅径15.3cm 高さ不明	丸いく外反する口縁	二重唇に厚壁なし、それに内口 は斜め下がり、内側リム		良好			66. 無		
42	*	漆形土器 刷毛欠	口径 14cm 高さ不明	丸い側にやや外反する 口縁	口縁内側ハケのみとヨコナデ 内側ヨコナデ、断面内側ハケ	密でくしまる 砂粒子度	良好	暗褐色		66. *		
43	*	漆形土器	口径径36.2cm 高さ 5.5cm	半円の胸に大きく外反する 口縁	内外全周へラ焼き	青、緑く無い 砂粒子度	良好	暗褐色		65. 62-4		
44	*	漆形土器	口径 14cm 高さ 不明	丸い側に直進外反する口縁	外面ハケのあとヘラ焼き	硬くより 砂粒子混	良好	暗赤褐色		66. 無		
45	*	漆形土器 刷毛欠のみ	口径径34.8cm 高さ不明	丸い側から土器	内面ハケとヘラ焼き	密でくしまる 砂粒子度	良好	暗褐色		66. *		
46	*	漆形土器 刷毛欠	口径 16cm 高さ不明	磨かれた土器	内外共ヘラ焼き	密、緑く無い 砂粒子度	良好	淡褐色		66. *		
47	*	漆形土器 口唇底部欠	口径径約 7.5cm 高さ 5cm	*	内外面へラ焼き 少々ハケを残す	密、青く 緑く	良好	淡褐色		66. 62-5		
48	*	漆形土器 口唇底部欠	口径径約11.8cm 高さ 5cm	*	*	密、青く 緑く	良好	暗褐色		66. 無		
49	*	漆形土器 刷毛欠	口径径 31cm 高さ不明	*	内外面ともヘラ焼き	青、青く緑く 砂粒子度	良好	淡褐色		66. *		
50	第2号住居址	漆形土器 刷毛欠	口径径 34.2cm 高さ不明	丸い胸に直立する口縁	内外面とも市広ハケをつか 砂粒子度	粗	良好	淡褐色		67. *		
51	*	漆形土器 刷毛欠	口径径14.2cm 高さ不明	外反する口縁に直立する口縁	内外面ともヨコナデ	青、緑くしまる 砂粒子度	良好	暗褐色		67. *		
52	*	漆形土器 刷毛欠	口径径16.5cm 高さ不明	丸い胸に外反する口縁	内面ハケのみとヨコナデ 内面リムノハケ	青、しまり 砂粒子度	良好	暗褐色		67. *		
53	*	漆形土器 刷毛欠	口径径11.2cm 高さ不明	外反する口縁に直立してたね る口縁	内外面ともヨコナデ	密でくしまる 砂粒子度	良好	暗褐色		67. *		
54	*	漆形土器 刷毛欠	口径径16.4cm 高さ不明	やや外反し直立する口縁	外面ハケのあとヨコナデ 内面リムノハケ	硬く 砂粒子多く含む	良好	暗褐色		67. *		
55	*	漆形土器 刷毛欠	口径径18.2cm 高さ不明	やや内反するに胸に突をな す口縁	外面一ヨコナデ 内面ハケのあとヨコナデ 内面リムノハケ	青、しまり 砂粒子度	良好	暗褐色		67. *		
56	*	漆形土器 刷毛欠	口径径19.4cm 高さ不明	直進外反する口縁に面もな い口縁	外面ハケのあとヨコナデ 内面リムノハケ	粗く 砂粒子度	良好	暗褐色		67. *		
57	*	漆形土器 刷毛欠	口径径23.4cm 高さ不明	直進外反する口縁	内外面ともヨコナデ	青、しまる	良好	暗褐色		67. *		
58	*	漆形土器 刷毛欠	口径径 34cm 高さ 3.5cm	青太で粗い感	外器一内器のハケ 内面一外器	青、緑く 砂粒子度	良好	暗褐色		67. *		
59	*	漆形土器 口唇底部欠	口径径約8cm 高さ約 4.6cm	磨かれてかわいい土器	内外面ともヘラ焼き 少々ハケを残す	密でくしまる 砂粒子度	良好	暗褐色		67. *		
60	第3号住居址	漆形土器 口唇底部欠下穴	口径 38cm 高さ 24cm	長アコの胸に外反する口縁	内外面とも明にほんたわいハ ケ。ただし口縁外はヨコナデ	密、しまり 砂粒子多く含む	良好	暗褐色		68. 62-3		
61	*	漆形土器 刷毛欠	口径 35cm 高さ 25cm	丸い胸に直立する口縁	内外面ともハケ	粗くて砂粒子 多量に含む	良好	暗褐色		68. 62-1		
62	*	漆形土器	口径 30cm 高さ 25.5cm	アコの胸にや、外反する口縁	内外面とも太くて市広ハケ ただしお縁外はヨコナデ	粗くて砂粒子 多量に含む	良好	淡褐色	わずかに 平底	68. 62-2		
63	*	漆形土器	口径径12.5cm 高さ不明	外反する口縁に直立する口縁 がつく	内外面とも太くて市広ハケ ただしお縁外はヨコナデ	粗くて砂粒子 多量に含む	良好	暗褐色		68. 37-4		
64	第5号住居址	高坪形土器 刷毛欠	口径径17.2cm 高さ不明	坪形頭から口縁に鏡孔に外反 する	内面ハケのあとヘラ焼き 内面ハケ	密、緑く 砂粒子度	良好	暗褐色		69. 62-3		
65	第4号住居址	*	口径径16.4cm 高さ不明	*	内外面ともハケ	青、青く 砂粒子度	良好	暗褐色		69. 無		
66	*	*	口径径 20.2cm 高さ不明	64. 65に比して頬から口縁が 長い感じで角も	64に同じ	青、緑く 砂粒子多く含む	良好	暗褐色		69. 62-2		
67	*	高坪形土器	口径径 16cm 高さ 12.6cm	脚部から腰回へかけて鋸齿で ある	内面一外器へラ焼き 内面一平底	青、緑く 砂粒子度	良好	暗褐色		69. 62-2		
68	*	*	口径径 16.6cm 高さ 12cm	*	不詳	青、緑く 砂粒子度	良好	暗褐色		69. 62-3		
69	*	*	口径径 16.8cm 高さ 12cm	*	不詳	青であわせ多 量に砂を含む	良好	暗褐色		69. 62-1		
70	*	*	口径径 16.7cm 高さ 12.2cm	*	不詳	青く砂多く 青む	良好	暗褐色		69. 62-1		

Tab. 多々良込田遺跡出土土器一覧

遺物 番号	出土区 域・層 位	形 態	形 態の特徴	手 法・調 整	胎 土	施 工	色 調	考 察	Fig. PL
71	第4号 住居址	口縁 幅狭火	口縁 36.0mm 内外反する口縁に直立し乍ら少々 外反する口唇に付く	外反する口縁と直立する口縁 外反する口唇に付く	外面部ともヨコナフ	粗く 砂粒子混入	青灰 暗褐色	70. 無	
72	*	口縁径 幅狭火	口縁 15.5mm 内外反する口縁 内外反する口唇に付く	外反する口縁と直立する口縁 外反する口唇に付く	外面部へハケ、内面部へラ割り	粗く 砂粒子混入	青灰 暗褐色	70. *	
73	*	口縁径 幅狭火	口縁径 14.0mm 内外反する口縁 内外反する口唇に付く	外反する口縁と直立する口縁 外反する口唇に付く	外面部へハケのあとナデ削り 内面部へラ割り	粗く 砂粒子混入	青灰 暗褐色	70. *	
74	畜形土器 腹部火	口縁径 幅狭火	口縁径 18.0mm 直立する口縁 内外反する口縁	直立する口縁	不 評	粗く 砂粒子混入	青灰 暗褐色	70. *	
75	*	口縁径 幅狭火	口縁径 15.0mm 直立する口縁 内外反する口縁	直立する口縁	胸部内面へラ割り	粗く 砂粒子混入	青灰 暗褐色	70. *	
76	畜形土器 頭部火	口縁径 幅狭火	口縁径 23.0mm 直立する口縁 内外反する口縁	直立する口縁	外後一軸部ハケ 内後一軸部ハケ	粗く 砂粒子混入	青灰 暗褐色	70. 66-3	
77	吸形土器 頭部火	口縁径 幅狭火	口縁径 14.0mm 直立するもや、外反ぎの口縁 内外反する口縁	直立するもや、外反ぎの口縁 内外反する口縁	外後一軸部ハケのあとナデ削り 内後一軸部ハケ	粗く 砂粒子混入	青灰 暗褐色(表) 淡褐色(裏)	71. 無	
78	吸形土器 腹部火	口縁径 幅狭火	口縁径 13.0mm 直立するもや 内外反する口縁	直立するもや、外反する口縁 内外反する口縁	外後一軸部ハケのあとナデ削り 内後一軸部ハケ	粗く 砂粒子混入	青灰 暗褐色	71. *	
79	畜形土器 腹部火	口縁径 幅狭火	口縁径 14.0mm 直立するもや 内外反する口縁 内外反する口唇に付くをなす	直立するもや、外反する口縁 内外反する口唇に付くをなす	外後一軸部ハケのあとヨコナフ 内後一軸部ハケ	粗く 砂粒子混入	青灰 暗褐色	71. *	
80	*	口縁径 幅狭火	口縁径 13.0mm 直立するもや、外反の口縁 内外反する口縁	直立するもや、外反の口縁 直立するもや、外反の口縁	外後一軸部ハケのあとヨコナフ 内後一軸部ハケ	粗く 砂粒子混入	青灰 暗褐色	71. *	
81	畜形土器 頭下半火	口縁径 幅狭火	口縁径 22.0mm 直立する口縁	直立する口縁	外後一軸部ハケ 内後一軸部ハケ、胸へラ割り	粗く 砂粒子 多量に含	青灰 暗褐色	71. *	
82	畜形土器 頭部火	口縁径 幅狭火	口縁径 13.0mm 直立する口縁	直立する口縁	外後一軸部ハケのあとヨコナフ 内後一軸部ハケ	粗く 砂粒子混入	青灰 暗褐色	71. *	
83	獣形土器 腹部火	口縁径 幅狭火	口縁径 17.0mm 直立するもや	直立するもや、外反する口縁 直立するもや	内外反ともナデ表面に少しハケ のあと内面部へラ割り	粗く、大小の 砂粒子混入	青灰 淡褐色	71. *	
84	*	口縁径 幅狭火	口縁径 14.0mm 直立するもや	*	口縫内面ヨコナフ、内後ハケ 胸部内面ハケ、内後一軸部ハケ	粗く 砂粒子 多量に含	青灰 暗褐色	71. *	
85	畜形土器 頭下半火	口縁径 幅狭火	口縁径 15.0mm 丸い形に直立するもや、外反する 口縁	丸い形に直立するもや、外反する 口縁	内後一軸部ハケのあとナデ 内後一軸部ハケ	粗く 砂粒子 多量に含	青灰 暗褐色	71. *	
86	吸形土器 腹部火	口縁径 幅狭火	口縁径 15.0mm 外反する口縁	外反する口縁	内後一軸部ハケのあとヨコナフ 内後一軸部ハケ	粗く 砂粒子混入	青灰 暗褐色	71. *	
87	畜形土器 腹部火	口縁径 幅狭火	口縁径 14.0mm 直立するもや、外反する口縁 直立するもや	直立するもや、外反する口縁 直立するもや	内後一軸部ハケのあとヨコナフ 内後一軸部ハケ	粗く 砂粒子混入	青灰 暗褐色	71. *	
88	畜形土器 頭下半火	口縁径 幅狭火	口縁径 15.0mm 丸い形に直立するもや、外反する 口縁	丸い形に直立するもや、外反する 口縁	口縫内面ハケのあとナデ 内後一軸部ハケ	粗く 砂粒子 多量に含	青灰 暗褐色	71. *	
89	畜形土器 腹部火	口縁径 幅狭火	口縁径 16.0mm 外反する口縁	外反する口縁	口縫内面ハケのあとナデ 内後一軸部ハケ	粗く 砂粒子 多量に含	青灰 暗褐色	71. *	
90	畜形土器 腹部火	口縁径 幅狭火	口縁径 18.0mm 直立するもや	直立するもや、外反する口縁 直立するもや	口縫内面ヨコナフ 胸へラ割り	粗く 砂粒子 多く含	人跡 青灰 暗褐色	71. *	
91	*	口縁径 幅狭火	口縁径 11.0mm 直立するもや	直立するもや、外反する口縁 直立するもや	口縫内面ハケのあとナデ 内後一軸部ハケ	粗く 砂粒子 多く含	青灰 暗褐色	71. *	
92	手輪ね 土器	口縁径 幅狭火	口縁径 7.0mm 口縁径 8.0mm	一見鉢形土器を思わせる	口縫内面ヨコナフ 胸部へラ割り	粗く 砂粒子混入	青灰 黑色	72. 67-8	
93	*	器底 口縁径	器底 5.0mm 口縁径 7.0mm	器底のみの形	内外面一括	粗く 砂粒子多量	青灰 暗褐色	72. 67-9	
94	*	器底 口縁径	器底 3.0mm 口縁径 6.0mm	さかずきの形	*	粗く 砂粒子多く出	青灰 灰色	72. 67-9	
95	*	器底 口縁径	器底 2.0mm 口縁径 4.0mm	*	*	粗く 砂粒子	青灰 暗褐色	72. 67-9	
96	*	器底 口縁径	器底 3.0mm 口縁径 6.0mm	一見器台の形 さかずきの形	外後一軸部 内後一ヨコナフ	粗く 砂粒子多量	青灰 暗褐色	72. 67-9	
97	畜形土器	口縁径 幅狭火	口縁径 3.0mm 口縁径 3.0mm	薄くていねいな仕上げ	不 評	粗く 砂粒子多量	青灰 暗褐色	72. 67-2	
98	*	器底 口縁径	器底 2.0mm 口縁径 24.0mm	*	*	粗く 砂粒子多量	青灰 暗褐色	72. 67-1	
99	*	器底 口縁径	器底 2.0mm 口縁径 10.0mm	*	*	粗く 砂粒子多量	青灰 暗褐色	72. 67-3	
100	畜形土器	口縁径 幅狭火	口縁径 2.0mm 口縁径 2.0mm	手球形の形に2面に外反する 口縁	外後一軸部ハケのあとヘラ削り 内後一軸部ハケ	粗く 砂粒子多量	青灰 暗褐色	72. 無	
101	*	器底 口縁径	器底 1.0mm 口縁径 9.0mm	や、内さげる口縁	不 評	粗く 砂粒子多量	青灰 暗褐色	72. *	
102	*	器底 口縁径	器底 1.0mm 口縁径 10.0mm	*	*	粗く 砂粒子多量	青灰 暗褐色	72. *	
103	*	器底 口縁径	器底 1.0mm 口縁径 9.0mm	*	口縫外面部ハケのあとヨコナフ 胸内面ハラ削り	粗く 砂粒子多量	青灰 暗褐色	72. 67-5	
104	*	器底 口縁径	器底 1.0mm 口縁径 10.0mm	底浅しや、外反する口縁	口縫外面部ヨコナフ 底内面ハラ削り	粗く 砂粒子多量	青灰 暗褐色	72. 無	
105	*	器底 口縁径	器底 1.0mm 口縁径 9.0mm	キダリの形に直邊外反する 口縁	口縫外面部ヨコナフ 底内面ハラ削り	粗く 砂粒子多量	青灰 暗褐色	72. *	

多々良・津屋地区の遺跡 Tab. 多々良込田遺跡出土土器一覧

植物 番号	出水沢・樺社	基準地形	法 量	形 置 の 特 徴	手 法	調 査	動 土	施成	色 調	備 考	Fig. PL
306	第4生垣社	地形土基	高さ約 7.3cm 幅締 6.2cm	手刈内の側に内寄する口 縫	口縫外側ハケのあくとアシテ 内田ハサ、開閉不即	有、柔く 豊砂混	良好	濃紫褐色		72. 無	
307	*	*	高さ 幅締 6.6cm 幅締径 9.0cm	風通しや、外反する口縫	口縫内多量コナガ、開閉不即 内田ハサ、内寄ハサハサ	有、しまって 密	良好	暗褐色	平 壴	72. 65-4	
308	*	*	高さ約 5.1cm 幅締 6.7cm	かわい・先割に長く 幅締径 7.3cm	黒根葉柄のよじこぎ、黒根葉柄の あくとアシテ、口縫のハサ、口縫 ハサハサ	*	良好	赤褐色		72. 67-6	
309	*	*	高さ 幅締 8.7cm 幅締径 9.9cm	表アジの堅くや、内寄 口縫	口縫内外に多量コナガ跡外露ハケ のあくとアシテ、削内側削	有、しまり 密	良好	暗褐色		72. 65-7	
310	第6生垣社	地形土基 開閉式	高さ不明 幅締径 16.6cm	ぐの字口縫	口縫外側ハケで階層、平行に走る 丸根、口縫内に少ハサハサ多く含む	表で豊砂粒子 多く含む	良好	暗褐色	底内に豊 砂粒多い	73. 65-1	
311	*	*	高さ不明 幅締径 18.0cm	外反する口縫に内寄す 口縫が付く	山口外側に豊砂で隔く平行 刃根、削内側ハケ	多く、粘物子 多く含む	良好	暗褐色		73. 無	
312	*	*	高さ不明 幅締 28cm	*	不 許	極く、粘物子 多く含む	不良	暗褐色		73. *	
313	*	地形土基	高さ 幅締 3.3cm 幅締 12.3cm	ていねいでセンサイン 透けをもえる	口縫外側ハケ 内寄一不詳	密で柔く 豊砂混	良好	赤褐色		73. 65-3	
314	*	地形土基	高さ不明 幅締径 10cm	外反する口縫	不 許	*	良好	深紫褐色		73. 無	
315	高砂林科 育苗所	高砂林科 育苗所	高さ不明 幅締径 19.6cm	根冠から立ち上がる 口縫の根が露す	不 育	密、ほくしま り、豊砂混	良好	暗褐色		73. 65-2	

Tab. 12. 各名義選用處數與 χ^2 檢定出土壤指標數 (n=15種, n=25種, n=35種)

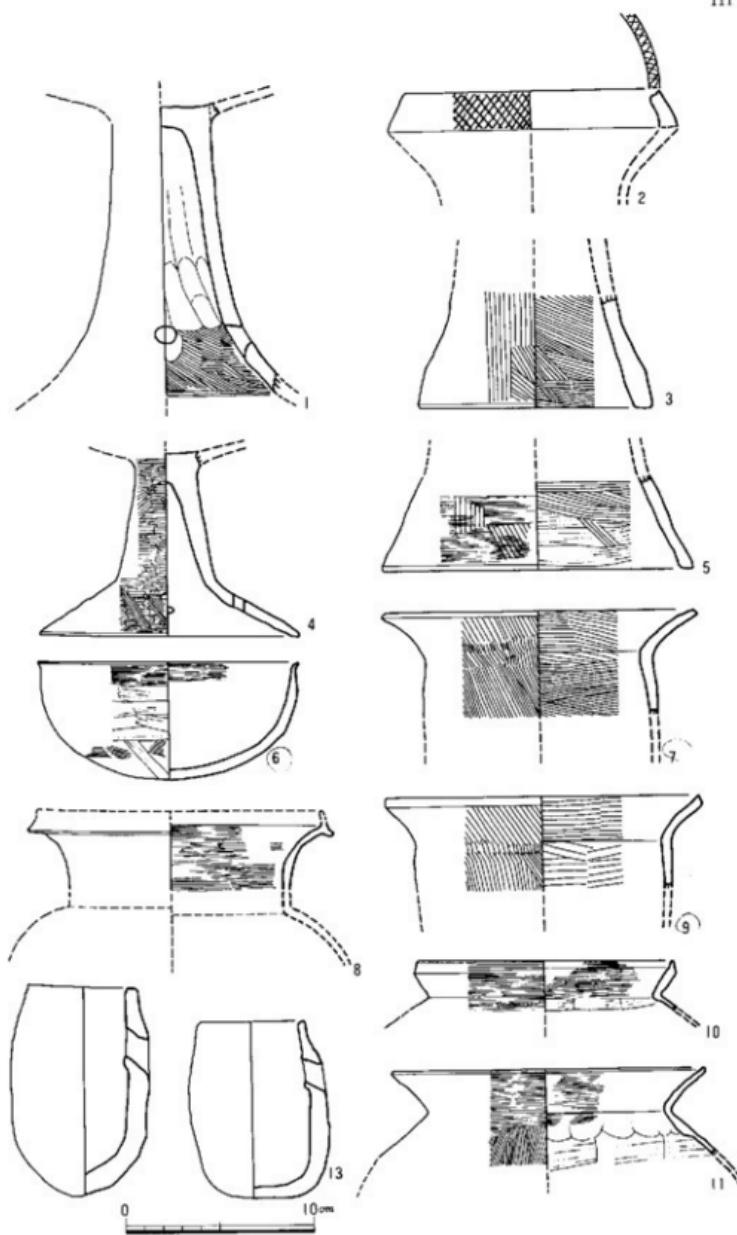


Fig. 63 多々良城ノ元遺跡出土土器尖測図 (縮尺 1/3)

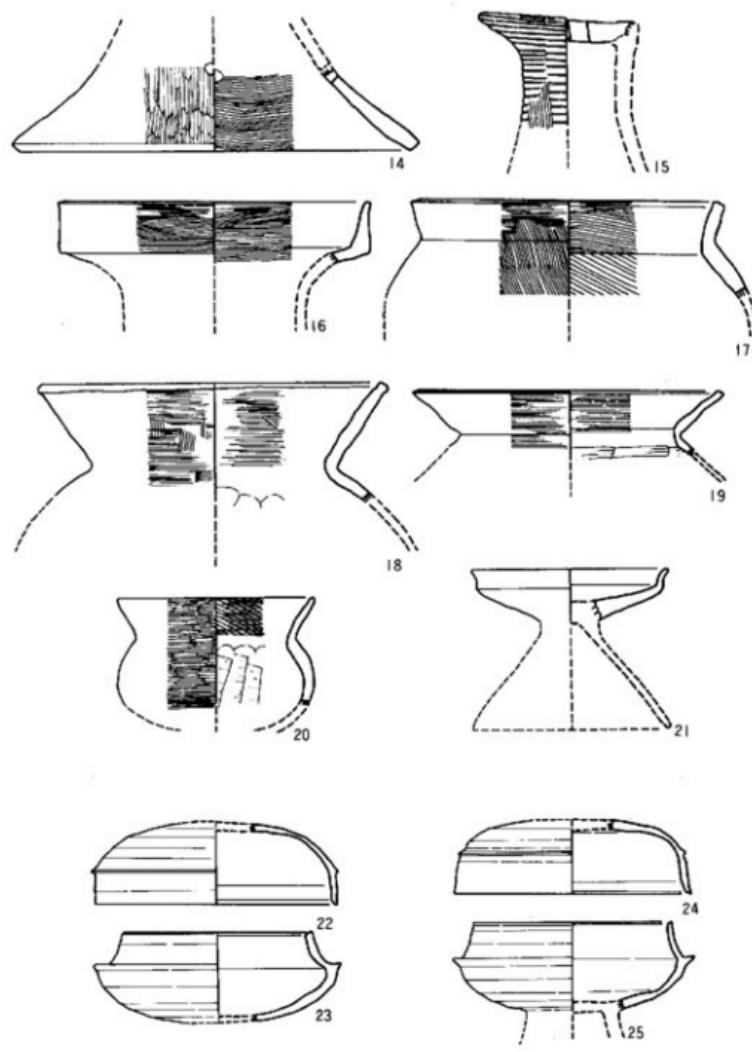


Fig. 64 多々良古川Bトレンチ出土土器実測図(縮尺1/3)

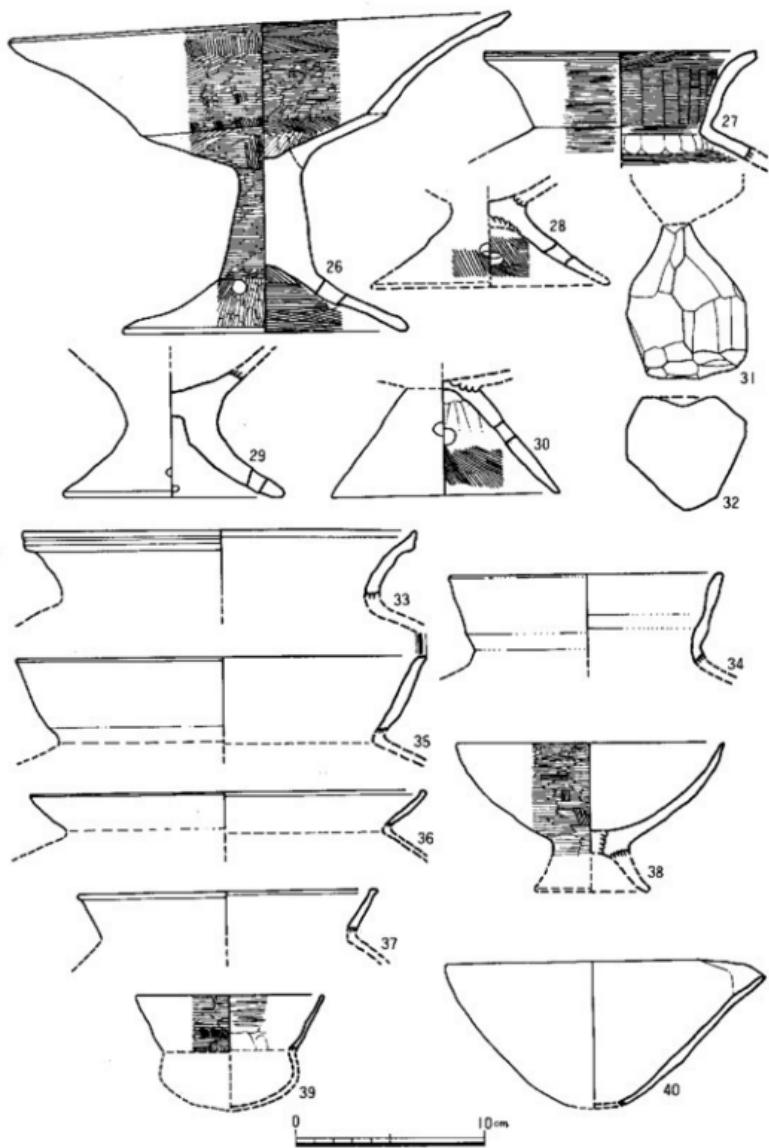


Fig. 65 多々良辻遺跡出土土器実測図（縮尺 1/3）

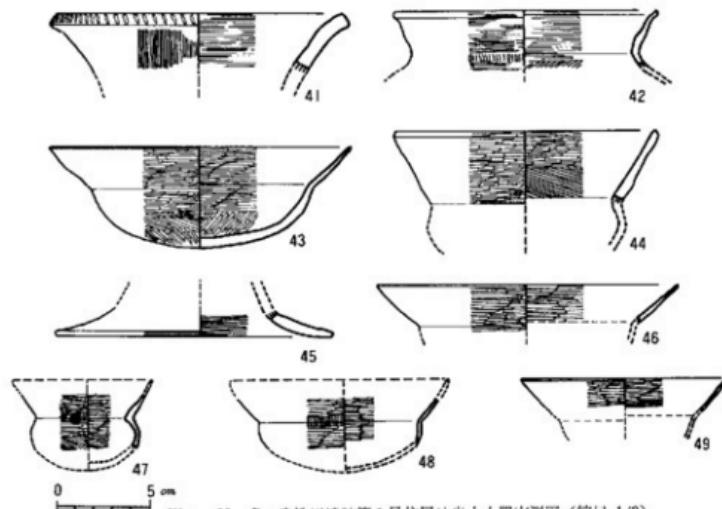


Fig. 66 多々良达田遺跡第1号住居址出土土器実測図（縮尺 1/3）

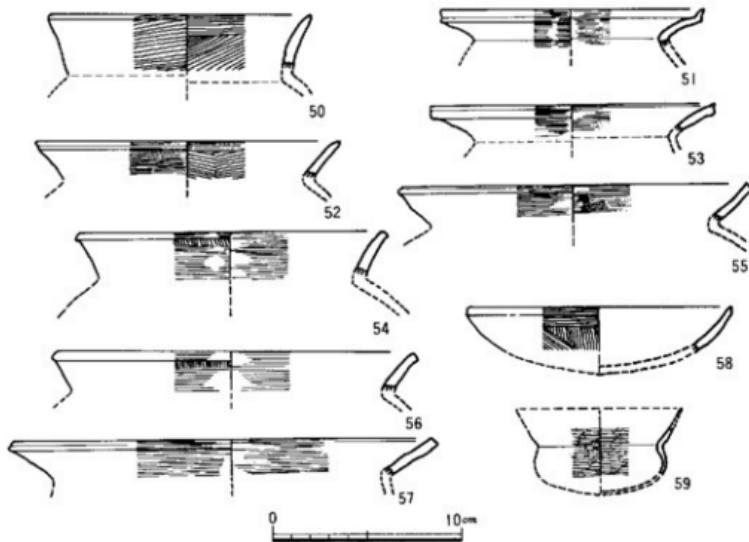


Fig. 67 多々良达田遺跡第2号住居址出土土器実測図（縮尺 1/3）

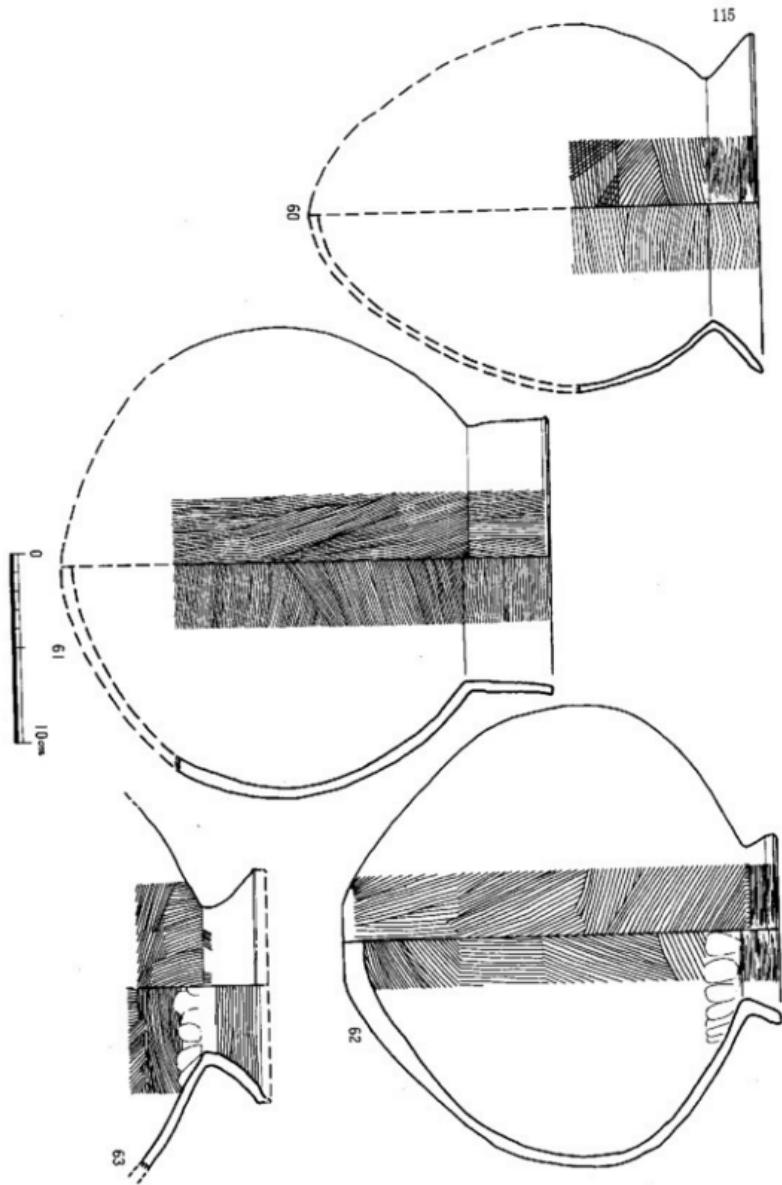


Fig. 68 多々良辻田遺跡第3号住居址出土土器実測図（縮尺 1/3）

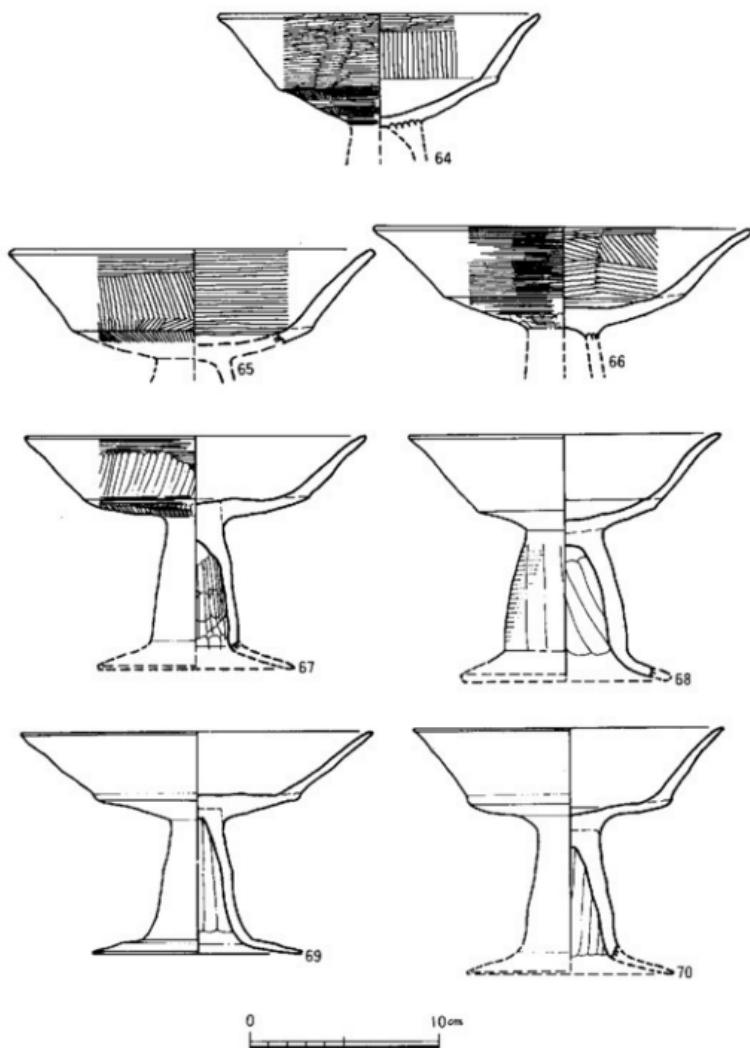


Fig. 69 多々良込田遺跡第4・5号住居址出土土器実測図（縮尺1/3）（但し64が5号）

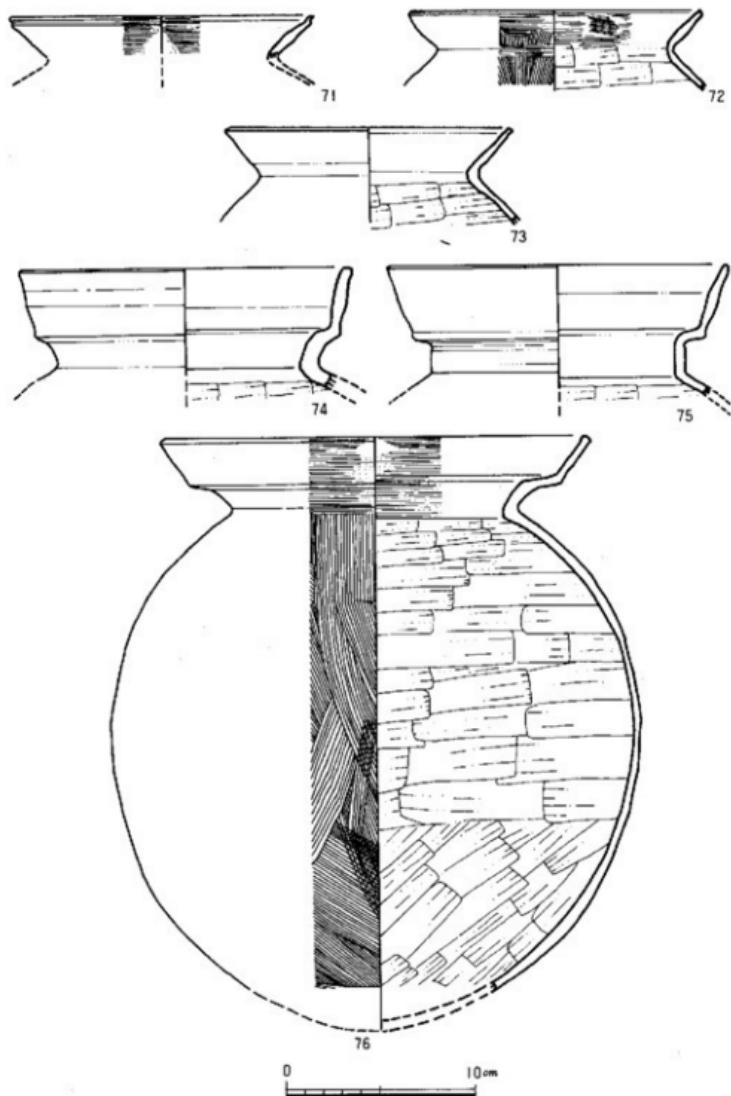


Fig. 70 多々良込田遺跡第4号住居址出土土器実測図 I (縮尺 1/3)

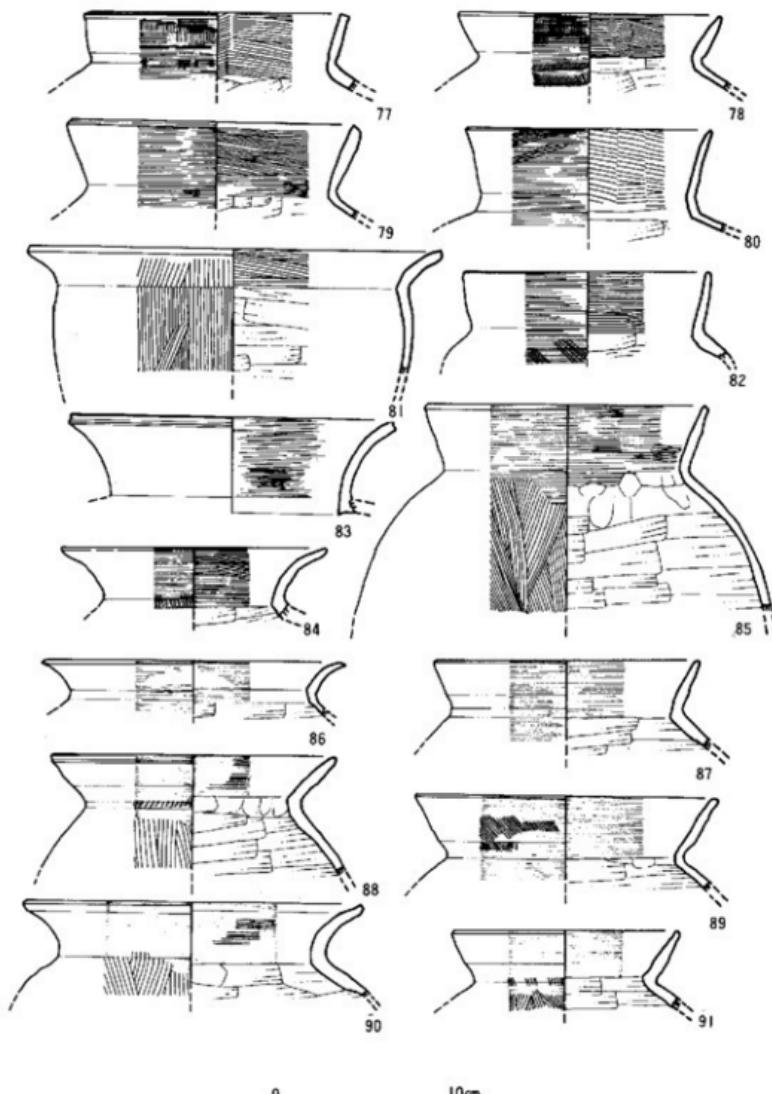


Fig. 71 多々良達田遺跡第4号住居址出土土器実測図II (縮尺 1/3)

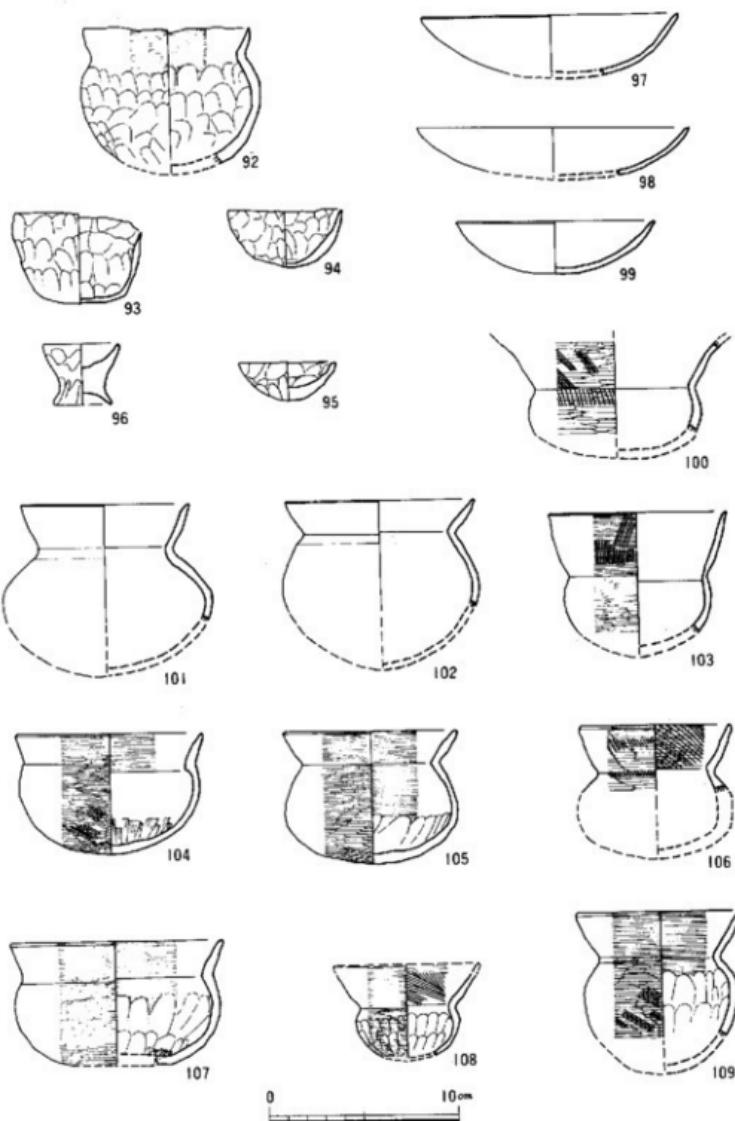


Fig. 72 多々良田遺跡第4号住居址出土土器実測図Ⅲ(縮尺 1/3)

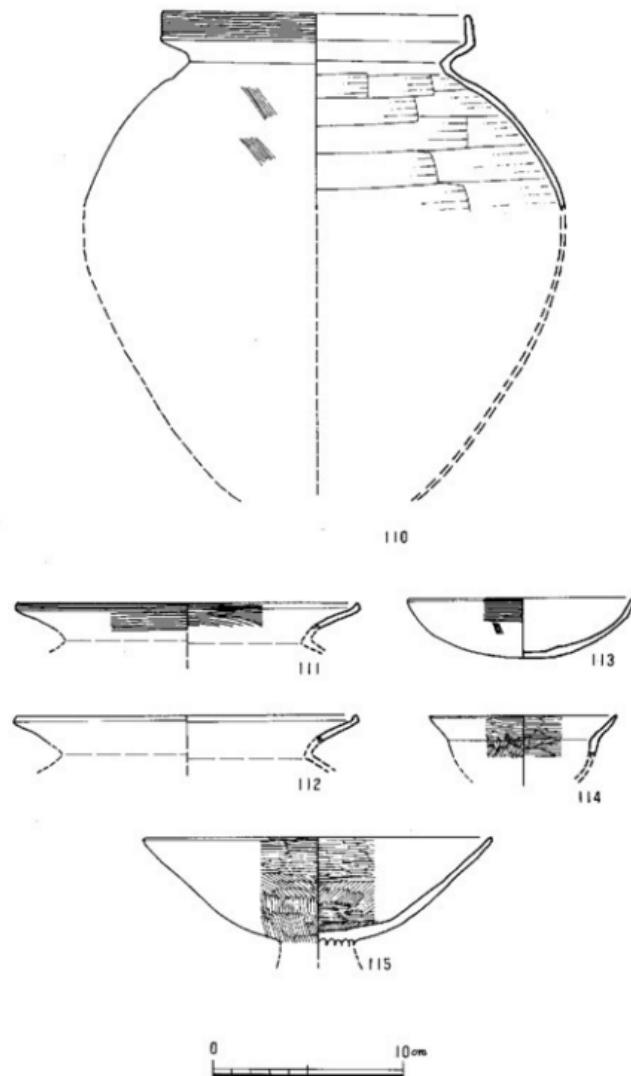


Fig. 73 多々良込遺跡第6号住居址出土遺物実測図 (縮尺 1/3)

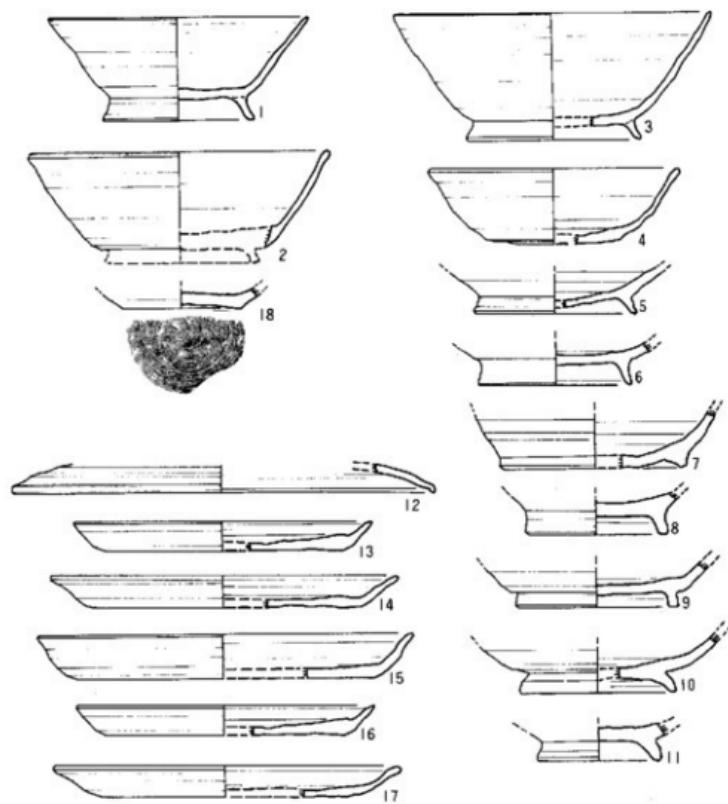


Fig. 74 多々良辻田遺跡第4号溝出土土器実測図（縮尺 1/3）

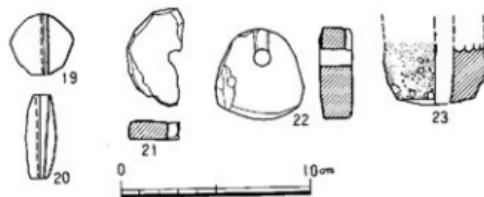


Fig. 75 多々良辻田遺跡第4・5号溝出土遺物実測図（縮尺 1/3）

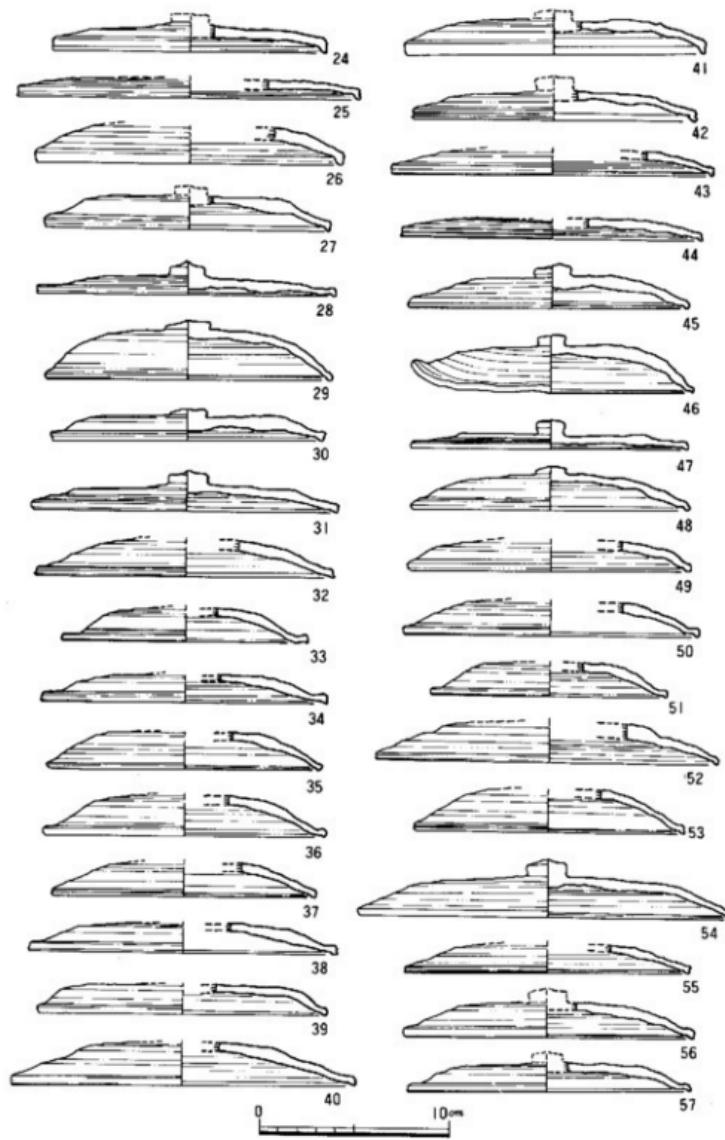


Fig. 76 多々良辻遺跡第4号溝出土須恵器実測図 I (縮尺 1/3)

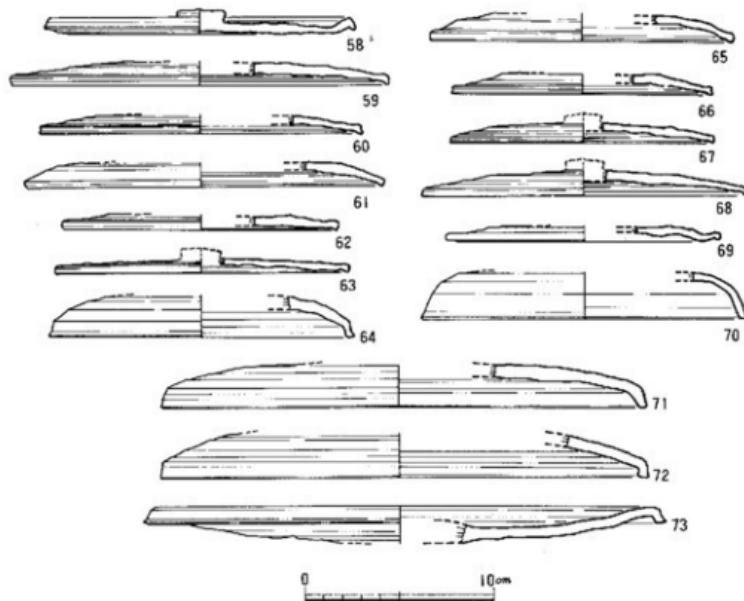


Fig. 77 多々良込田遺跡第4号溝出土須恵器実測図Ⅱ (縮尺 1/3)

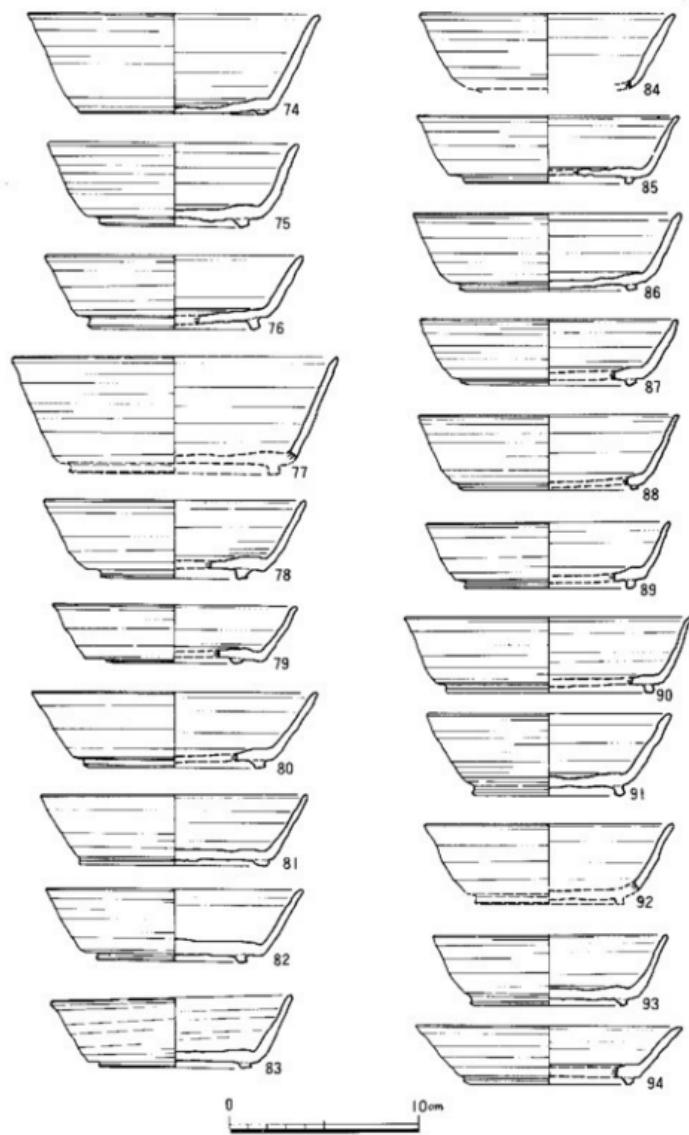


Fig. 78 多々良込田遺跡第4号溝出土須恵器実測図III (縮尺 1/3)

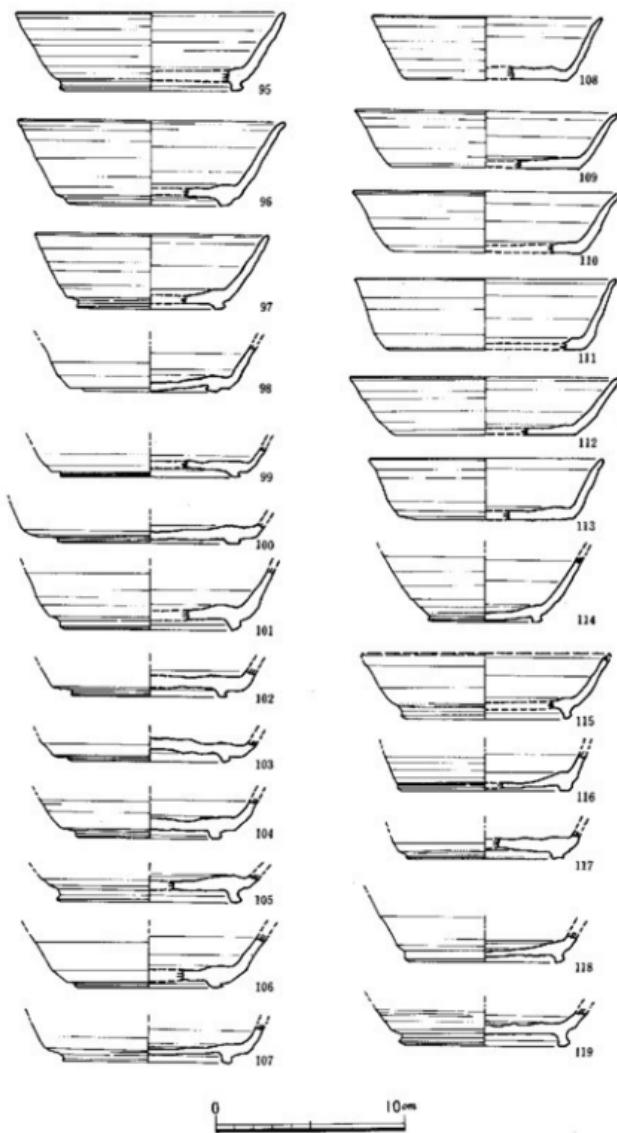


Fig. 79 多々良达田遺跡第4号溝出土須恵器実測図IV（縮尺 1/3）

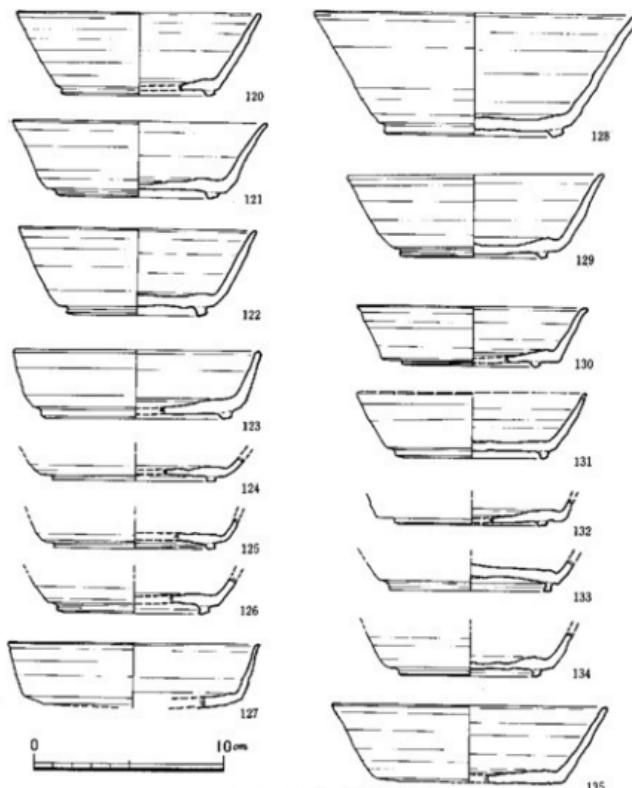


Fig. 80 多々良出土遺跡第4号溝出土須恵器実測図V (縮尺 1/3)

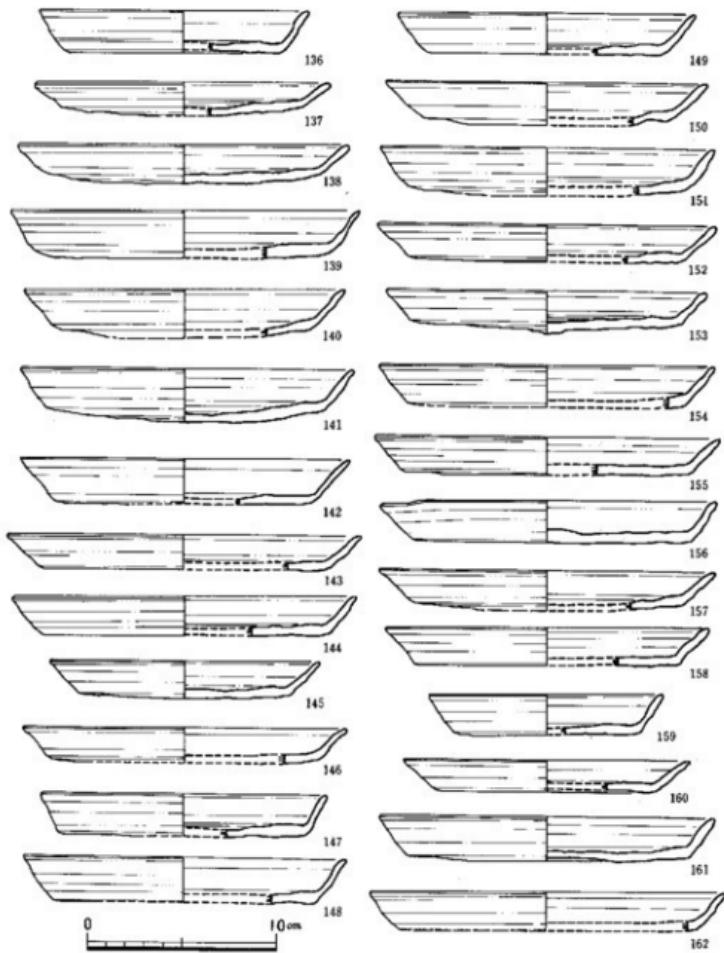


Fig. 81 多々良込田遺跡第4号溝出土須恵器実測図VI (縮尺 1/3)

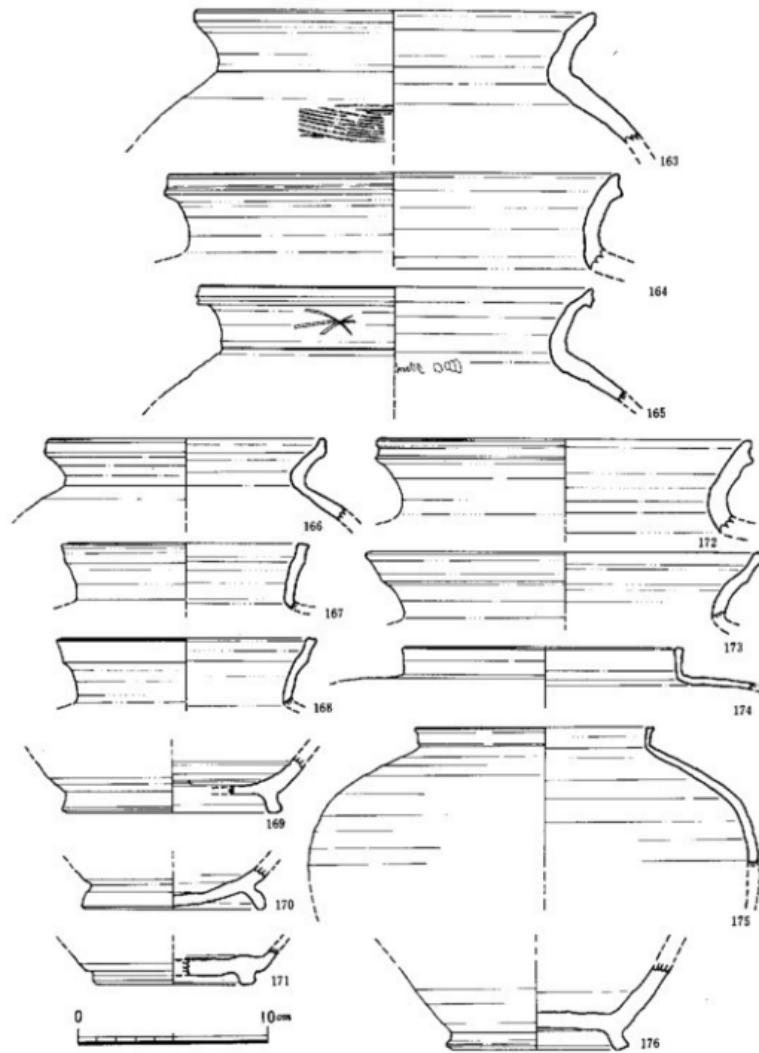


Fig. 82 多々良込田遺跡第4号溝出土須恵器実測図VII (縮尺 1/3)

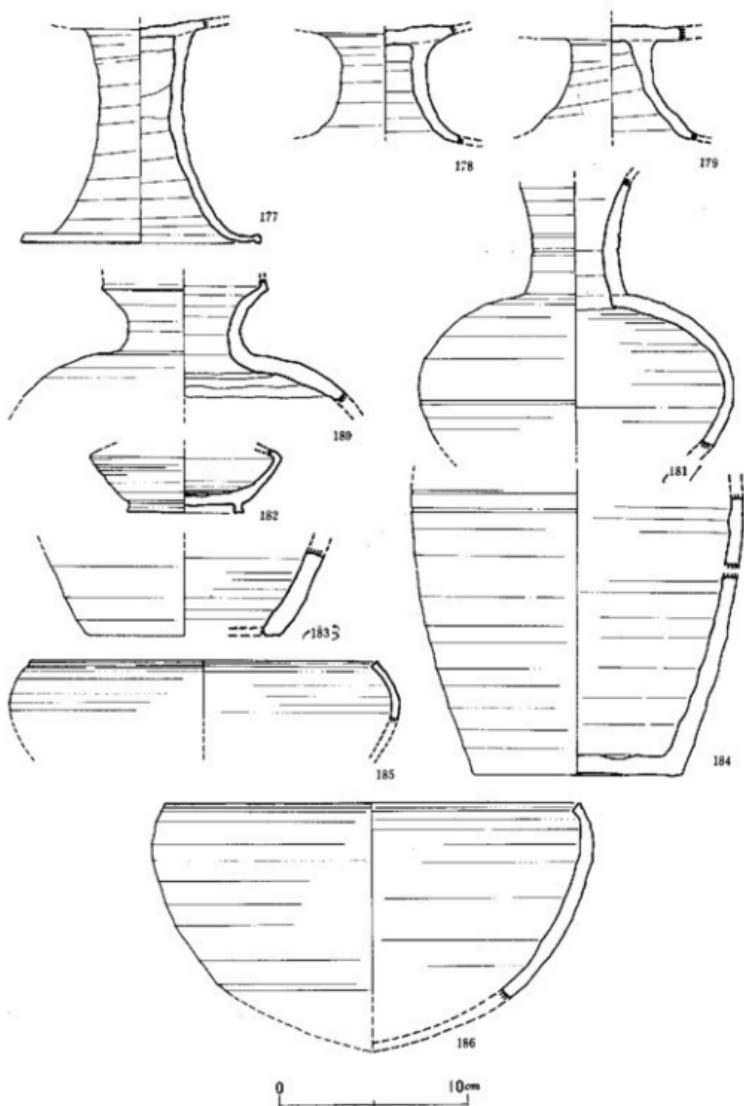


Fig. 83 多々良込田遺跡第4号溝出土須恵器実測図面（縮尺 1/3）

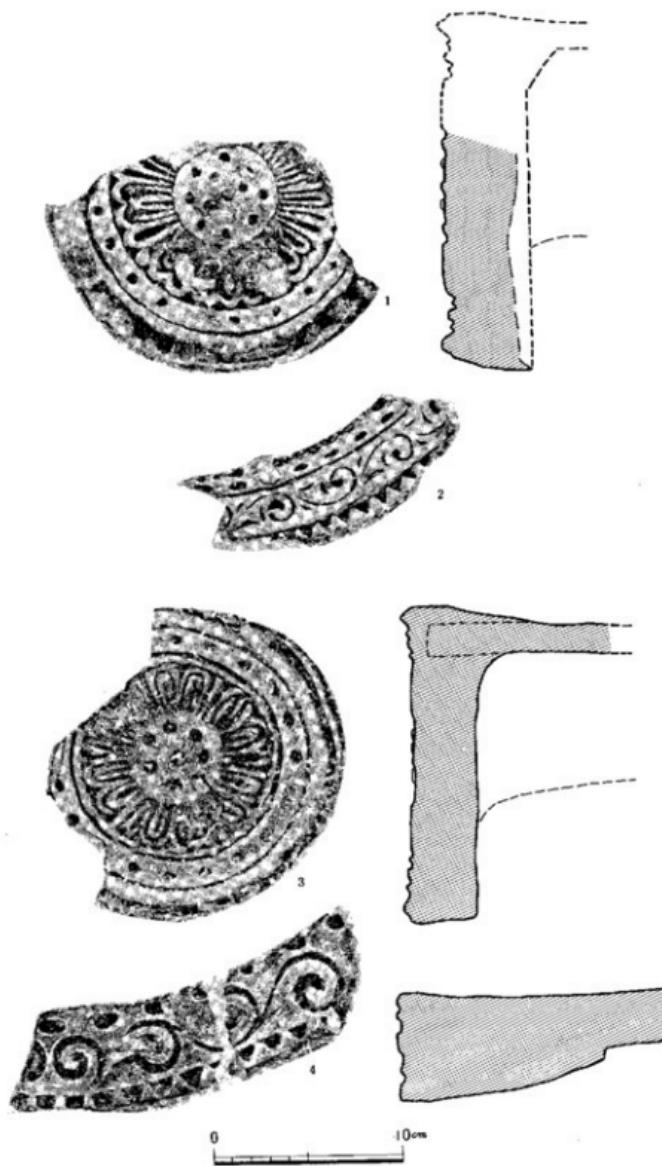


Fig. 84 多々良达田遺跡第4号溝出土瓦当実測図撮影（縮尺 1/3）

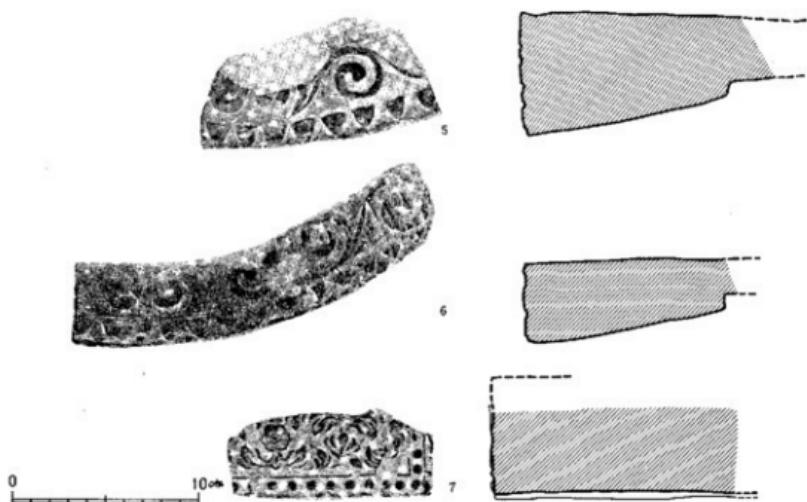


Fig. 85 多々良込田遺跡第4号溝出土瓦当及び埴輪実測図拓影（縮尺 1/3）

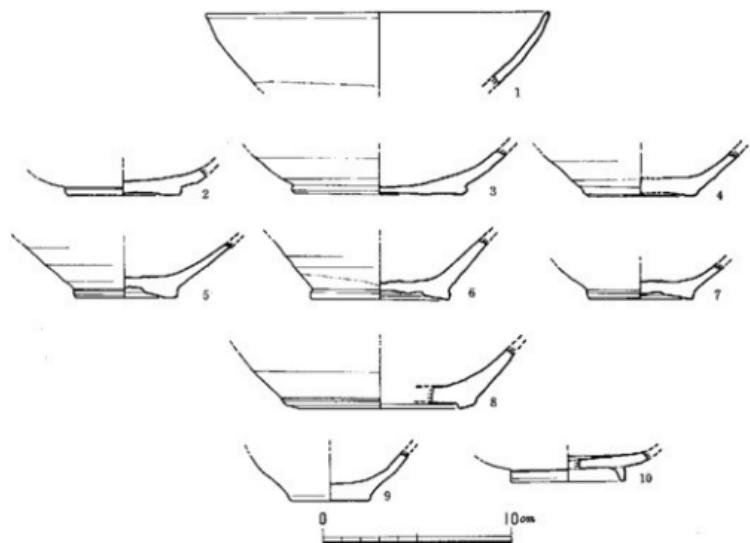


Fig. 86 多々良込田遺跡出土越州窯青磁及び緑釉陶器実測図（縮尺 1/3）（縮尺另し9,10が縦軸）

第3章 多々良藏ノ元遺跡と多々良古川の調査

1. 調査経過 (Fig. 90, 付図2)

この地点の調査は現在地図上で判断出来る多々良川の氾濫源が果して事実かどうか、そしてその氾濫源が古代に於いてどの様に利用されていたかを知る為になされた。

多々良古川地点は4トレンチA・B・C・Dを設定し調査したが、BトレンチⅦ層に弥生時代終末から古墳時代初頭にかけての遺物を出し、XI層に於いて磨滅した弥生中期土器片を出した。

多々良藏ノ元遺跡ではⅧ層に数多くの遺物を出土した。層には乱れた様子なく、時期も弥生式時代終末から古墳時代初頭に限定され、多々良込田遺跡との関係で興味深い。

2. 層位 (Fig. 87・88参照)

多々良古川地点では本調査で確認するところの最下層である礫堆積層の上に11層の層が認められる。その礫層は新幹線橋脚基礎工事において観察したところ、洪積岩盤層までかなりの厚さで堆積し、その礫層深さ2~3mの地点で縄文晩期土器片を採集している。この礫層は津屋方才田遺跡まで認められる。遺物包含層と認められるのはⅧ層のみである。

多々良藏ノ元遺跡の層序は多々良古川の礫層まで調査することは出来なかったがⅦ層の砂礫層に遺跡として認め得るにたる遺物を検出した。そのⅧ層より上層は砂質は少ないとところからⅨ層期・その出土遺物から弥生式時代末期から古墳時代初頭より以後の時代には多々良川の氾濫を一応くいとめていたと考えられる。

3. 出土遺物

多々良藏ノ元遺跡出土遺物について (Fig. 63)

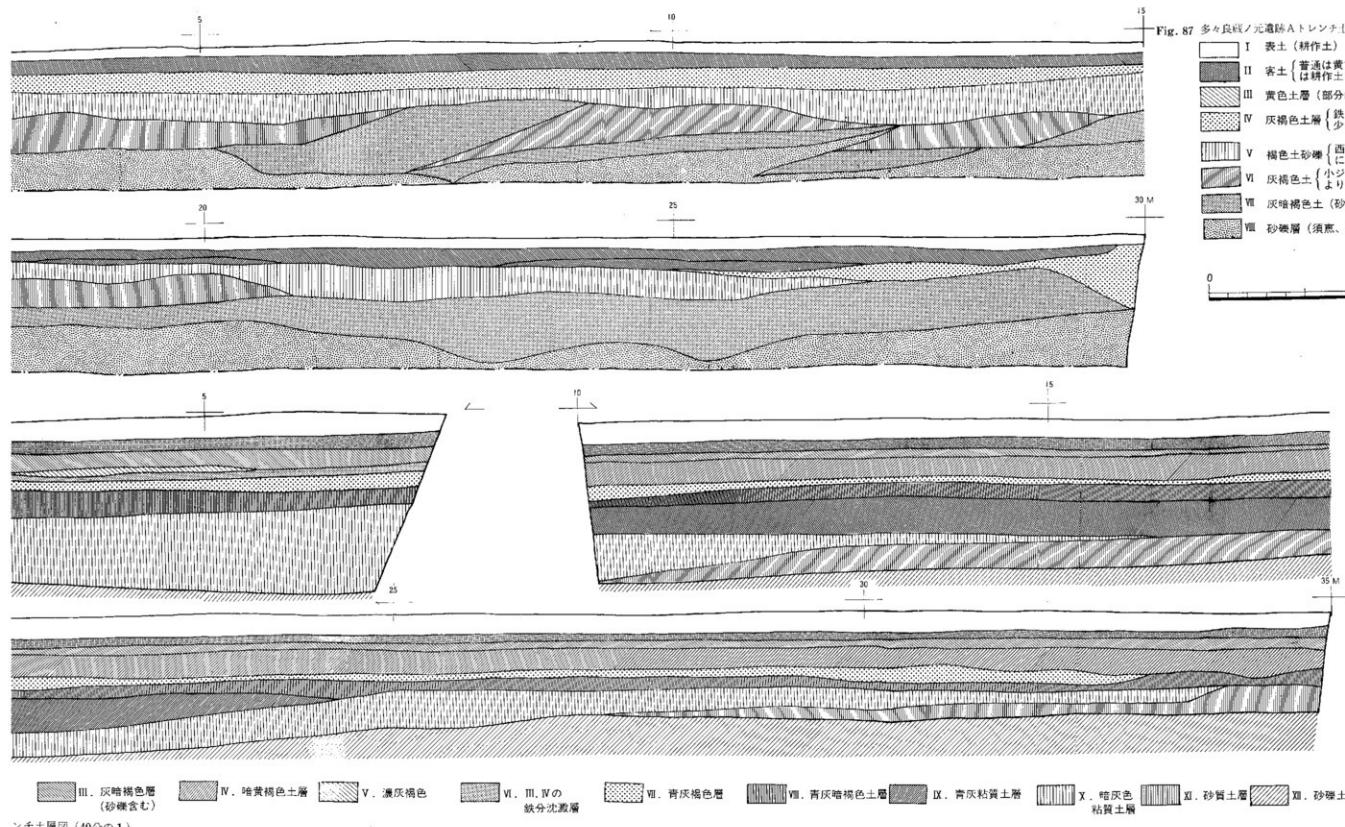
1・4は高環形土器、2・8は壺形土器、3・5は器台形土器、6は盤形土器 (P.L. 61-4), 7~11は菱形土器、12・13はタコ壺 (P.L. 61-5) 等である。2は口縁と口唇端に平行叩き目文を格子目に付し、いわゆる弥生式時代終末期に編年されるところの西新式土器に比定され、これと同時期のものが1・3・5・8であろうか。4は多々良込田II式に位置付けされる高環形土器 (Fig. 65-26) と手法・調整等で少々異にするが同一時期と考えられよう。6・7・9がこの時期段階に並ぶと言えよう。10・11は胴部内面がヘラ削りであるところから少々前者より下る時期に編年出来ると思うが、10は瀬戸内それも中國地方に多くの類例を見るので判然としない。12・13はタコ壺で当時の生産活動の一端をのぞかせて興味深い。

多々良古川出土遺物について (Fig. 64)

14・15は多々良込田I式、16・17はII式、18・19・20はIV式に比定出来、一連の須恵器は須恵II式期に比定出来るであろうか (第4章参照)。

Fig. 87 多々良城ノ元遺跡 A (トレンチ七層図) (総図1/40)

- I 表土（耕作土）
- II 寄土〔普通は黃色土があるがこの場合
は耕作土とが混入している。〕
- III 黃色土層〔部分的にある〕
- IV 灰褐色土層〔鉄、マンガンの沈澱
少し粘質を帯びている〕
- V 橙色土砂層〔西一東-15mあたりまでは砂利を多量
に含んでいるがその後はアラ砂である。〕
- VI 灰褐色土〔小じりの混入が土層
より少ない。〕
- VII 深暗褐色土〔砂層で遺物を多量に含んでいる〕
- VIII 砂礫層〔須恵、土器を混入〕



III. 深暗褐色層
(砂礫含む) V. 哈黃褐色層 VI. 濃灰褐色
VI. III. Vの
鉄分沈澱層 VII. 青灰褐色層 VIII. 青灰粘質土層
IX. 青灰粘質土層 X. 暗灰色
X. 砂質土層 XI. 砂礫土層
XII. 砂礫土層

トレンチ土層図 (40分の1)



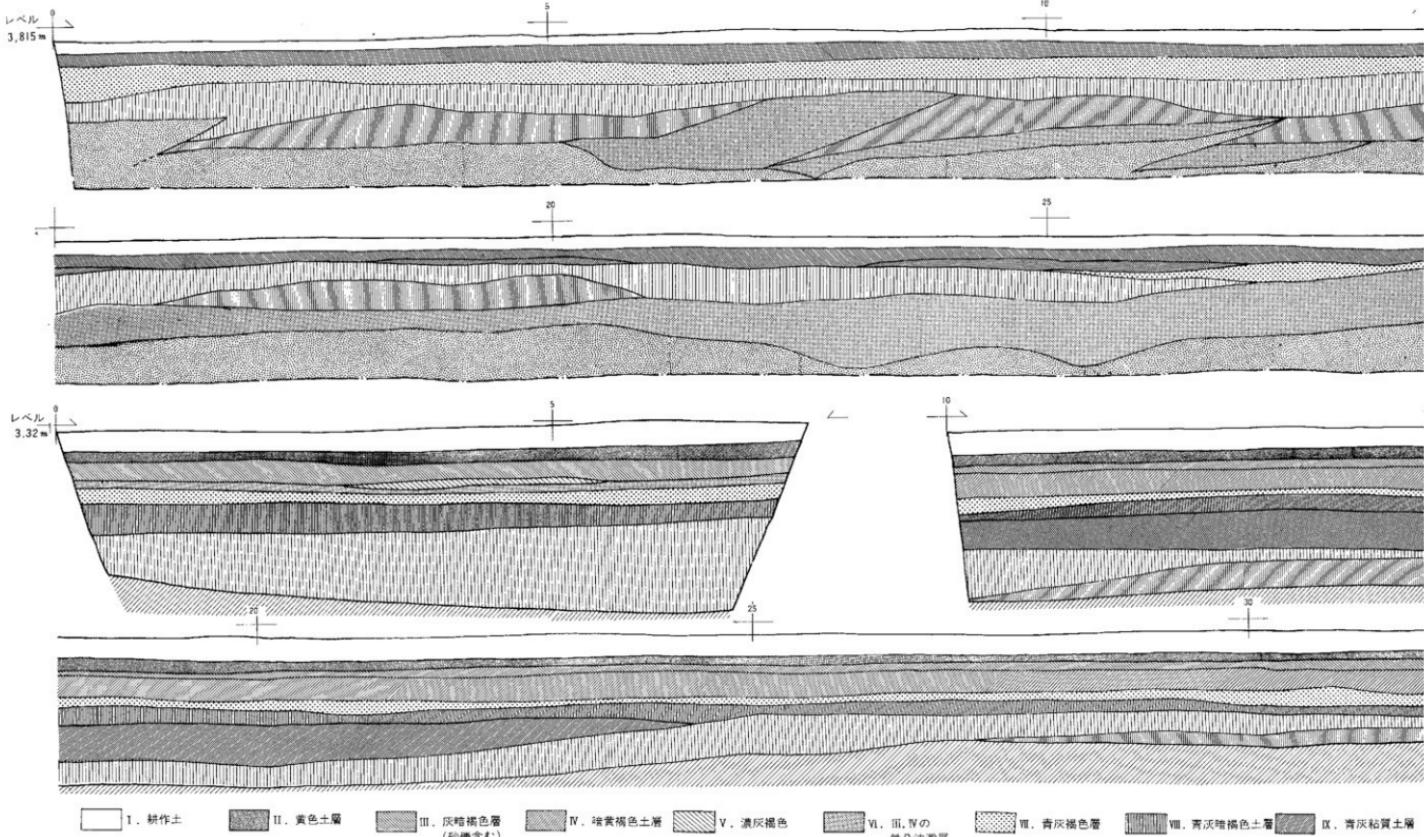
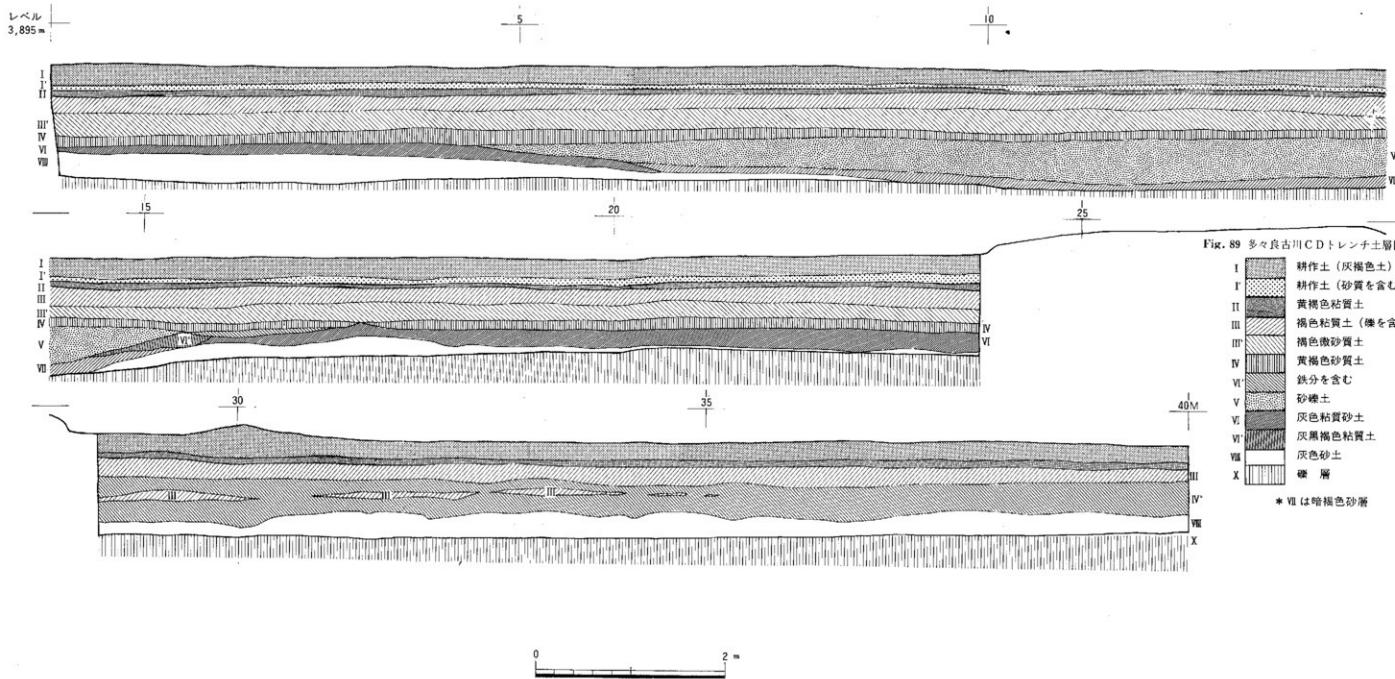
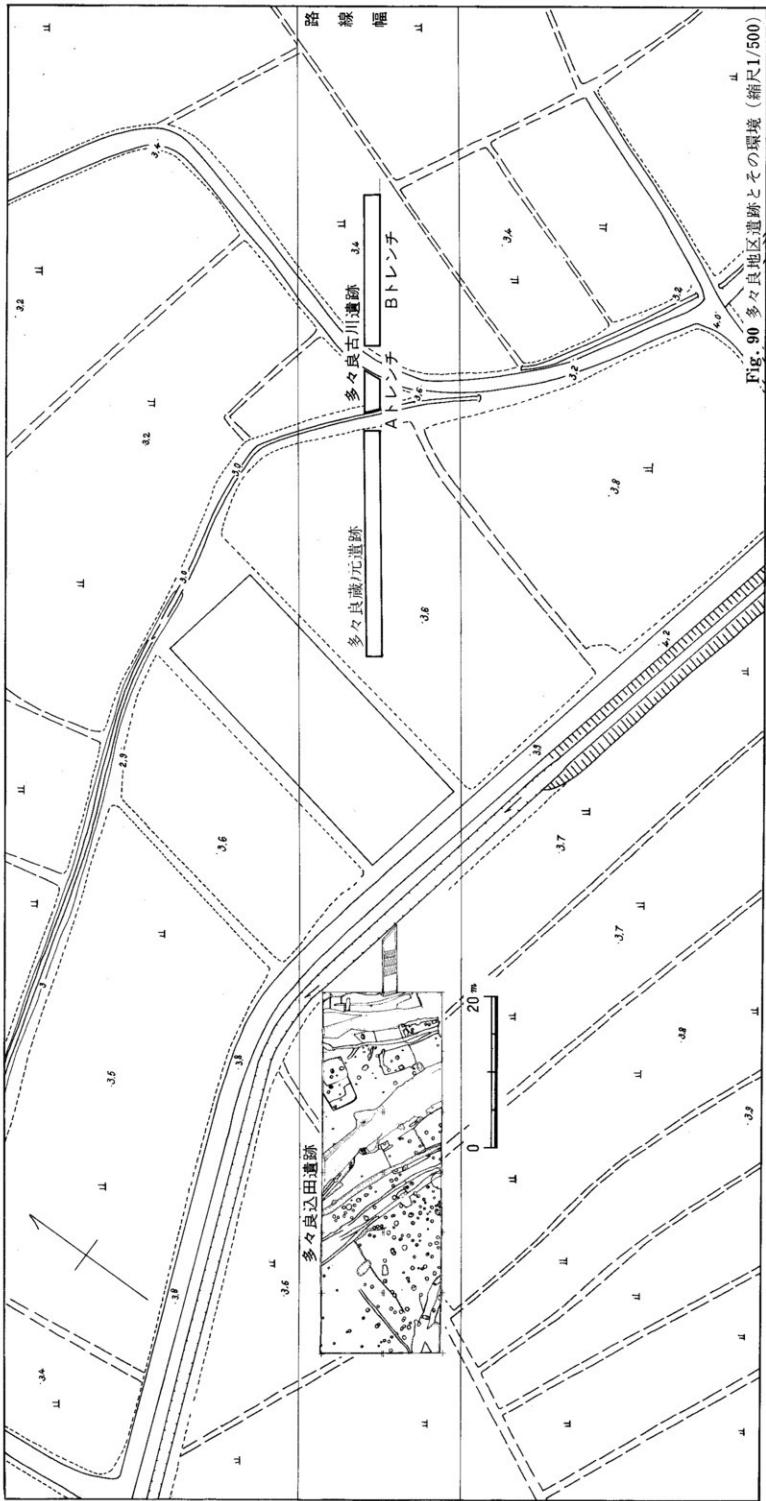


Fig. 88 多々良古川 A・B トレンチ土層図 (40分の1)





第4章 多々良地区小結

発掘調査における結果事実を整理する (Fig. 68, 付図 4)。

一、多々良川と多々良平野との関係は本地区調査の結果から、多々良川はその氾濫を弥生時代終末から古墳時代初頭に「多々良込田遺跡」でくいとめられ、「多々良藏ノ元遺跡」で砂洲を形成し、「多々良古川地点」を時に没し、時に砂を集めたという事が言える。現在の地形測量図はそれから想定した多々良平野・川の関係と、調査結果とが一致し、古代の地形復元考察に一つの資料となる事を示している。

一、「多々良込田遺跡」で検出を見た古墳時代初頭 6 軒の住居址と、「多々良藏ノ元遺跡」の漁撈具は多様な生活（半農半漁）を想定させる。

一、奈良時代に入って多々良平野に条里制が施行されるに至り、「多々良込田遺跡」は古墳時代の先記生活から、重要な役割を与えられたと考えられる。検出された資料、即ち大陸系の縄輪陶器・越州窯系磁器、太宰府や鴻臚館・各寺院址等で発見される軒丸・軒平瓦・文様磚、それにコバルトブルーのガラス器はその事を暗示している。

一、多々良込田遺跡で検出された 7 本の溝について整理する。

第 1 号溝は現地図上で見る多々良川氾濫源と多々良平野とを区別する線と同位置にあり、多々良川から水を引く用水路であつただろうことが考えられるが、調査範囲の狭小の為断言できない。

第 2・3 号溝は各地で発見調査された弥生時代終末期から古墳時代初期の集落址に見られる住居群を包围する溝と同一要素である可能性を有する。

第 4 号溝から第 7 号溝は方位を N70°W から N72°W にとり、現在の地形図に見る条里地割方位 N73°W とはほぼ同一方位にあり、条里制遺構と明言して疑いを得ないだろう。時期は出土遺物より奈良時代末から平安時代に比定されようか。

一、多々良込田遺跡に認められる柱穴は第 4 号溝より南西面に存在するが、建築物の構造を把握するには至らなかった。多くは調査者の技術的水準の低さによるかもしれない自省している。

一、弥生時代終末期から古墳時代初期にかけての土器編年を試みる。遺跡密度の濃度から多々良込田式とし、古式から多々良込田 I 式とし、IV 期に分ける。

多々良込田 I 式土器—弥生式土器の範疇にあって、Fig. 63-1 ~ 3・5・8 等があげられる。

多々良込田 II 式土器—弥生式土器か土師器か論議を呼ぶところである。第 3 号住居址出土土器と Fig. 65-26・27 等があげられる。

多々良 III 式土器—土師器概念に定着を見る土器の一類である。第 1・2・6 号住居址出土土器がこれに当る（第 6 号住居址出土は酒津式土器といわれる）。

多々良 IV 式土器—第 4・5 号住居址出土土器がこれに当る。

断っておくが 1 住居址 1 土器型式とは思わない。時間的制約から詳細な分類は今後においた。

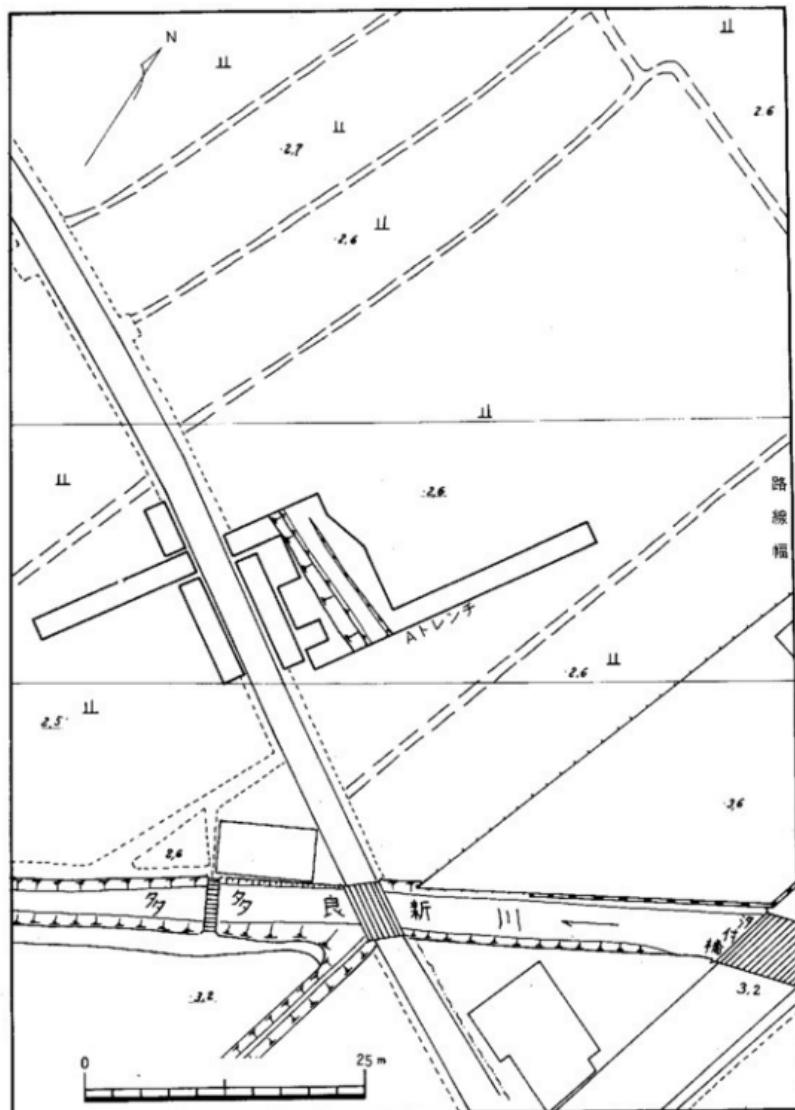
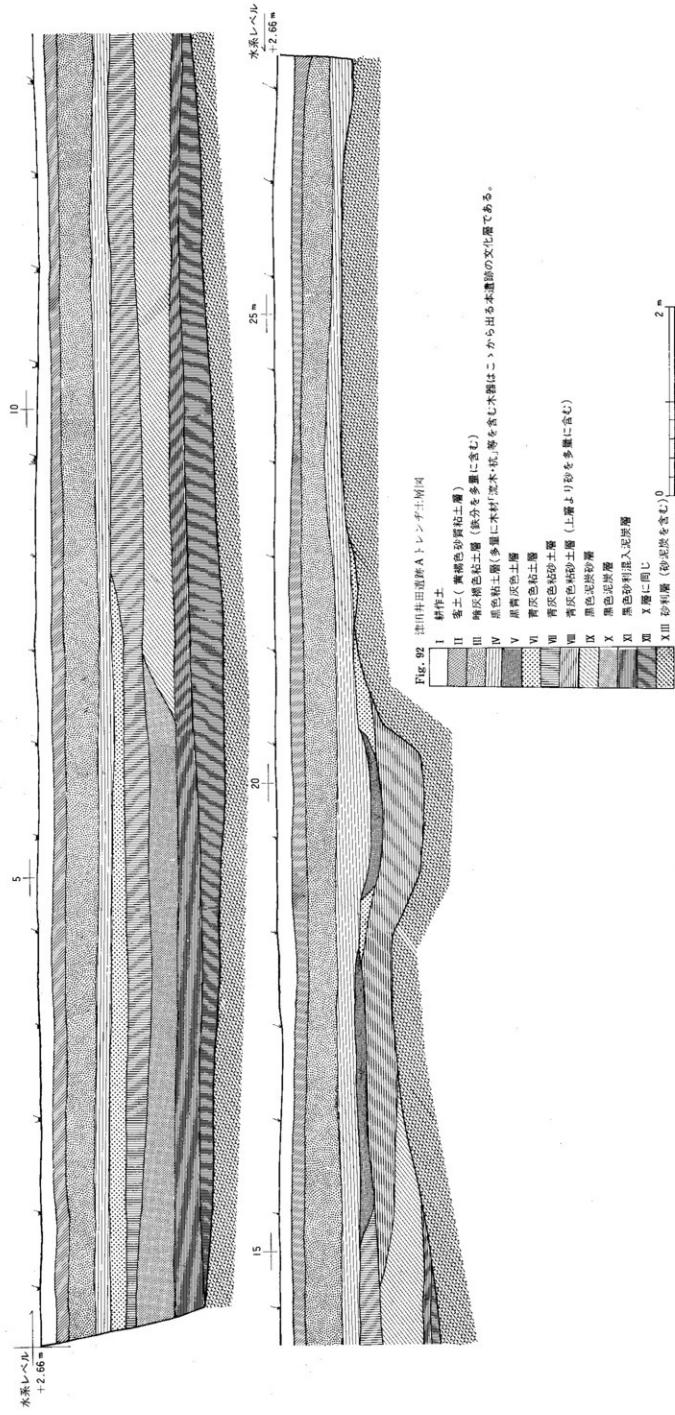


Fig. 91 江戸城跡平面図及び地形図 (縮尺 1/500)



第5章 津屋井田遺跡

1. 調査経過 (Fig. 91, 付図2)

南東から北西へ本地点を横切る道路が現在の地図上に見る条里の地割である。本地点の調査目的はその現条里の地割の起源を求めるところにある。まず調査はこの道路を切断する様にトレンチを構えた。その結果、道路南側には造橋の検出ならず、北側に於いて礫層の地山が落ち込み、そこに木々に混って木器を見るに至った。北側に調査の中心を移し、そのトレンチを拡大するに至り、現在の道路と平行に走る1本の溝と、その上層に包含される一群の木器を検出した。なお本遺跡の所在地は福岡市東区大字津屋井田である。

2. 層位と遺構

層は13層に分けられ、木遺跡唯一の溝は最下層の砂利層を掘って設けられているものである。層の流れの状態からV層期までこの溝は存続したと言えるであろう。

本遺跡の堆積上層はIV層からX層まで全く泥炭層であり、木器等の保存を良好ならしめた。その結果、当時の農耕具、建築材、その他の生産用木器を出土するに至ったのである。

その木器を包含する層はその出土する上器 (Fig. 95-9, P.L. 90-3) から弥生式時代最終末期に比定されよう。

又本地点を横切る道路南面には古墳時代初期の土師器を多量に出土したが、保存状態が悪くここに明確に把握するにいたらなかった。それを包含するは本遺跡第Ⅲ層である。

3. 出土遺物 (Fig. 93~95, P.L. 89~92)

フォーク状木器 (Fig. 93-1)

長さ55cm、刃部巾38cm、厚さ1cmの計測を執り3分の1のみを有する。材質は不詳である。

くわ (Fig. 93-2・3)

全長44cm、刃部巾17.2cm、柄巾8.0cm、柄部厚さ1.2cm、刃部厚さ0.6cm、柄差し部長さ4.0cm巾2.5cmの計測を其々執り、材質は不明 (Fig. 93-2)。Fig. 93-3は挿図参照。

矢板 (Fig. 94-1)

長さ44cm、巾8.4cm、上部厚さ1.2cm、刃部厚さ0.32cmの計測を執り、上部に斜めに抜ける径1.2cmの1孔をもうける。

不明木器 (Fig. 94-5・6) は図を参照されたい。

建築材 (Fig. 95-7・8)

7は長さ131.2cm、巾4.8cm、厚さ3.2cmで片面に刃状に尖らせて、かつばば中央に切り込みを有す。8は図を参照されたい。

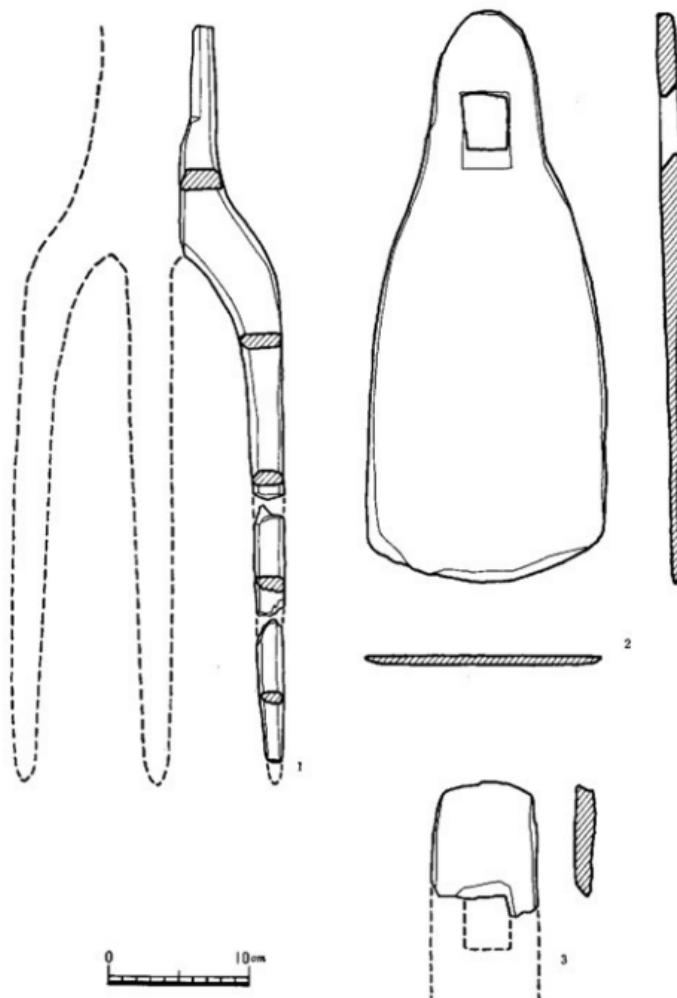


Fig. 93 津黑井田遺跡出土木器実測図 I (縮尺 1/4)

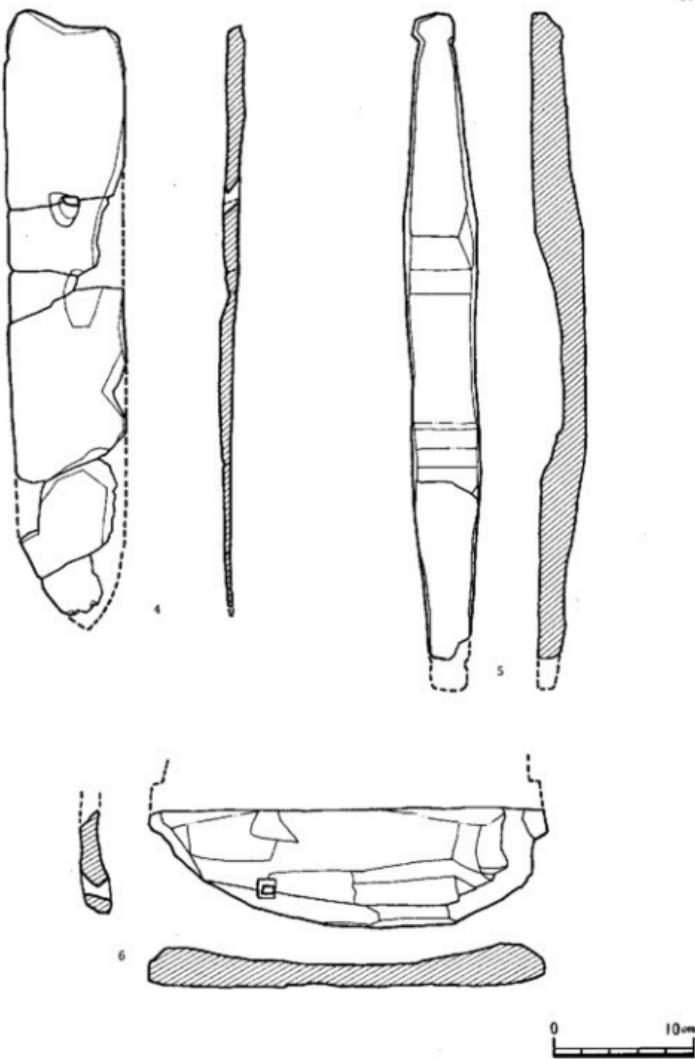


Fig. 94 津屋井田遺跡出土木器Ⅱ (縮尺 1/4)

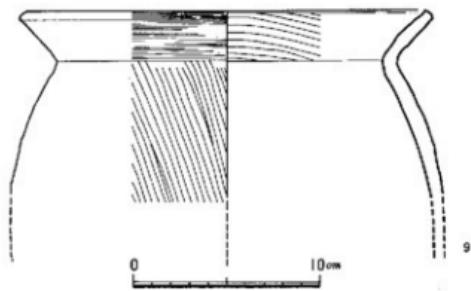
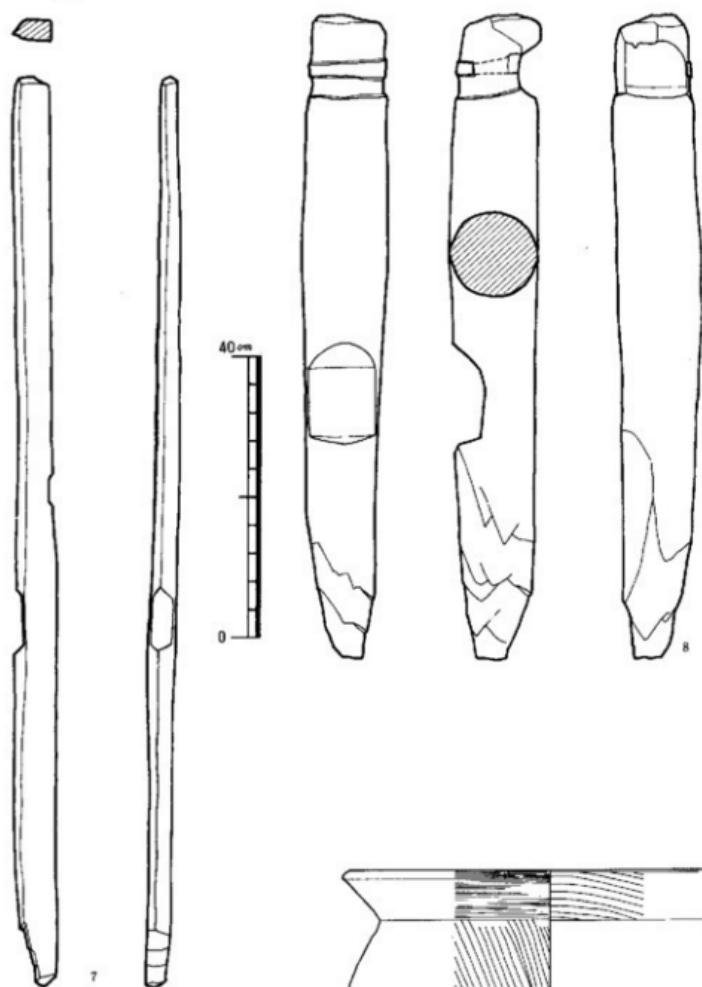


Fig. 95 津屋井田遺跡出土木器と土器 (縮尺1/8, 1/3)

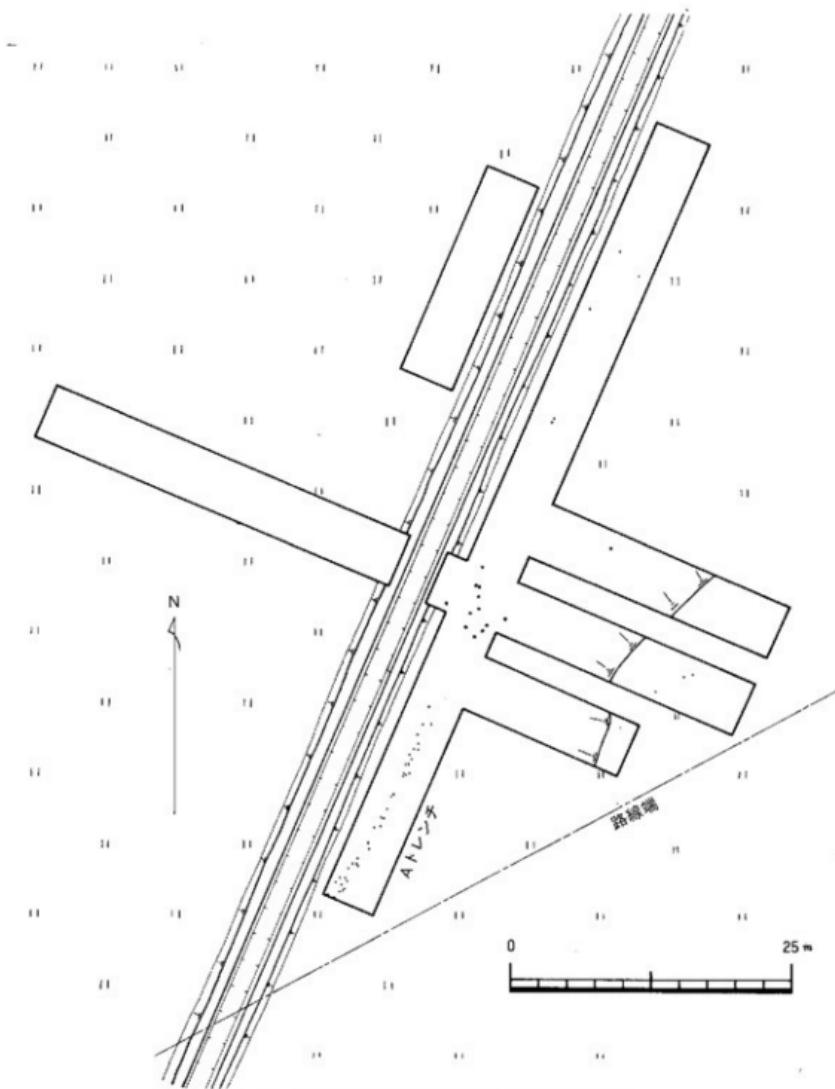


Fig. 96 津屋方田遺跡平面図及び地形図(縮尺 1/500)

1. 調査経過 (Fig. 96, 付図2)

本地点を南西から北東に抜ける現在の農業用水路が現在地図上に見る条里地割の線である。故にこの水路を横切る様にトレンチを設けた。その結果、水路東側に杭列を発見するに及び、そのトレンチの両側に2本のトレンチを設けた。その3本のトレンチ発掘の状態観察により、水路東側に杭列が並んで存在するのではという観測を得、水路東側に水路と並行してトレンチを設けた。

並行するトレンチの調査過程、水田耕作土から水田の蓋を形成する床土をはがすと率いにも杭列の上面に突きあたり、その杭列を残す様にベルトを残し、土層闊と平面プラン図を併行して把握し乍ら、記載したFig. 96・98の作図に成功した。猶、遺跡は東区大字津屋字方才田にある。

2. 層位と遺構・出土遺物

層序はⅦ層まで数えられるがその下層は有機質で当然調査対象なるも、本来の調査目的に達した事と現在の調査技術からⅦ層上面までにて打ち切った。

杭列はかなり浅い層、即ち現在の文化層を剥ぐとのぞき出し、深いものはV層まで突き抜ける。杭は泥炭質の第Ⅲ層灰褐色土層に大部分その姿をかくし、泥炭質故に現在まで保存を可能ならしめられたものであろう。

この第IV層灰褐色土層より、更に深部には第Ⅲ層包含の杭より二三わり程大きい杭が存在するが、層の乱れがないところから、第Ⅲ層灰褐色包含杭より古いことも考えられる。しかし第Ⅲ層より認められる杭も在るところから、第Ⅲ層包含杭と同一時期として良いかもしれない (Fig. 98)。

第Ⅲ層包含杭の時期についてであるが、それを立証する上器2例が同じ層より出土しているので、それを観察することにより杭列時期決定の参考としたい。

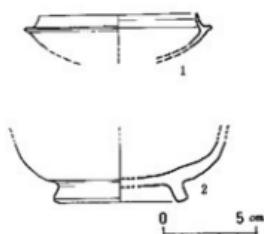


Fig. 97 津屋方才田遺跡
出土土器実測図 (縮尺 1/3)

Fig. 98-1は色調は暗いあざき色を呈し、胎土は密でしまり、砂粒子を混ぜ、焼成良好な須恵IV期の壺形土器である。

Fig. 98-2は色調、胎土、焼成とも前者と同一で、奈良時代末から平安時代にかけての須恵器である。

以上の土器2例からその時期を判断するなら7世紀初頭から平安時代にかけて存在した杭列であると言えよう。条里制の地割の開始期は論議のあるところで他の調査例を待ちたい。

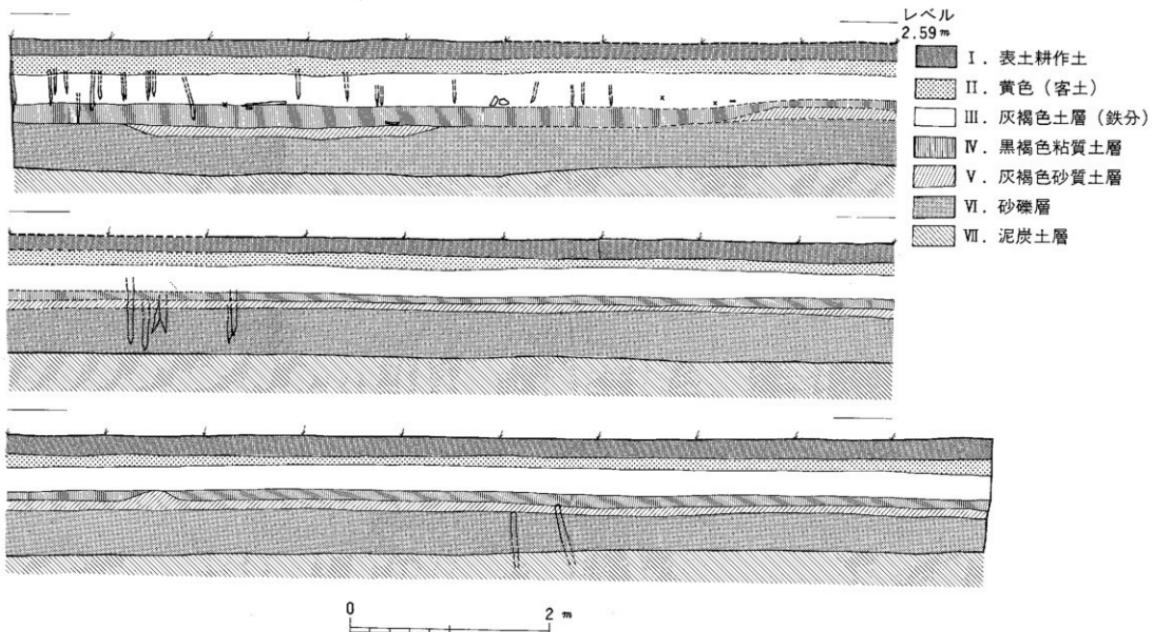


Fig. 98 津屋の方面遺跡A トレンチ両面土層図と杭

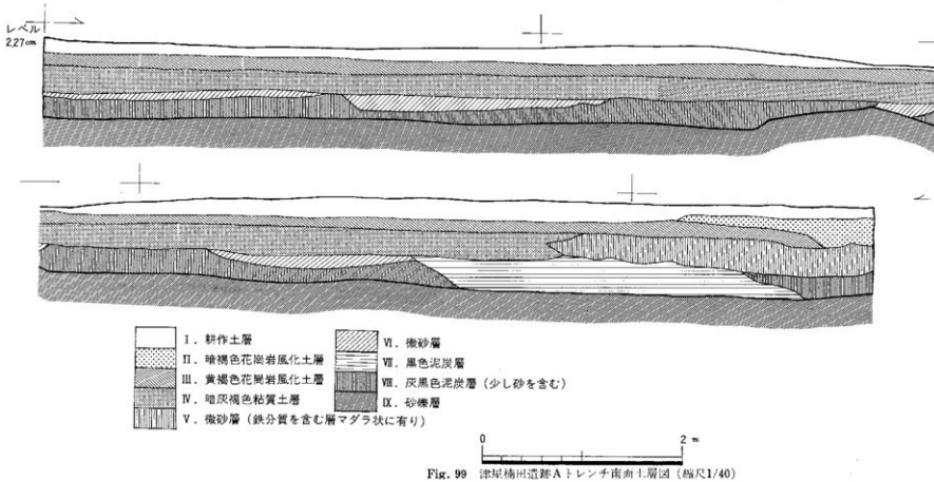


Fig. 99 津屋橋川遺跡Aトレンチ南面土層図 (縮尺1/40)

第7章 津屋楠田遺跡

1. 調査経過 (付図2, Fig. 100)

この地点を北東から南西に、又南東から北西に夫々抜ける道路が交叉して十字路を形成する。北東から南西に抜ける道路を狭んで西側を大字津屋字道田といい、東側を大字津屋字楠田という。遺跡はその楠田に集中して杭列を見発するところにより遺跡名を付けた。

この交叉する十字路が現在の地図で認められるところの条里の地割である。故にこの道路に沿って夫々トレンドを設定し調査を進めた。結果としてⅨ層からⅩ層に打ち込まれた杭列を見出したが、杭列が近代期に設けられたものもあり、土層図に明記するを断念した。

2. 棚位と遺物・出土遺物 (Fig. 99)

土層はⅨ層まで数えられ、Ⅸ層砂礫層が杭列築成時の地山と考えられる。

第Ⅸ層上・第Ⅷ層と第Ⅶ層が泥炭質の層の為、杭を現代まで残存せしめたと考えられる。

杭列は一定の方向を知るにははなはだ不均等であるが南東から北西に抜ける道路に並行して存在する。この杭列の方向は近代まで生き続けていた様で近代の杭もわずかではあるが、その上層に発見した。

第Ⅶ層から第Ⅹ層に抜ける杭の時期は出土する2例の遺物から判断するなら、奈良時代末から平安、鎌倉に至る時期に存在したようである。

遺物の1例は布目を有す古代平瓦、他の例は龍泉窯系青磁底部である。

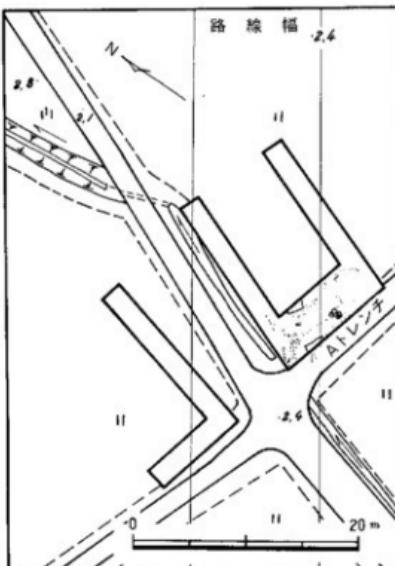


Fig. 100 津屋楠田遺跡平面図と地形図 (縮尺 1/500)

第8章 津屋道田地点の調査

若杉山塊に源を発する須恵川は福岡平野と柏原・多々良平野の条里地割の重要な分岐点となっている。

本地点はその須恵川のすぐ東南傍にあり、多々良地割の南西限を知る上に重要な地点にある。

本調査地点を方向 N73°W を軸とする道路が横切って在る。この道路が現在地図上で認められる条里地割線である。

この地の調査目的はこの道路がいつの時代に形成され、現在の水田分割線になっているかを判断する資料を検出することにある。

調査方法はトレンチ発掘調査法を執った。

調査経過を追って行くと第1層水田耕作土から、第IX層暗灰色砂層までの土層が見られ、第IV層下は礫層となり、多々良・津屋地区一帯に見られる文化基盤層である。第IV層より僅かではあるが土師式土器片を含んで、第V層で泥炭質の暗灰色粘質土層となり、有機質で草子葉植物遺体、下部に流木等を含み、本来の調査目的にそくした成果を検出するかに思えた。しかし第V層が暗灰色砂混じり粘質土に変化して砂質分を多く含みながら、第IX層暗灰色砂層となりこの地区的基盤層である礫層にぶちあたり、調査目的の成果は得られなかった。

以上の調査結果から考えるにこの地が古代条里地割からはずされ、IV層に於いて土器（時代不詳）を包含するところから、いつの時代かに生活面として存在した事は一応想定出来る。しかし、津屋地区の調査で一般的に見られた遺跡基盤となっている礫層の上層泥炭質土層に杭列等の遺構が検出されたにも拘わらず、この地点では砂質分の多い層となっているところから、古代条里地割期には須恵川の氾濫源にあって、稻作農耕や生活の場には適当でなかったと言えるであろう（Fig. 101参照、付図2参照）。

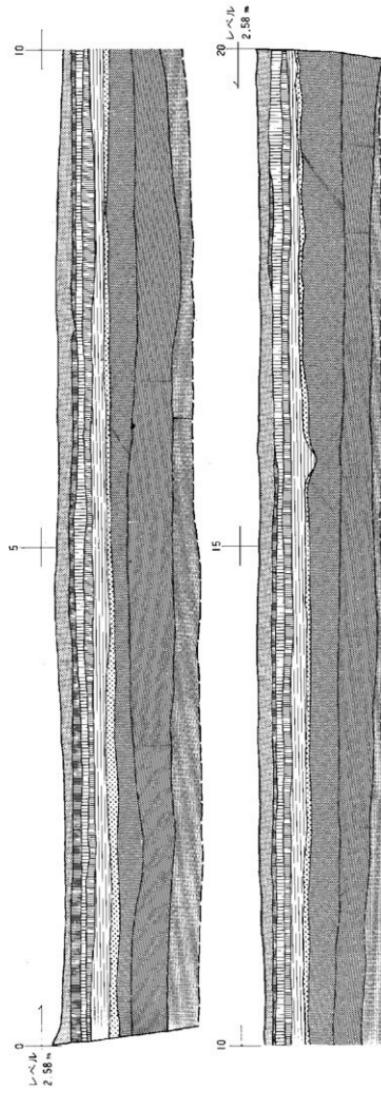


Fig. 10 沿尾道市地先北アレンチ上層(東側)

I.	表土 (灰褐色砂質粘土)
II.	褐色砂質混入土 (田畠と「闇がまじる」)
III.	黄褐色砂質粘土 (田畠より粘土を多く含む)……この層に土面罫を含む。
IV.	黄褐色砂粒粘土 (砂粒、粗礫を田畠より多く含み一部に砂塊ブロックがある)
V.	前色粘土 (後分を多く含む)
VI.	海灰粘土 (有機質、藻類植物体を含み下部に灰木、木轟を含む)
VII.	明灰色砂より粘質土 (頂と同じく上層近く灰木を含む下部につづりが多くなる)
VIII.	明灰色砂より粘質土 (最下層、この下は埋層となる)

2 M

第9章 津屋地区小結

本地区調査における発見資料を整理する。

- 一、津屋井田遺跡において、弥生時代終末期の土器を伴う農耕用木製品を出土し、当時の農耕技術水準を知る土層図を得た。
- 一、津屋方才田遺跡において、条里地割の方向に走ると目される現農業用水路のすぐ脇で、それと同方向（約N73°W）に築かれた杭列を得た。その杭の構築年代は伴出土器から7世紀を狹む前後の時期から奈良末平安期の間と考えられる。
- 一、津屋柄田遺跡において、布目平瓦と龍泉窯系青磁と共に伴する杭列を得た。杭列の方向は現代農業のかく乱に逢い定かでないが、条里遺構と見てまちがいないだろう。
- 一、津屋道田地点において、古代須恵川の多々良平野への氾濫範囲を推定する資料を得た。
その調査成果を今少しまとめて今後の問題点としたい。

多々良平野が農地として活用され始めたのは弥生時代終末期より下らないことは、津屋井田遺跡の農耕用木製品と伴出した土器片で明らかである。当時の農耕がこの平野一帯にくり広げられていたという事は多々良地区の調査成果と併せて考える時に明白である。しかし、その農耕技術水準は低次元であった。津屋井田遺跡の出土する農耕具包含層は土層図で見ると微高地の裾が緩やかに落ち込み低湿地へと広がりを持ち、しかも当時の水田と泥炭層とを隔てる間層を見出せない点から低湿地に堆積する水稻農耕可能な泥炭層一ぱいを利用していたと思われるからである。そこにはぬかるんだ低湿地に足をとられながらも必死に生産活動に従事する弥生人を想像するにかたくない。

弥生時代の多々良平野は微高地を点在せしめる湿地帯であったろう。微高地が彼らの生活の場であり、葦・蘆の繁る沼地がきびしくも人々の生産の場であった。

多々良平野の条里を復元する上において重要な意味を持つ字名として、この地北西端に存する「六の坪」という地名が上げられるのみである。その字名から現在の地図上で多々良平野の条里を復元して、条里遺構と思われる杭列を見た津屋方才田・津屋柄田遺跡の条里地名を平行式坪みなみから引き出すと前者は「三十四ノ坪」、後者は「三十五ノ坪」と言えようか。又この現地図上条里復元から考えると津屋道田地点は条里復元枠から外れ、奇しくも調査結果と一致する。条里制の起源については大化革新以後か、大化前代かの議論があり、安易に走り過ぎて読者に御迷惑が及ぶ恐れを感じ述べないが、津屋方才田遺跡の出土土器の年代は大化前代に条里制施行の基盤がこの平野に在った事を裏付けるものであるということだけは言えようか。

条里制遺構は福岡市の全ての地域に存在する。しかしその起源の問題とか、農地と村落の関係等数多くの問題が未解決である。にも拘わらず開発の波に抗しきれず消滅の憂き目を見てい

る。条里遺構の何と多いことか。

実際、多々良平野の条里制研究にとって重要な位置にある流通センターは調査区を僅少にとどめ忍とうの如く条里遺構を破壊した。現在の耕地整理事業もとうてい及ばず、又現在われわれが利用している、土地の単位、行政区画、道路等の基盤になっている条里遺構はそれをもつとも活用している行政によってあらゆる方向から、その保存にまじめに取り組まれるべきである。

注：付図2は読者の多々良平野古代条里復元を考え、収録した。

「条里」という言葉に始めて接するみなさんへ

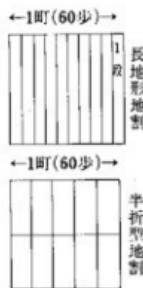
条里制とは大化の改新（645年）のときに行なわれた十地区調査。班田制の説明を耕地の地割にきざみつけたものであると考えられる。主として水田地域を東西、南北6町ごとに条と里に縦横碁盤目状にきざみ、1条、2条……1里、2里とよんで30条以上に及んだ。6町四方の区画を里（さと）とよび、この里はさらに1町4方の坪36にあてた。いまなお水田地域に三ノ坪などの地名をのこすのは、この条里地割のより名の遺存とみてよく、坪なみには一ノ坪の横に七ノ坪、十三ノ坪などをおく平行式のものと、六ノ坪の横に七ノ坪をおき、十二ノ坪は一ノ坪の横にくる千鳥式のものと2種が存在した。1里には30戸ないし50戸が平均して存在したと考えられるが、50戸は年代的にのちのことと、古くは30戸であったとする説がただしいようである。また1町4方の坪のなかの1筆の割り方も60歩×6歩つまり1筆10反とする長地型と、大化改新のときの30歩×12歩すなわち2段にする半折型があり、これまた前者が古い形式ではないかとされる。近年登呂の弥生時代の水出址が明らかになると共に、条里制地割の起源を大化以前にもとめんとする傾向もあって、問題をのこしている。条里制の地割は、畿内を中心として、全国の沖積平野のほとんどどの地域にいまなお残存し、地表にあざやかな景観をとどめている。その濃密の度合は弥生式遺跡の分布とほぼ一致し、水田裏作の不能な陸奥の国にはみられない。条里地割は当時の村落計画のみでなく、後世の都市道路計画にまで影響をおよぼし、今日の道路、水田溝渠畔にまで踏襲されているものがすくなくない（図解考古学辞典水野清一、小林行雄編より）

31				7	1坪
32				8	2
33				9	3
34				10	4
35				11	5
36	↓	↓	↓	12	6

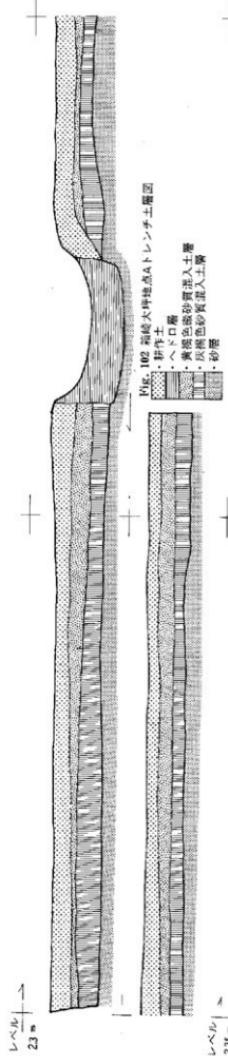
平行式坪なみ

36				12	1坪
35				11	2
34				10	3
33				9	4
32				8	5
31	↓			7	6

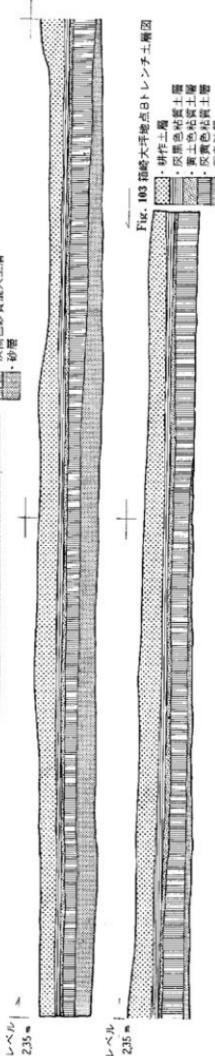
千鳥式坪なみ



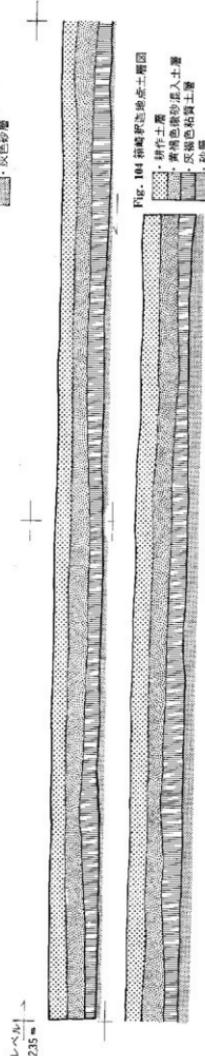
レベル
23 m



レベル
23.5 m



レベル
23.5 m



0 2 M

箱崎・名子地区の調査

第1章 箱 崎 地 区.....	145
第2章 名 子 地 区.....	145
多々良・津屋・箱崎地区の調査関係文献.....	146

第1章 箱崎地区 (付図2, Fig. 102~104)

この地は四王寺・若杉の各山塊に源を発した宇美川、須恵川によって作られた平野部に在る。この地の条里地割は現在の地図で見ると、太宰府水城堤と平行に走り、方向を N35°W に執る福岡平野の条里地割の北端に位置し、古代条里的北限を知る資料を得る為、この地が調査地点に選ばれたのである。

本地点の調査は2地点選ばれた。その1は福岡市大字箱崎字人坪と、他は同大字箱崎字町迎地点である。

調査結果は当初の調査目的に反し、現在の水田築成層を剥いで砂層を見るに至り、調査断念のやむなきに至った。恐らくこの地は近代まじかまで宇美・須恵川の氾濫源であったろう。

第2章 名子地区 (付図3, P.L. 94~99)

立花山塊に源を発した猪野川が、北方の城ノ越山、東方の森江山、南の江辻山間を流れ、多々良川に合流する手前で、名子の扇状地を作り出している。周囲遺跡環境は城ノ越山麓に湯ヶ浦古墳群（昭和49年日本大学調査）、土井田地の南に名子道遺跡（昭和46年福岡市調査）があるが、いずれも造成工事に伴うものでその姿を今に見る事は出来ない（前者については業者と福岡市で部分的な保存について接渉中）。

調査目的は多々良・津屋・箱崎と同一で、地点を4地点選び、名子第1・2・3・4地点とした。その結果は第1地点に於いて、近世の杭列と飼糞おけを二次利用した肥料おけ（P.L. 95）とその時期を想定させる磁器（P.L. 96）の検出を見たのみである。その杭の方向から、現在の農用地割はかなり現代に接近した時期に為されたと考えられ、併せて農業用水・湯ヶ浦池の構築年代をも考えさせる。

出土磁器について言及する。

図版96は、いずれも塊で、染付がなされている。高台の面取りは丸みをおびており、壇付部は、せまく無釉である。胎土は、白磁で、焼成よく、釉色は、白色とやや青みおびた白色を呈す。高台内、高台、高台脇、さらに口辺部口造りの内外面に、線引きの染付がなされ、高台内に角福、見込内底に枯梗様の花文を描いたものがある。体部外面、見込の染付には、連続するつる草様文、山水などが描かれているが、かなり図案化されている。また、見込内底を蛇ノ目状に無釉にしたものがあり重ね焼がおこなわれたのであろう。これらは、いずれも肥前、有田郷を中心とする近在窯の出土品に類似がみられる。

多々良・津屋・名子地区の調査関係文献

◎古式土師器

- 森貞次郎他「有田遺跡」福岡市教育委員会 1968
 小田富士雄他「狐塚遺跡」八女市教育委員会
 下条信行他「宮の前遺跡（A～D地点）」福岡県労働者住宅生活協同組合 1971
 小田富士雄ほか「高島遺跡」
 渡辺正氣「筑紫郡春日町竹ヶ本遺跡調査報告書」福岡県文化財調査報告書第22集 1961
 鎌山猛・乙益重隆「弥生文化（上）一九州」考古学講座4 1969
 森貞次郎「弥生文化の発展と地域性一九州」日本の考古学Ⅲ 1966
 坪井清足「弥生」陶磁大系2 1973
 小田富士雄「弥生土器一九州6」考古学ジャーナル版84 1973
 福岡市教育委員会「名子道遺跡」1971
 福岡市教育委員会「野方中原遺跡」1974
 潤井仁夫「宮ノ前遺跡E地点」福岡県教育委員会 1970
 浜田信也「湯銭遺跡」福岡県教育委員会 1970
 湖見治「広島県庄原市銀崎遺跡の調査」庄原市教育委員会 1958
 間壁忠彦「岡山県立岡市走出の祭祀遺跡」倉敷考古館研究集報第2号 1966
 三杉兼行・間壁「備前・麻那遺跡の土器」遺跡2 1957
 坪井清足「岡山県立岡市高島遺跡調査報告」岡山県高島遺跡調査委員会 1954
 間壁忠彦「倉敷市西津新屋敷遺跡出土土器」瀬戸内考古学第2号 1958
 間壁忠彦「田野市田井深山遺跡」倉敷考古館研究集報第6号 1969
 近藤義郎「製埴土器代表型式集成図」日本考古学会製埴部会 1966
 湖見・川越哲志・河瀬正利「広島県尾道市太田貝塚発掘調査報告書」広島県文化財調査報告第9集 1971
 坪井清足「土井ヶ浜IV式土器」日本農耕文化の生成所収 1961
 間壁忠彦・瀬了「岡山県矢掛町芋岡山遺跡調査報告」倉敷考古館研究集報第3集 1967
 山陽町教育委員会「使木山遺跡発掘調査報告」 1971
 坪井清足「岡山県都窪郡庄村上東遺跡の土器」弥生式土器集成資料編 1958
 近藤正・春成秀爾「埴輪の起源」考古学研究51 1967
 近藤義郎「埴輪」日本の考古学V 1966
 宮兵波島調査團「試の篠栗式土器」私たちの考古学5 1955
 近藤義郎「篠栗式遺跡における古代塩生産の立証」歴史研究第233号 1968
 広島県教育委員会「広島県埋蔵文化財包載地基報告書」1961

◎条里と古代柏屋

- 吉田東伍「大日本地名辞書」
 郡岡良弼「日本地理志料」
 篠塚豊「九州万葉散歩」
 「筑前旧志略」
 井上辰雄「古代の櫛屋」多々良遺跡調査報告書收 福岡市 1972年
 日野尚志「筑前国早良郡の条里」史学研究第99号
 「伴今時代における早良平野の開拓」福岡市教育委員会編「有田遺跡」所収 1968
 水野正好「野洲郡野洲町富波条里制構造調査概要」滋賀県教育委員会 1966

- 福岡市教育委員会「弁多田遺跡」1974
鏡山猛「筑紫地方の条里」九州考古学論叢所収
落合重信「条里制」
鏡山猛「福岡県下の条里遺跡」福岡県史蹟名勝天然記念物調査報告10
〃「条里と聚落」北九州の古代遺跡 1956
- ◎肥前窯系磁器
永竹威「伊万里」陶磁大系19 1973
有田町教育委員会「調査報告有田天狗谷古窯」1972
朝日新聞社「古伊万里」1974

後記

多くの方々に御迷惑をかけながら、この一冊の報告書が出来あがりました。謹んで御恵存下さることをお願いします。

調査過程において、開発と文化財保護の谷間におかれた不安から、窮屈をもかむの例えに似て、若衆の身を省りみず、不穏な言動に出て、国鉄当局の人々に非礼を働いたことに陳謝の意を表します。そこで知り得たことは開発サイドに立つ人々も我々調査者と同様社会的矛盾を感じて生きておられるということでした。相対立する開発側と文化財を保存する側は過去・現在・未来という歴史に生きる国民、社会矛盾を感じて生きる人間という原点にたって、はじめて解決されるであります。

この報告書は現代に生きる全ての人々に文化財の何たるかを語らしめるまでいたったかどうかは自信ありません。記録保存という名にかりて専門家のみに目を向け、市民各位には背を向けてはいないかとお叱りを受けるのも覚悟しています。それはそれで、完成した報告書は歴史を解明する手掛りとして大切にし、市民各位の御要望は文化財普及面の予算をもって解決する方向を見出したいと考えます。

各地域で無理なお願いを申し多数の人々に御協力頂き乍ら、地域の方々が文化財に対してどの様にお考えなのか少しこれ理解出来た事が文化財担当者の教訓であり、課題であります。

1975年3月10日「新幹線」は東京から博多まで直行します。地域文化・経済に多大な影響を与える事は必定でしょう。地域文化・経済は地域の人間で守り抜きたいものです。その方法も又わたくしたちの課題です。

各地区的調査協力者のみなさんには心から感謝します。ありがとうございました。

又、校正に御協力頂いた堀部美代子・和田むつみ・森重章文・田口崇・高橋和子・山本光子の方々ありがとうございました。

後期付図説明

1. 現地説明会（多々良込田遺跡において）
2. 押し寄せる新幹線工事
3. 作業に協力する弥永のみなさん
4. 老いも若きも五十川のみなさん
5. 多々良・津屋地区のみなさん
6. 作業あいまの分布調査（名子地区の人々）



3

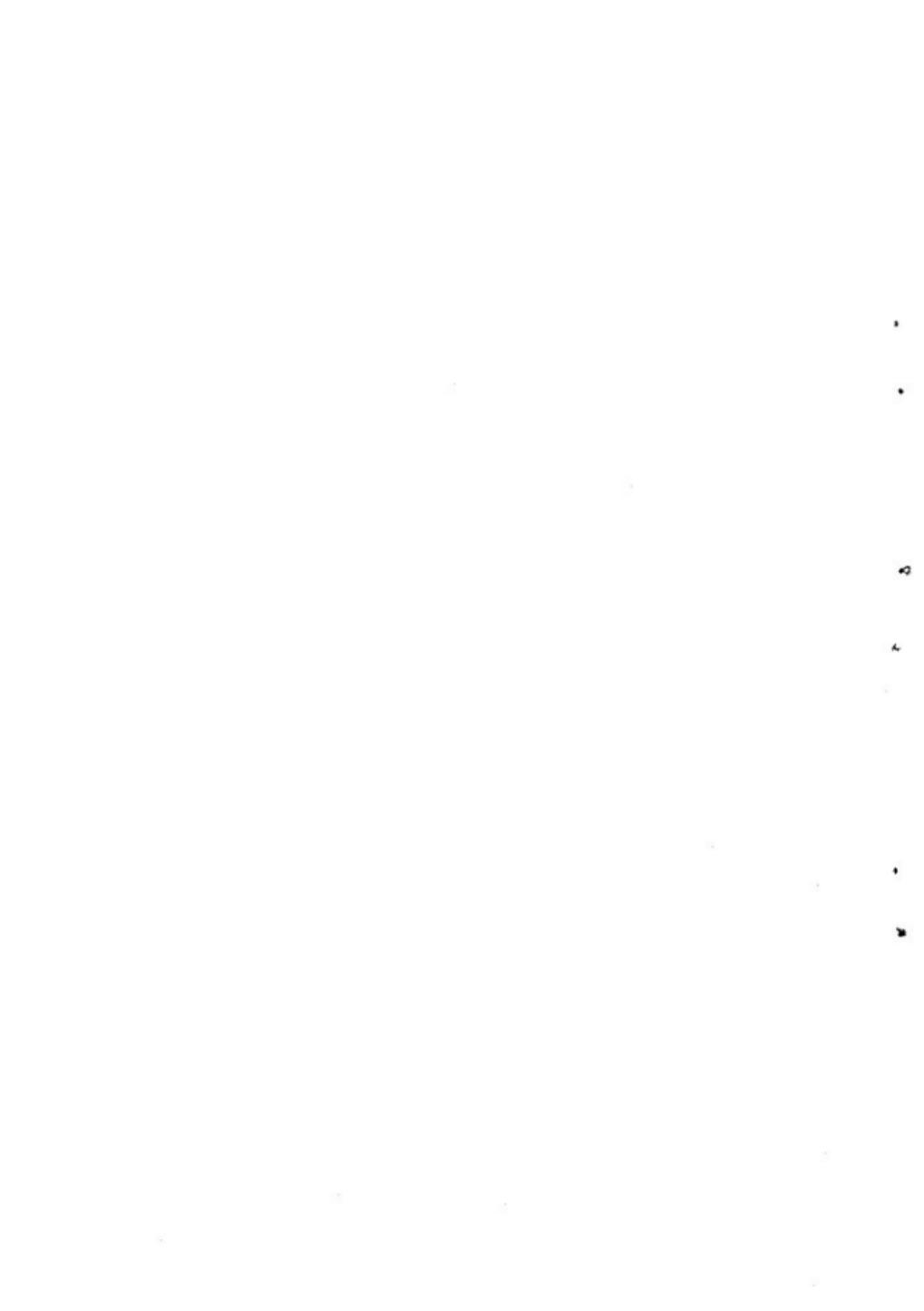
4

5

6



図 版





(1) A 地点近景(北より)



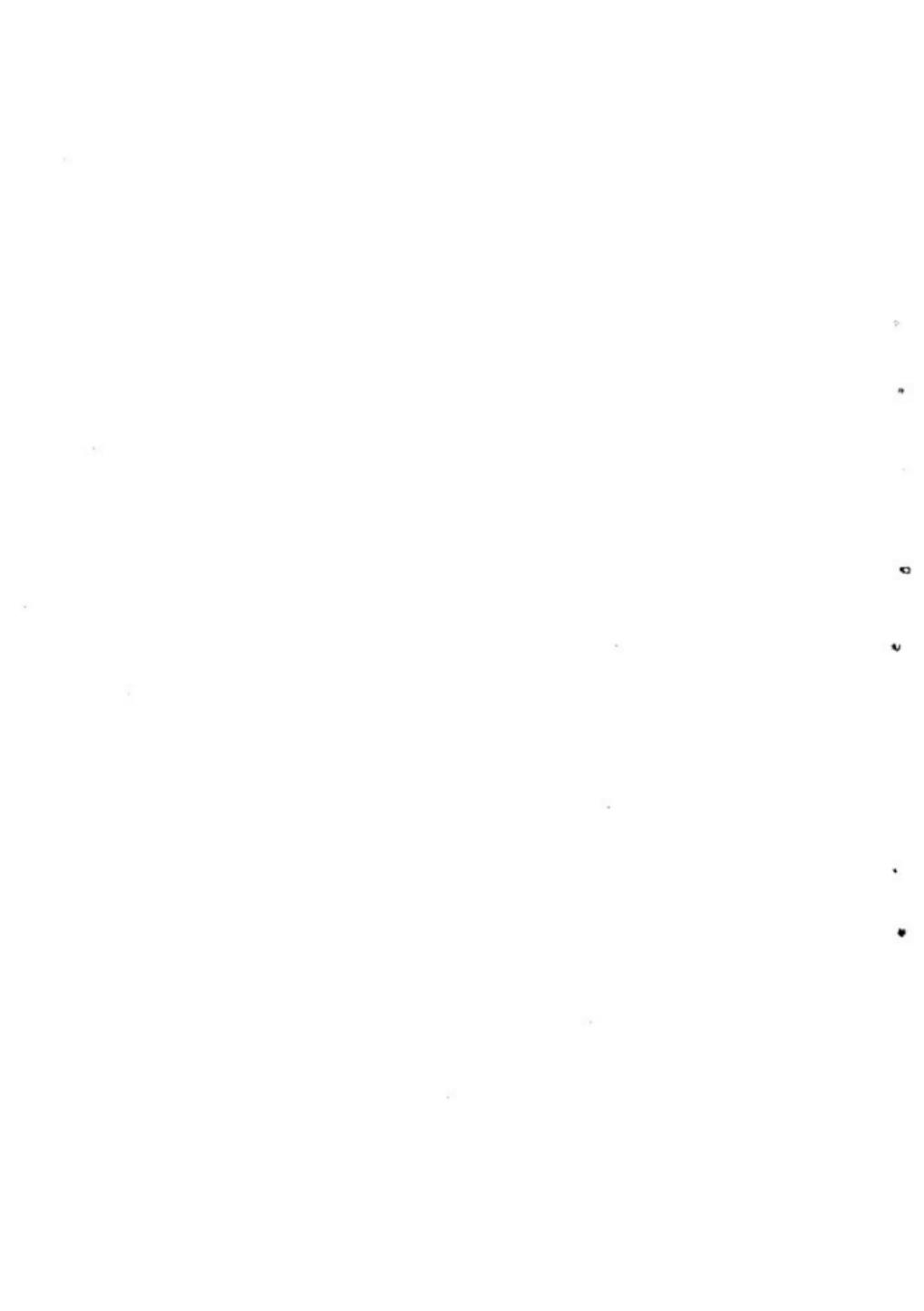
(2) A 地点発掘風景





五十川高木遺跡 A 地点

A地点踏査全景(北より)

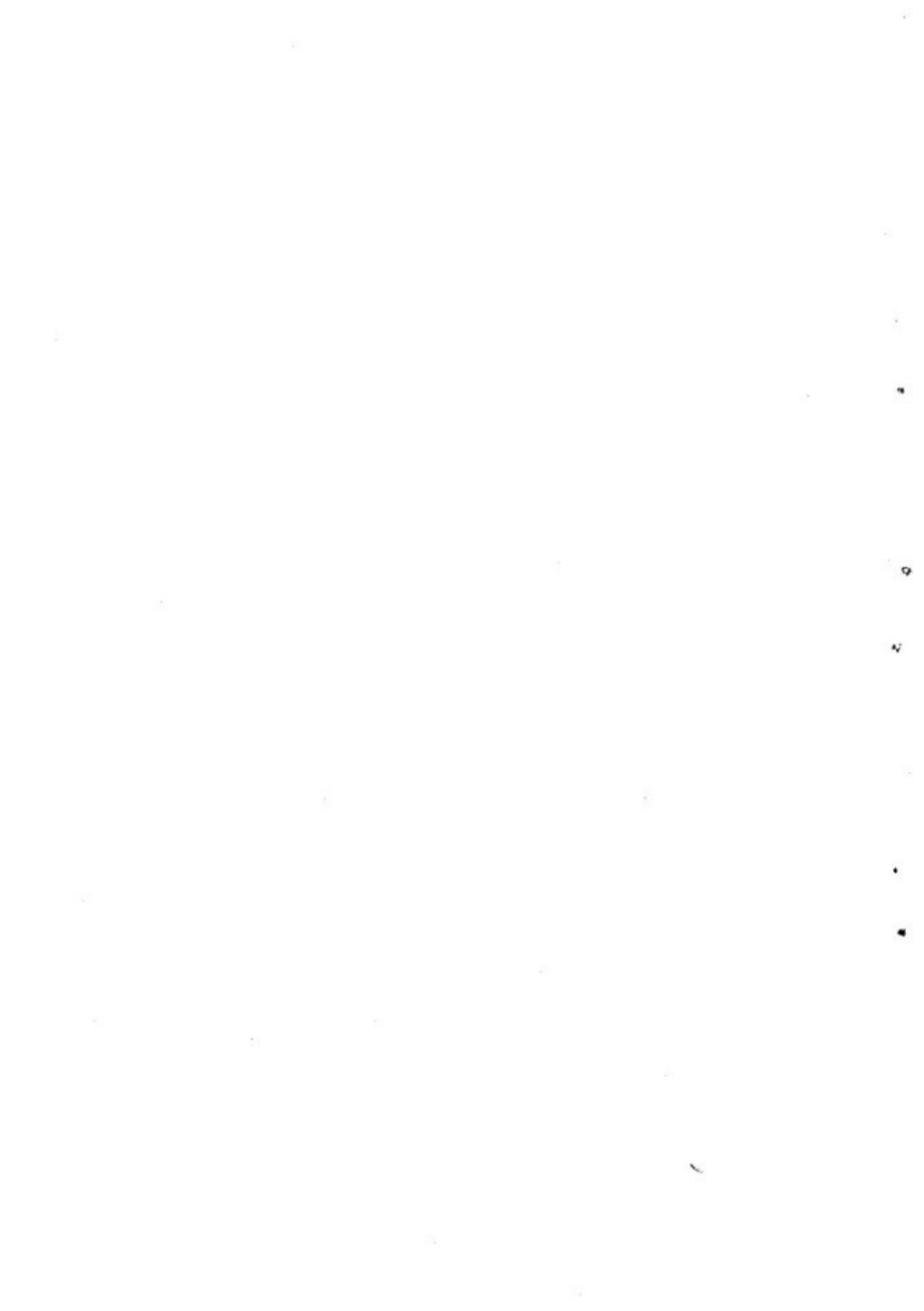


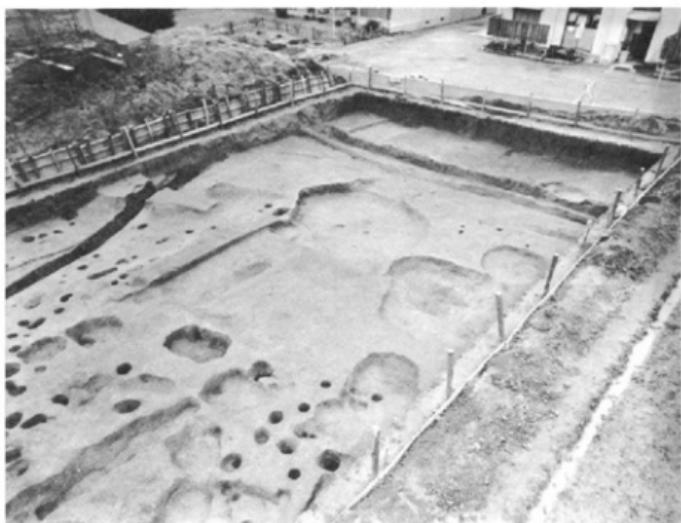


(1) 遺 跡 近 景 (北東より)



(2) 遺 跡 近 景 (北西より)

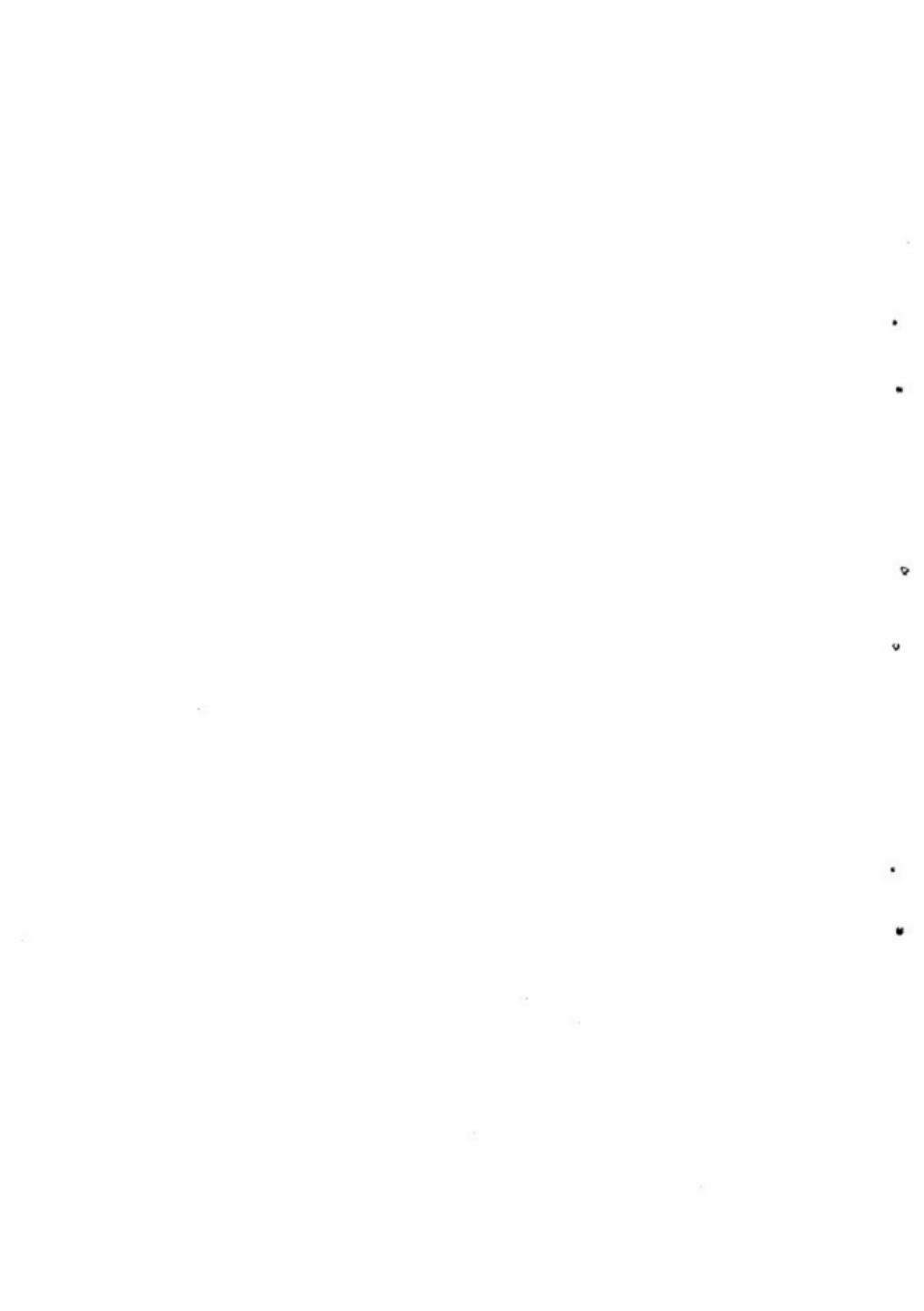




(1) 遺 踪 近 景 (東南より)

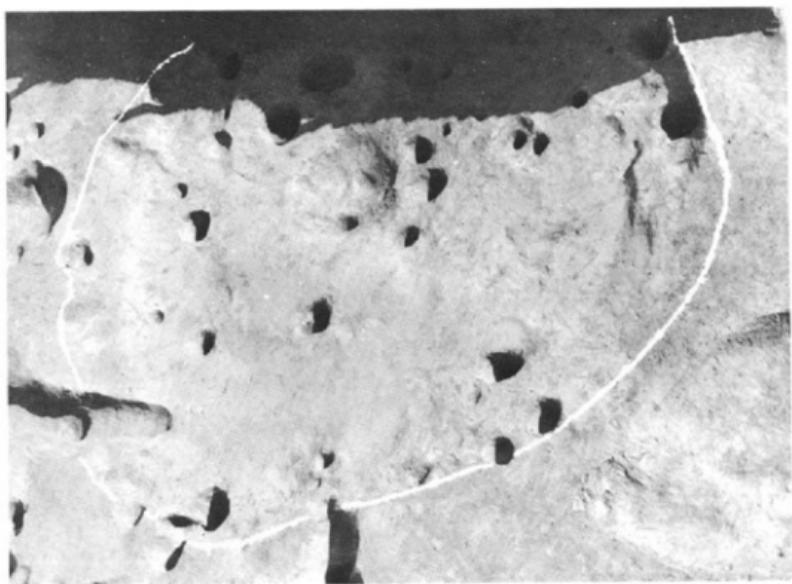


(2) 遺 踪 近 景 (西より)

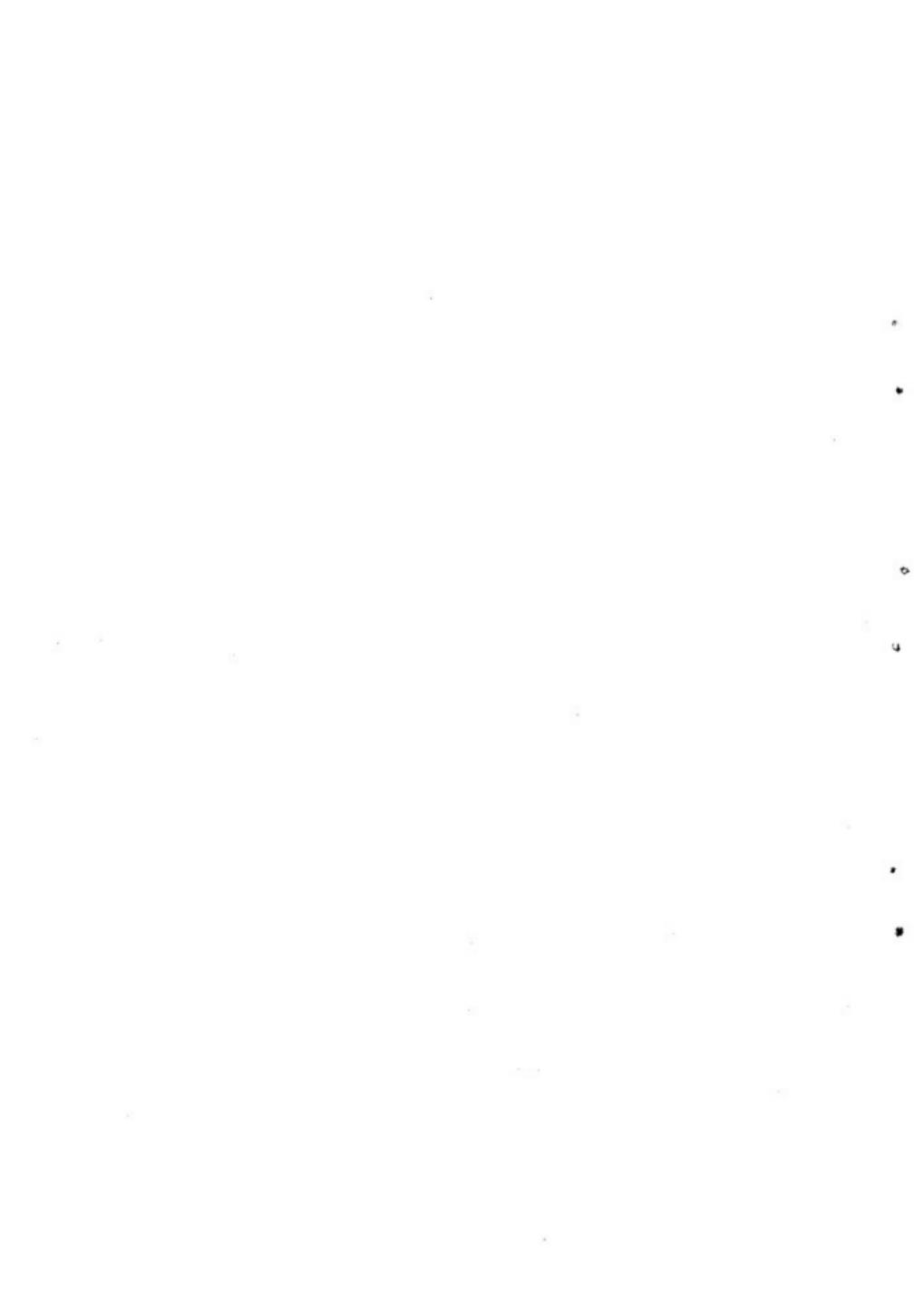


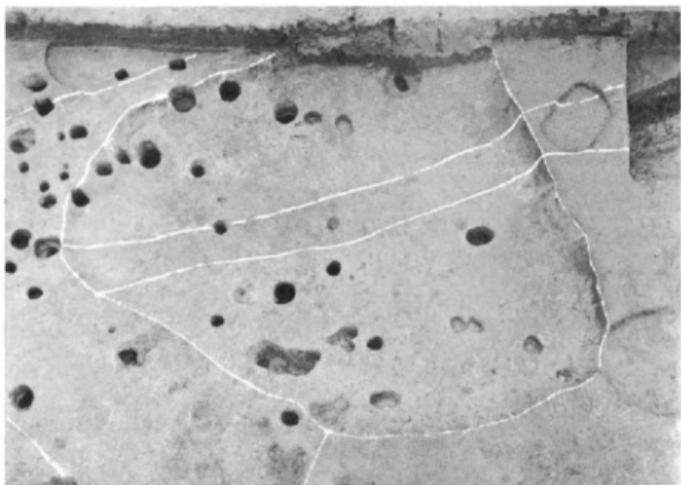


(1) 第 1 号住居址 (南より)



(2) 第 2 号住居址 (西より)

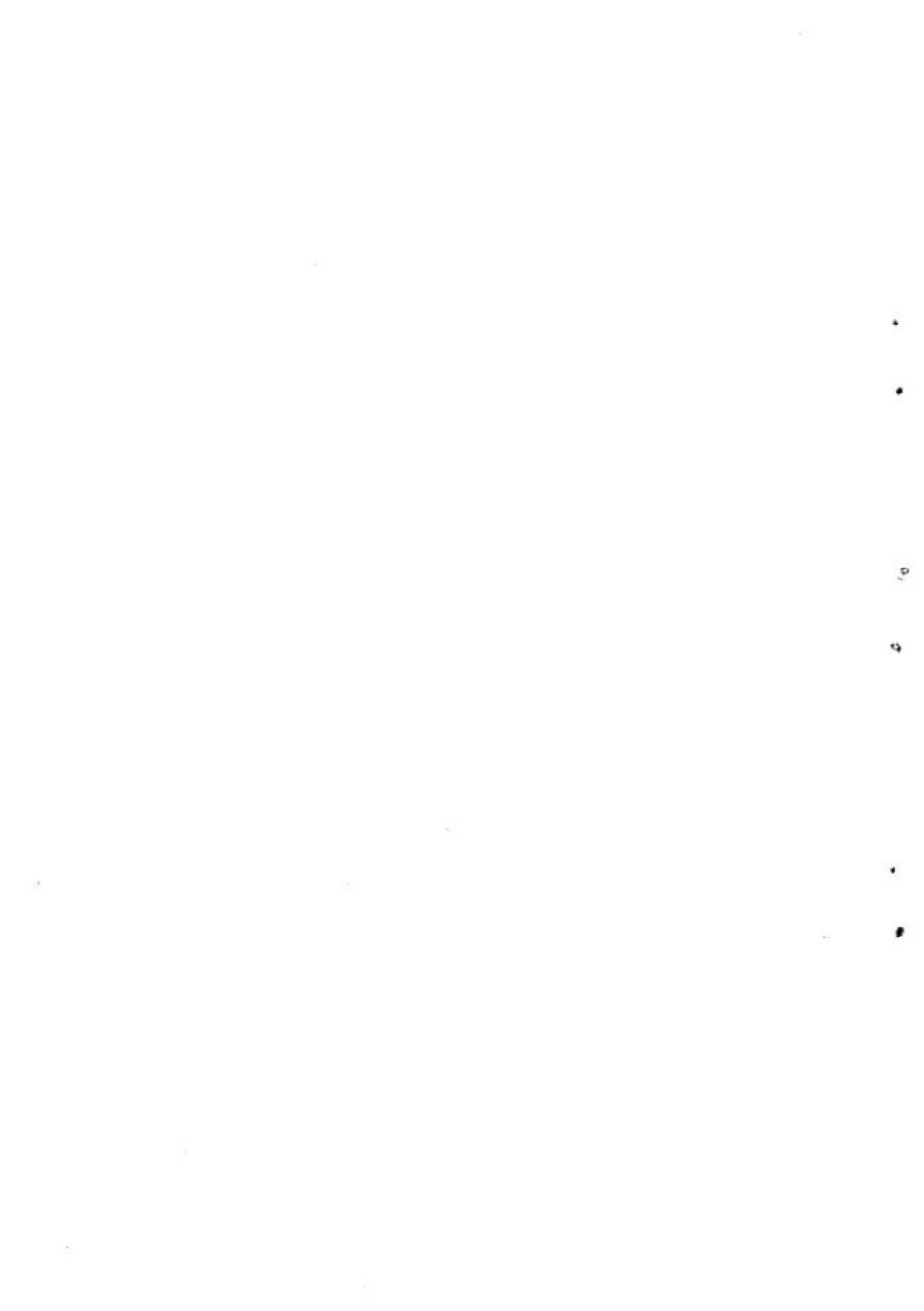


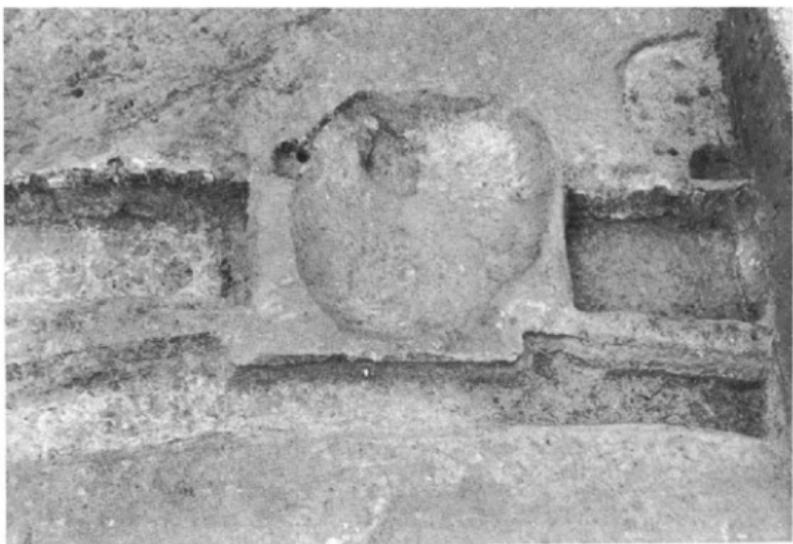


(1) 第3号住居址(東より)



(2) 第3号住居址と第4号溝(北西より)

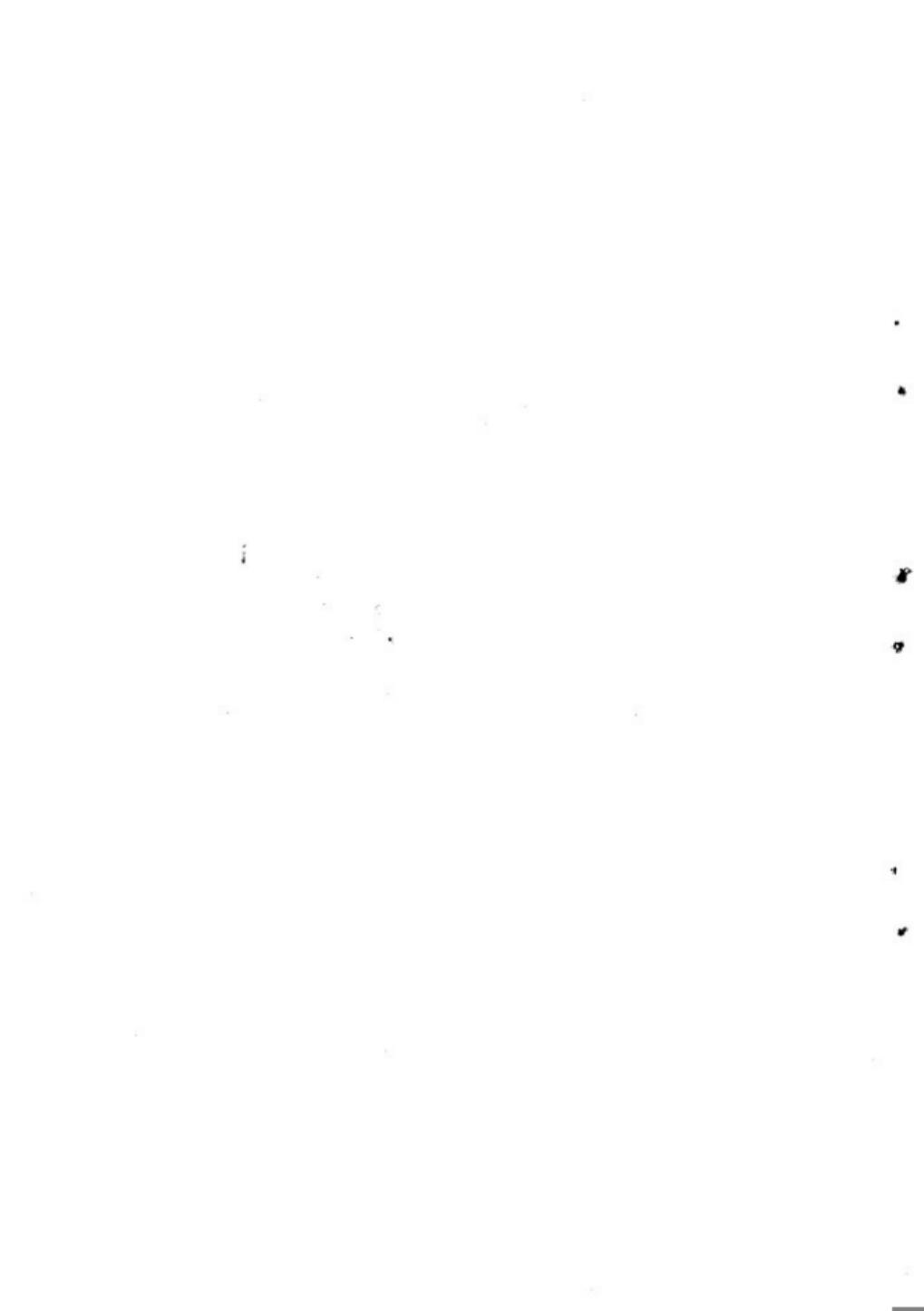




(1) 第1号ピットと第2号、3号溝（南より）



(2) 第4号溝（南より）





(1) 第3号溝西端の状態



(2) 井戸堆積土層断面（西より）

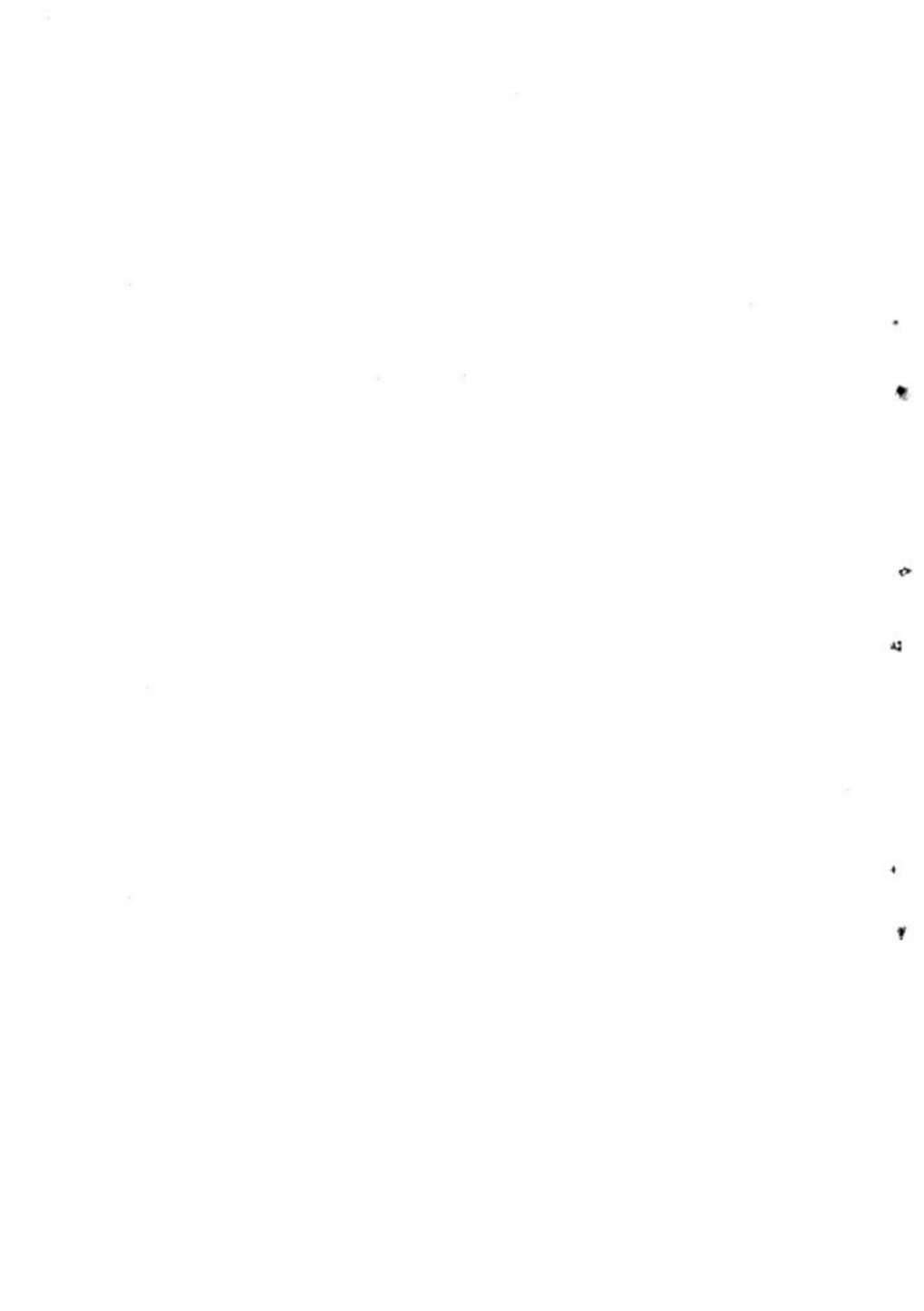




(1) 井戸全景(西より)



(2) 井戸桿組状態

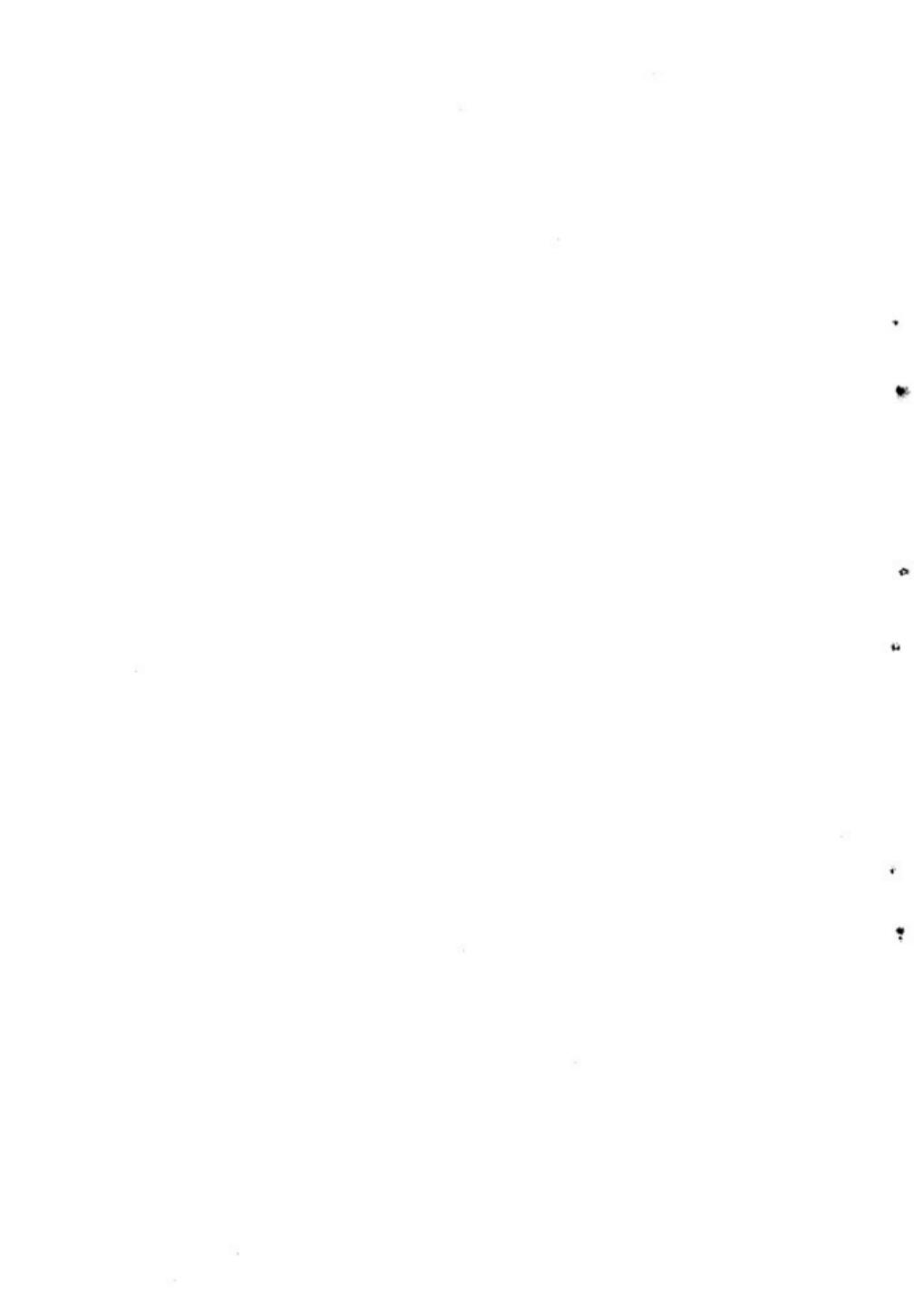




(1) 第3号住居址遺物出土状態

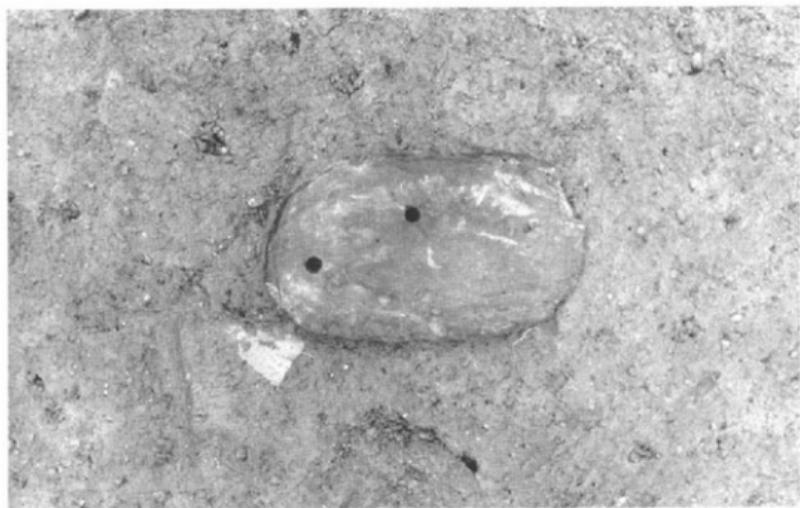


(2) 古銭出土状態

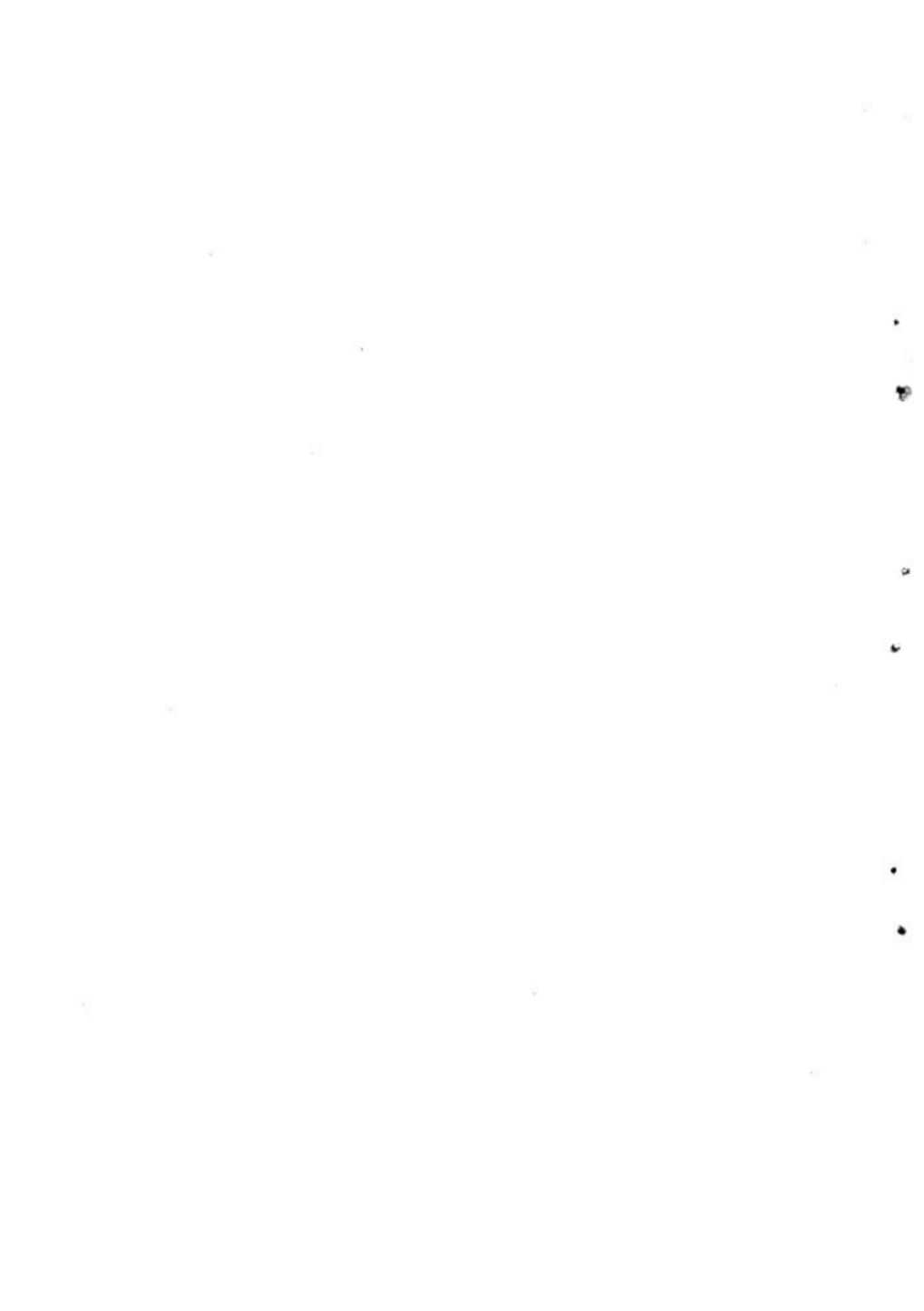


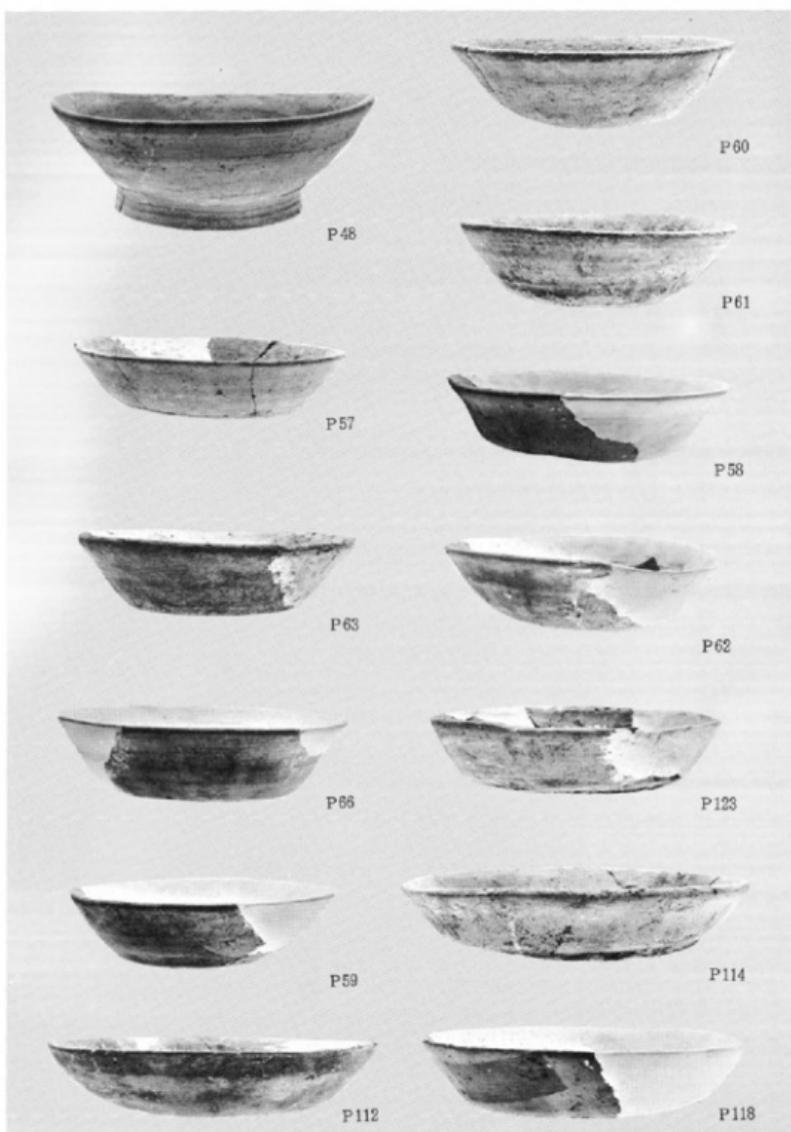


(1) 第4号ピット青磁碗出土状態



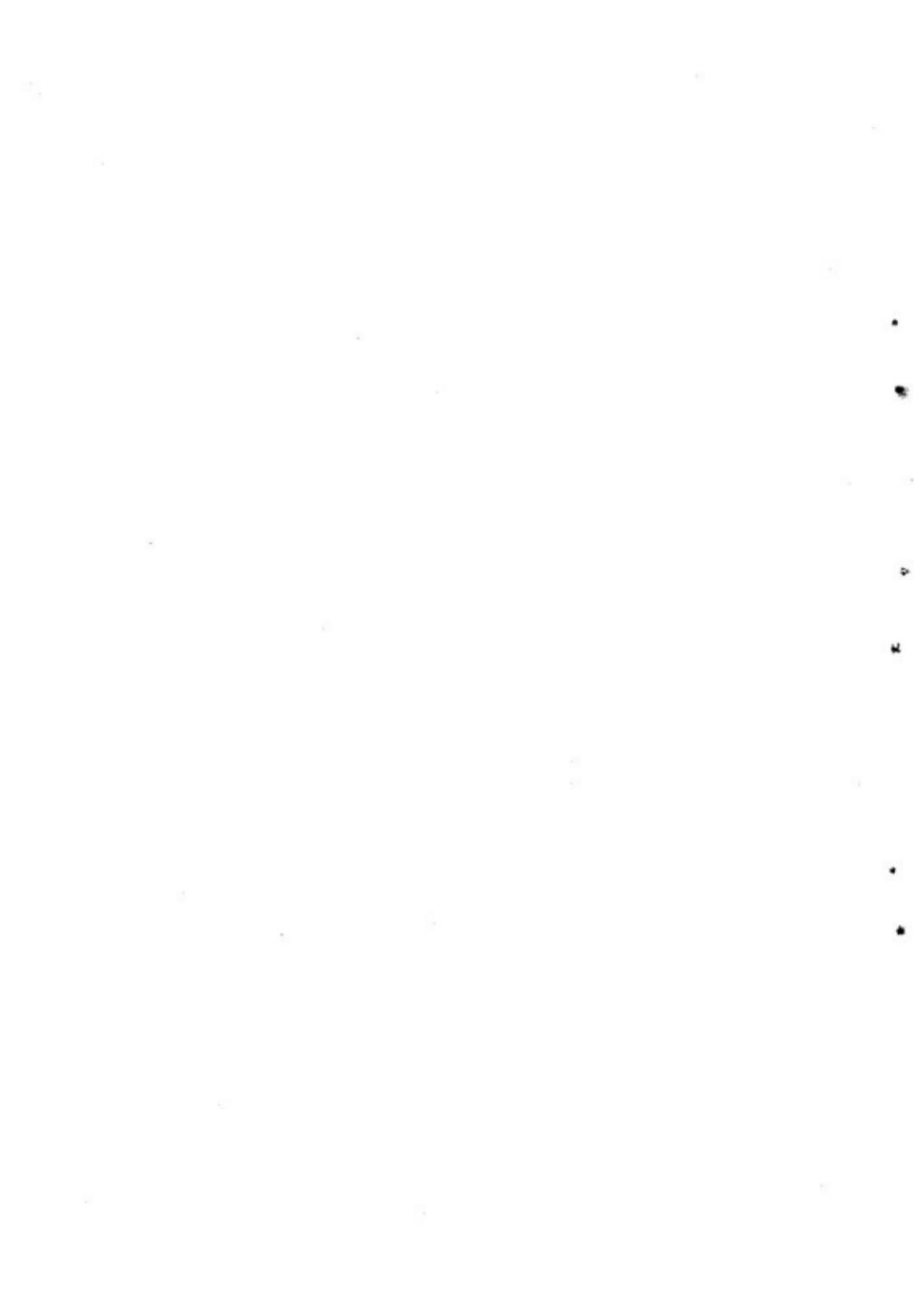
(2) C-37・38区 3層滑石製品出土状態

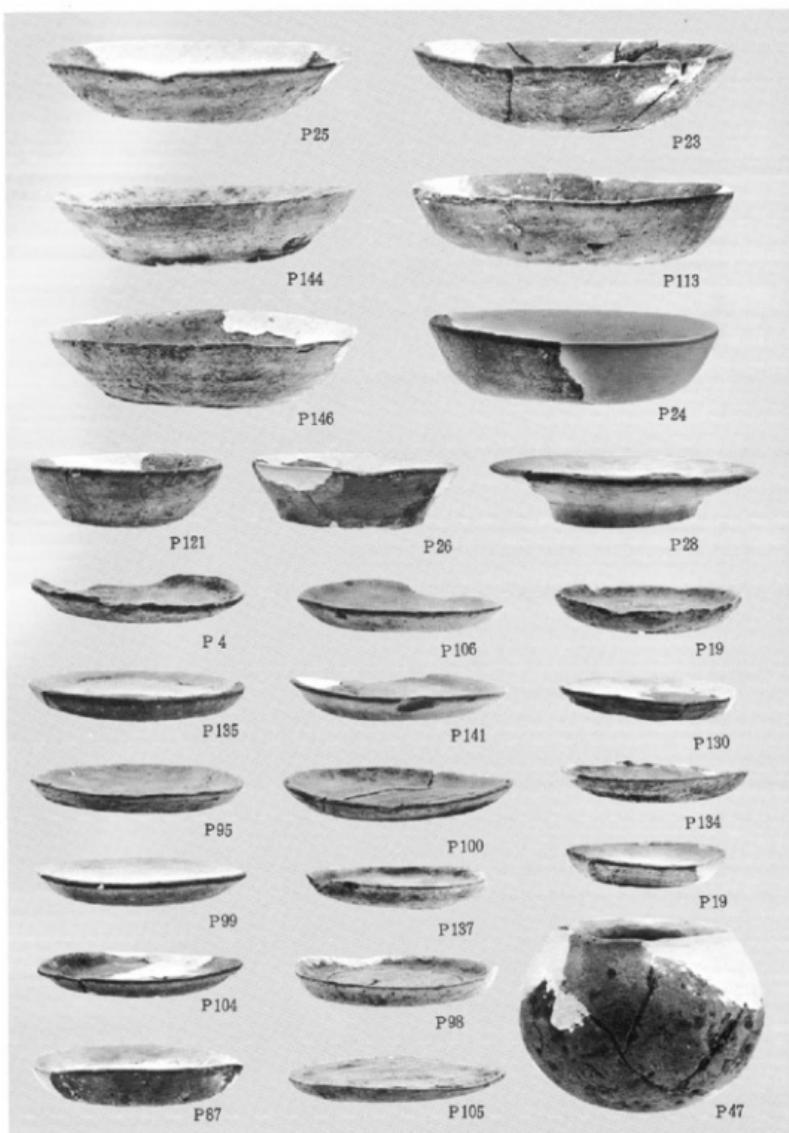




出土土師器坏類

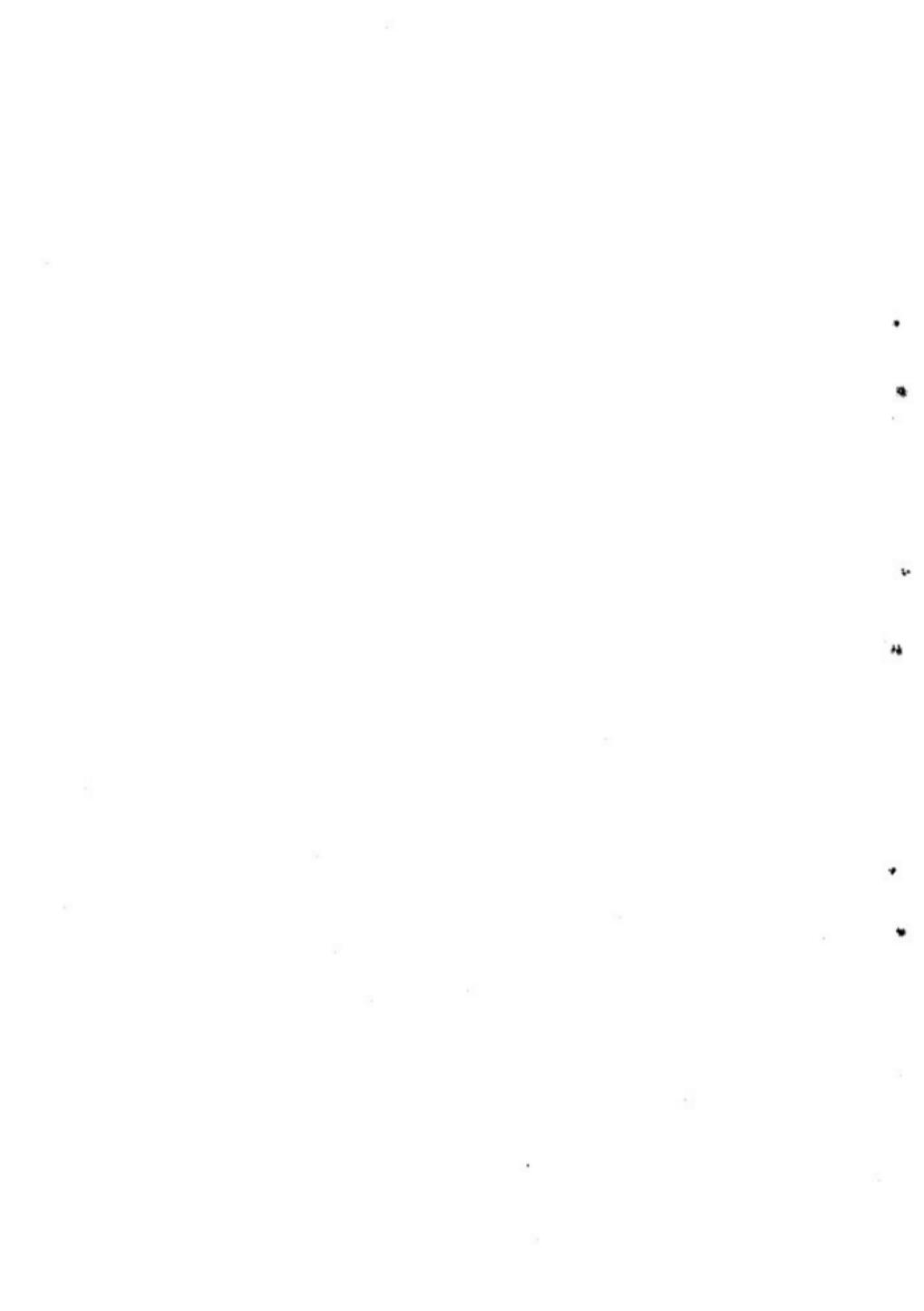
(縮尺1/2)

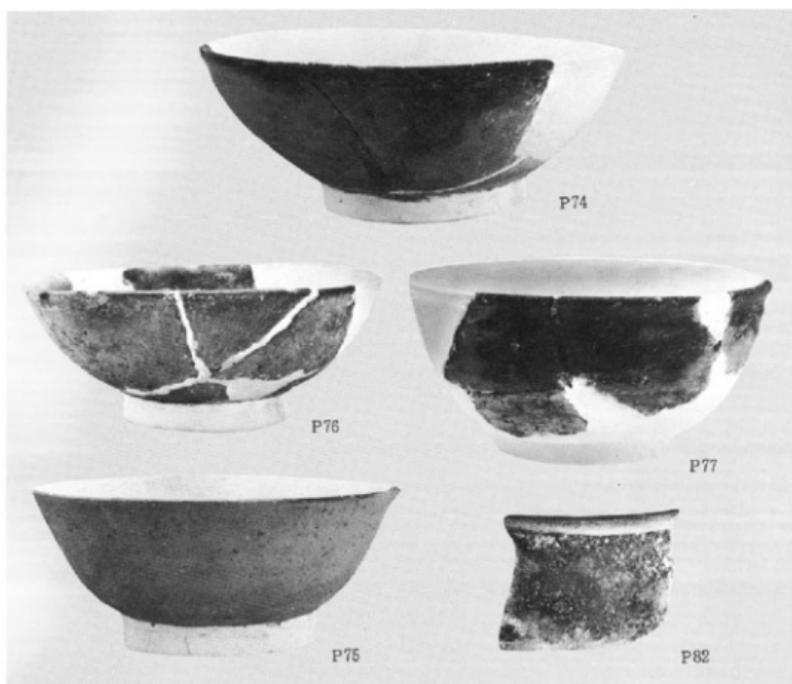




出土土師器環・皿・壺

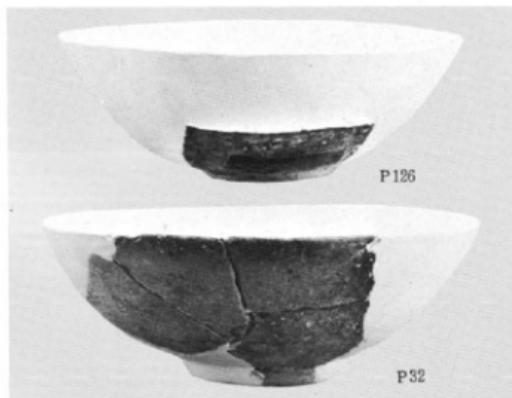
(縮尺 1/2)





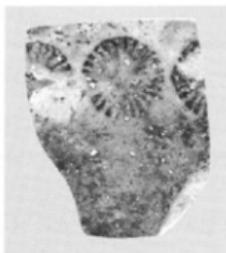
(1) 黒色土器

(縮尺 P82は2/3, 他1/2)

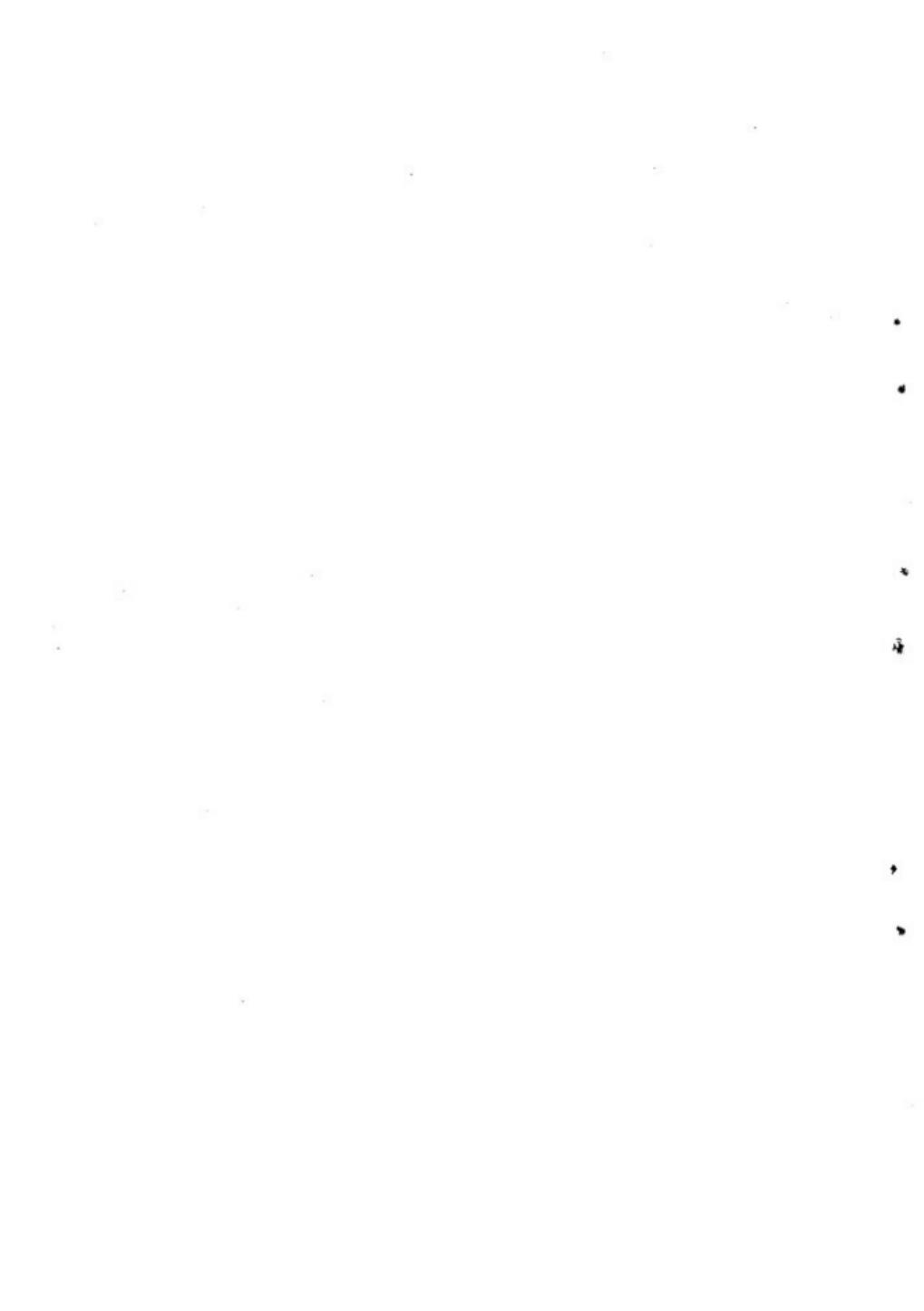


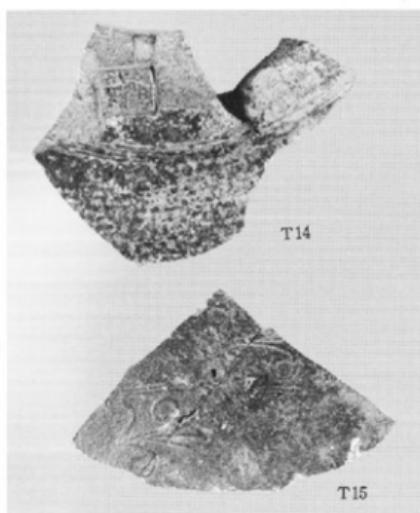
(2) 瓦器

(縮尺1/2)

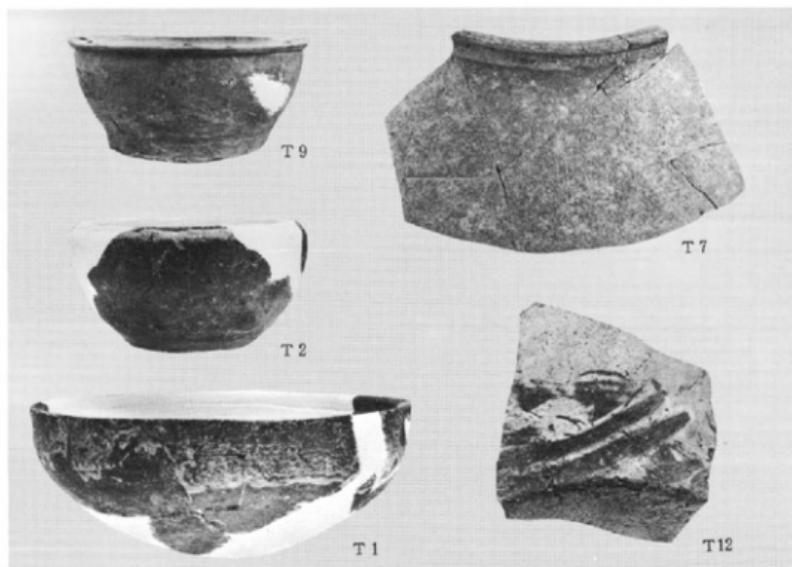


(3) 火鉢 (縮尺1/2)





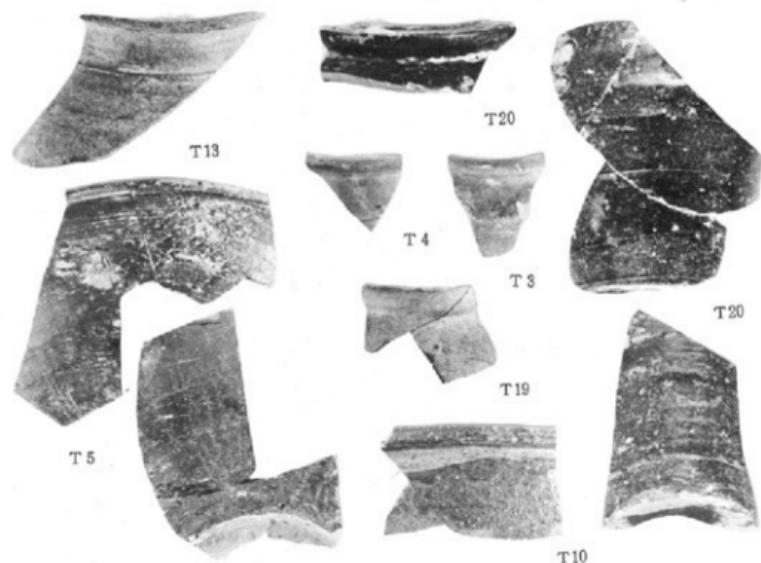
拡大 (1.1倍)



出土陶器 (I)

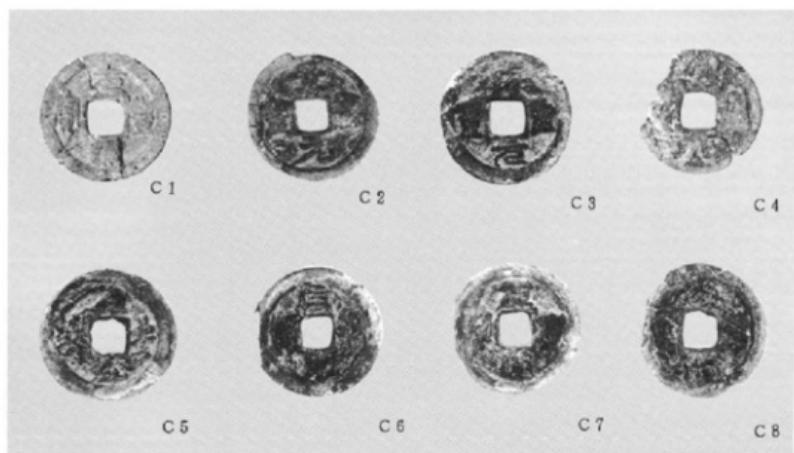
(縮尺 1/3)





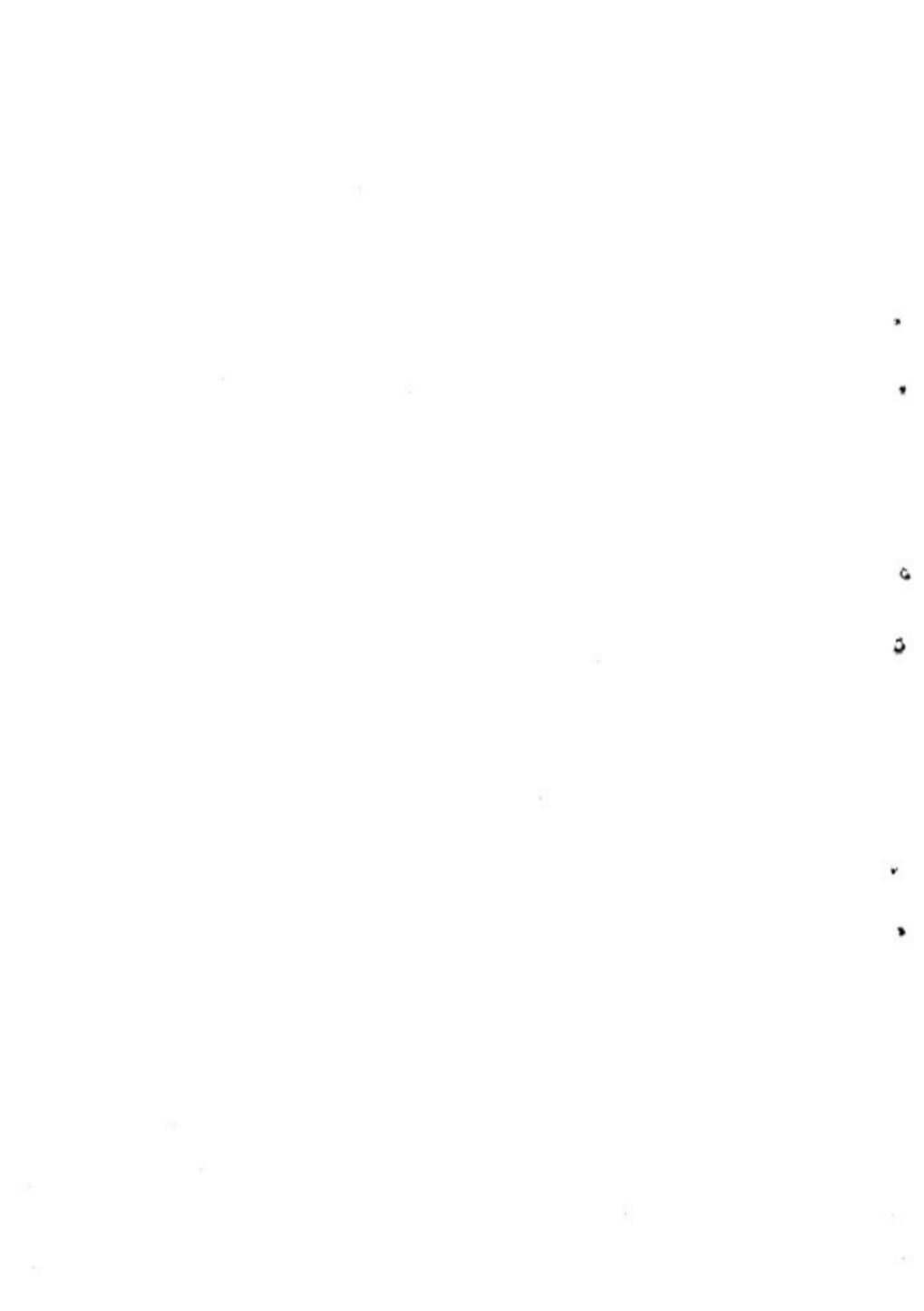
(1) 出土陶器 (II)

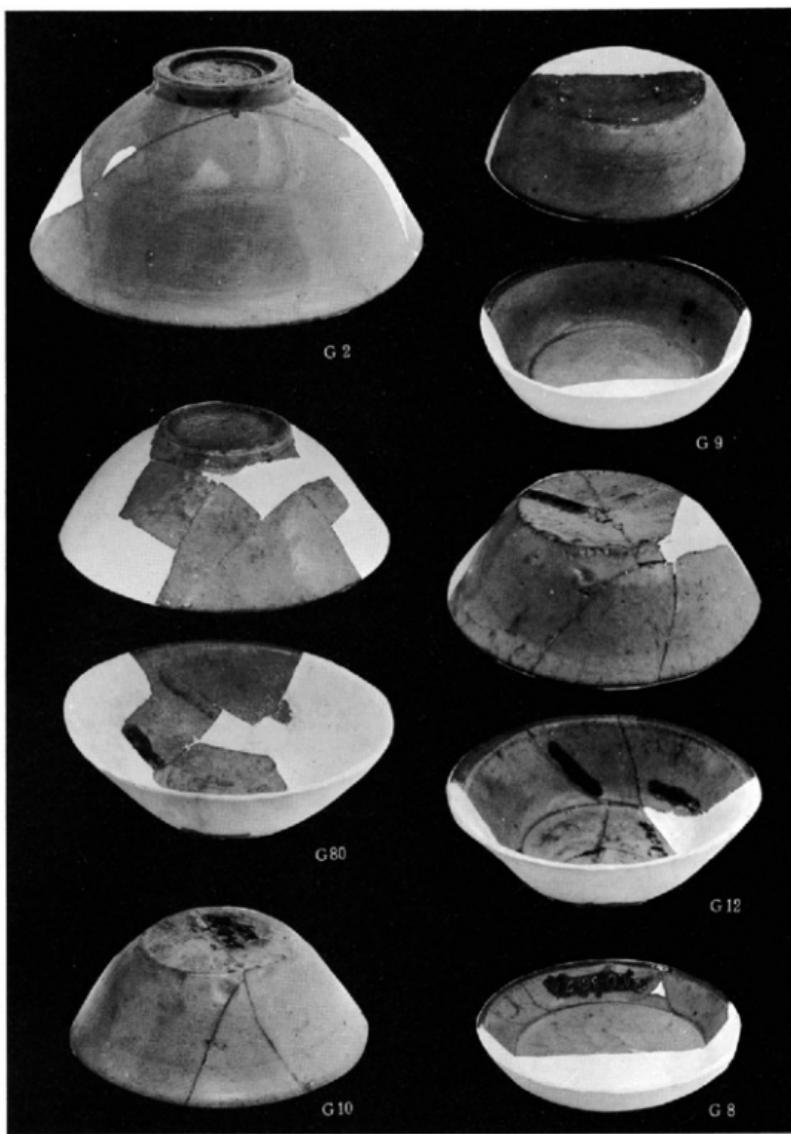
(縮尺1/2)



(2) 出土古錢

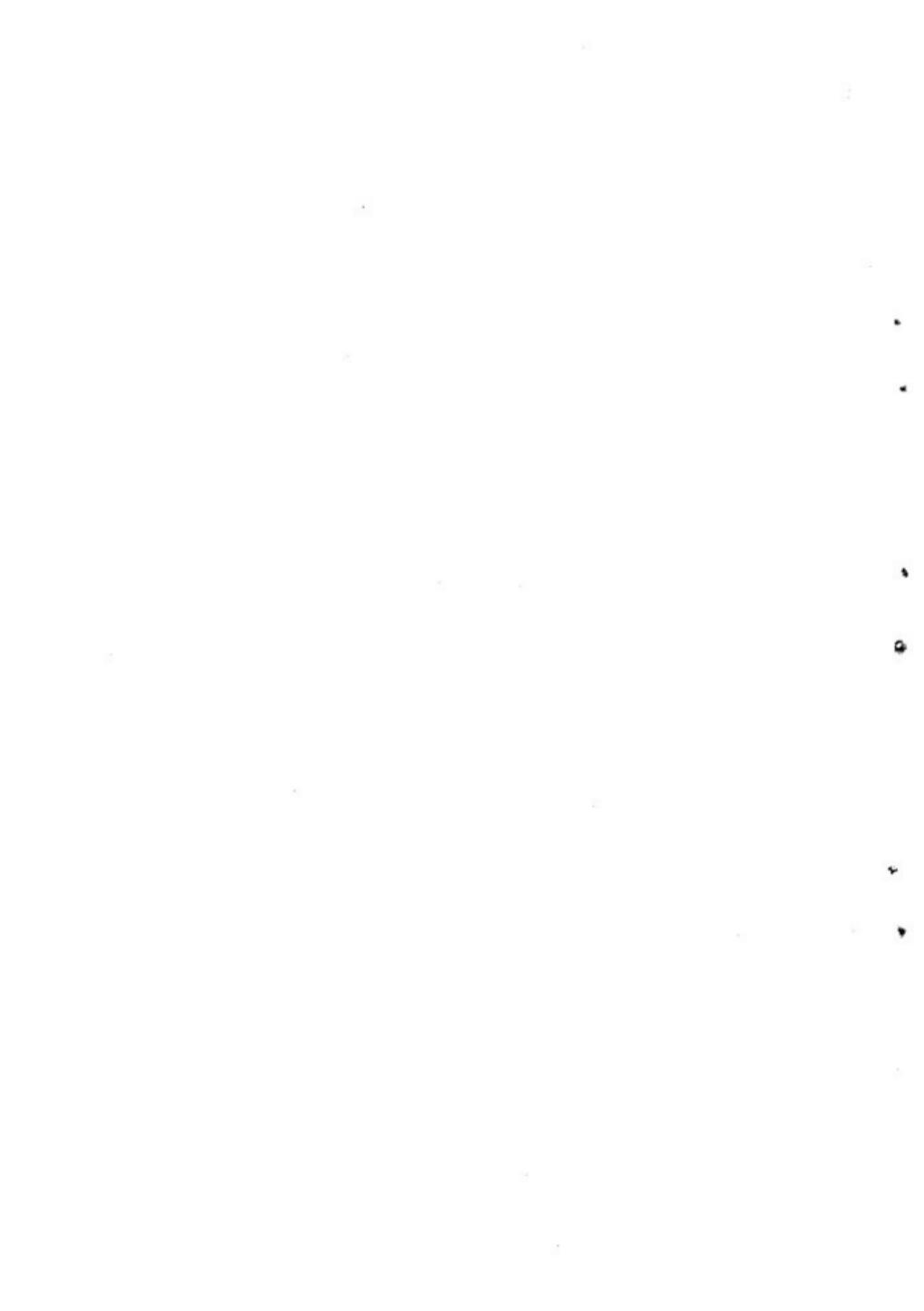
(実大)

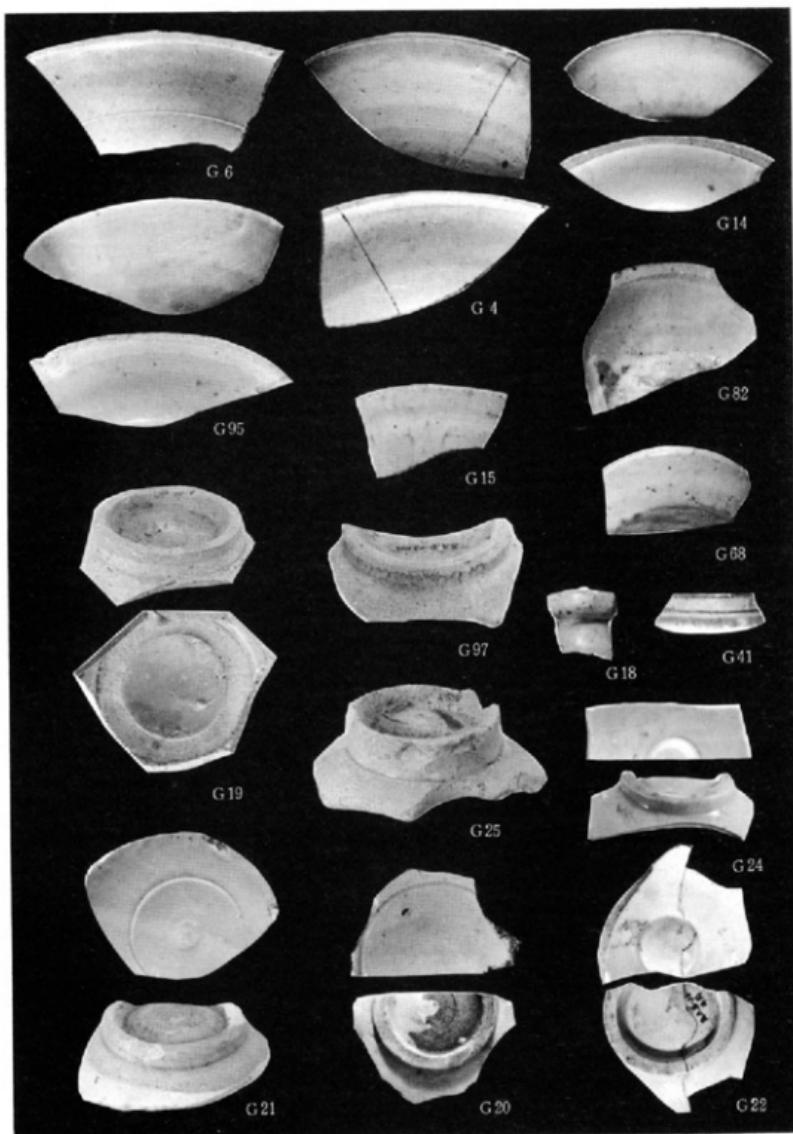




白磁類 (I)

(縮尺 1/2)





白 磁 類 (II)

(縮尺 1/2)

6

7

8

9

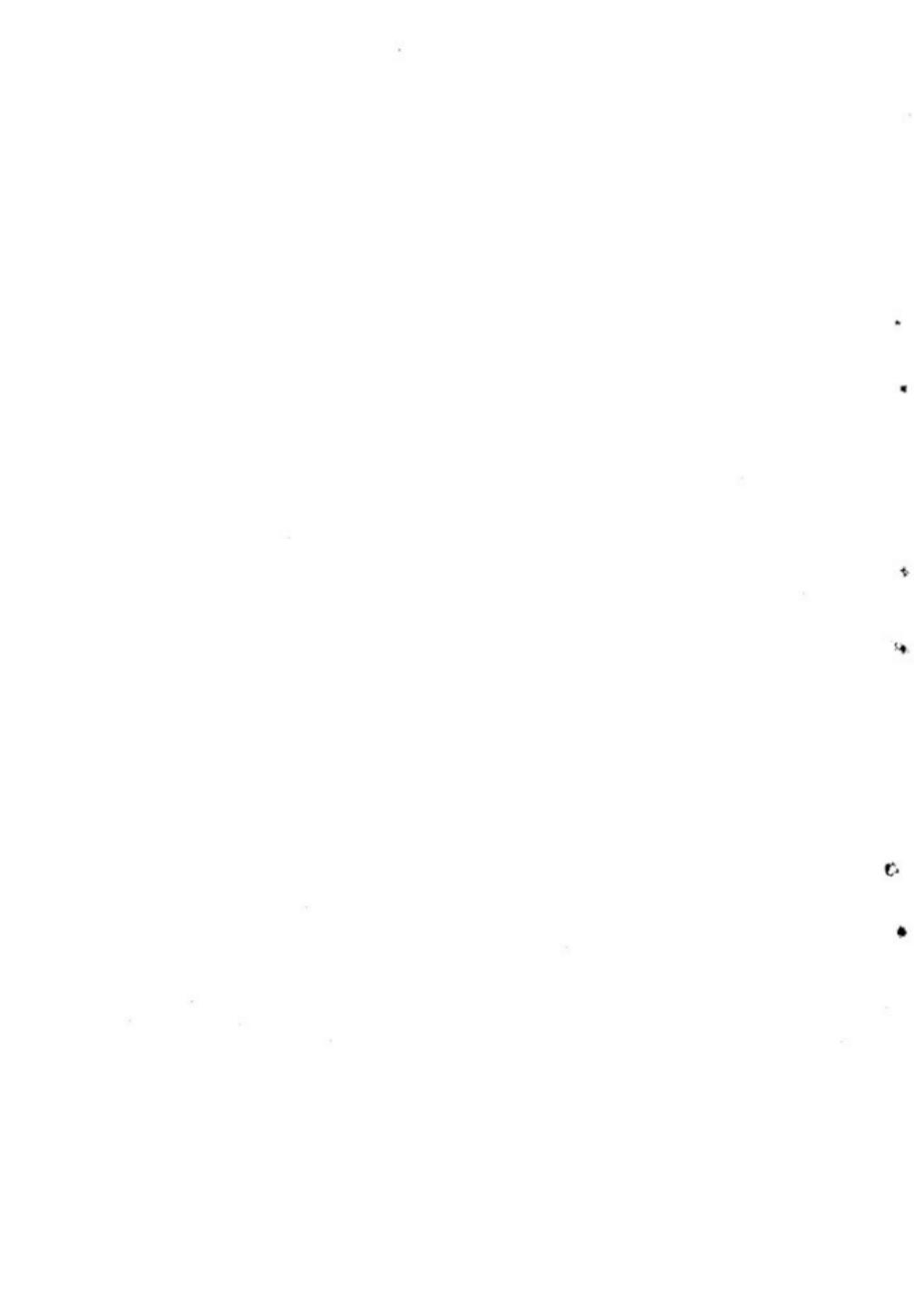
10

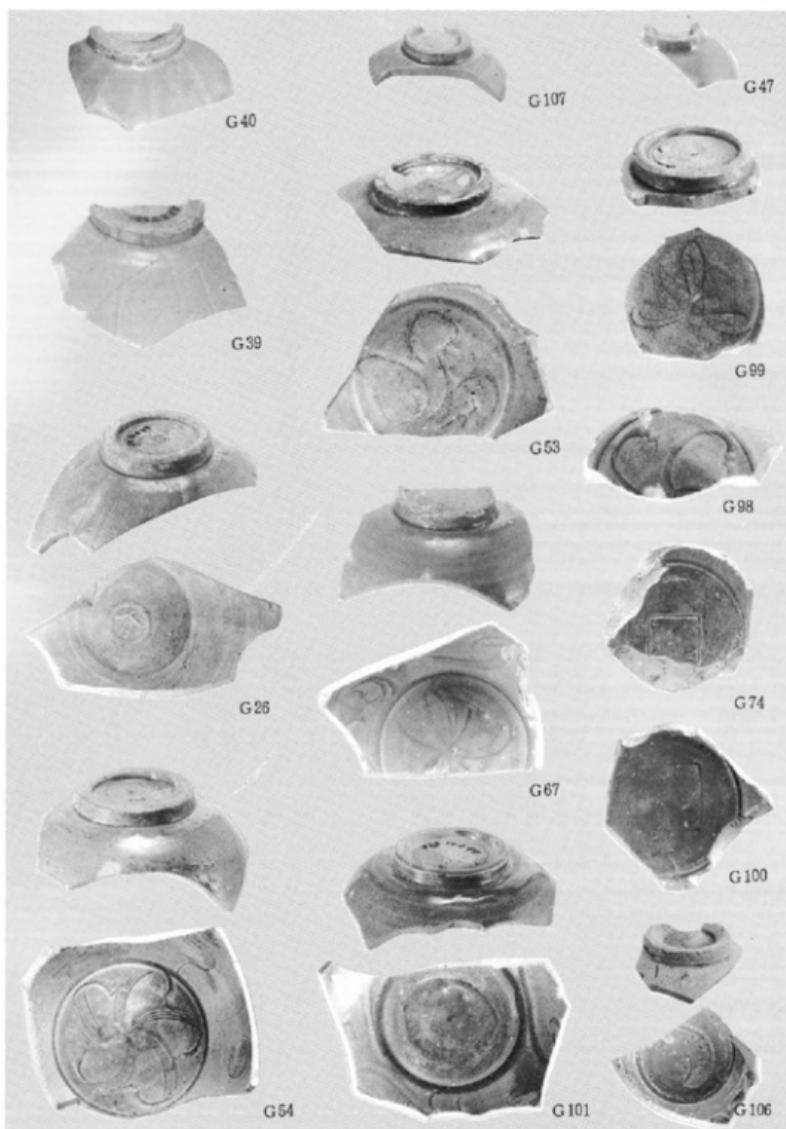
11



青磁碗 (I)

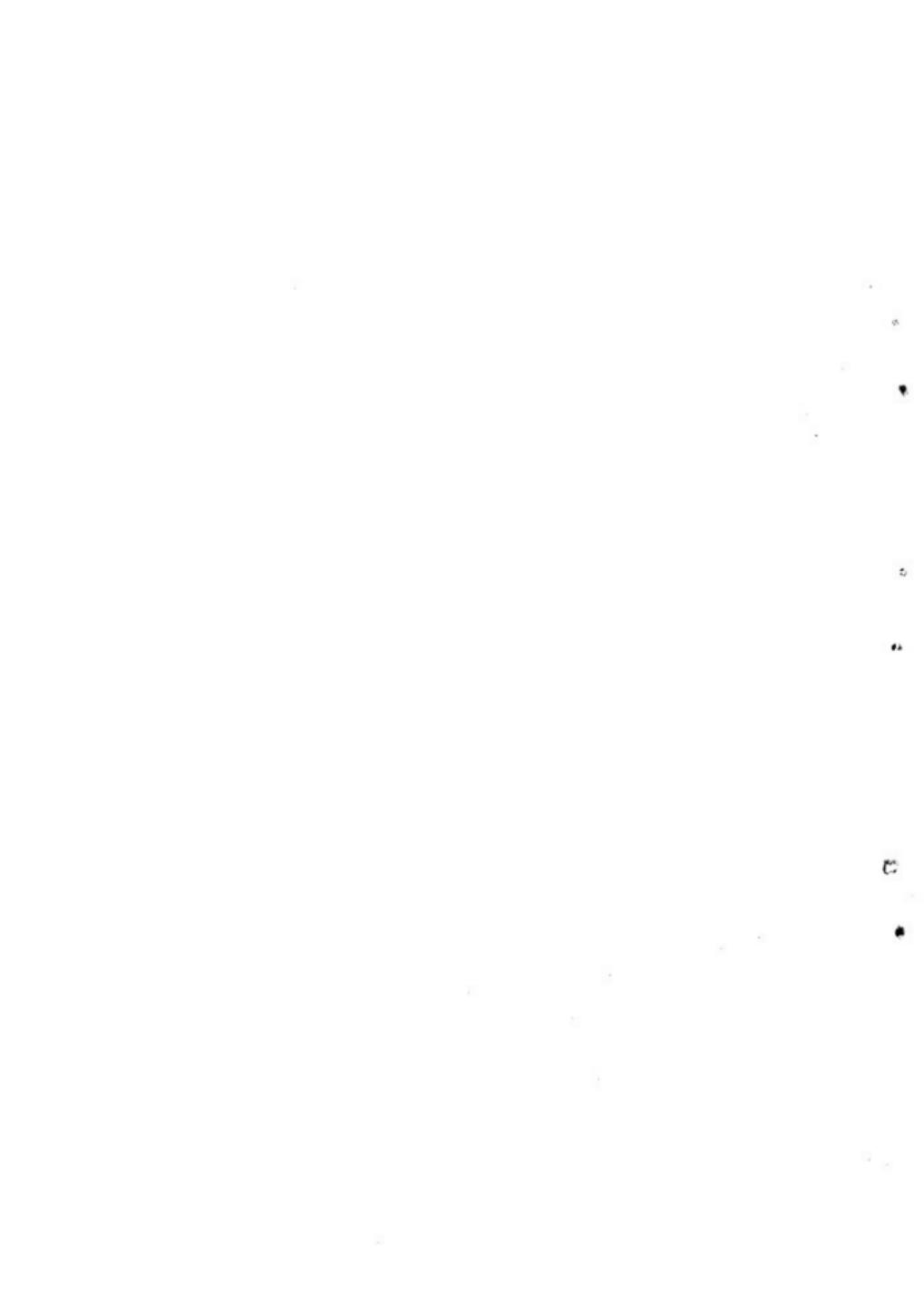
(縮尺2/5)

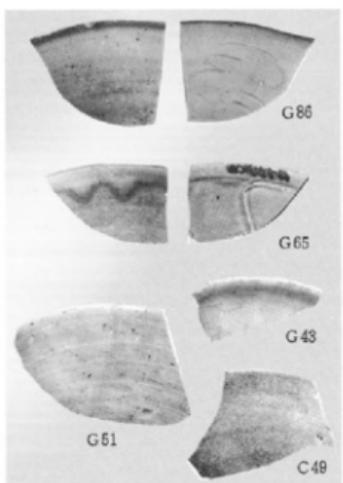




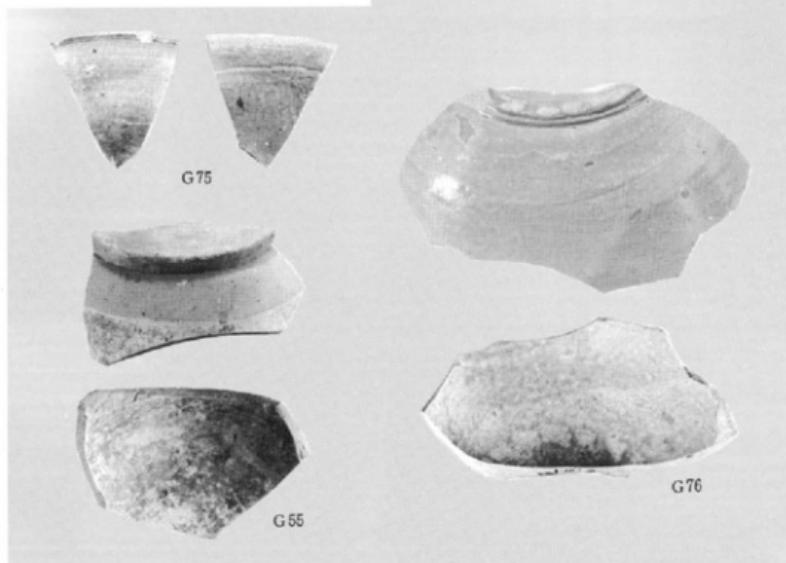
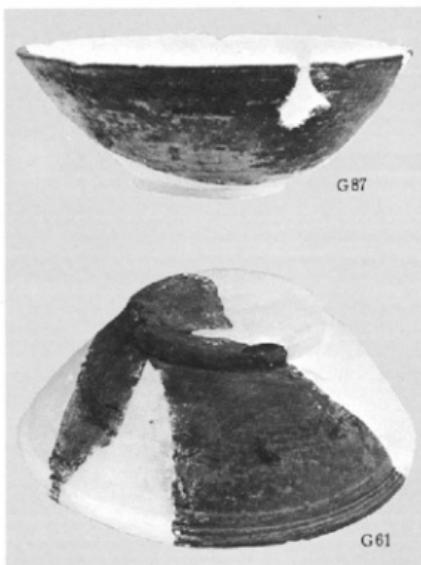
青 磁 碗 (II)

(縮尺 1/3)



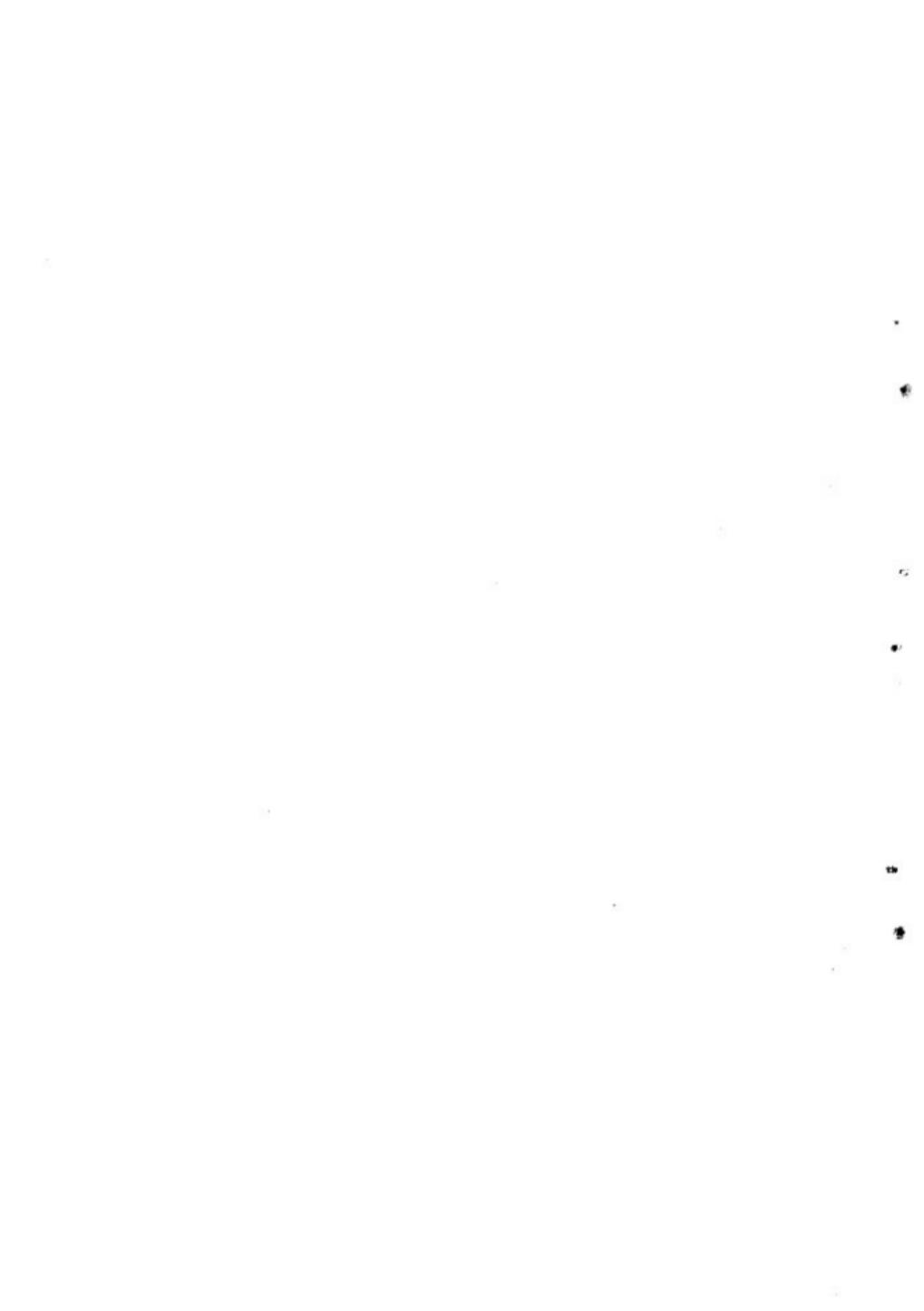


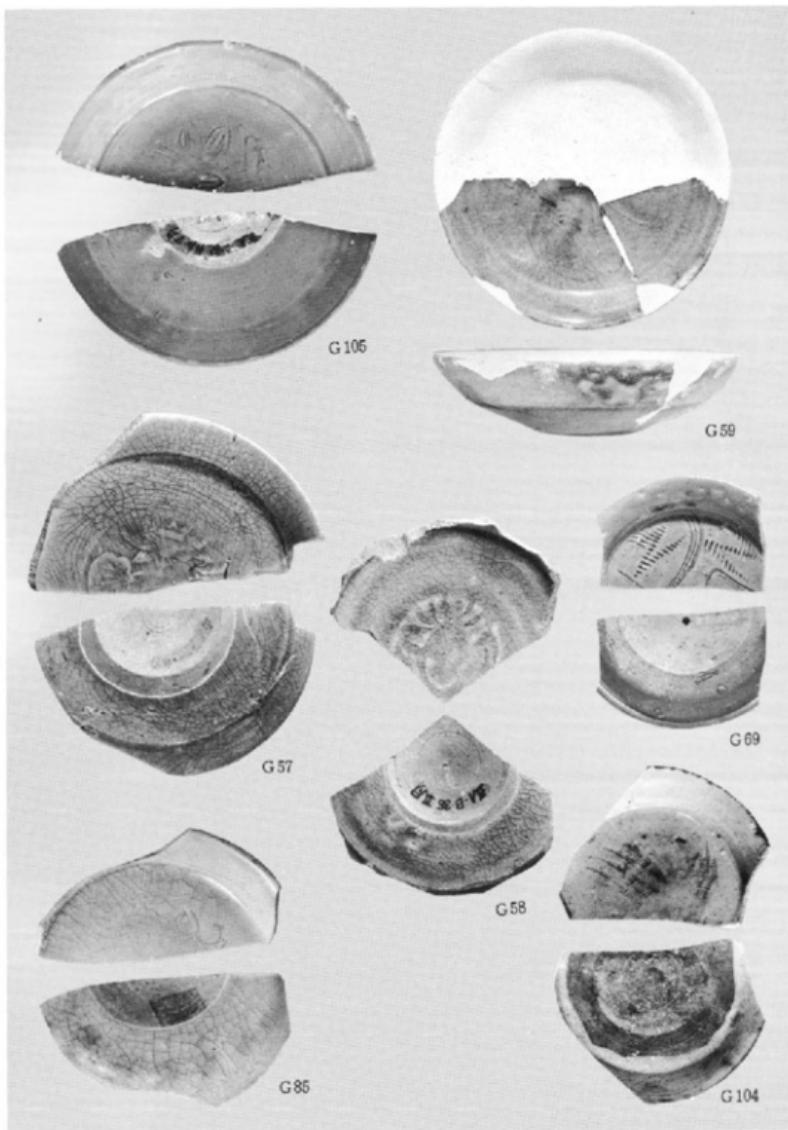
(1) 出土青磁 (縮尺1/3)



(2) 越州窑系青磁

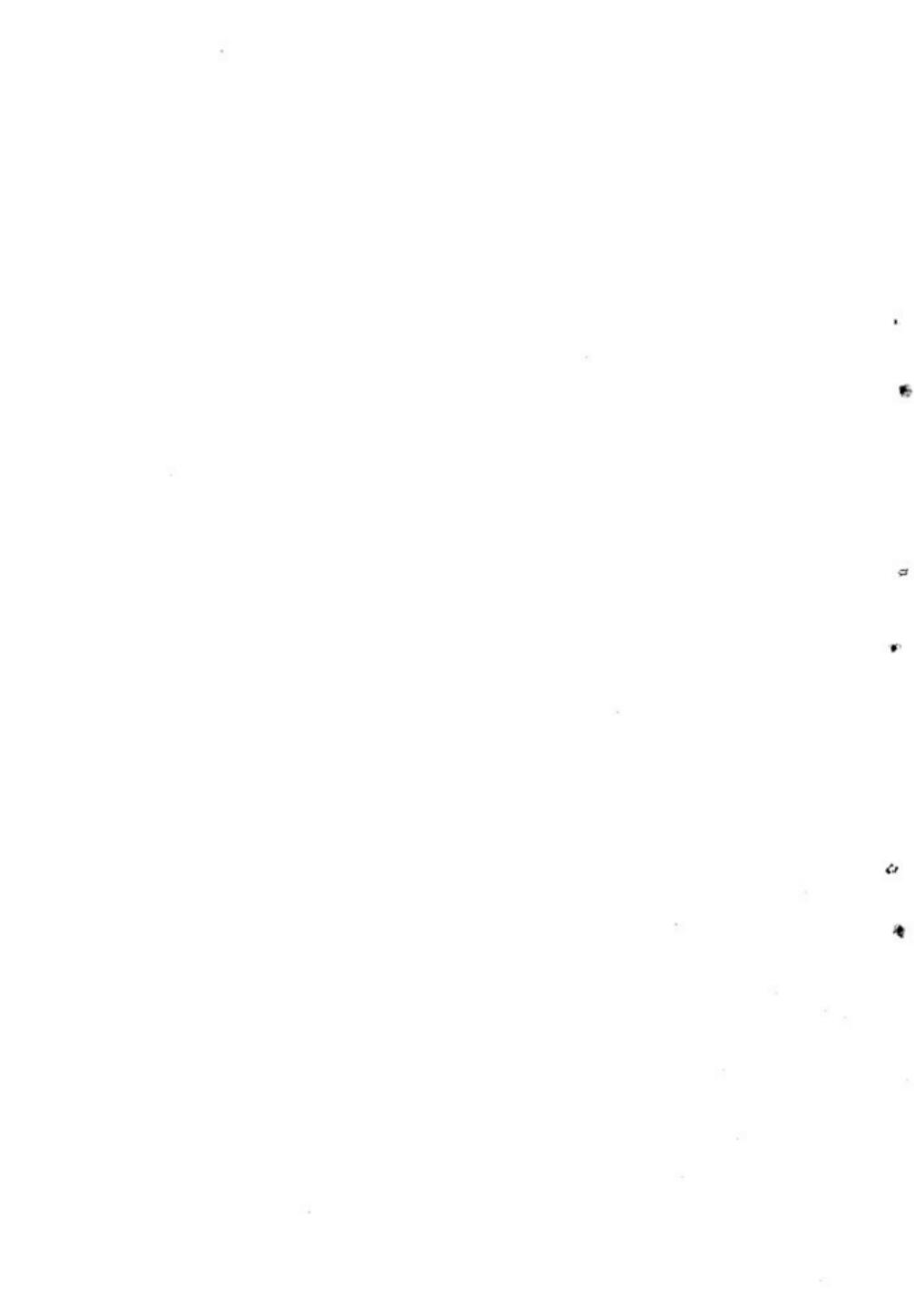
(縮尺1/2)

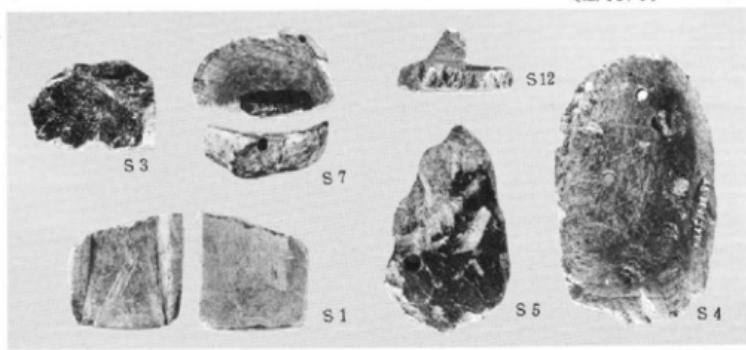
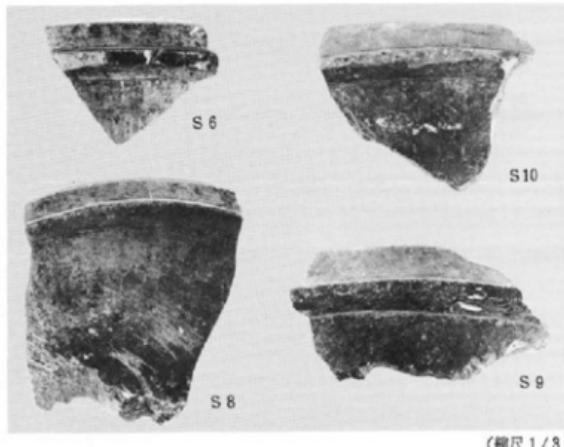
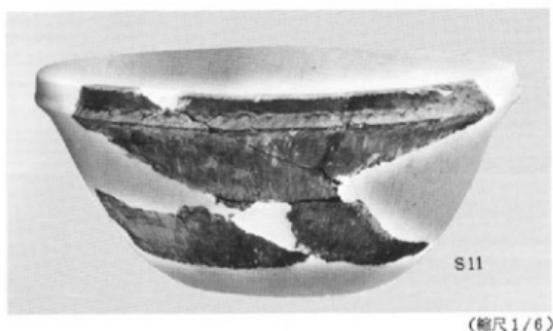




青磁皿類

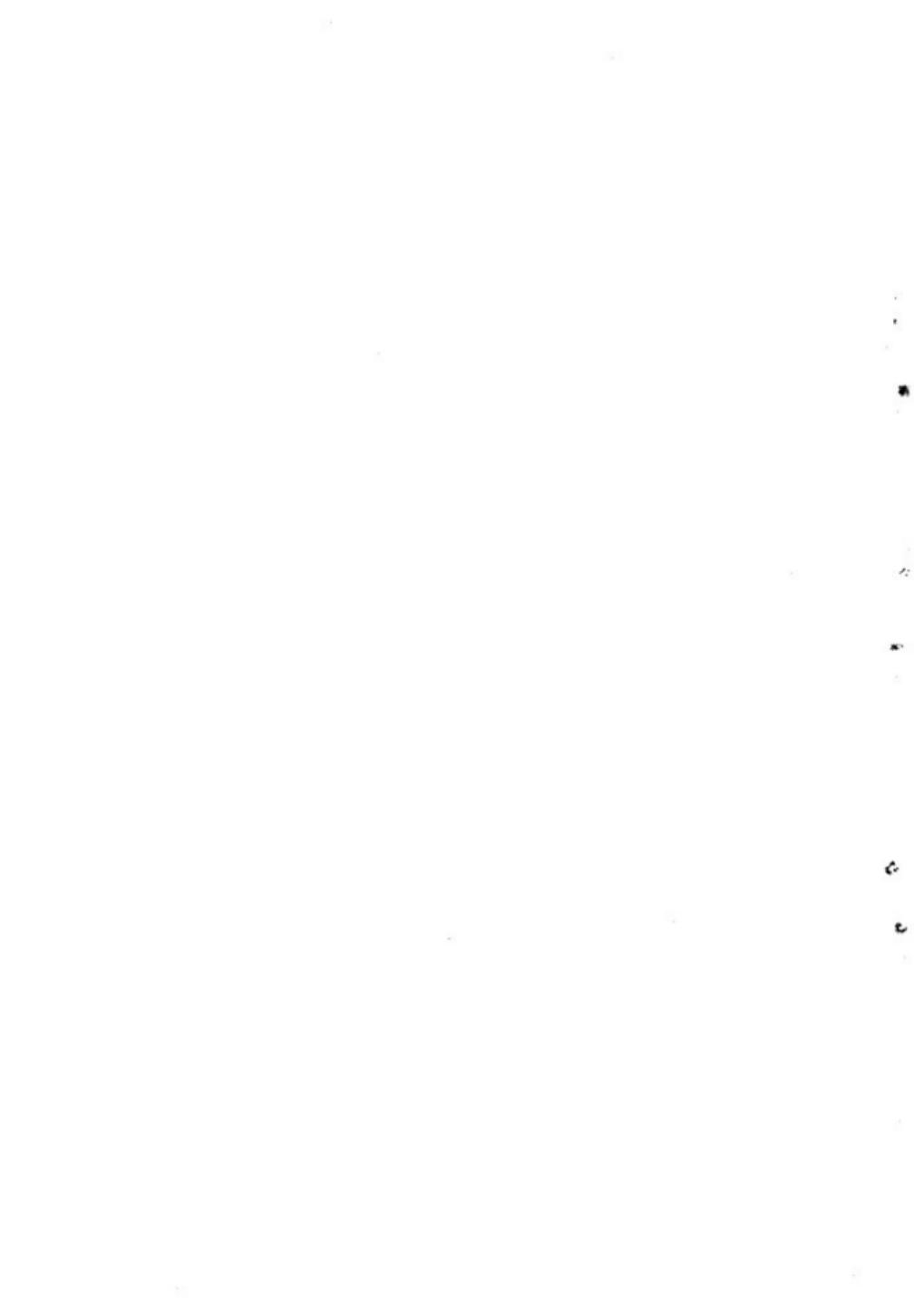
(縮尺1/2)

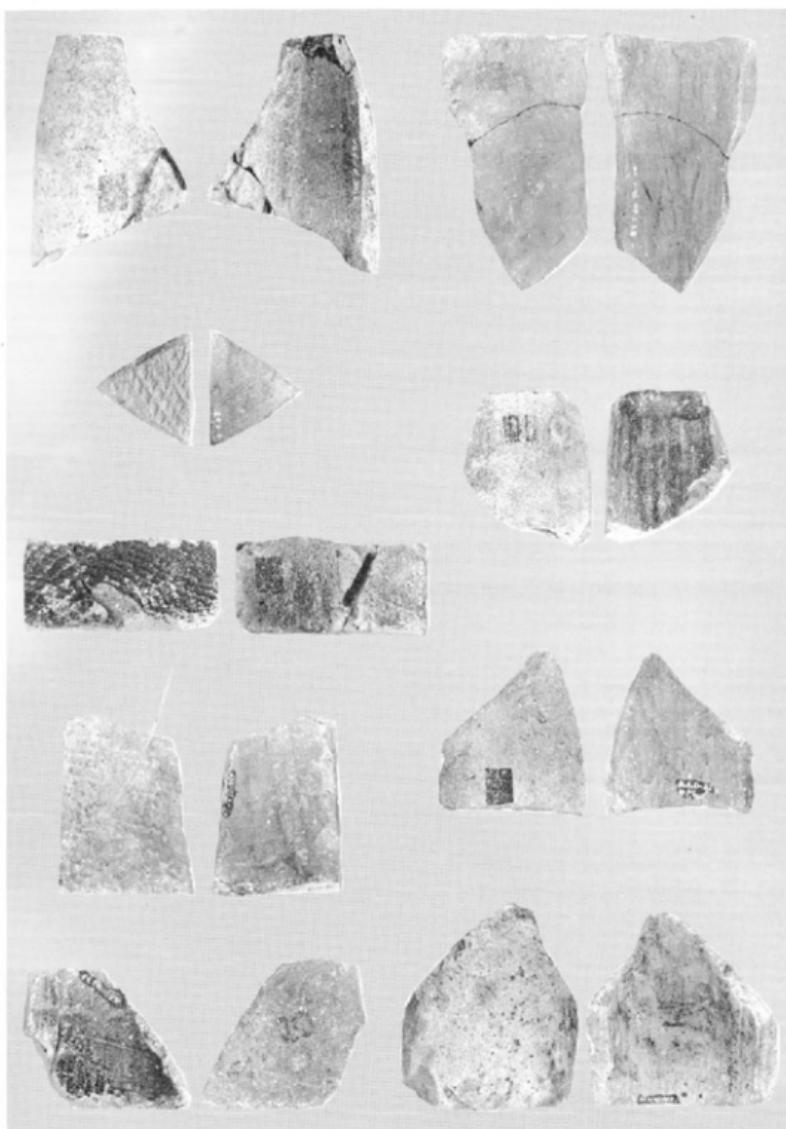




出土滑石製品

(縮尺 4/9)





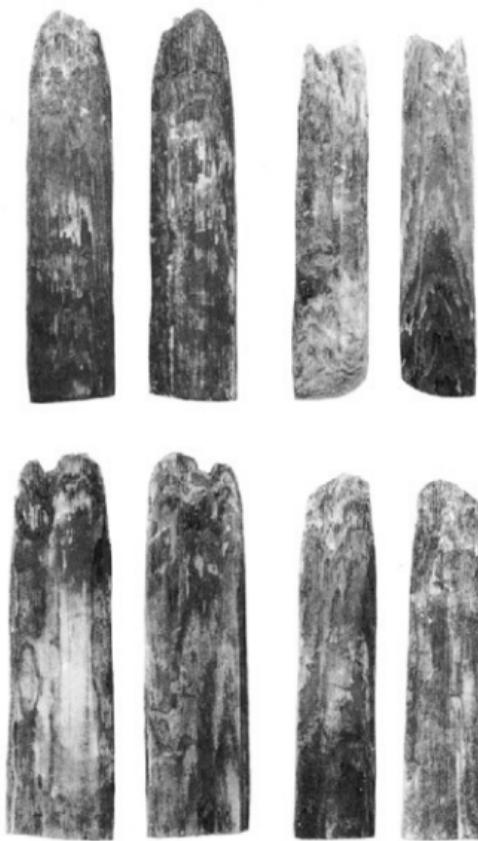
井戸出土古瓦類

(縮尺1/3)





(1) 井戸出土木製品
(縮尺1/3)



(2) 井 戸 柴 材

(縮尺1/6)





(1) B 地点遠景(南より)

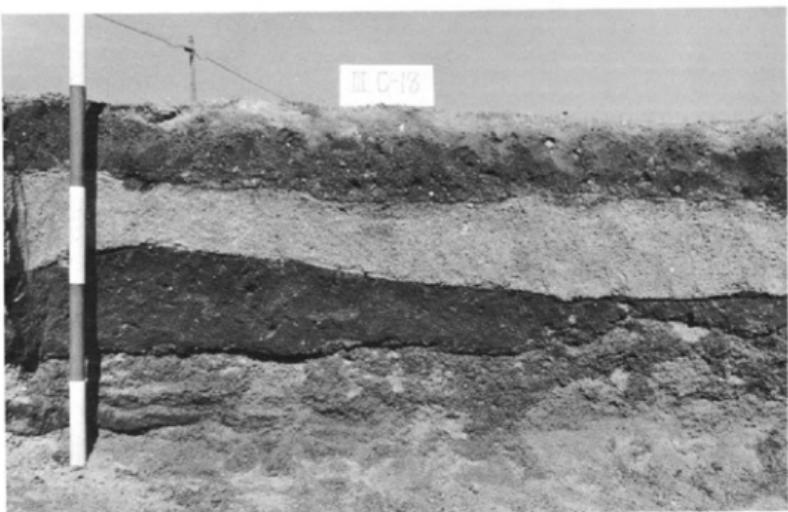


(2) B 地点発掘状態





(1) B 地点土層断面



(2) 同 土層断面

o

t

4

9

11



(1) 須恵器出土状態



(2) 石器出土状態

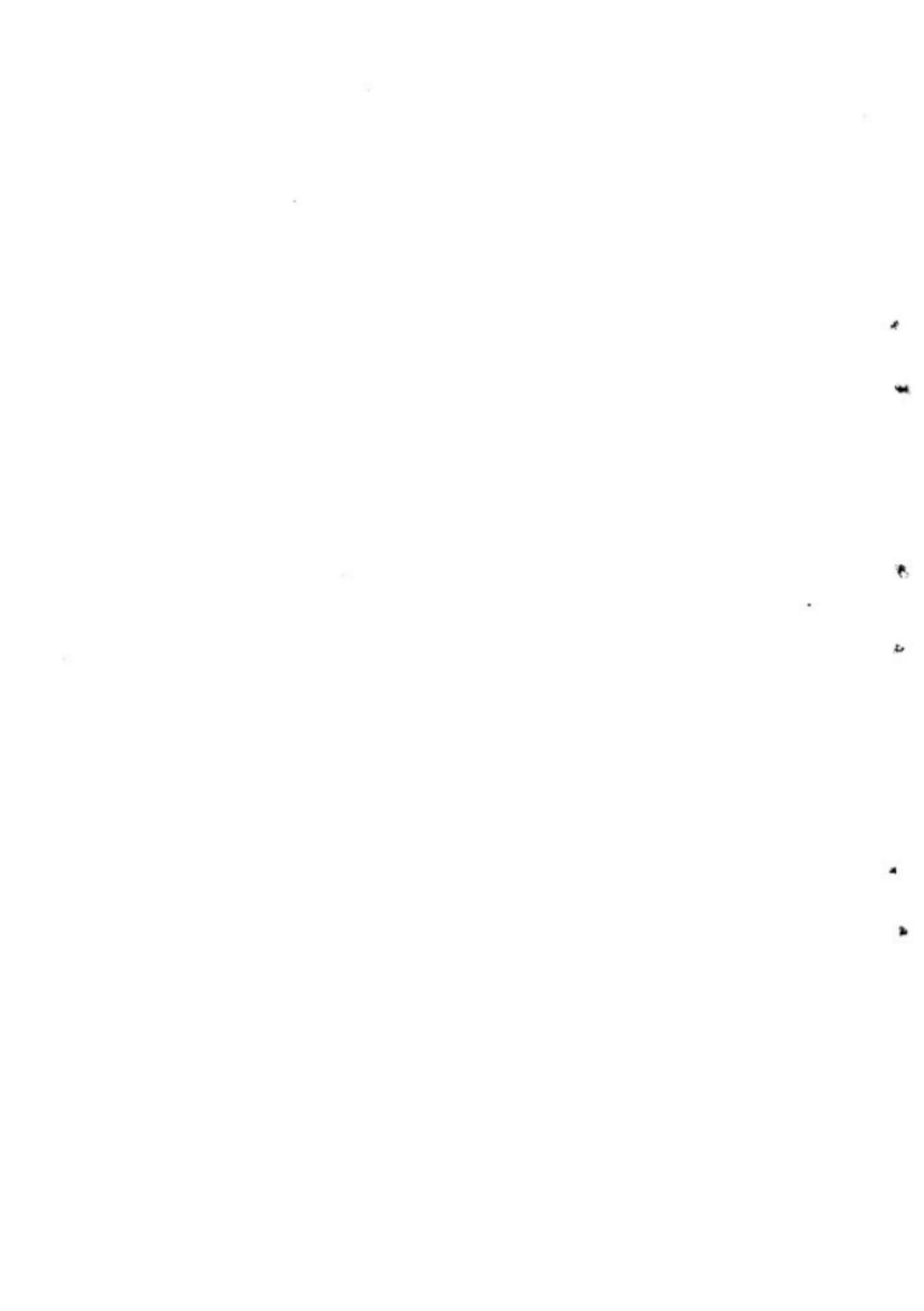




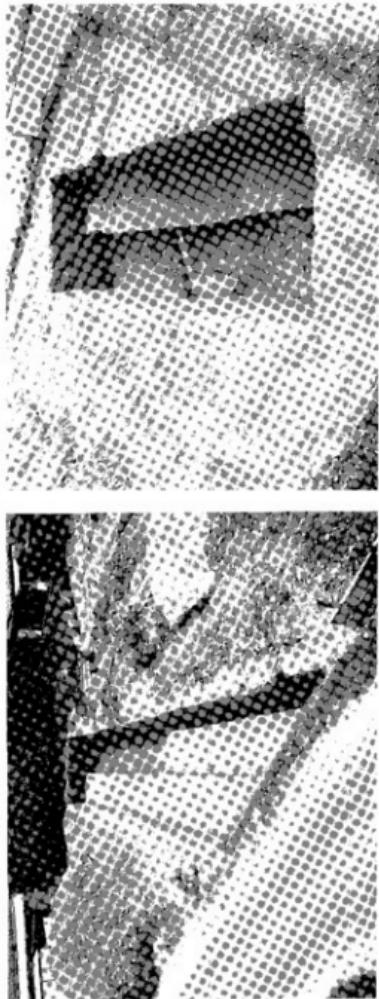
(1) A 地点 遠景 (東南より)



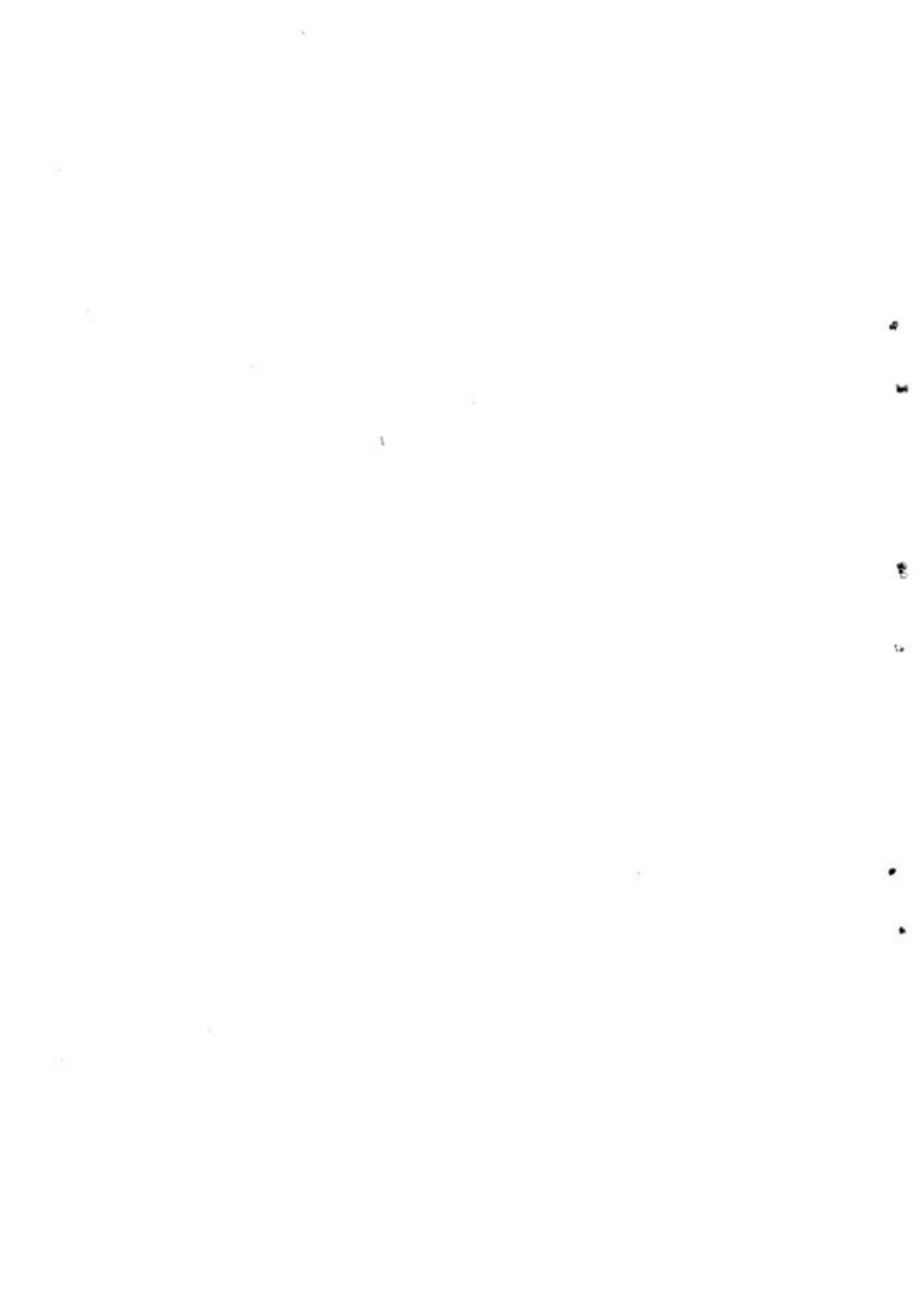
(2) A 地点 近景 (北より)



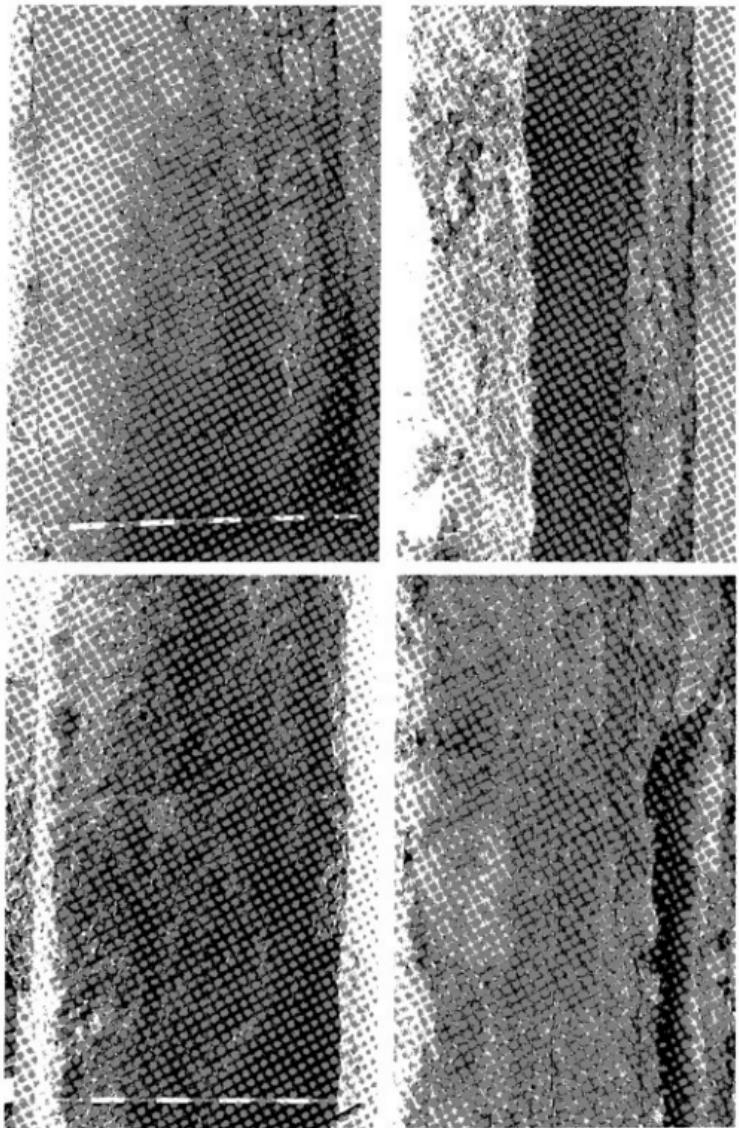
排水溝跡 A 地点



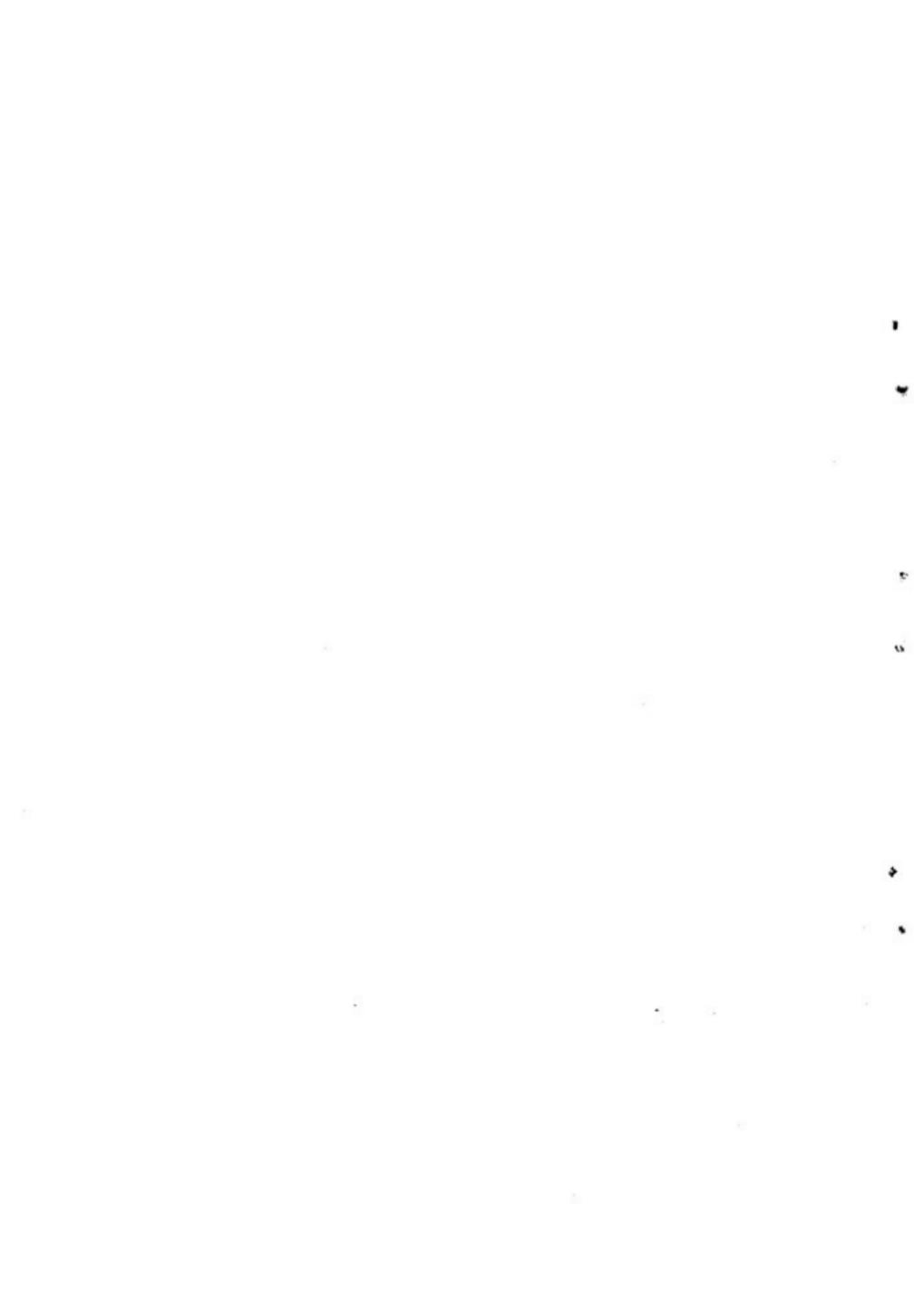
トレンチ完掘状態 (1. Aトレンチ, 2. Bトレンチ, 3. Cトレンチ, 4. Dトレンチ)

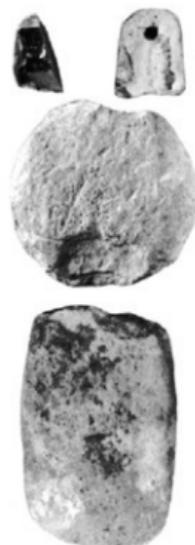


強水濾跡 A 地点



トレンチ土層状態 (1. A トレンチ, 2. B トレンチ, 3. C トレンチ, 4. D トレンチ)





A 地点出土遗物

4

g

F

o

t

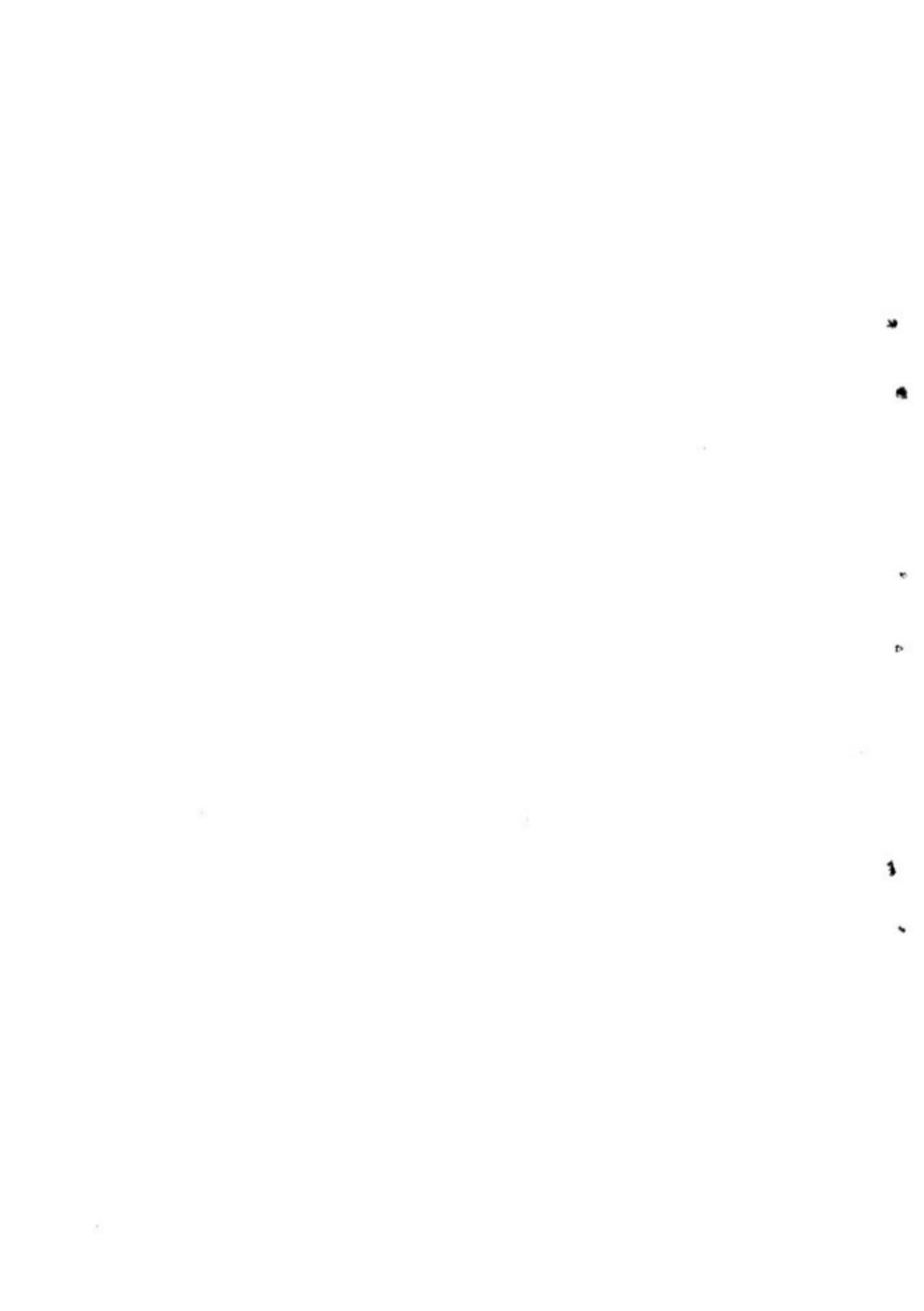
s



(1) B 地点遠景(東より)



(2) B 地点近景(南より)



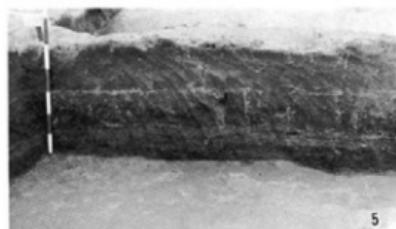


(1) I 区発掘状態



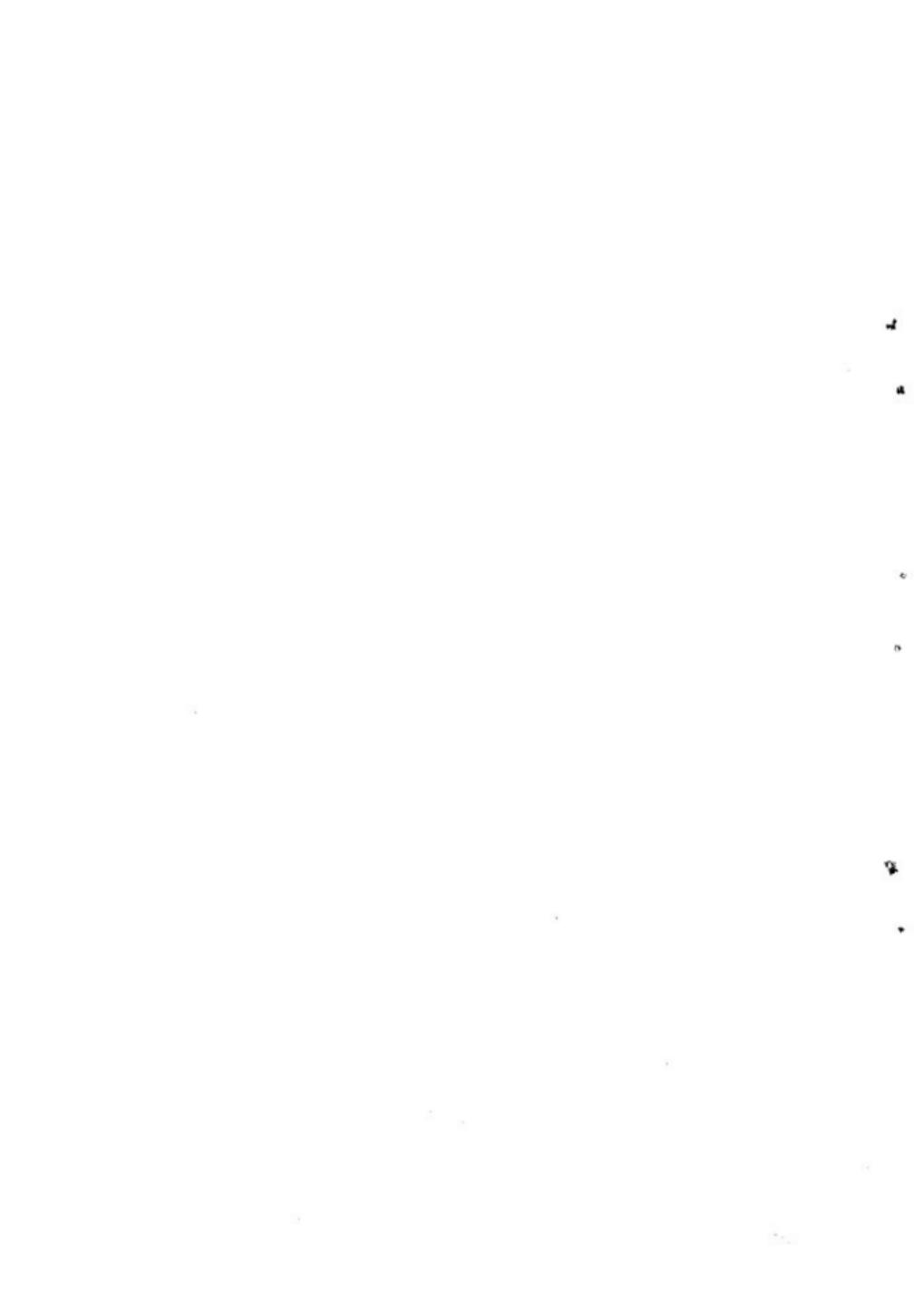
(2) 同完掘状態





1. H-3~4区 北壁断面
2. J-3~4区 北壁断面
3. H-4区 東壁断面
4. I-4区 東壁断面
5. J-4区 東壁断面
6. K-4区 東壁断面
7. H-3区 北壁断面
8. H-3区 東壁断面

I 区 土層状態





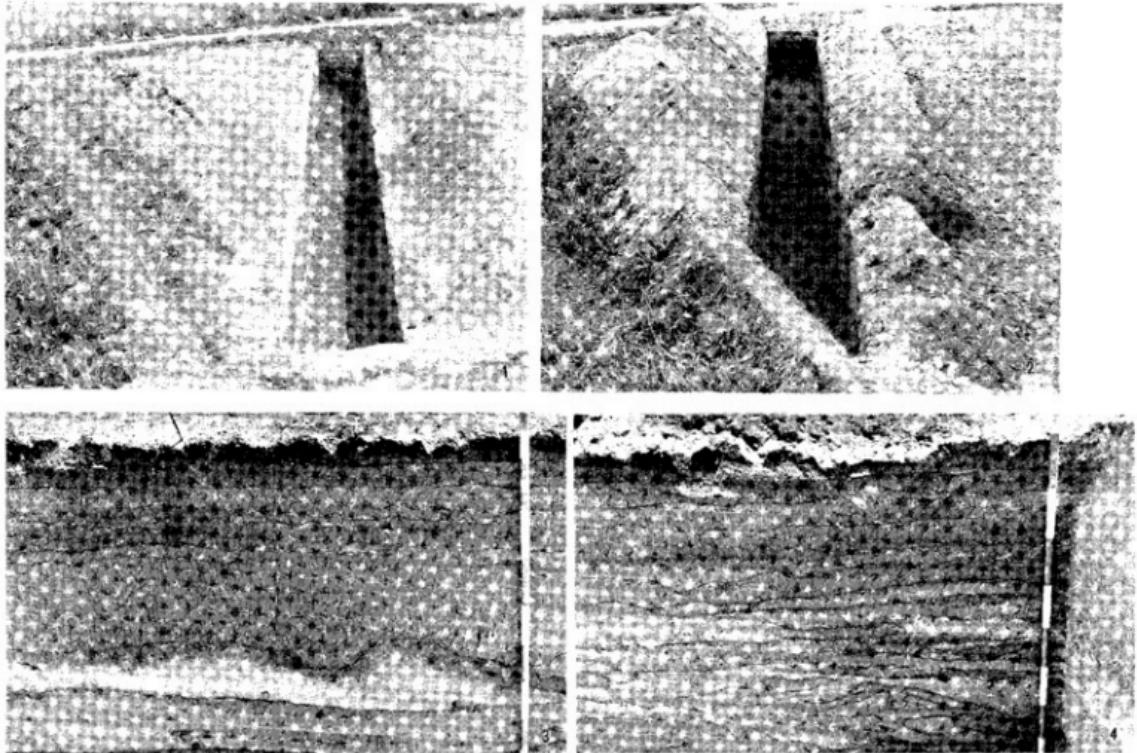
(1) 第 1 号 ピット



(2) 第 2 号 ピット



弥永遺跡 B 地点

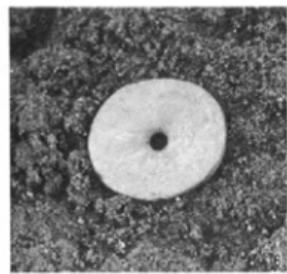
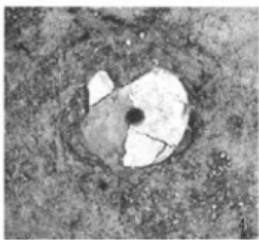


II区トレンチおよび上層 (1. Aトレンチ, 2. Bトレンチ, 3~4. Aトレンチ上層)



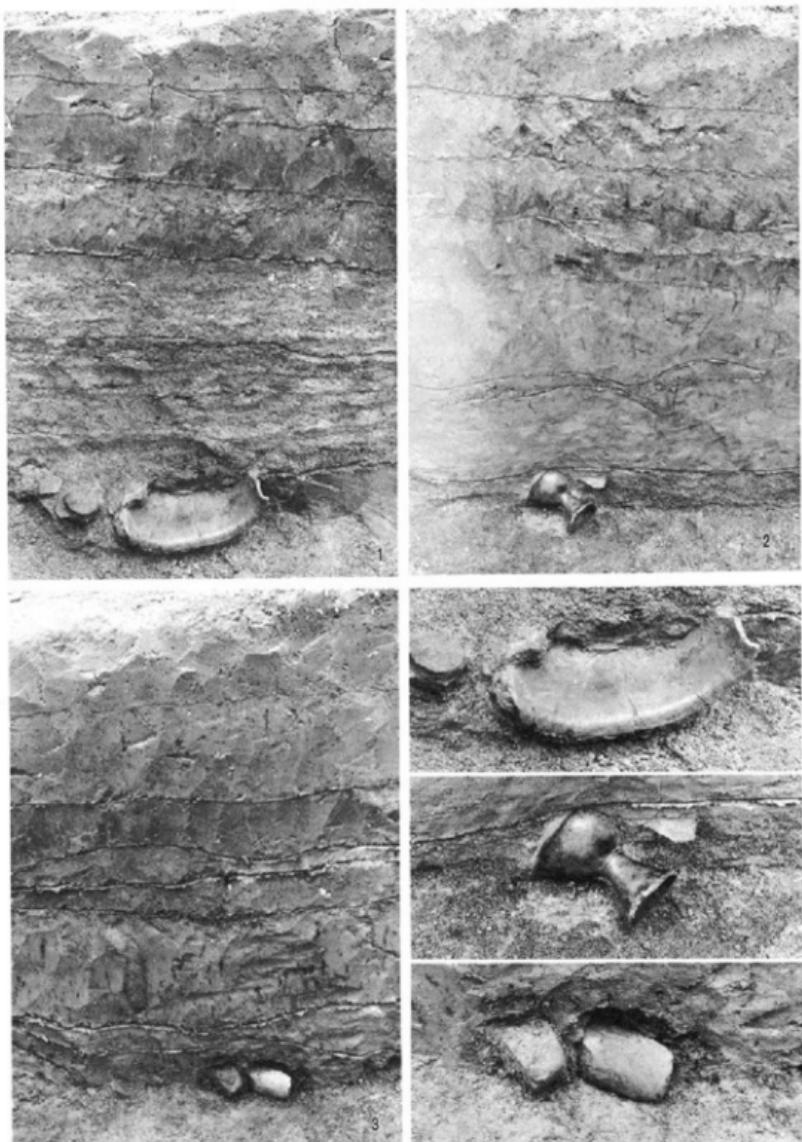


1. S35 出土状態
2. S38 出土状態
3. S51 出土状態
4. S63 出土状態
5. S7 出土状態
6. S62 出土状態
7. S4 および S58 出土状態
8. S34 出土状態



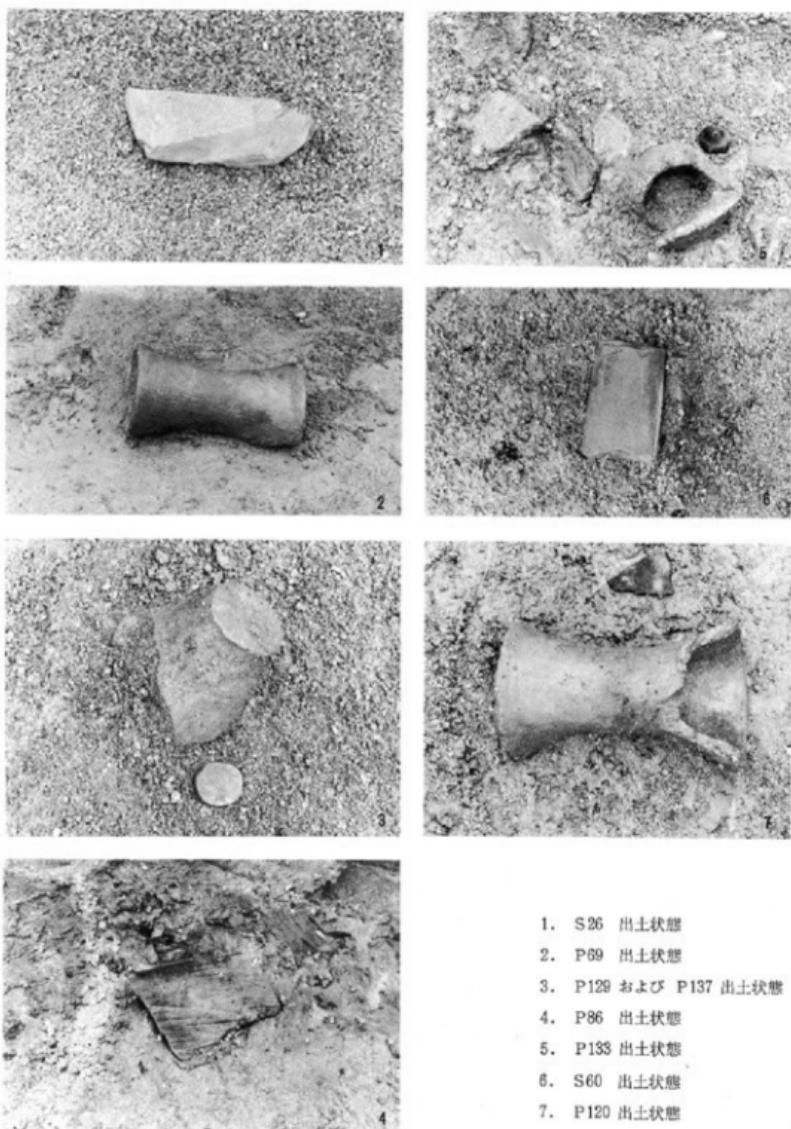
I区石器出土状態





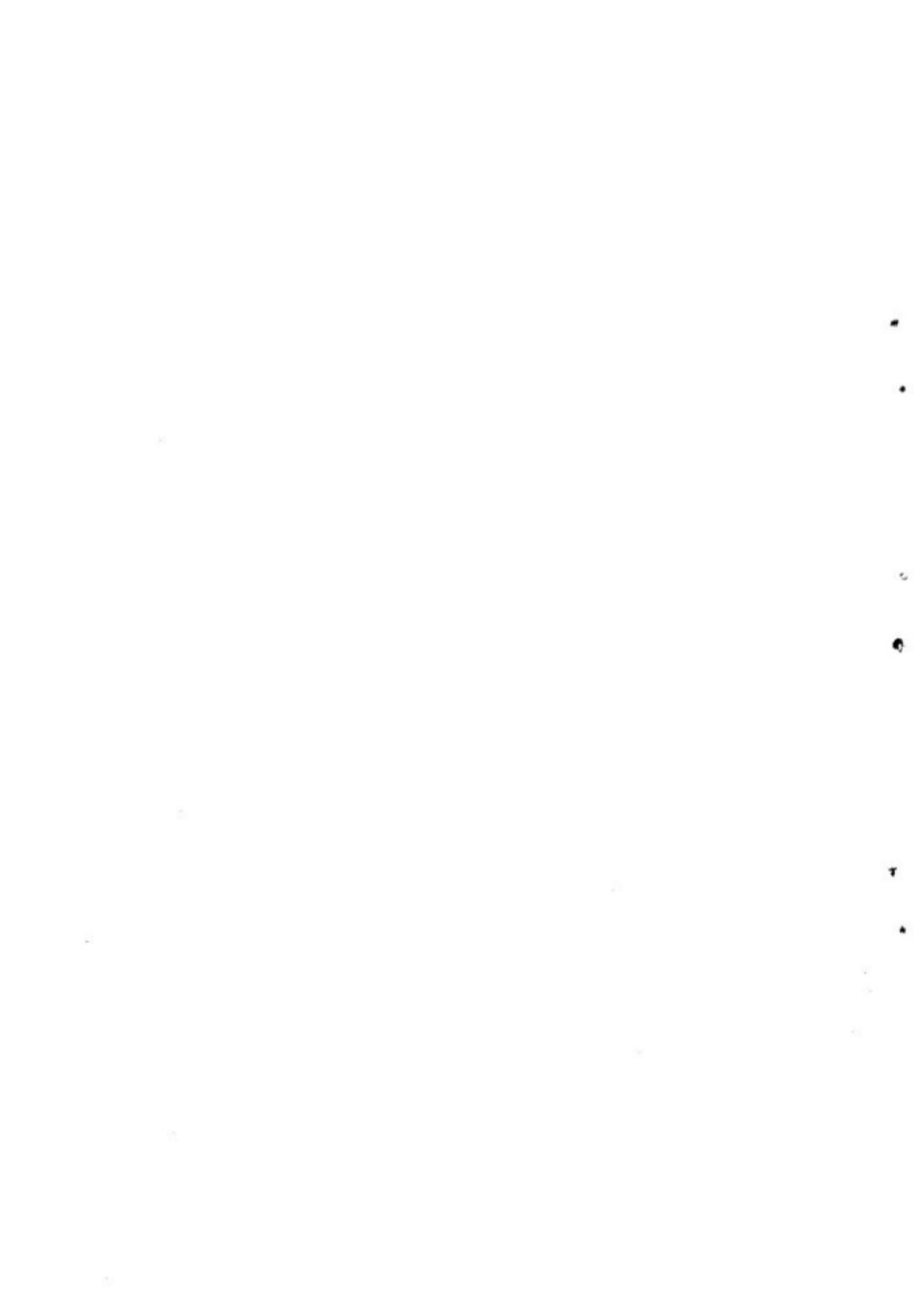
II区A トレンチ遺物出土状態 1. P95出土状態, 2. P94出土状態, 3. S25出土状態

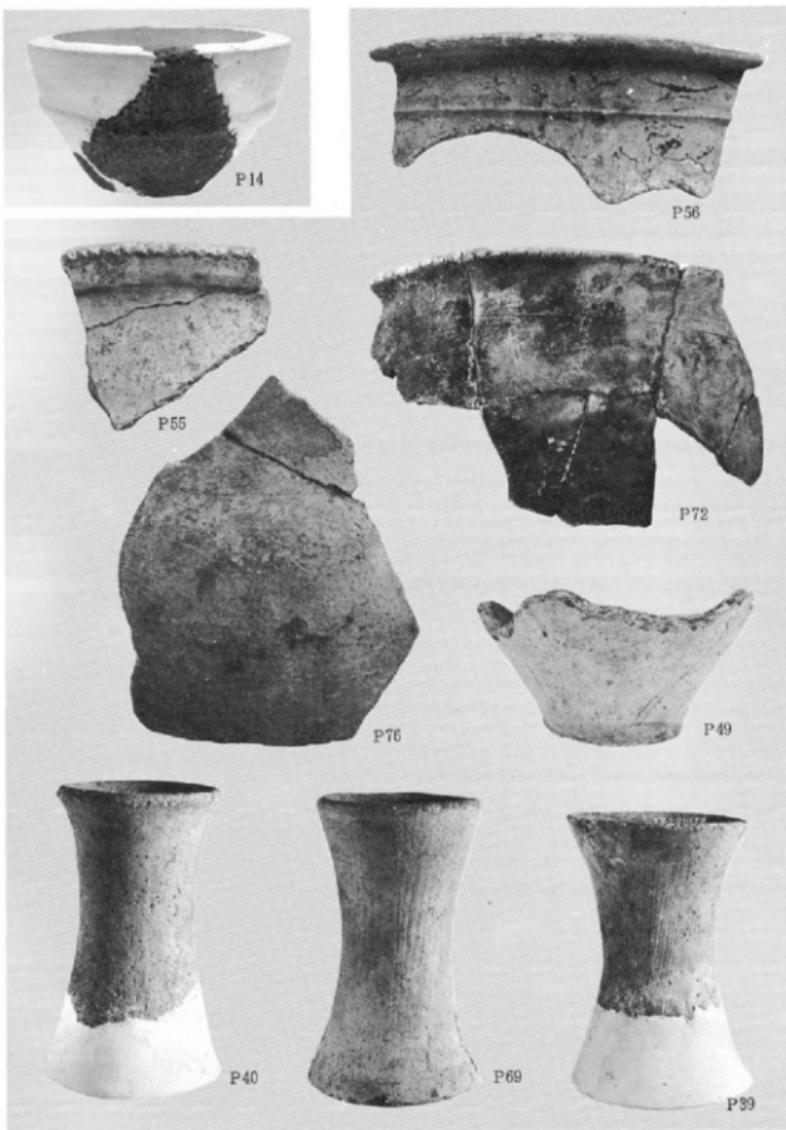




1. S26 出土状態
2. P69 出土状態
3. P129 および P137 出土状態
4. P86 出土状態
5. P133 出土状態
6. S60 出土状態
7. P120 出土状態

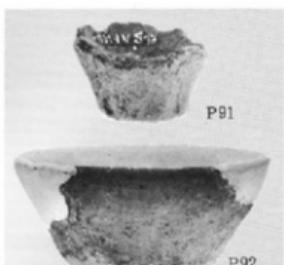
II区各トレンチ遺物出土状態





I区およびII区各トレンチ出土土器 (縮尺P14は1/2, 他は1/3)





(縮尺1/2)

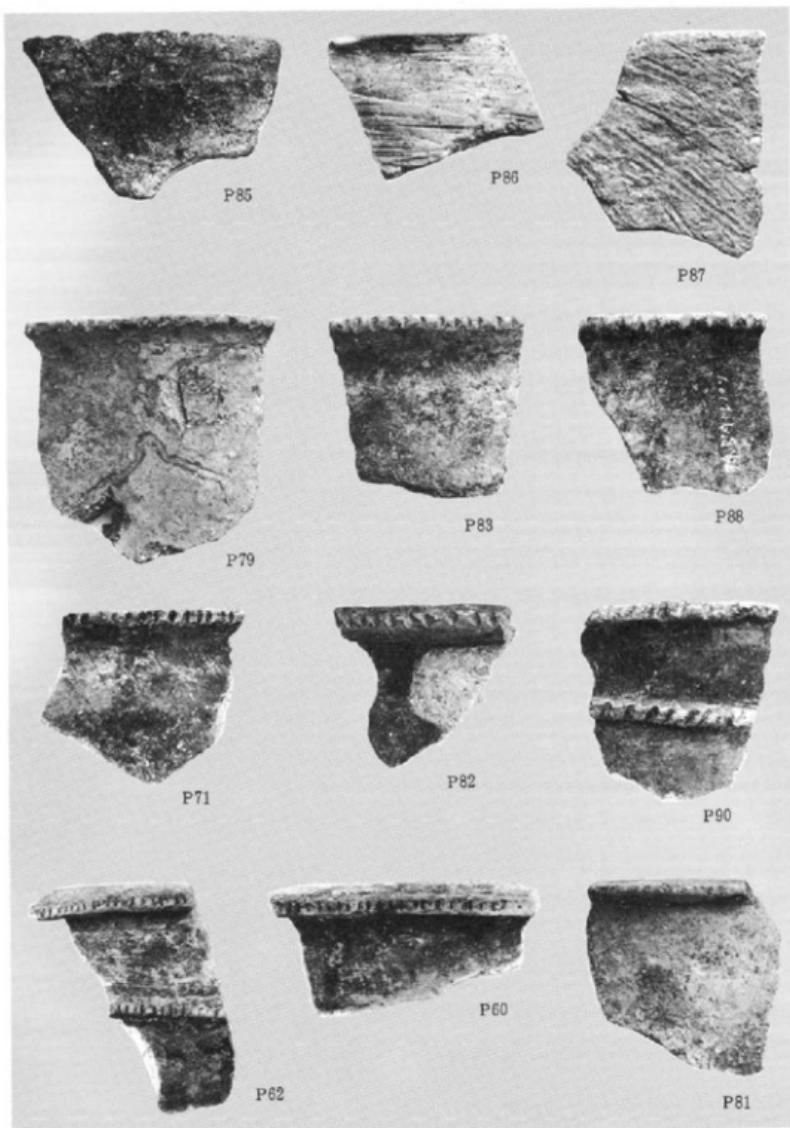


(縮尺1/2)

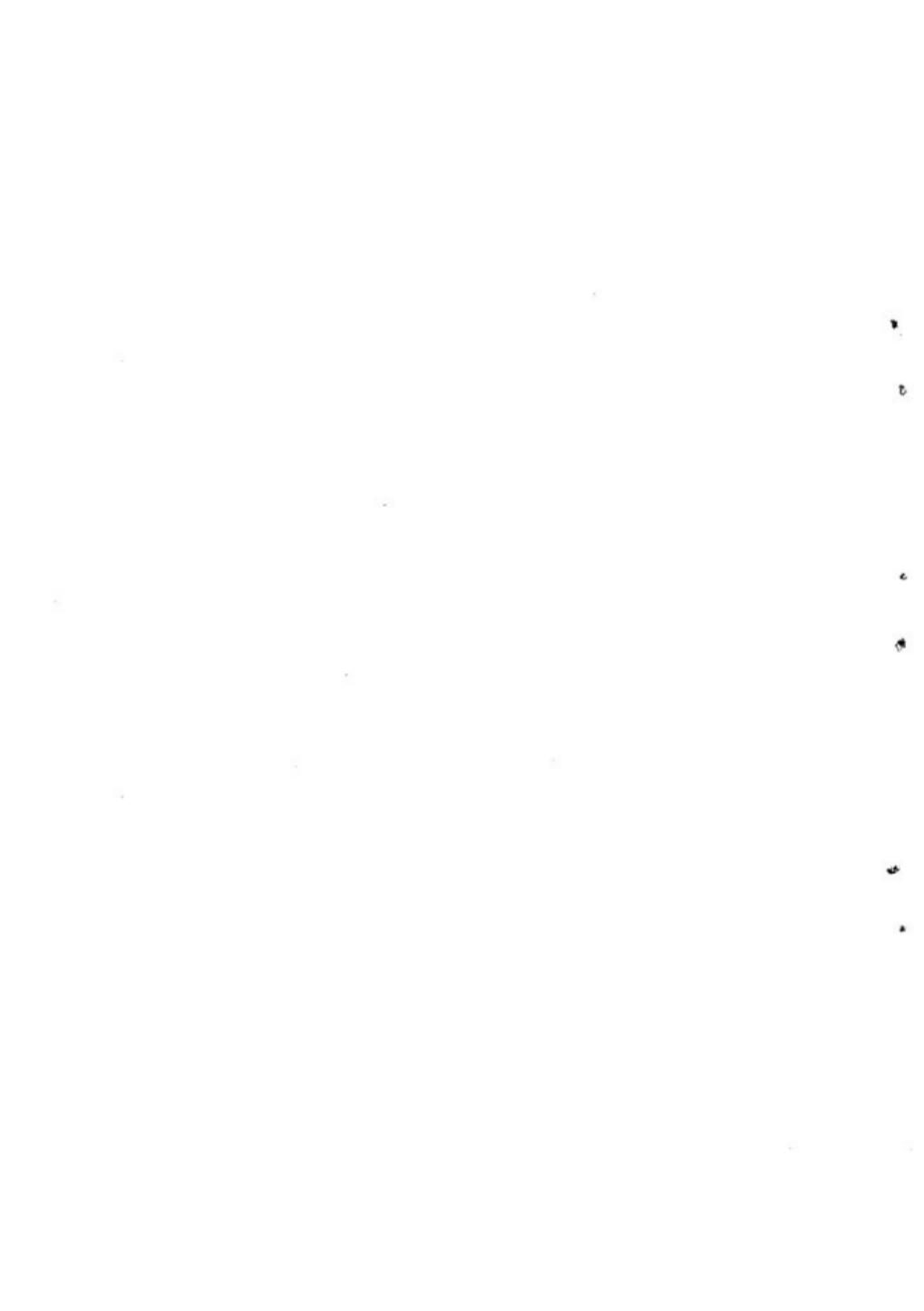


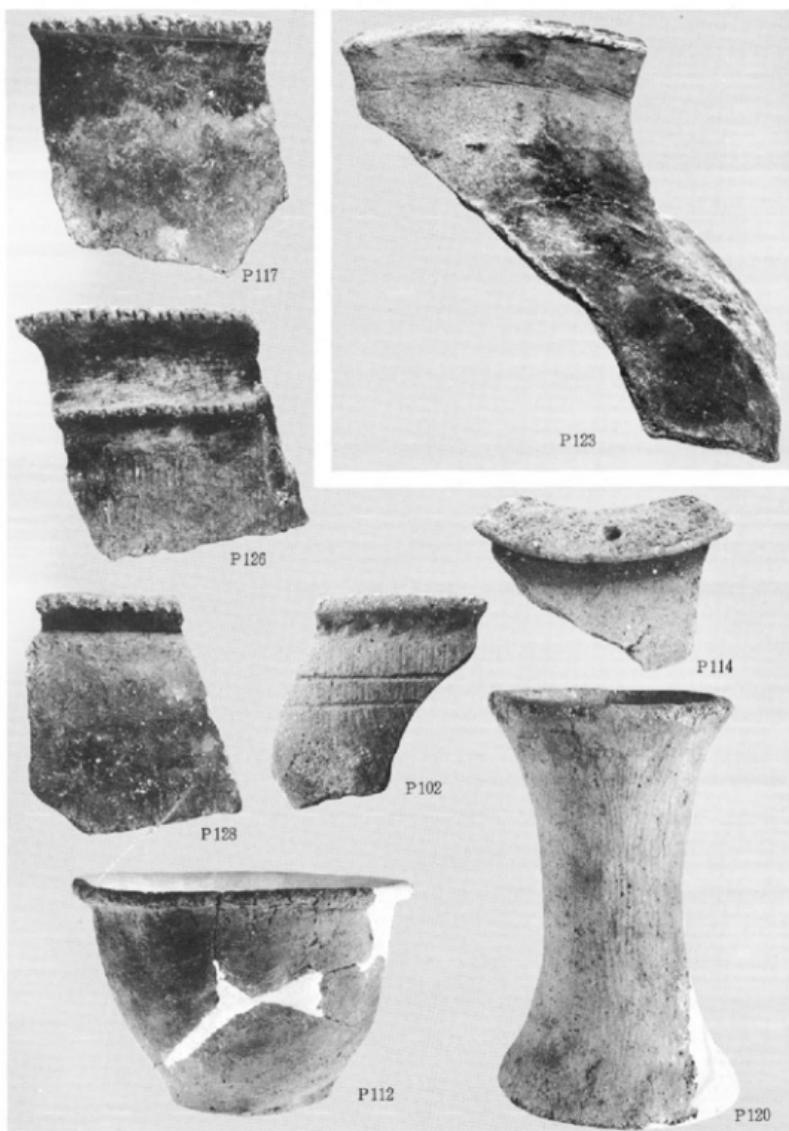
Aトレンチ10層出土土器（I）





A トレンチ10層出土土器 II (縮尺1/2)





Bトレンチ各層出土土器 (縮尺P123は1/6, 他は1/2)

9

0

6

5

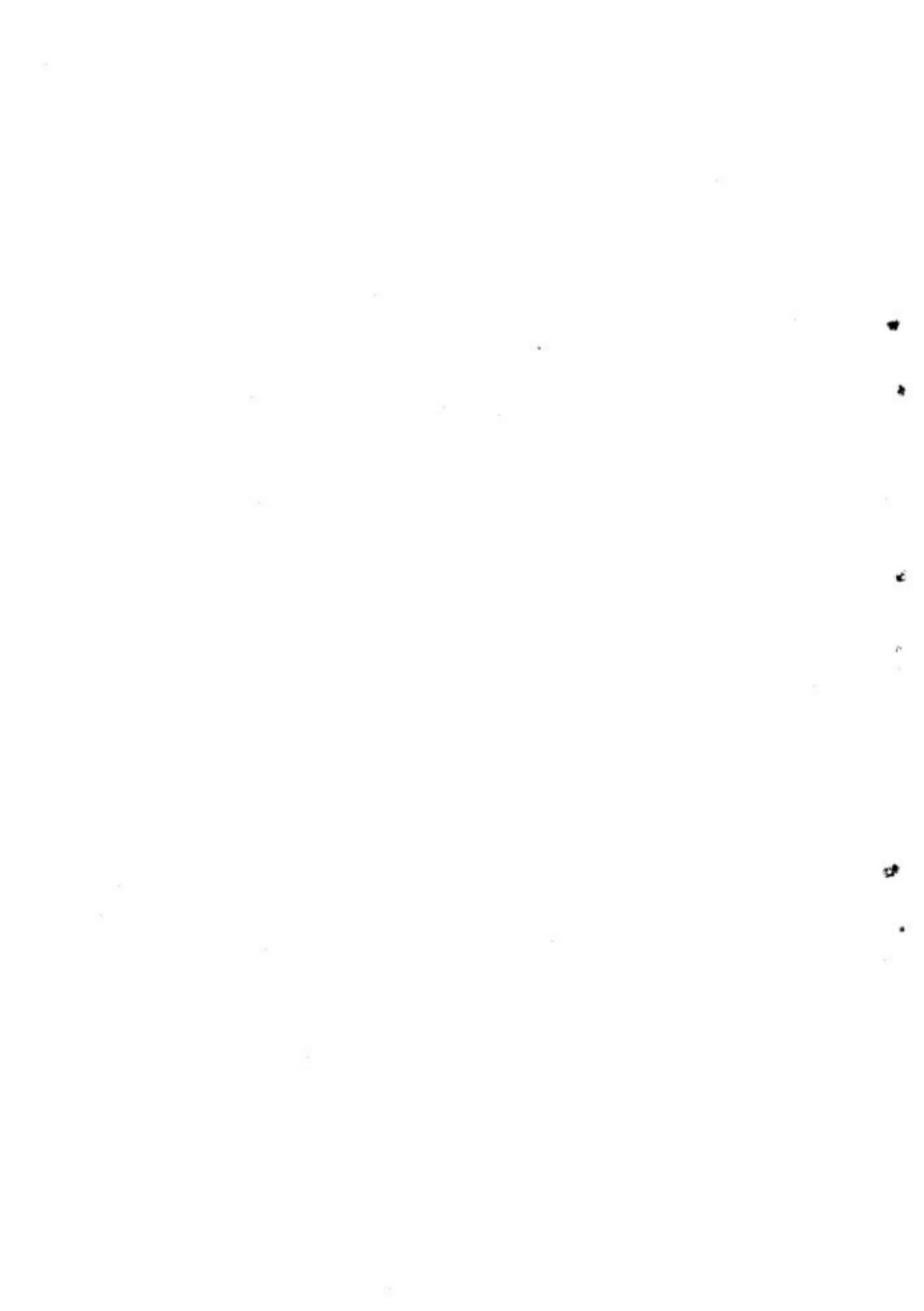
8

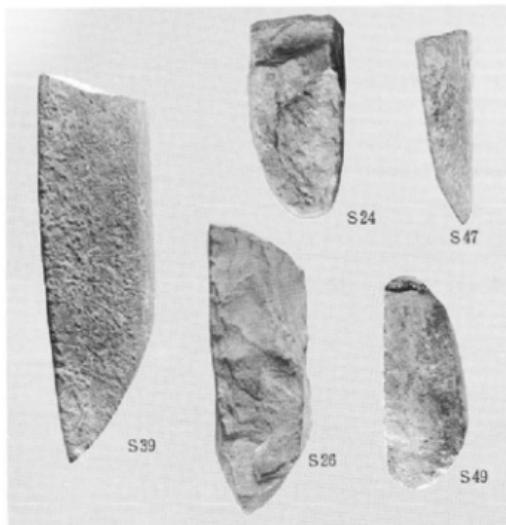
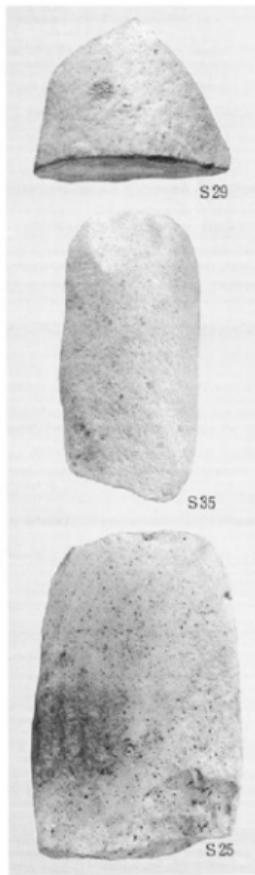
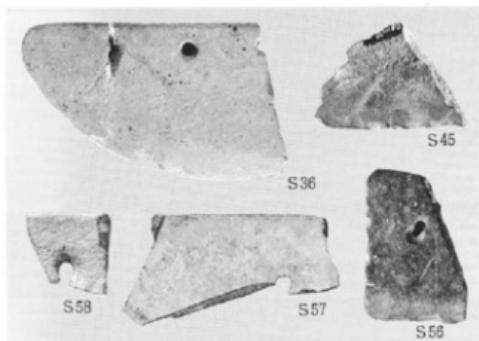
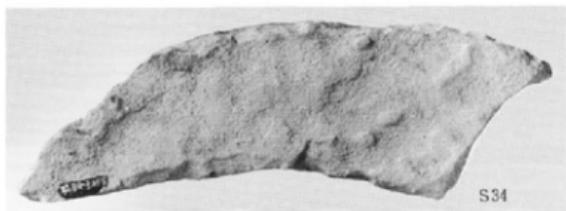
7



(2倍拡大)

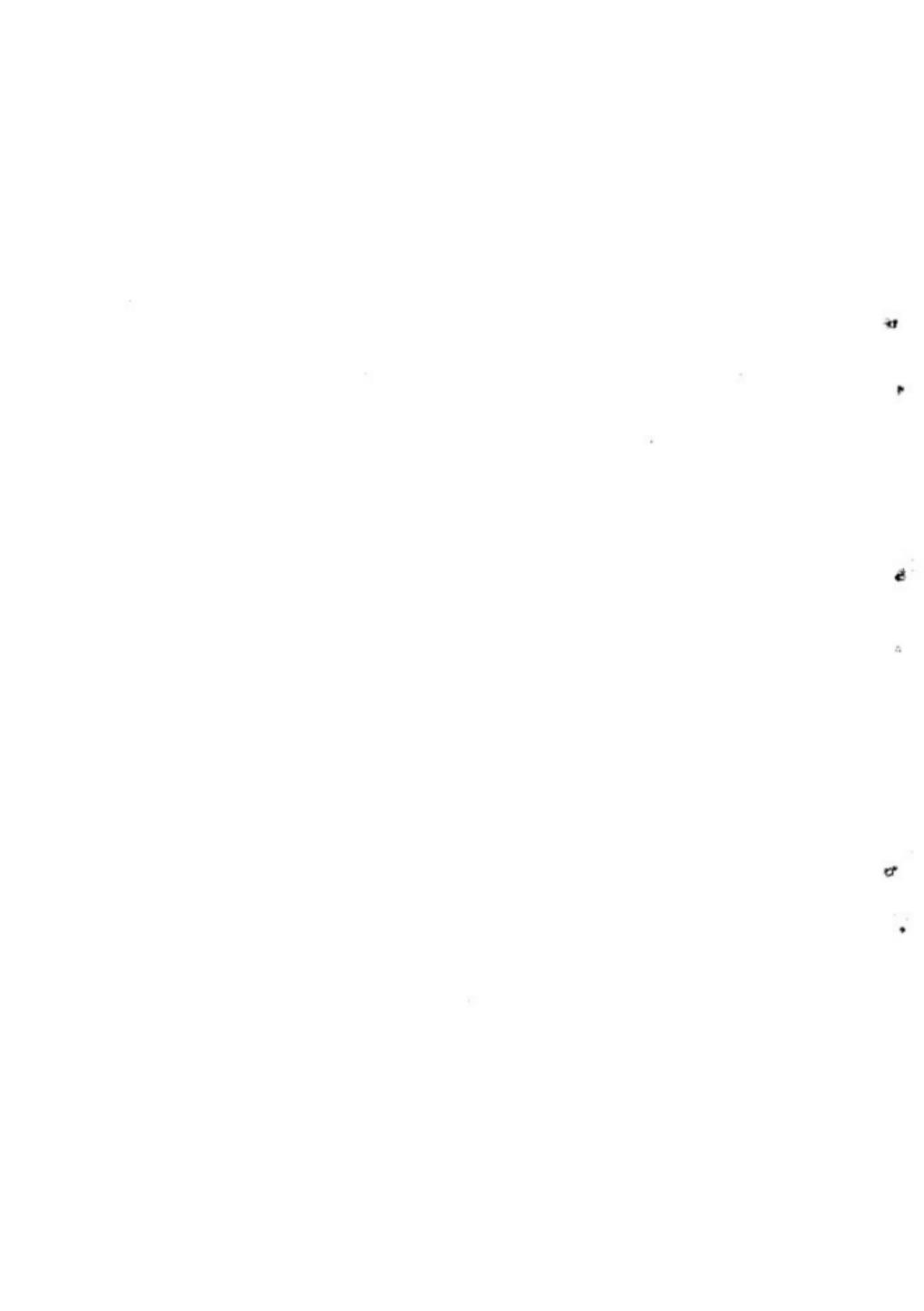
(実大)

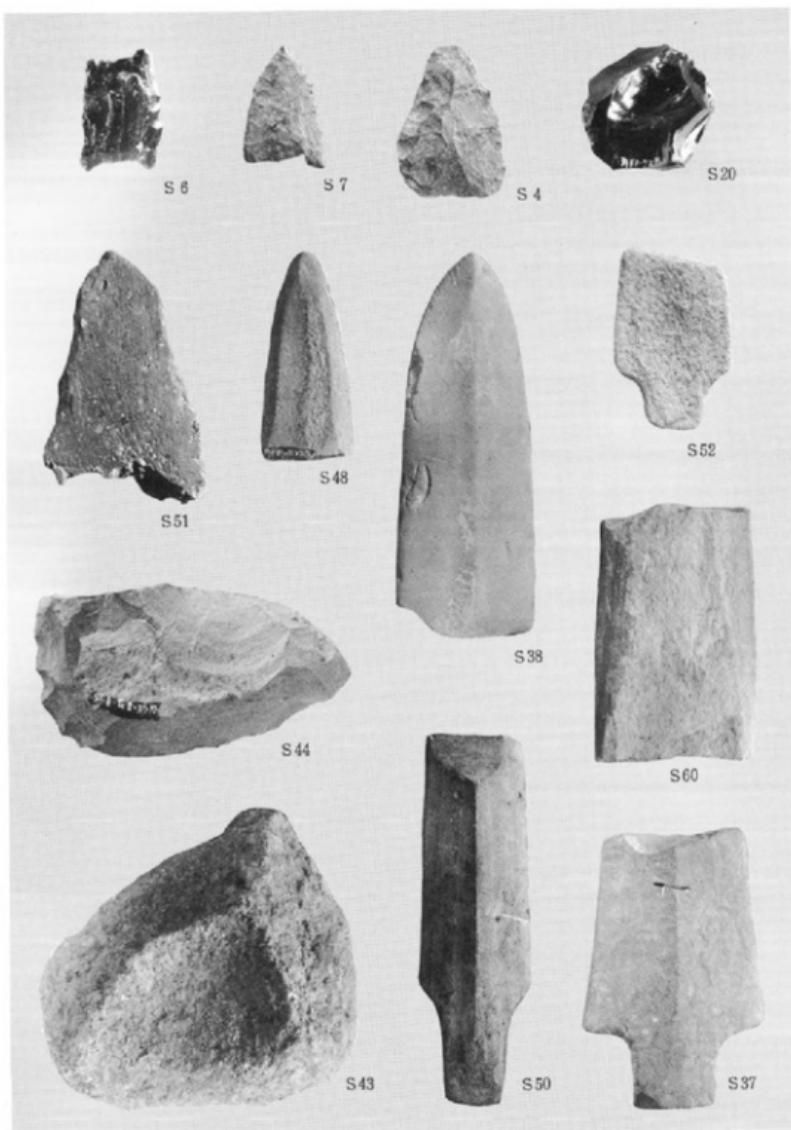




B地点出土石器 (I)

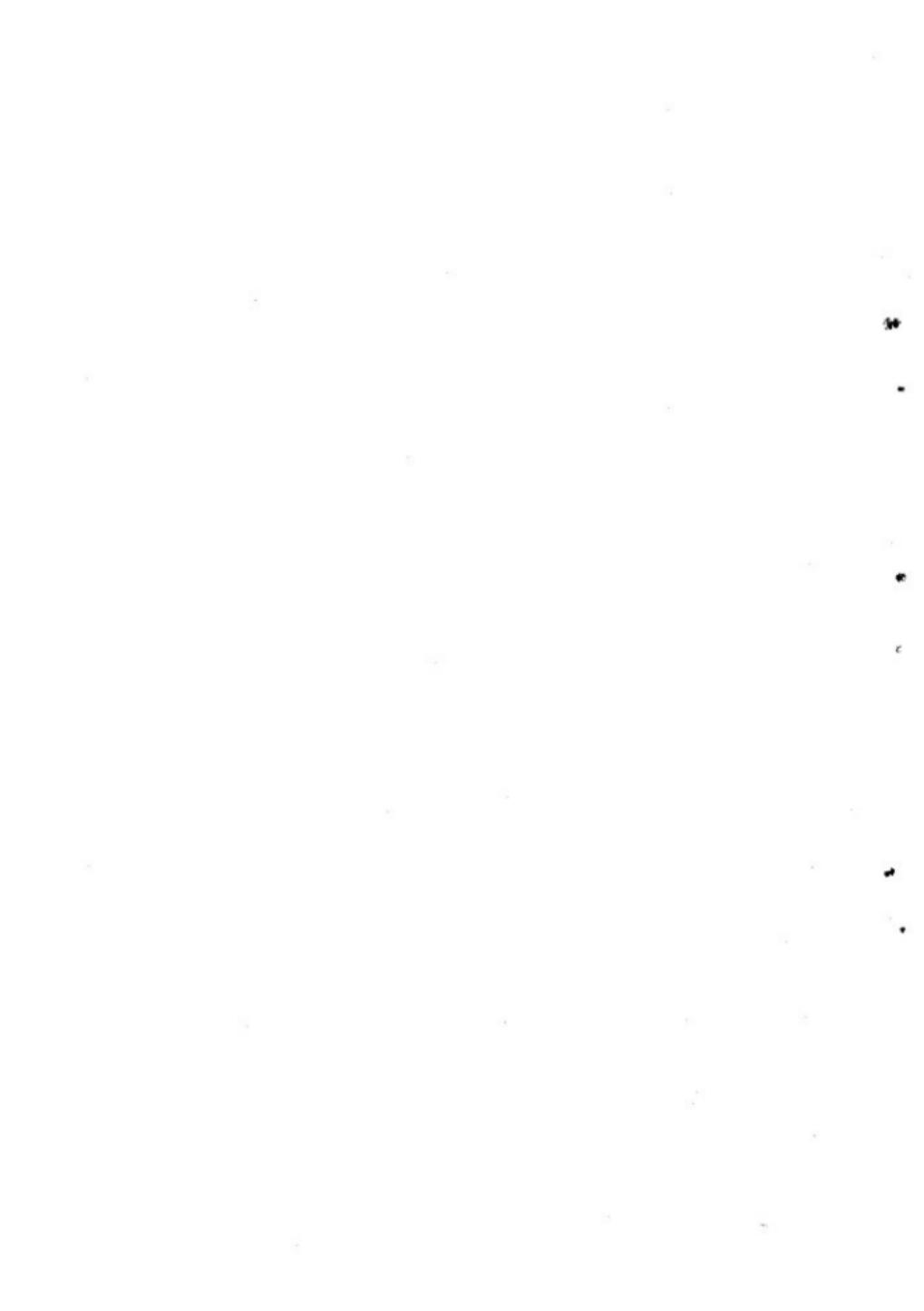
(縮尺 1/2)

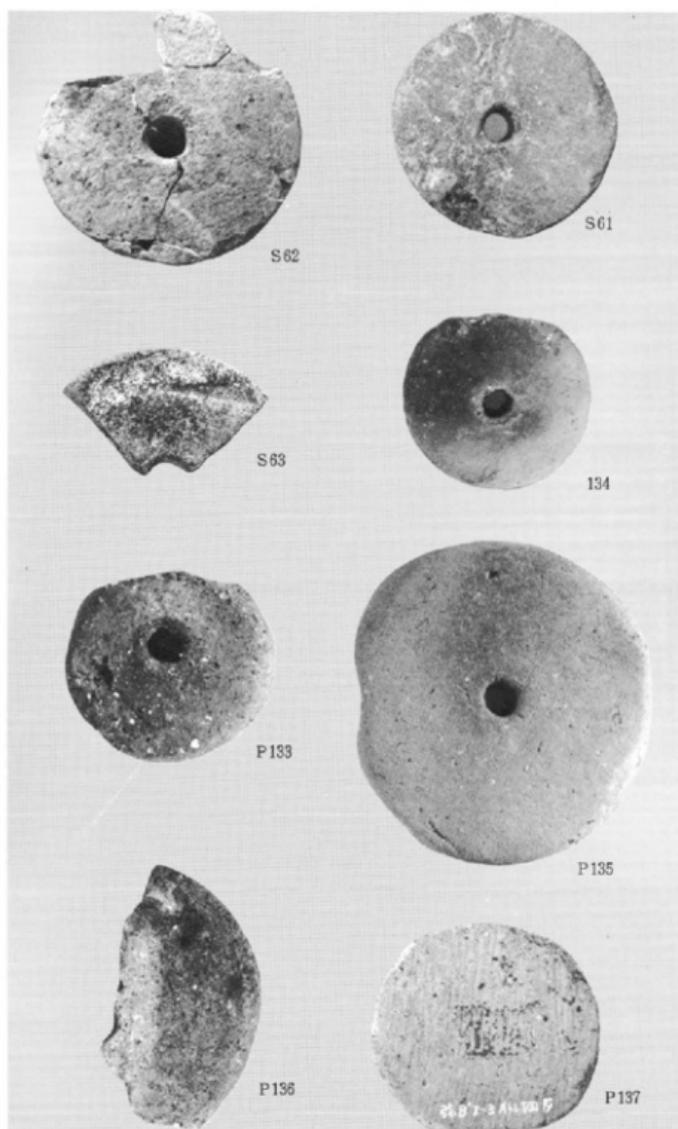




B 地點出土石器 (II)

(縮尺 2 / 3)





B 地点出土纺錐車

(実大)





(1) C 地点遠景(北東より)



(2) C 地点近景(南より)





(1) 発掘風景



(2) トレンチ発掘状態





(1) 作業風景(西南より)



(2) 作業風景

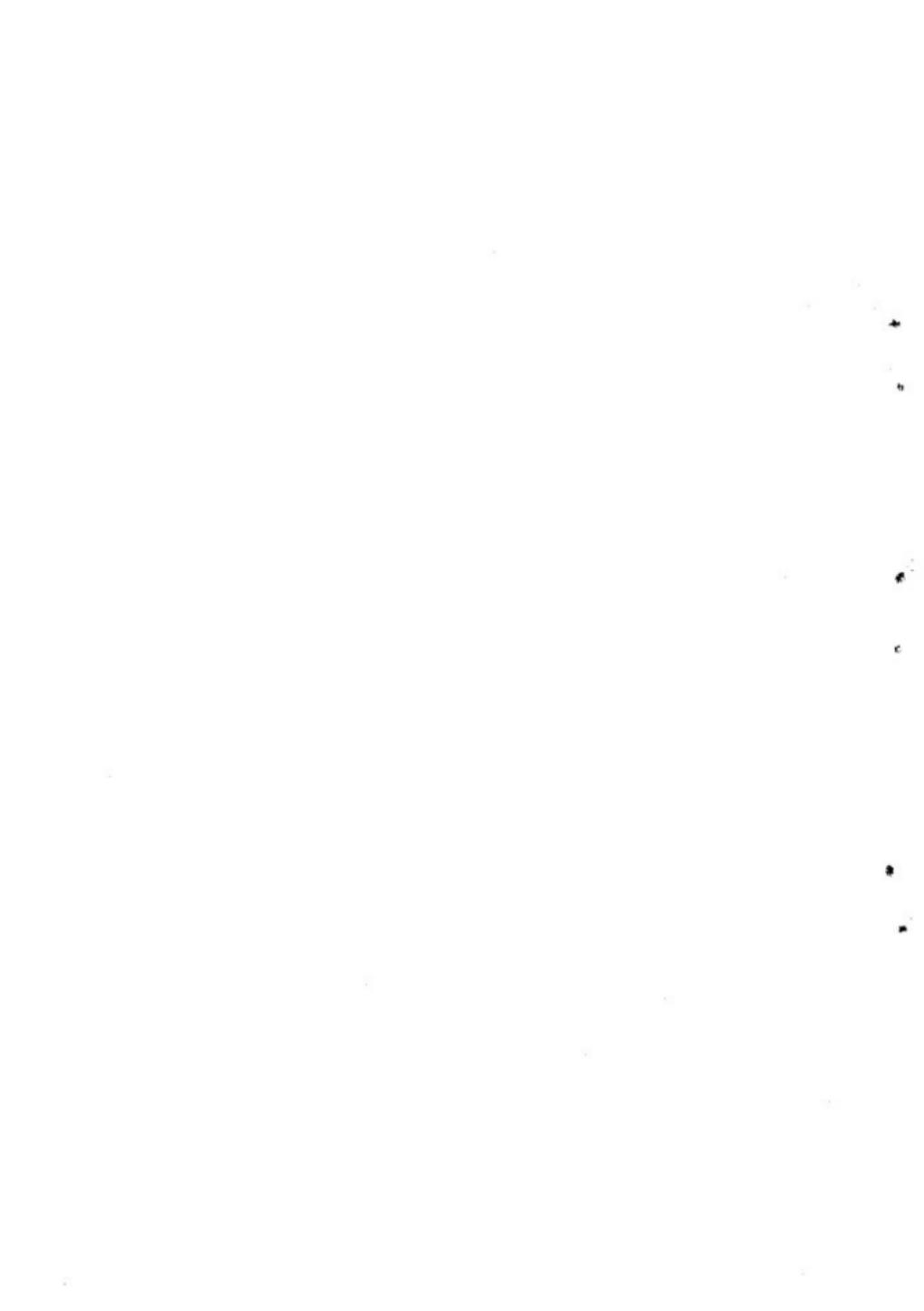




(1) 遺跡遠景(西南より)



(2) 作業風景(東北より)

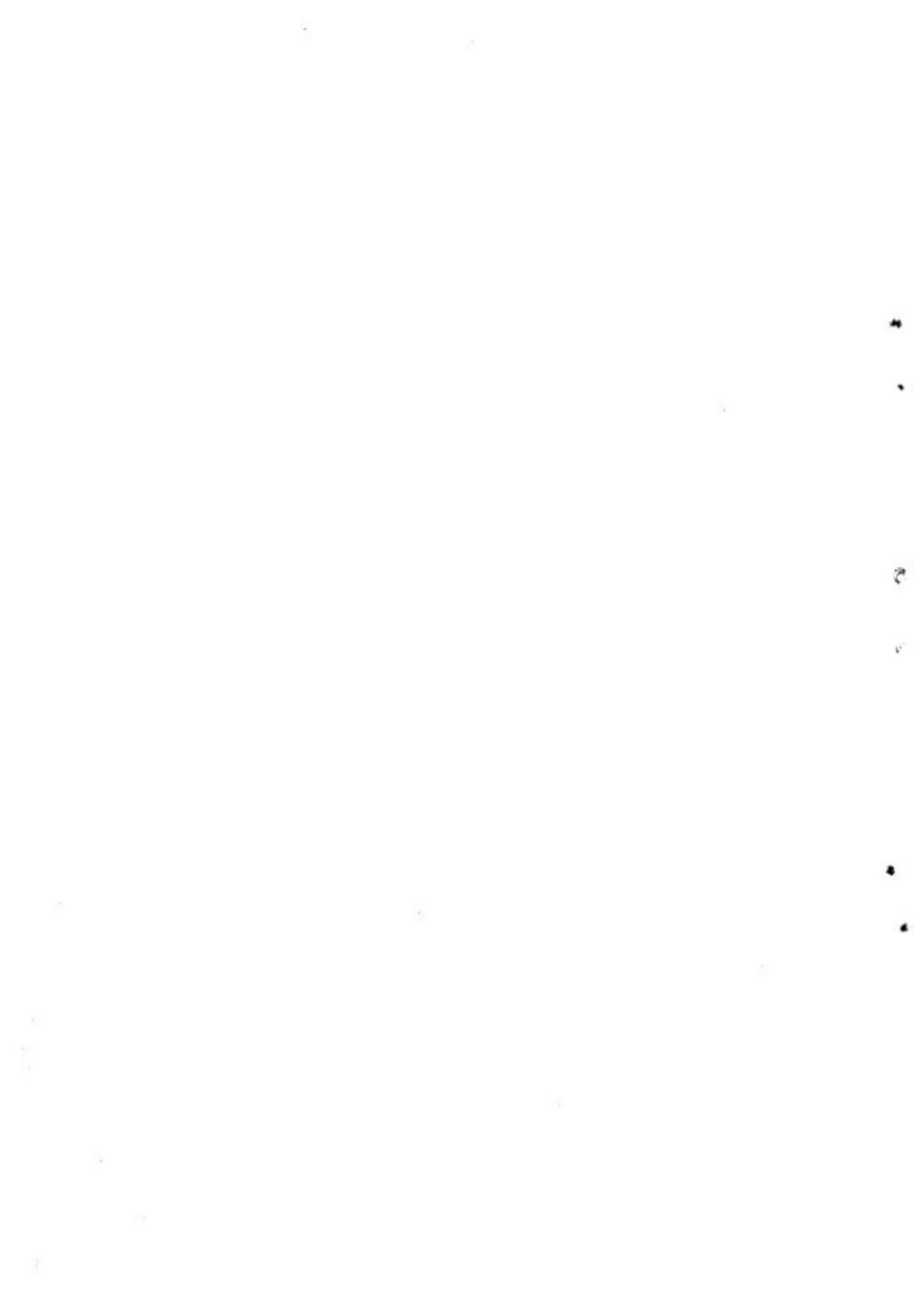




(1) 塚・瓦・須恵器出土状態



(2) 塚・瓦・須恵器出土状態

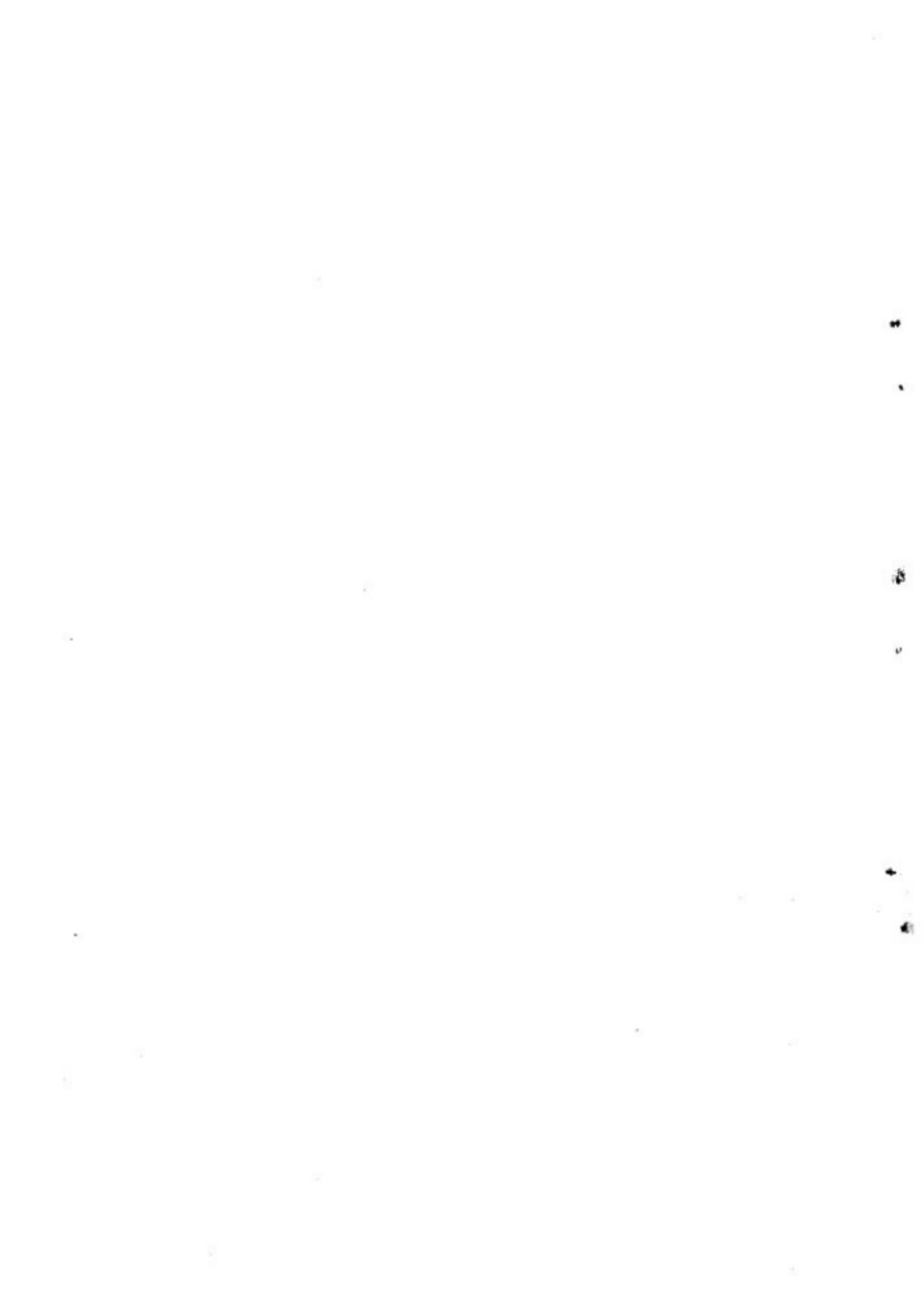




(1) 瓦出土状態



(2) 第4号溝遺物出土状態



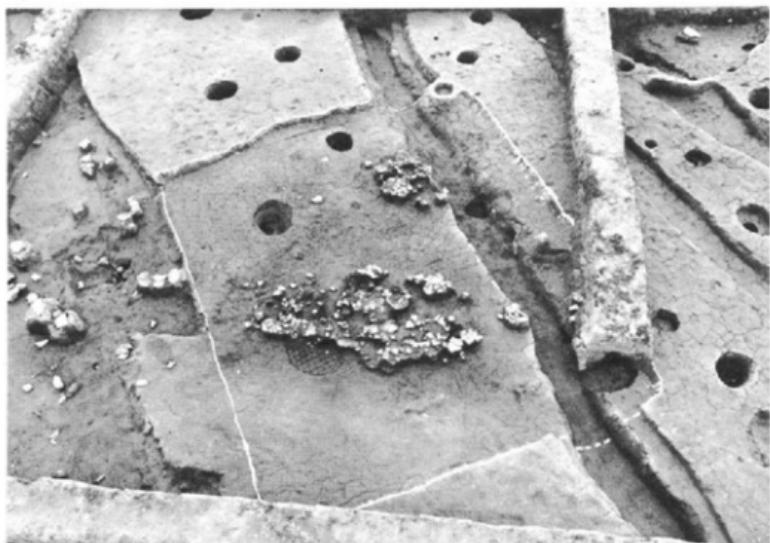


(1) 第1・2号住居址（西南より）

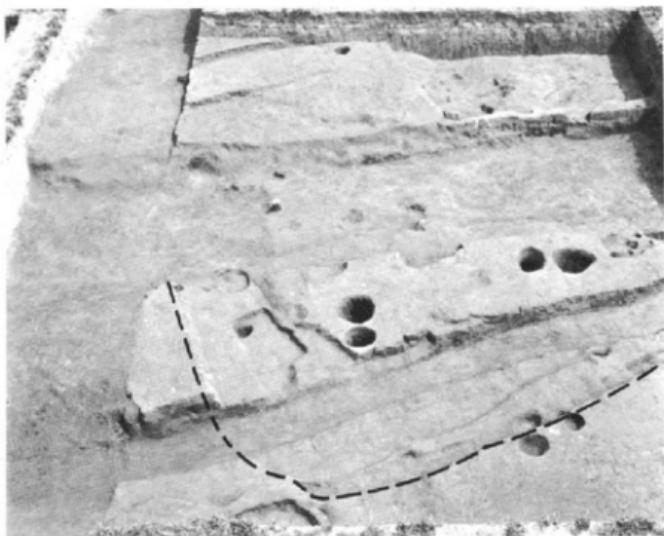


(2) 第3号住居址（南東より）

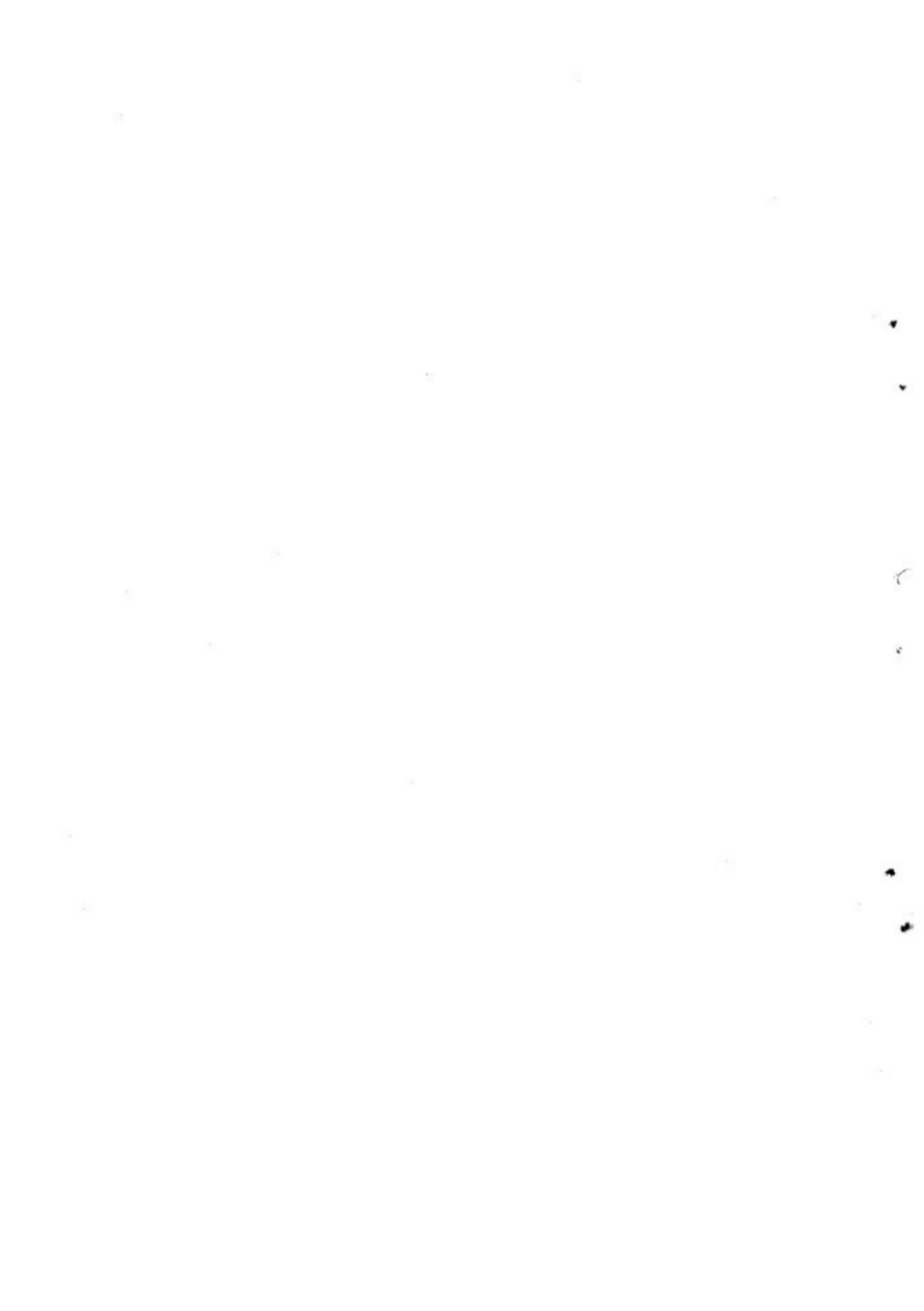
G

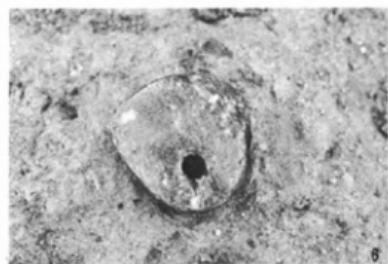


(1) 第4号住居址と遺物(南東より)

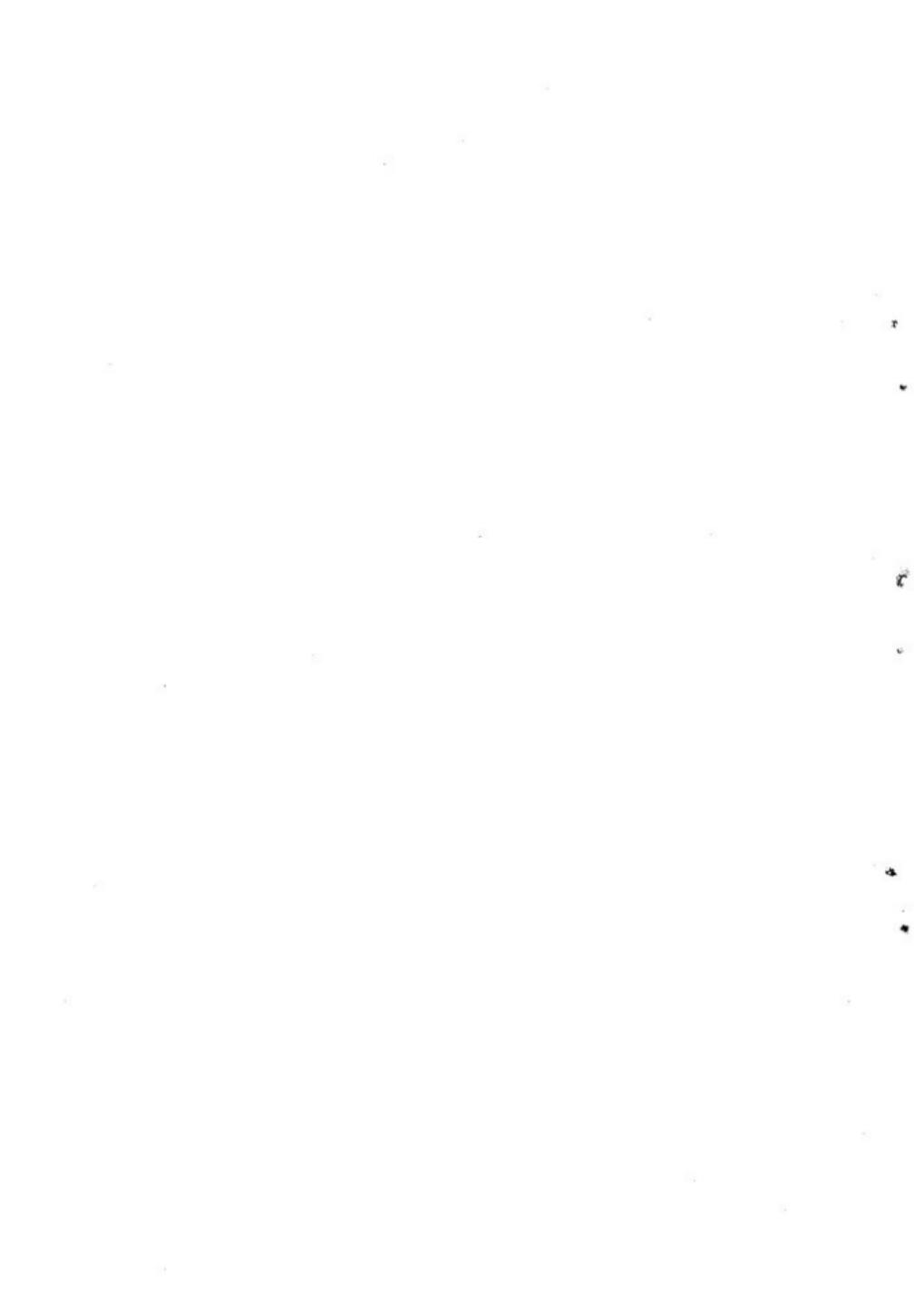


(2) 第5号住居址(西南より)





1. 第4号溝内瓦出土状態
2. 第4号溝内越州窯磁器出土状態
3. 第1号住居址内環形土器出土状態
4. 第3号住居址内壺形土器出土状態
5. 第4号住居址内土器出土状態
6. 第4号溝内石鍤出土状態
7. B-1区最下層土器出土状態

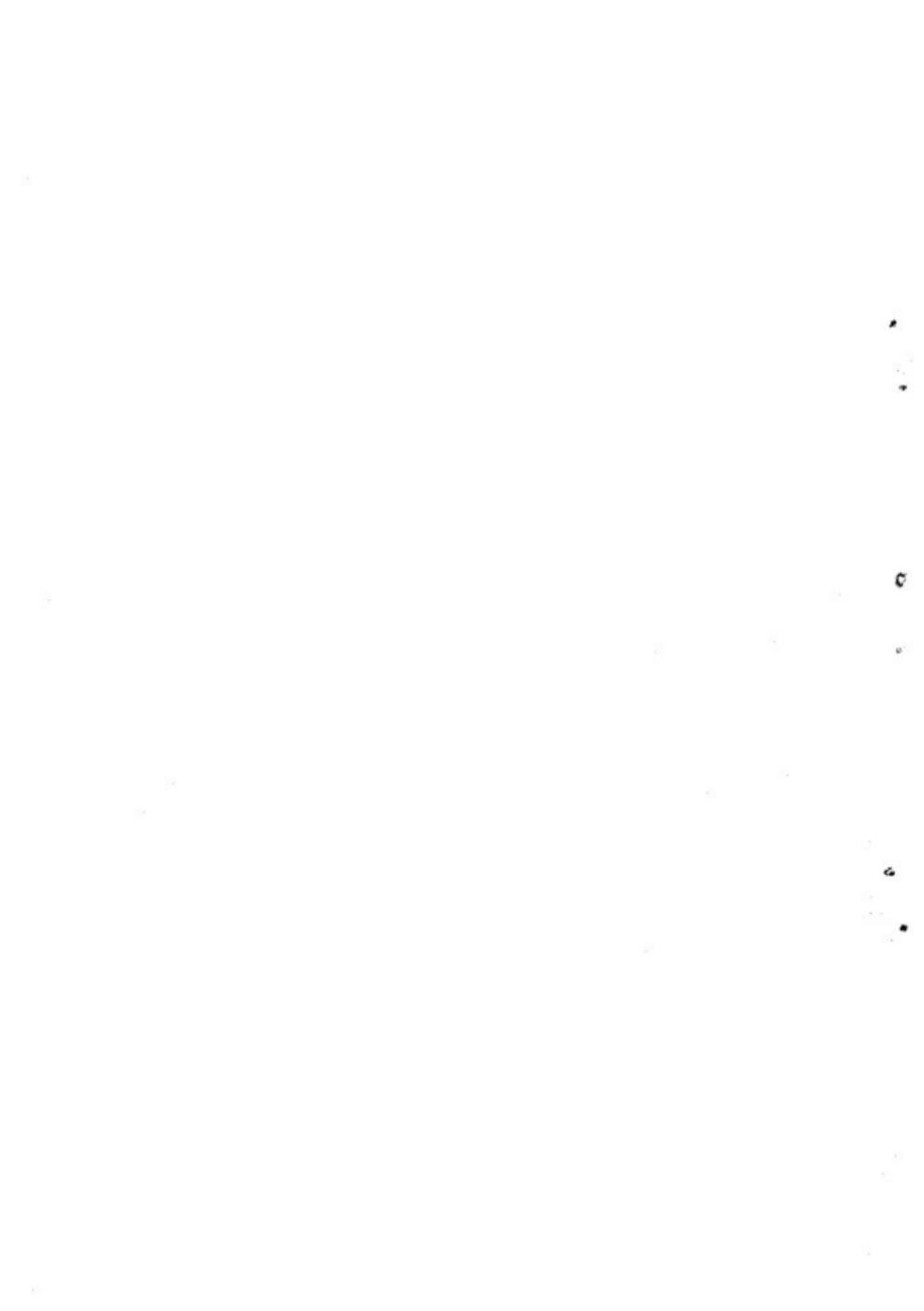


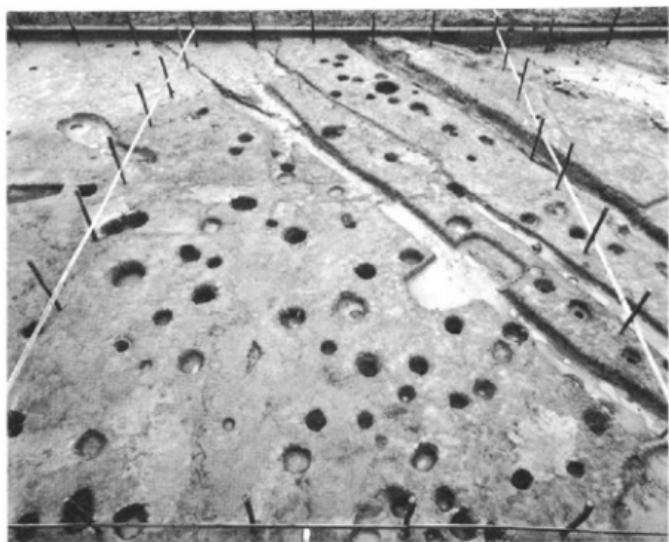


(1) 遺構 遺景 (B-1区南東より)



(2) 遺構 遺景 (B-3区南東より)

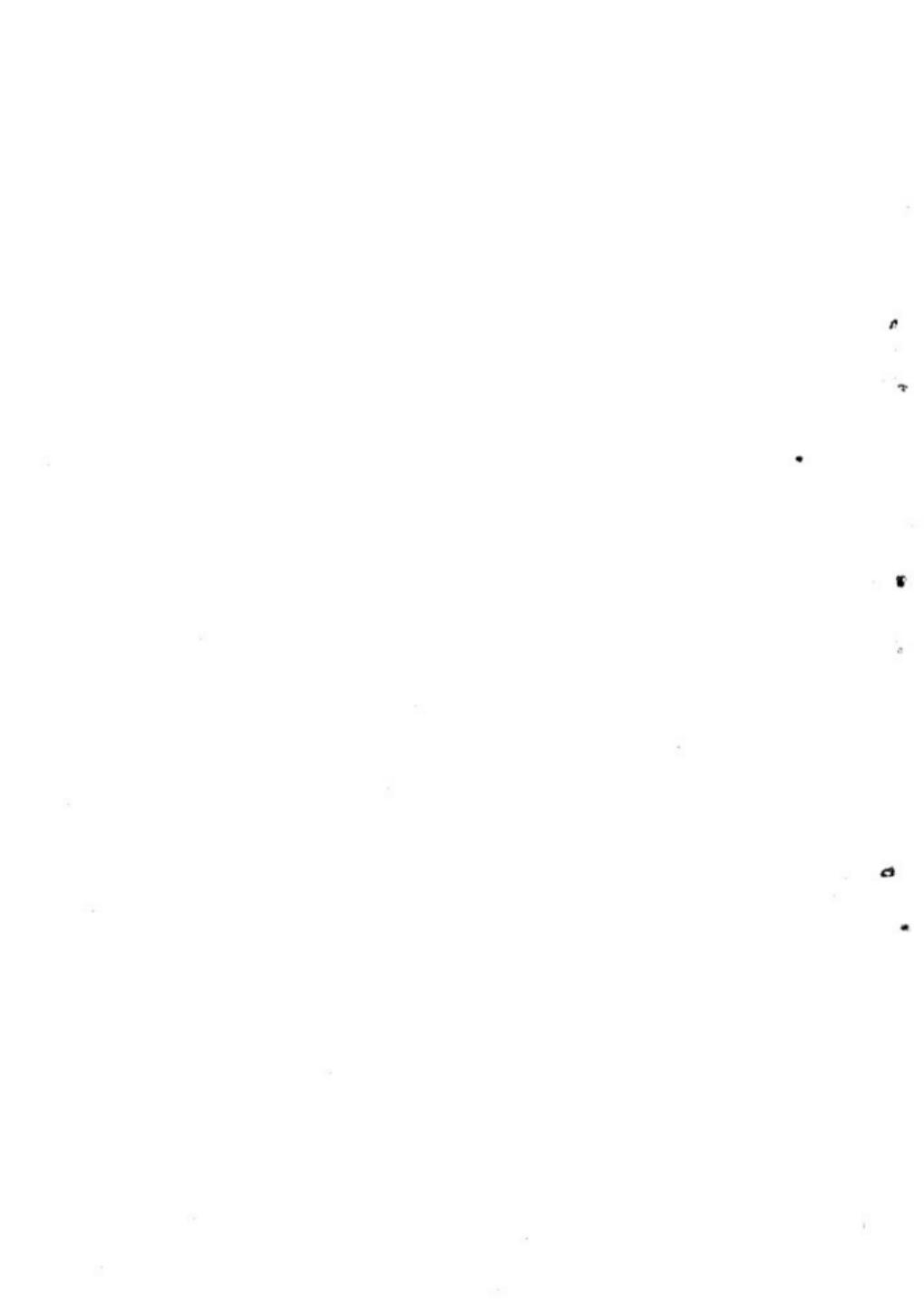


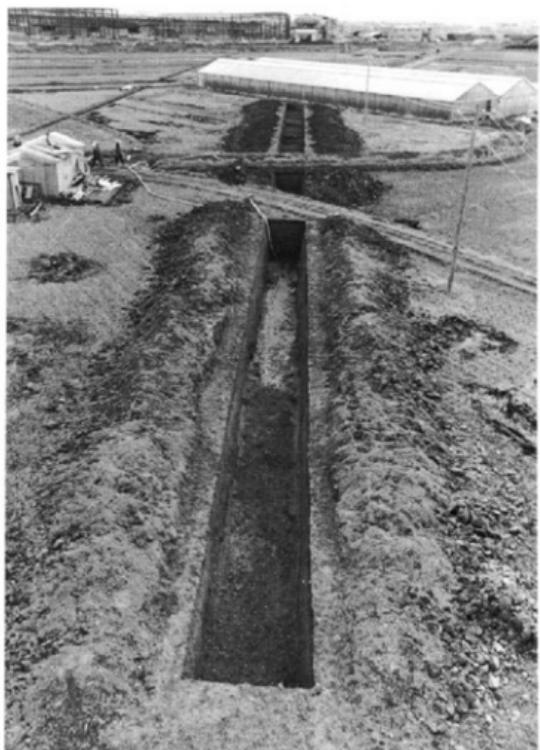


(1) 遺構遠景 (B-4区南東より)



(2) 遺構遠景 (B-6区南東より)





(1) 遺 跡 遠 景 (東北より)

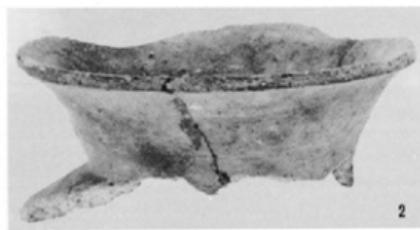


(2) 須恵器出土状態



(3) 土師器出土状態





2



3

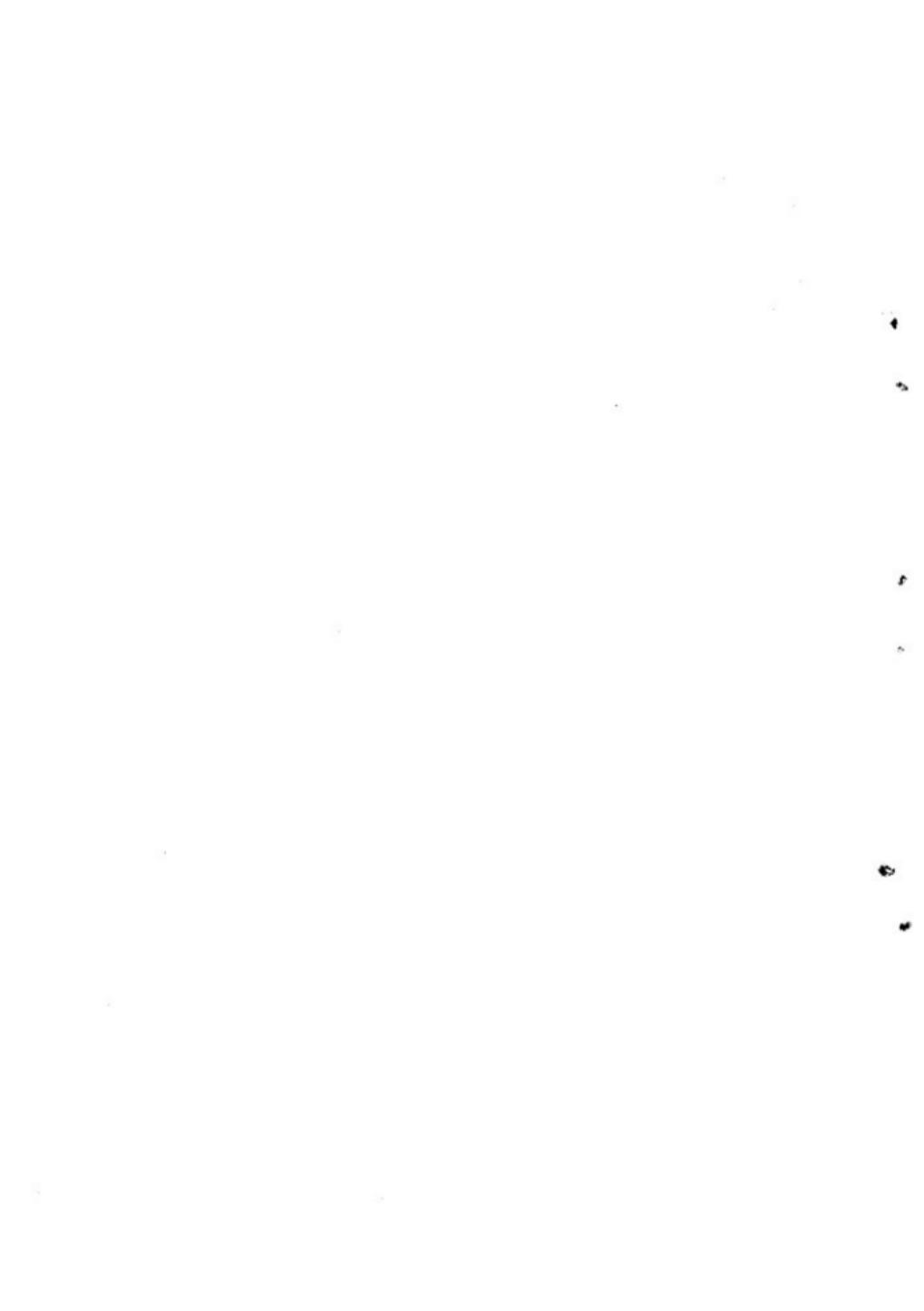


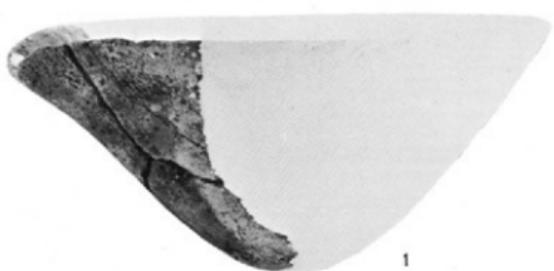
4



5

多々良蔵ノ元・辻田遺跡出土遺物 (1~3 辻田B-1区より)
(4.5歳ノ元Aトレーナー)





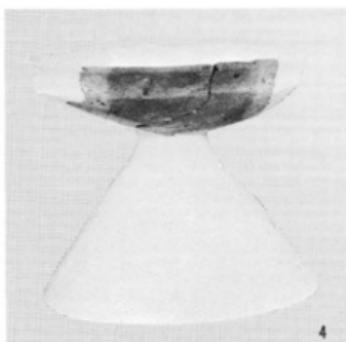
1



2



3



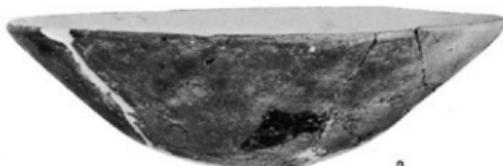
4

第2号溝出土土器 (1,2.は同一物
4.は多々良古川Bトレンチ)

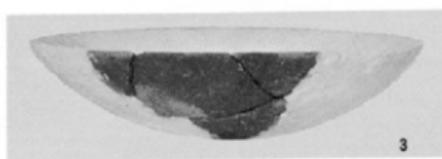




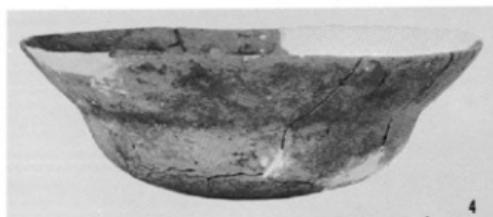
1



2



3

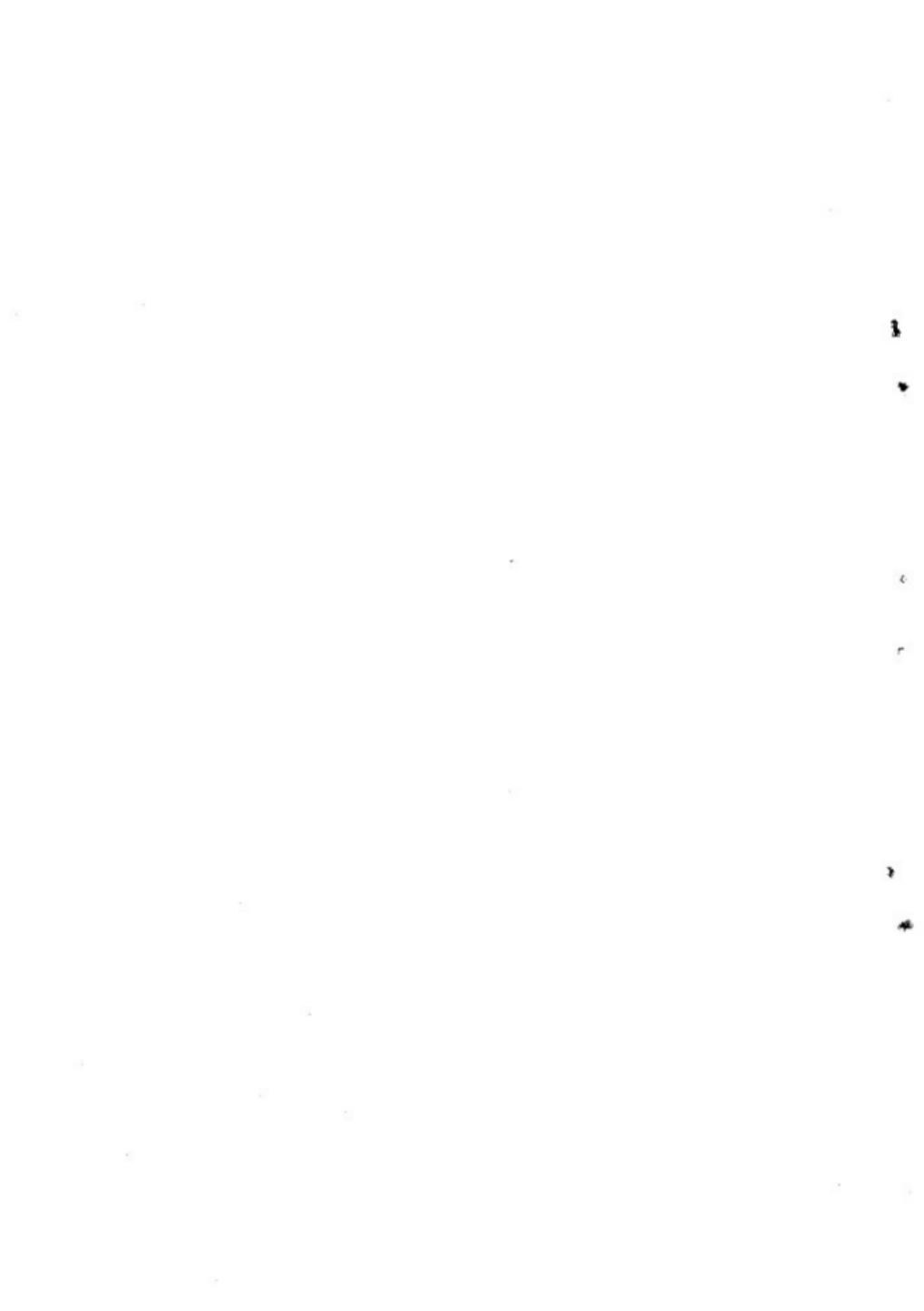


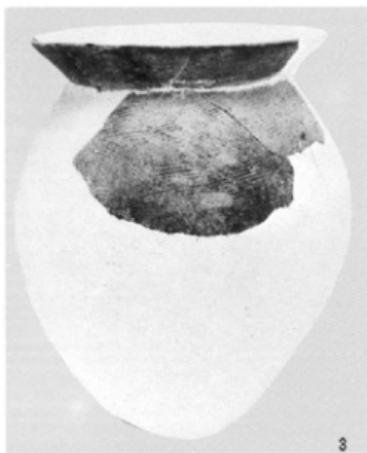
4



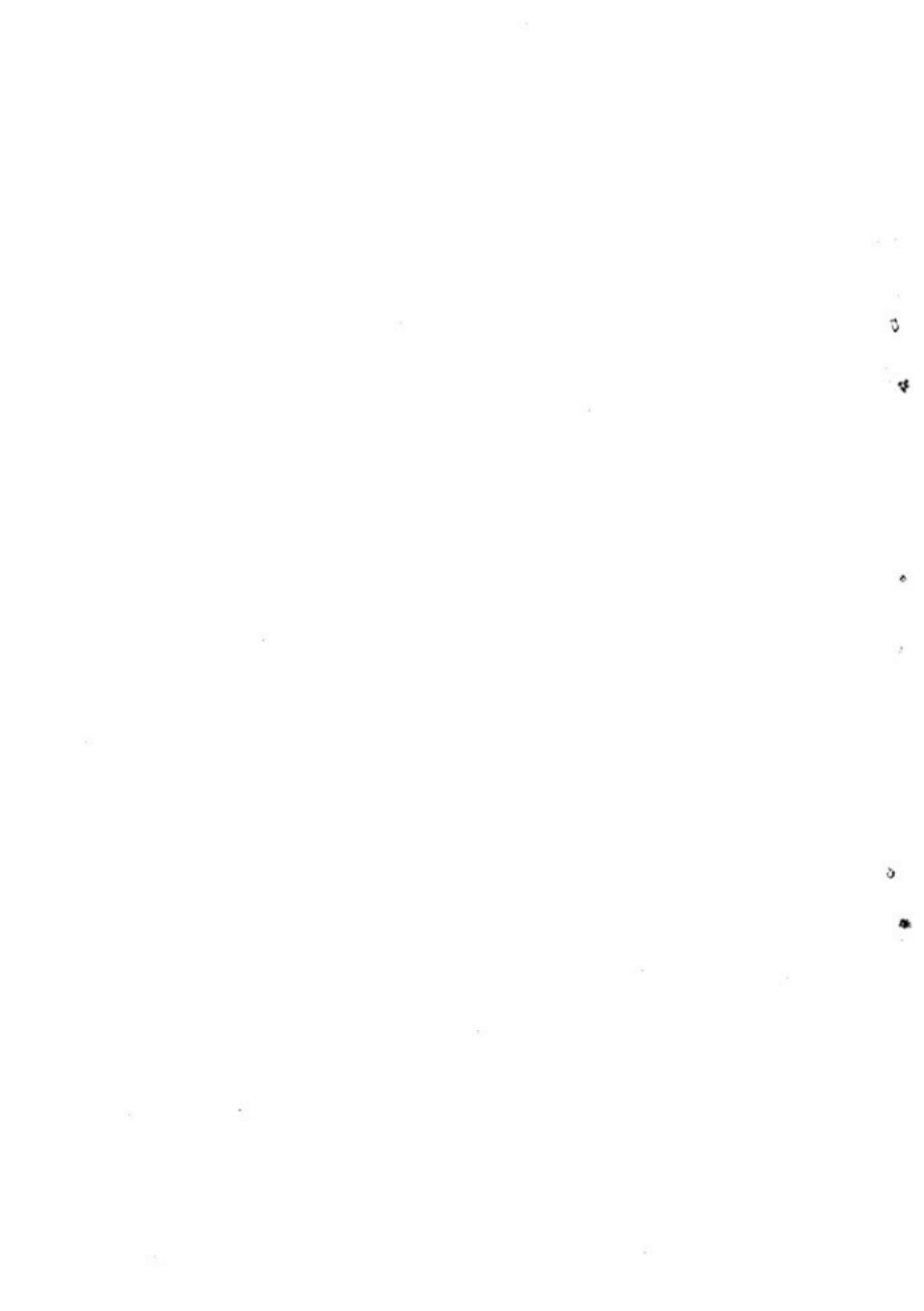
5

第1号、第6号住居址出土土器 (1,2,3.は第6号より)
（他は第1号より）



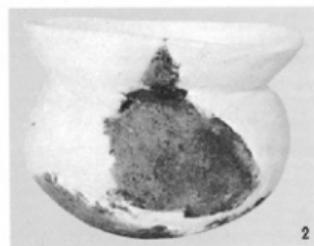


第3号住居址出土遺物

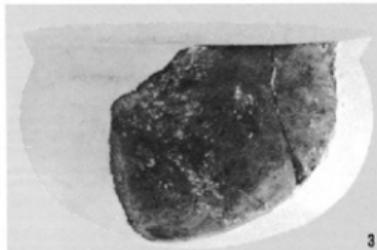




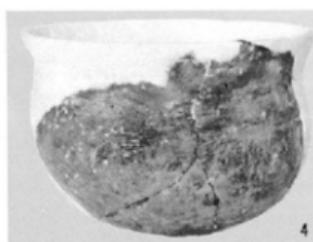
1



2



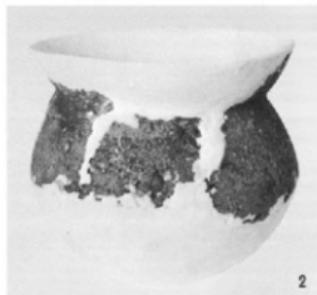
3



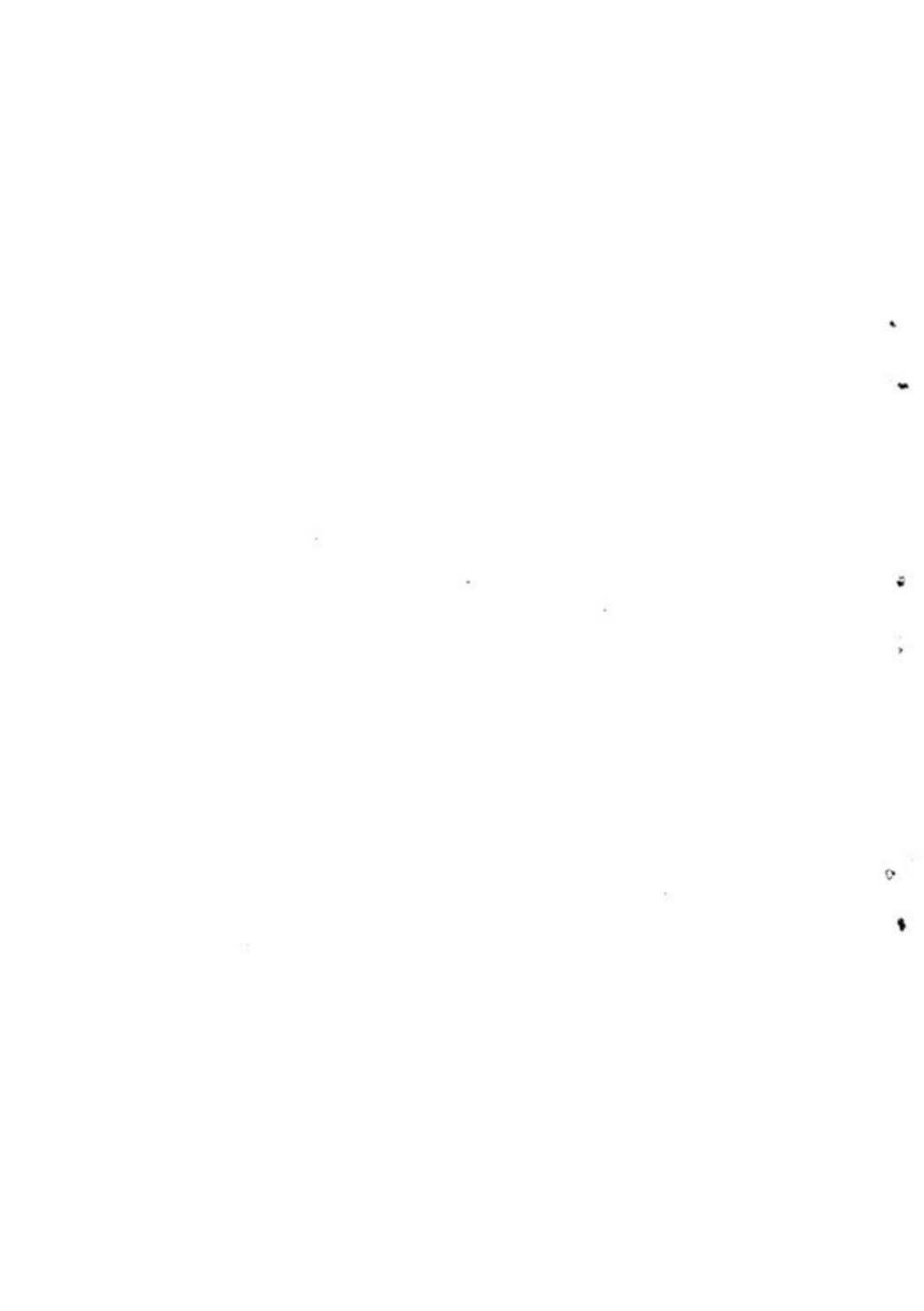
4

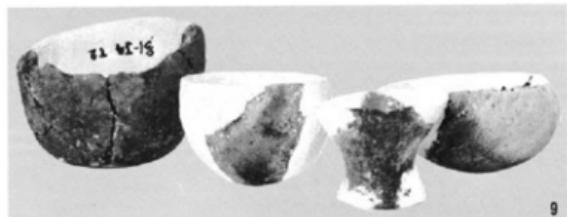
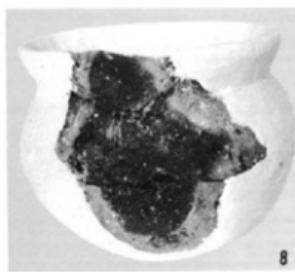
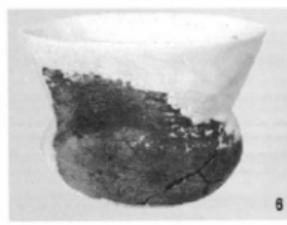
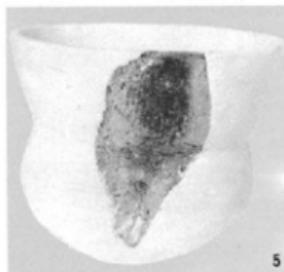
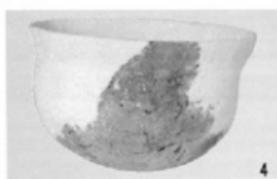
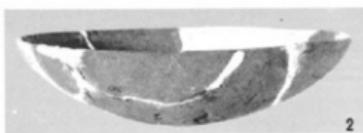
第4号住居址出土土器





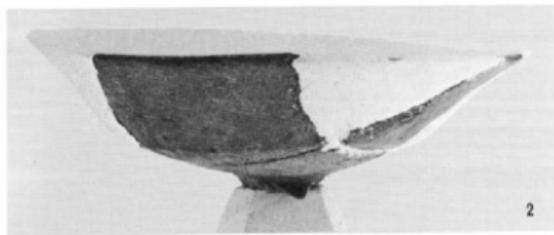
第4号住居址出土土器





第4号住居址出土土器





第4号住居址出土土器

3

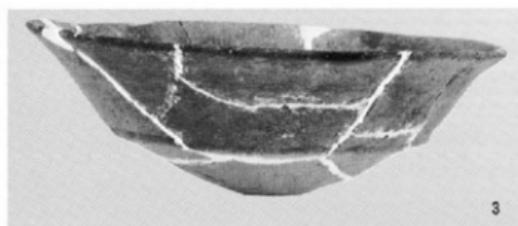
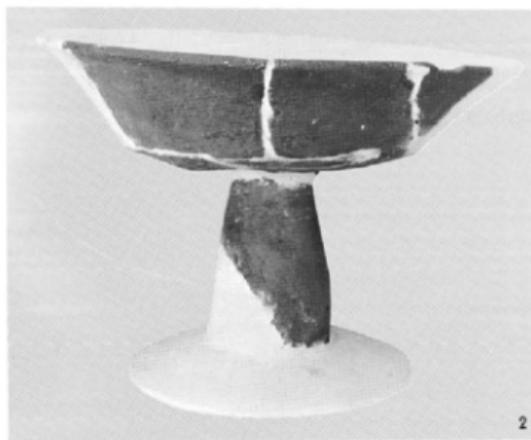
10

8

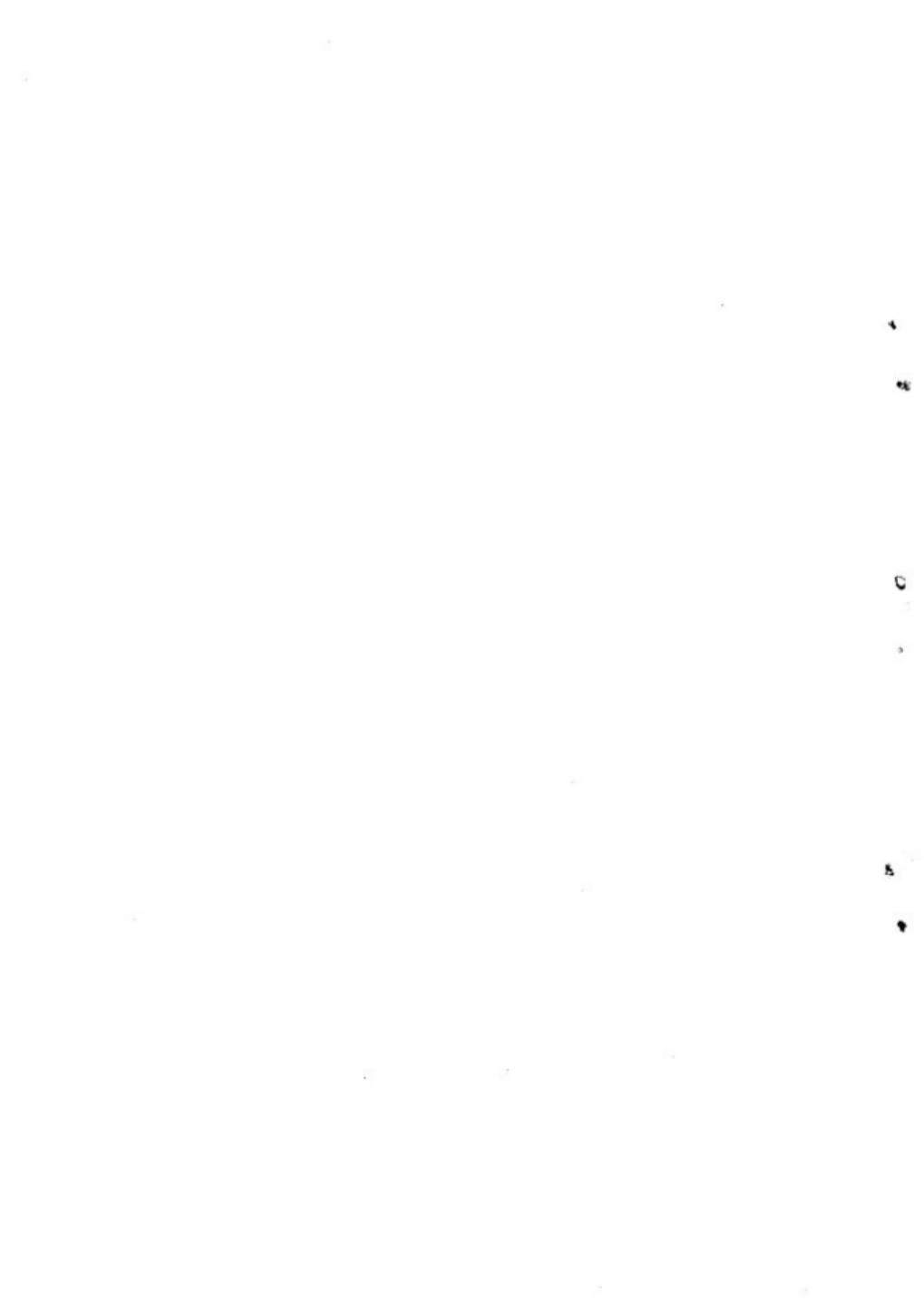
5

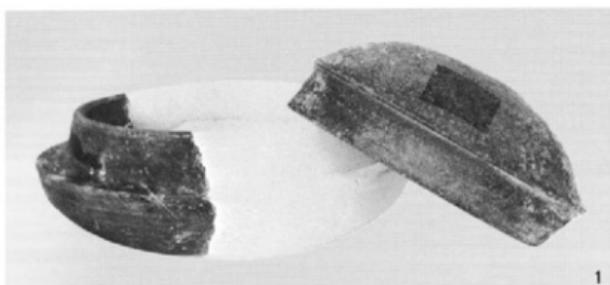
2

9



第4号、第5号住居址出土土器（3のみ）
（5号より）





多々良藏ノ元出土須恵器（3は津屋井田遺跡より）





1

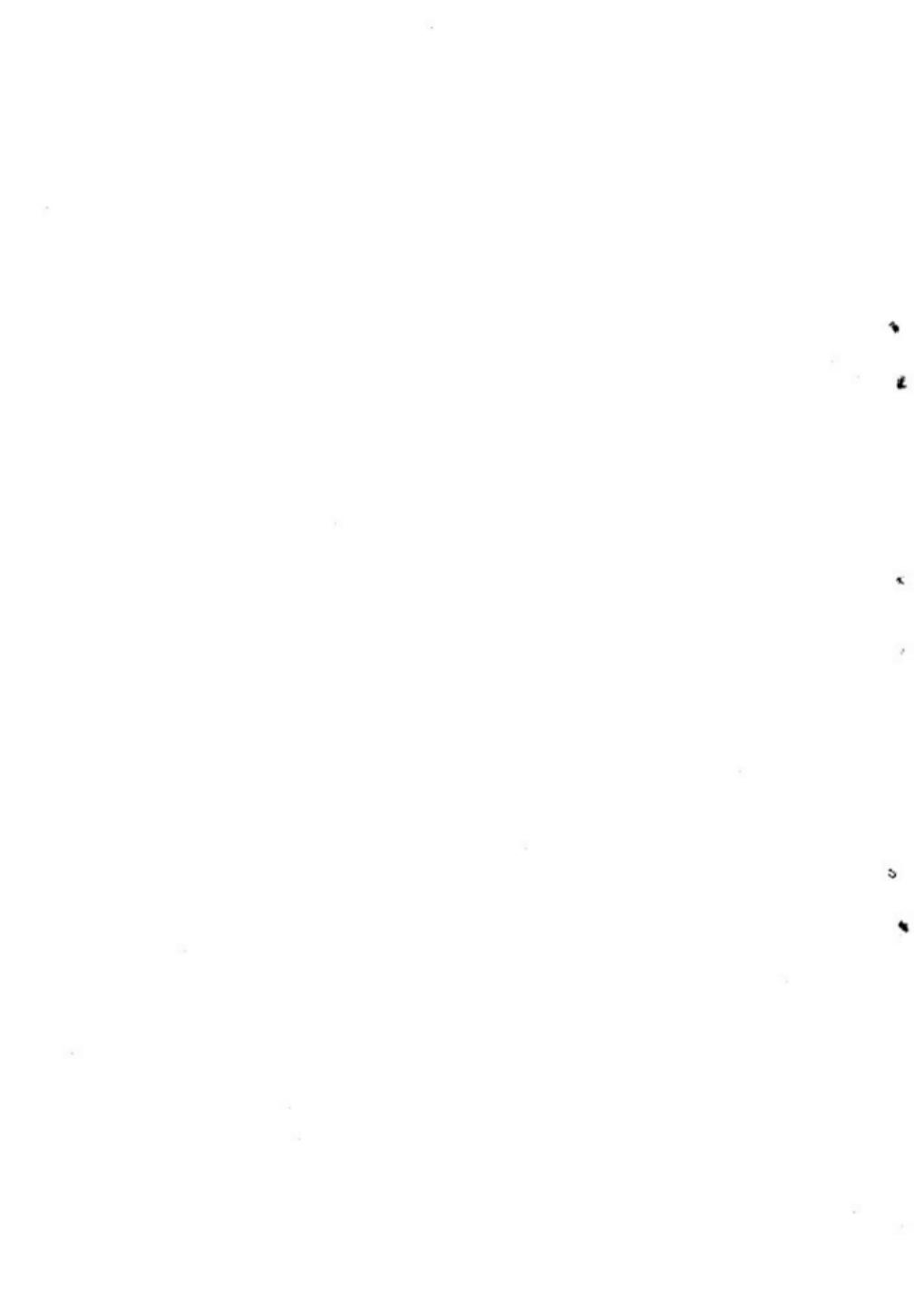


2



3

第4号溝出土瓦及び埴





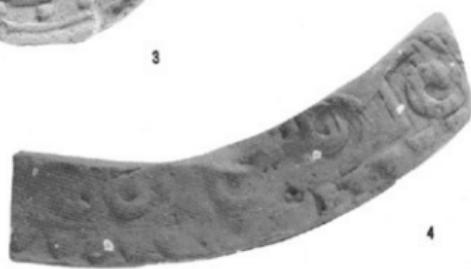
1



2



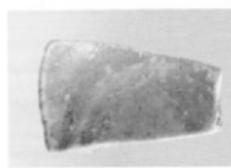
3



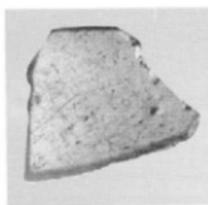
4

第4号溝出土瓦

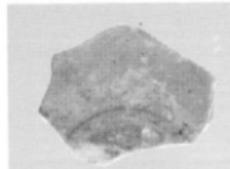




1



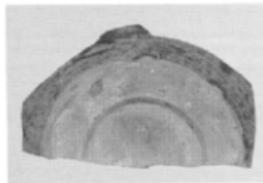
2



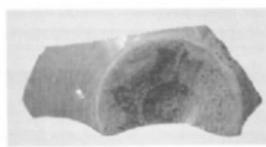
3



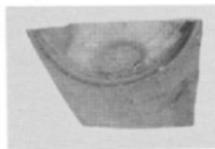
4



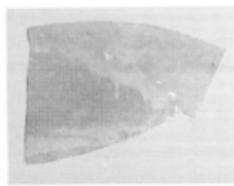
5



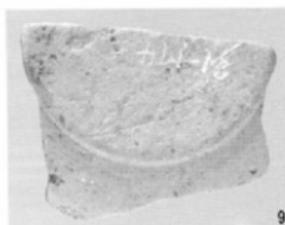
6



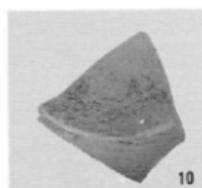
7



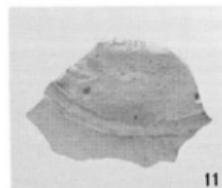
8



9

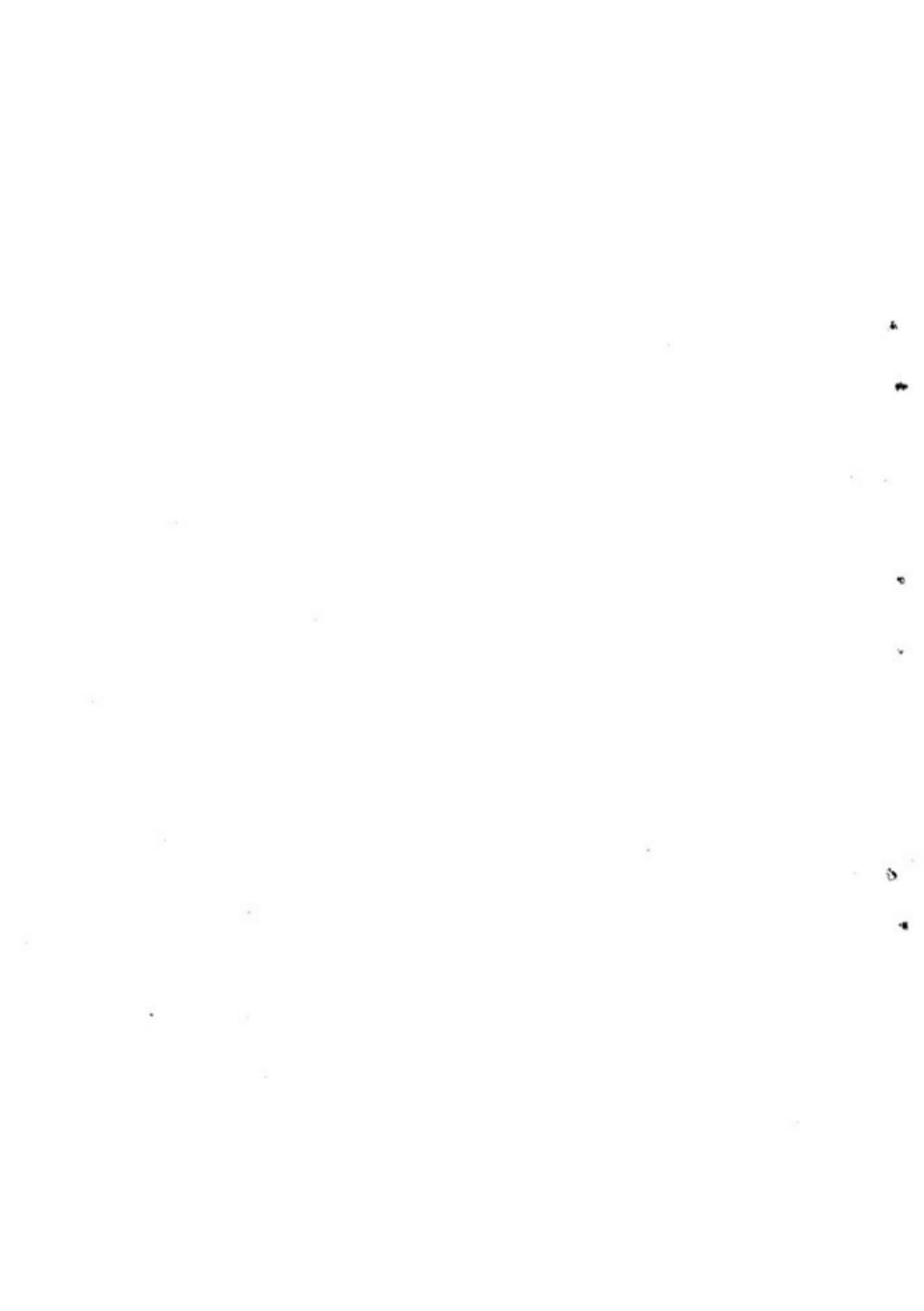


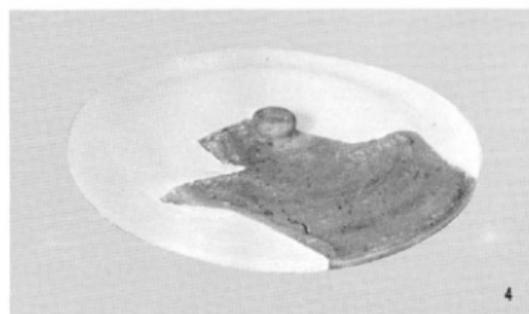
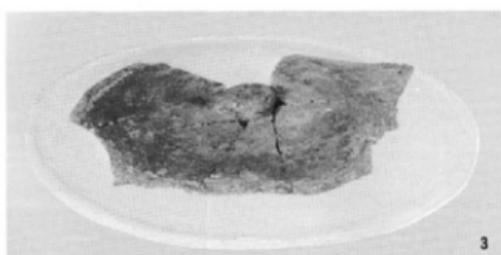
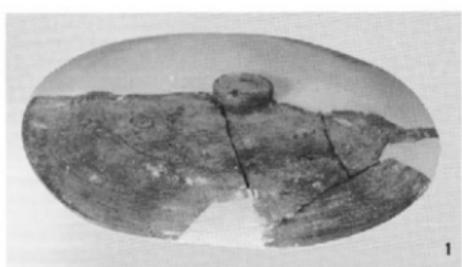
10



11

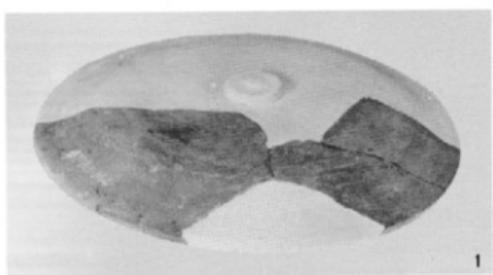
第4号溝出土遺物 (2.は古代ガラス)
1. 3. は綠釉陶器
4~11は越州窯系磁器)



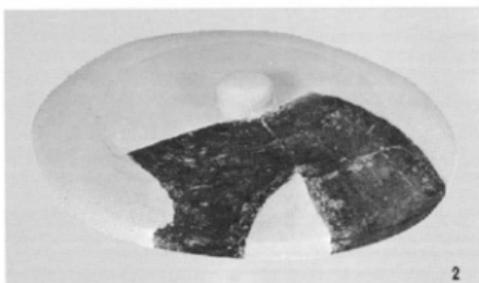


第4号溝出土須恵器

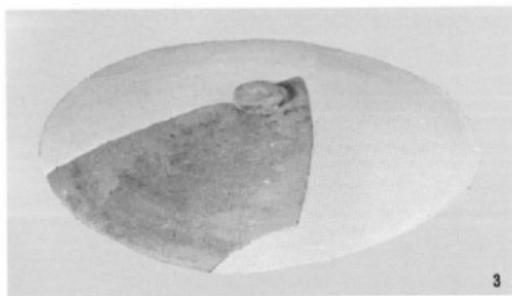




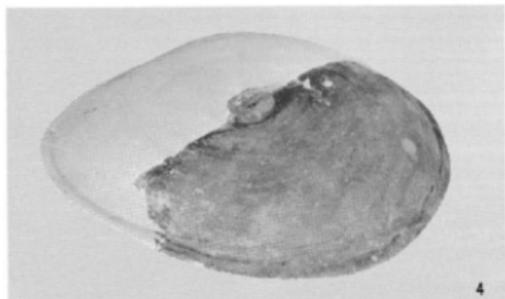
1



2



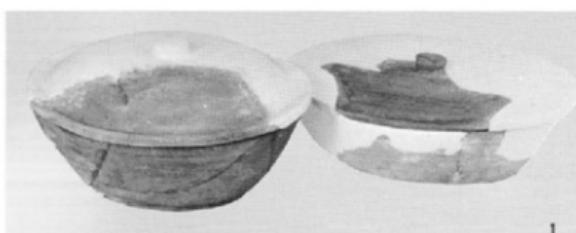
3



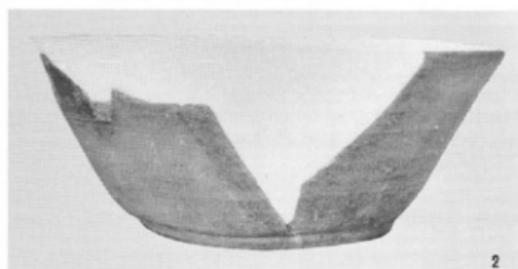
4

第4号溝出土須恵器

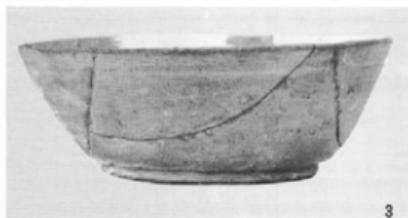




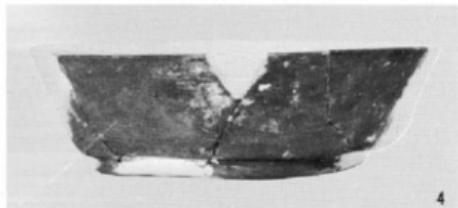
1



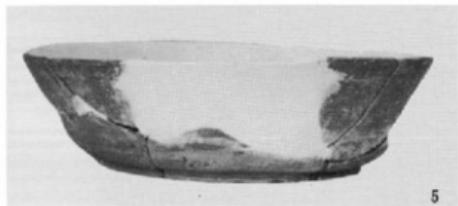
2



3



4



5

第4号溝出土須恵器





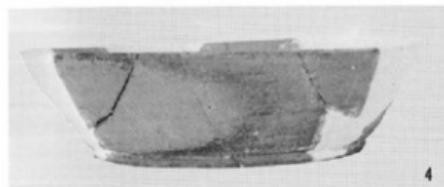
1



2



3



4

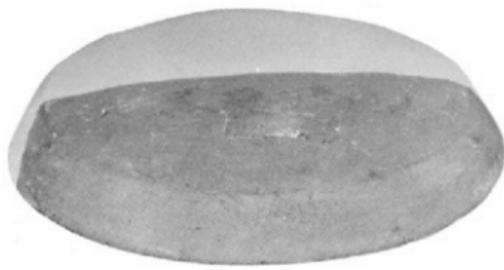


5

第4号溝出土須恵器

b

t₁



1



2

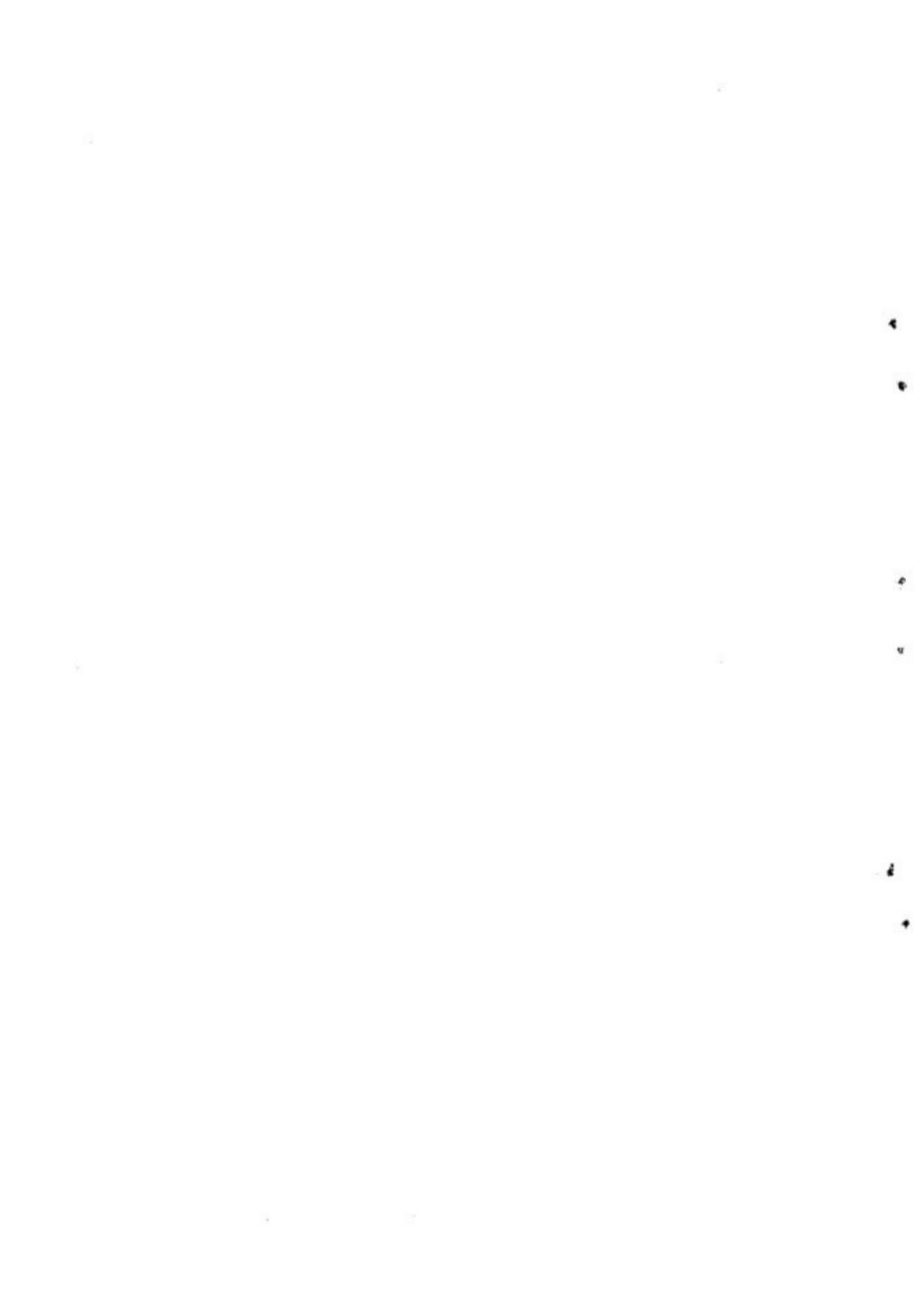


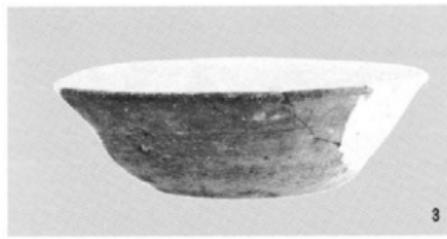
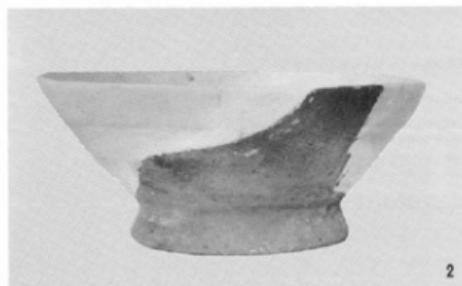
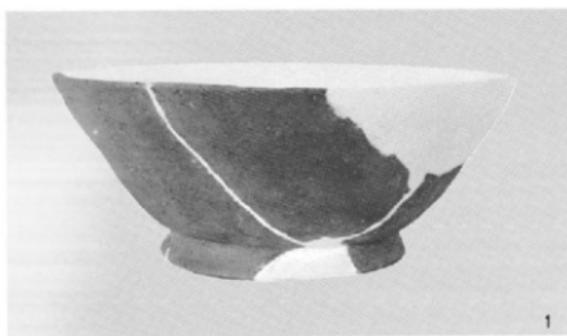
3



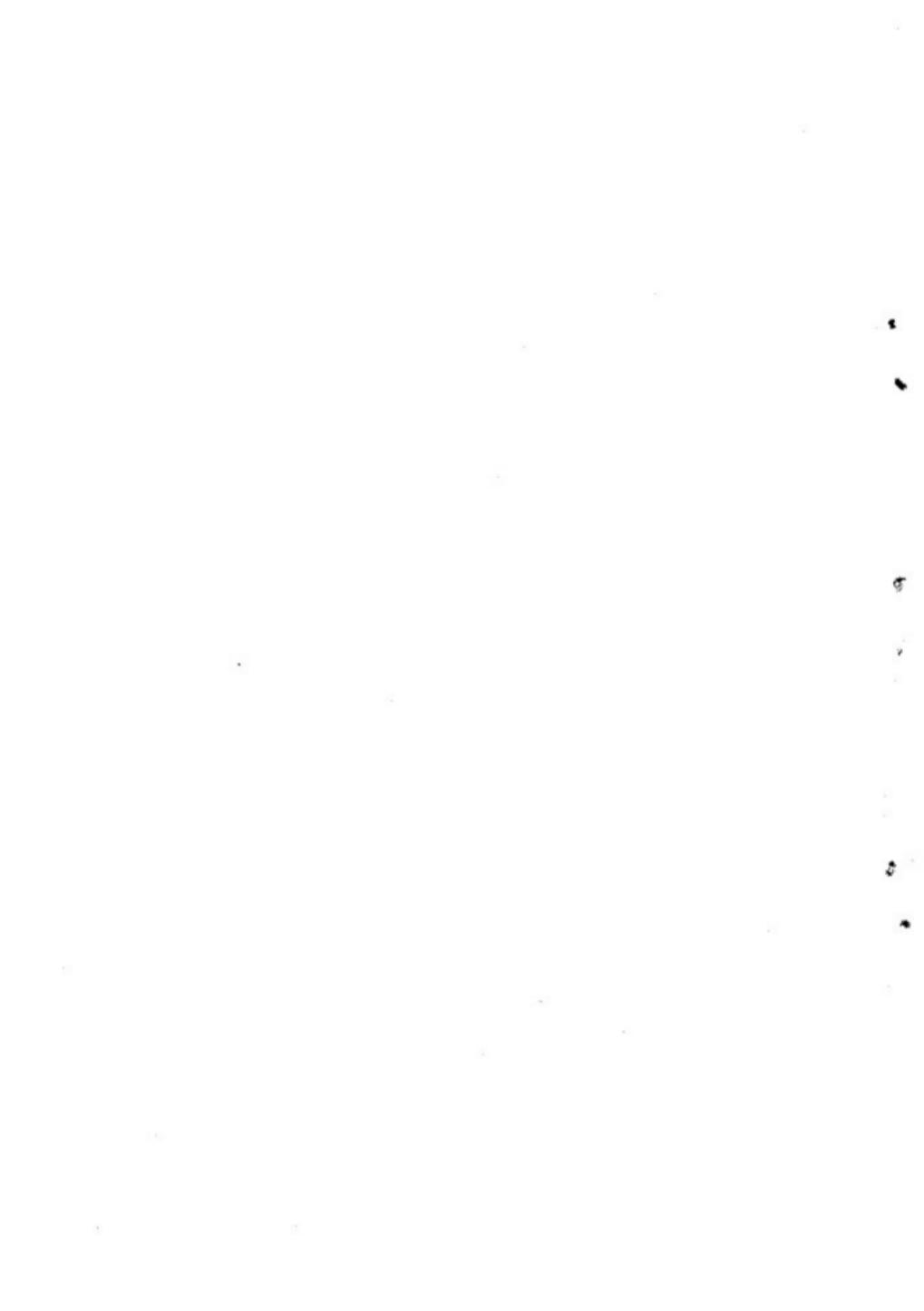
4

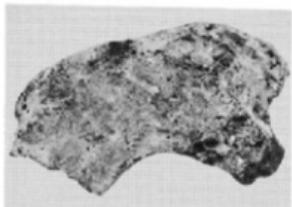
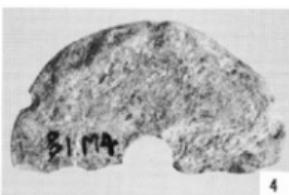
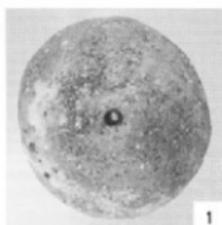
第4号溝出土須恵器



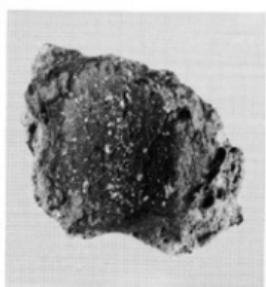
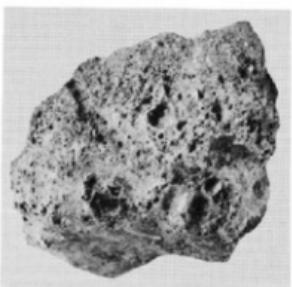


第4号溝出土土師器





5



第4号溝出土遺物 (5.は第5号溝より)

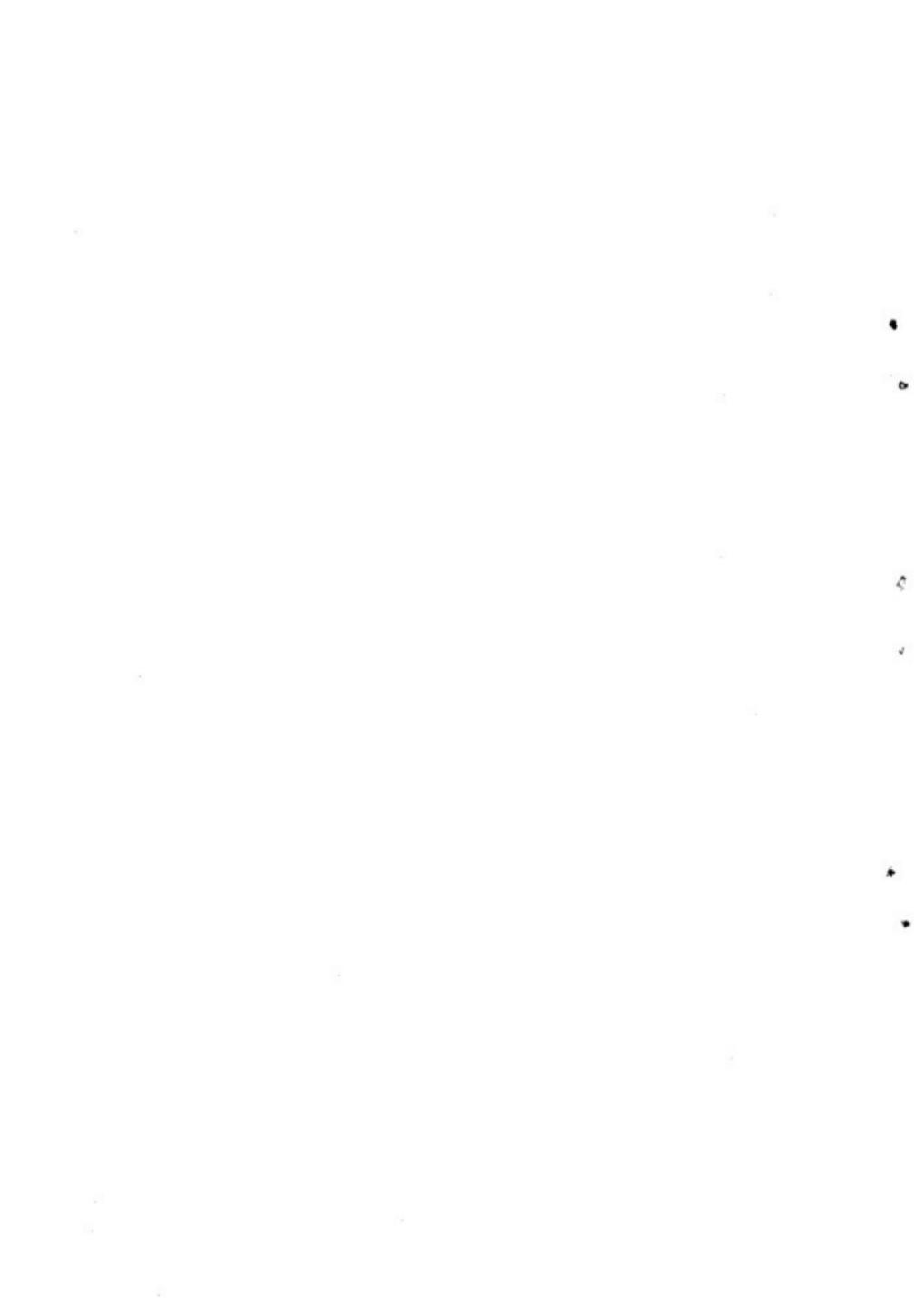
6



(1) 津屋道田の流木出土状態（東北より）



(2) 津屋楠田遺跡遠景（東南より）

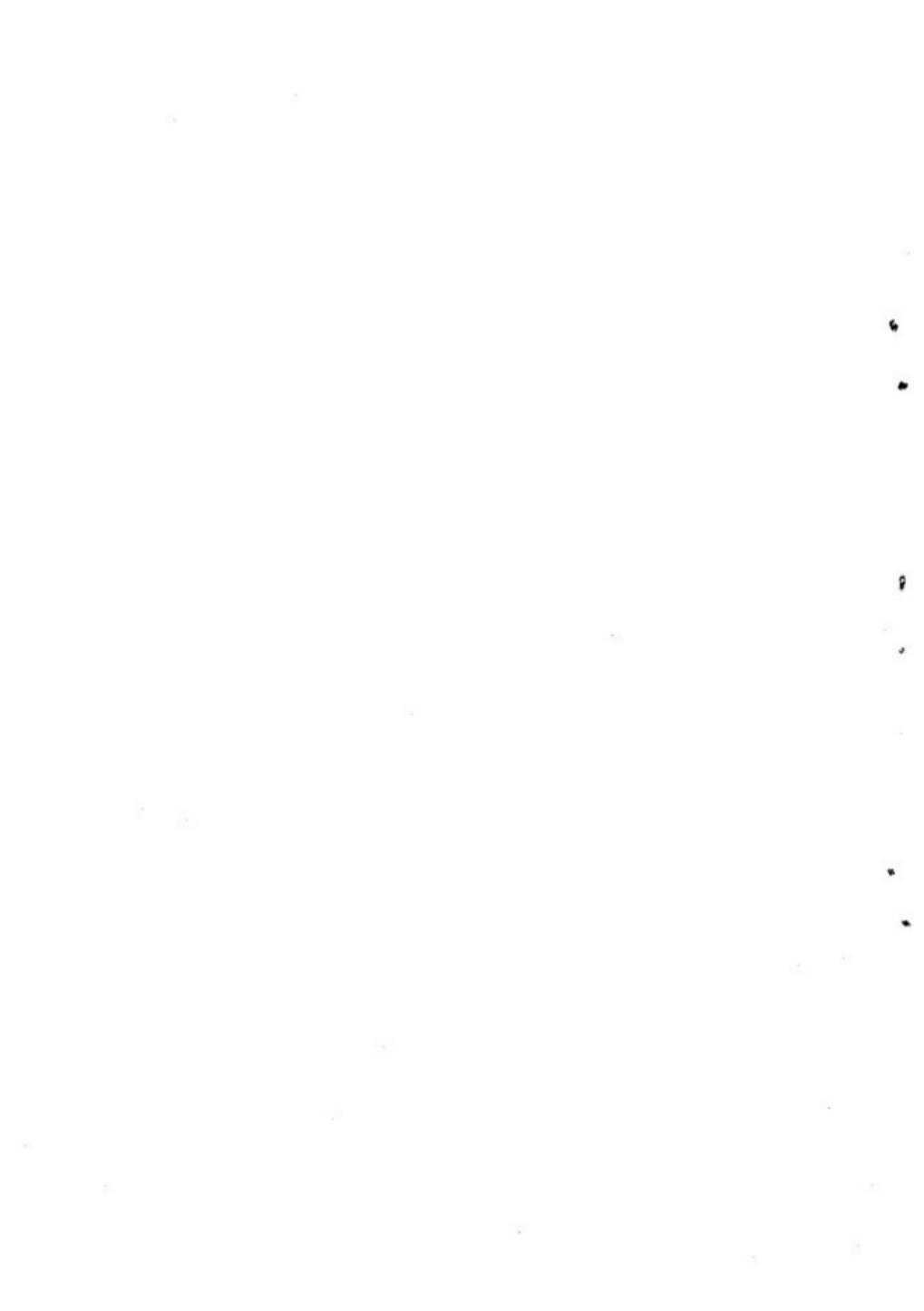




(1) 津屋楠田遺跡遠景（南より）



(2) 杭列近景（東南より）

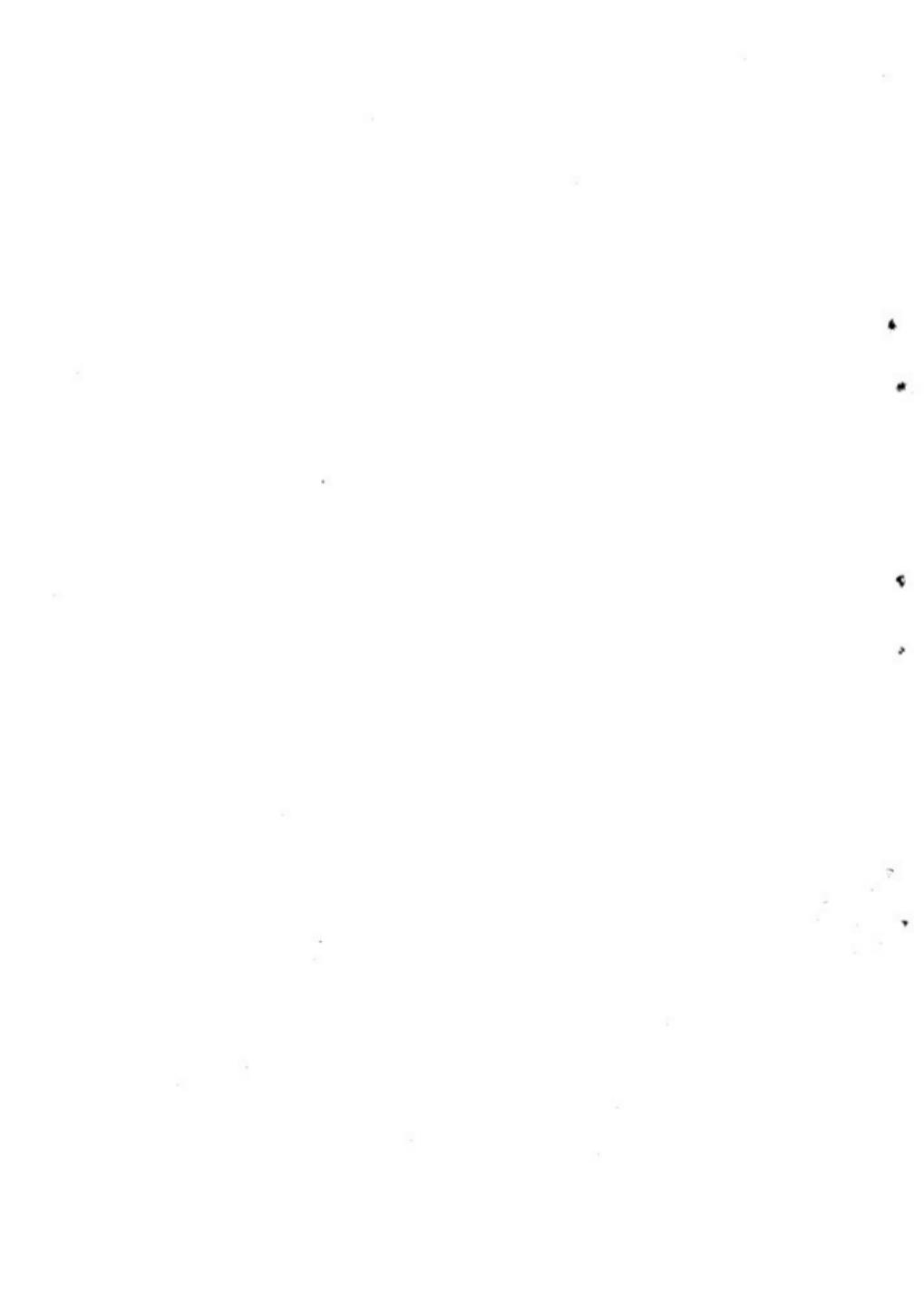




(1) 遺跡遠景(北西より)



(2) 杭列近景(北西より)





杭列とその層序



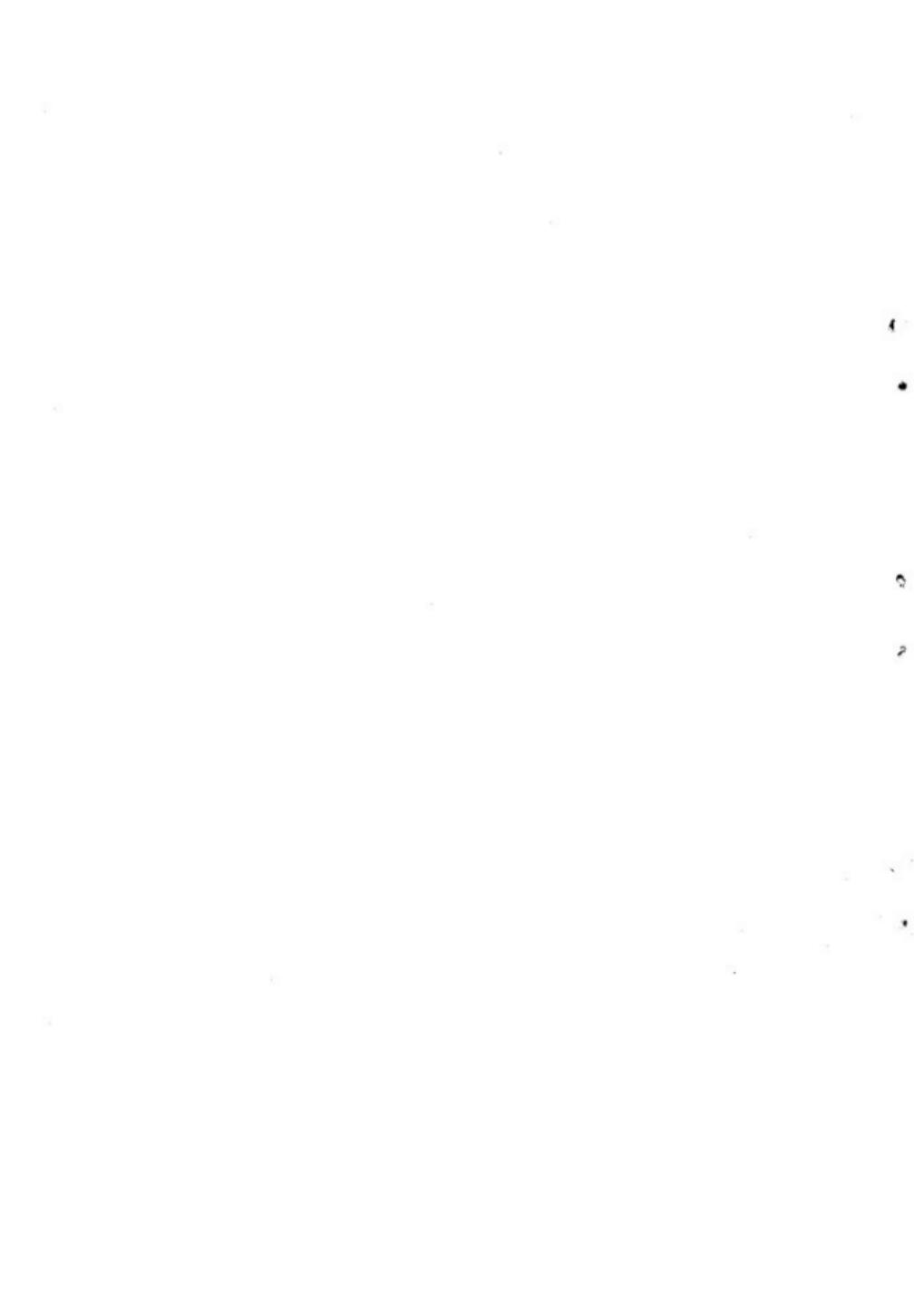
杭列と同層の須恵器



杭列とその層序



須恵器近景

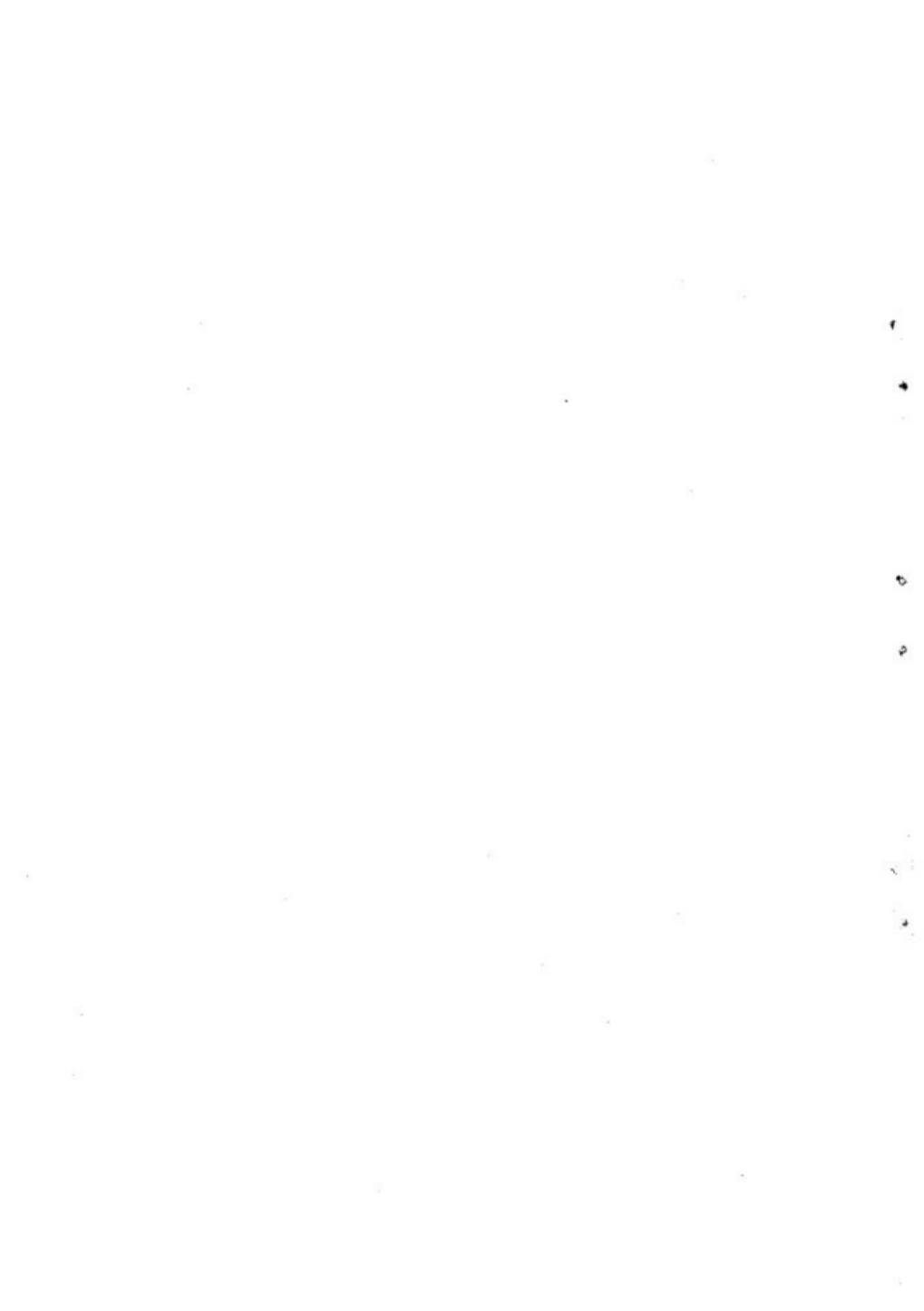




(1) 遺跡遠景(北西より)



(2) 遺跡遠景(東北より)

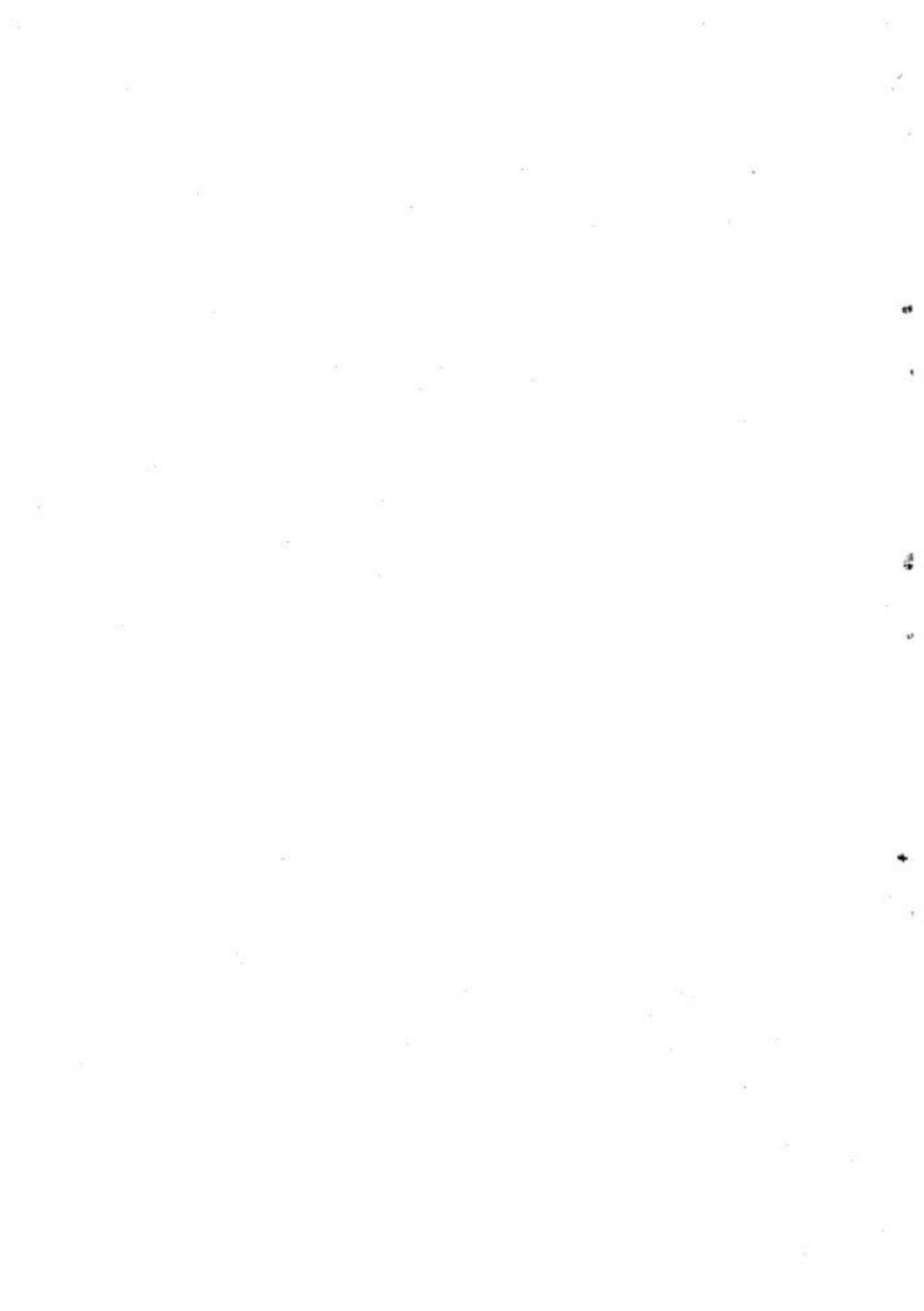




(1) 遺構近景(東北より)

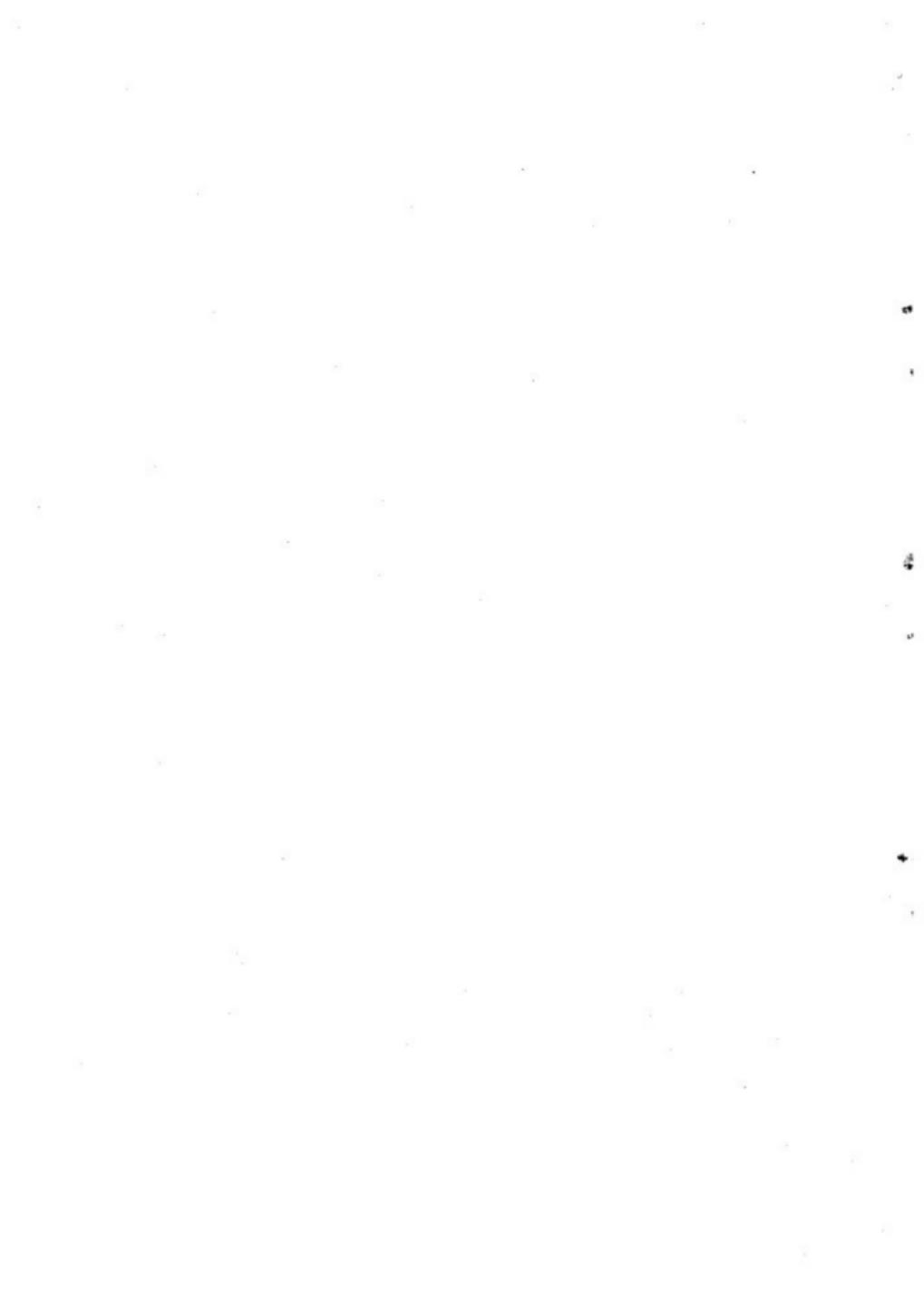


(2) 遺構近景(西南より)





遺物出土状態（東北より）

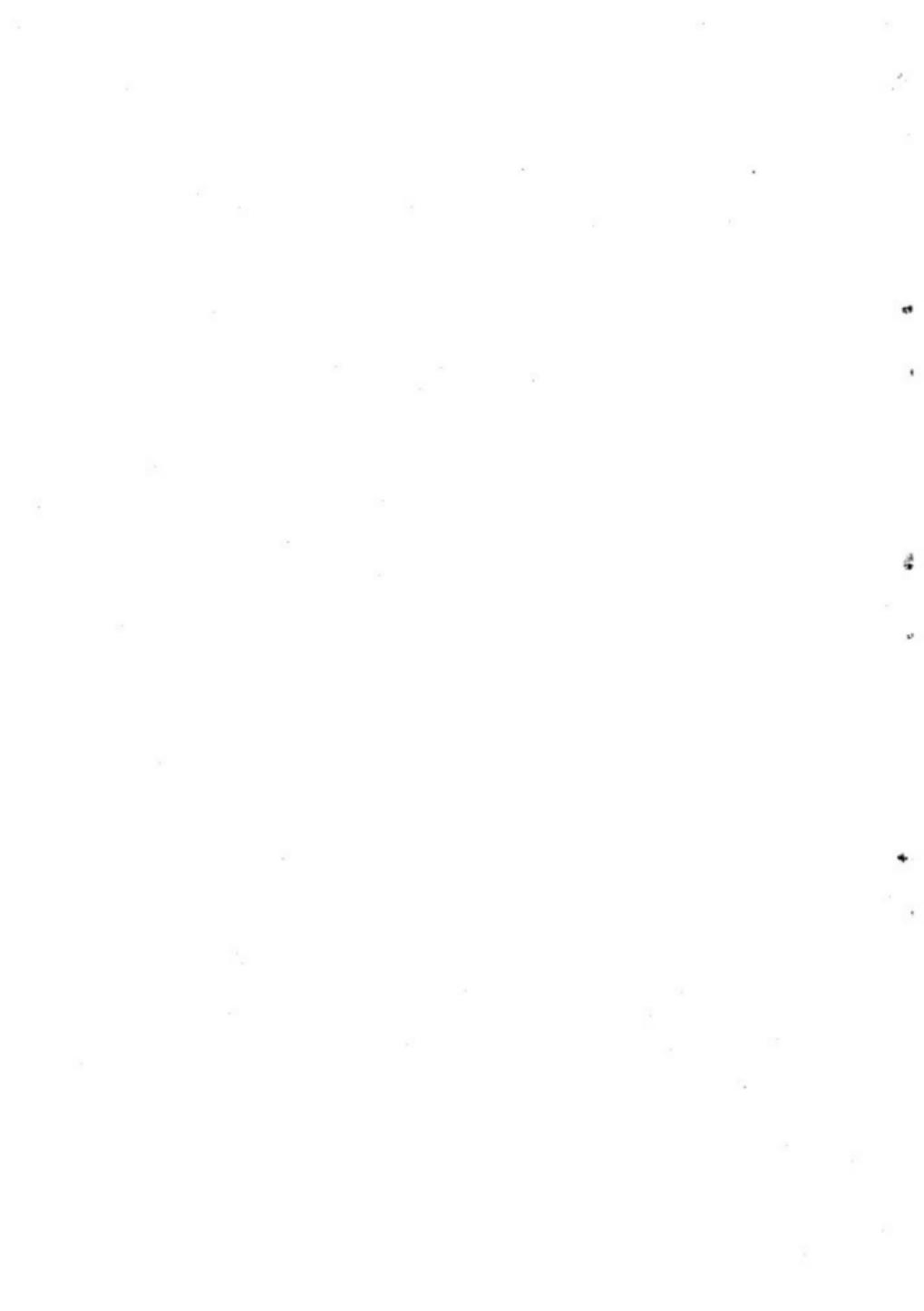


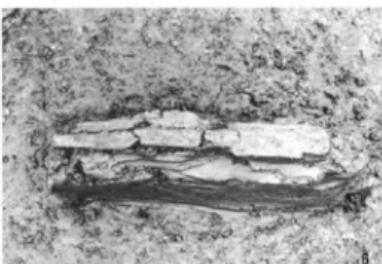


(1) 遺物出土状態（北東より）



(2) 遺物出土状態（東南より）



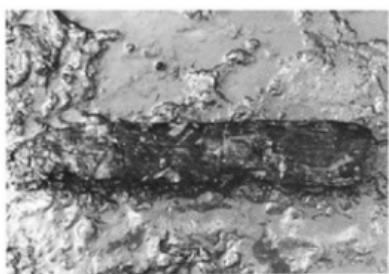


1. 木鍤出土状態
2. 木鍤出土状態
3. フォーク形木器出土状態
4. 不明木器出土状態
5. 不明木器出土状態
6. 不明木器出土状態
7. 建築材出土状態

8

8

9



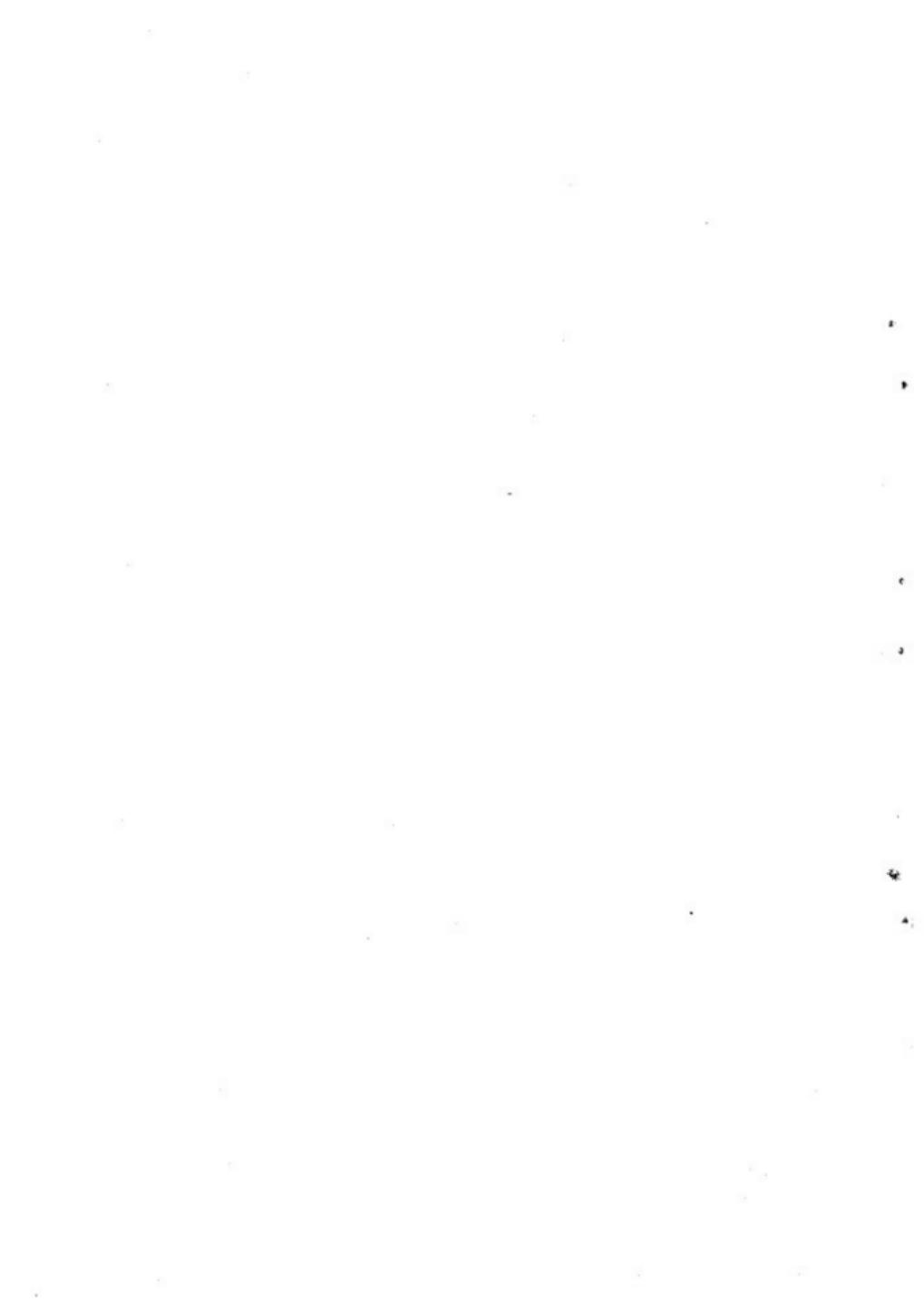
矢板出土状態



土器出土状態



土器出土状態





津屋井田遺跡出土木器





津屋井田遺跡出土木器（3・4は同一物）

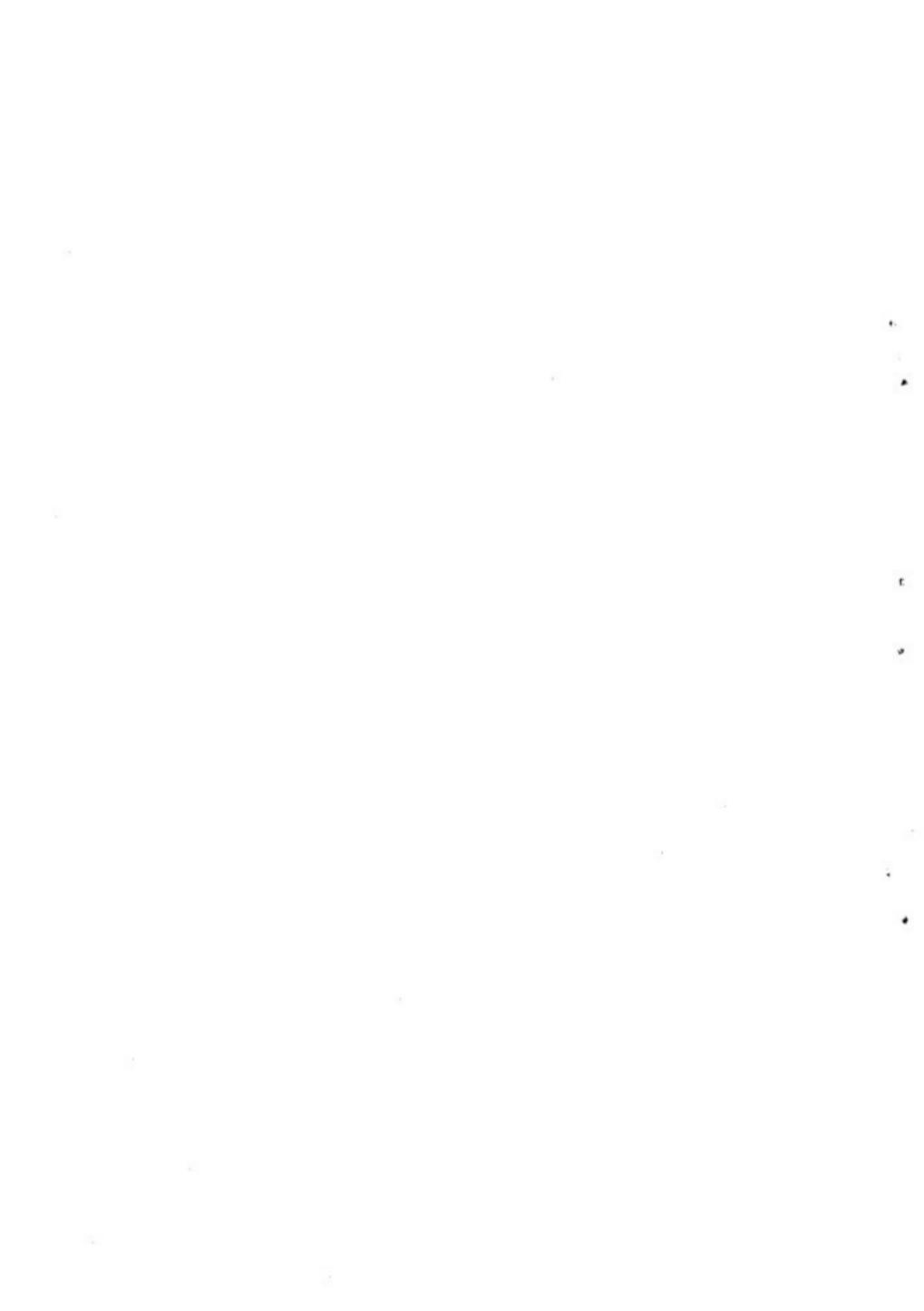




(1) 箱崎大坪地点発掘区遠景



(2) 箱崎积迎地点発掘区遠景



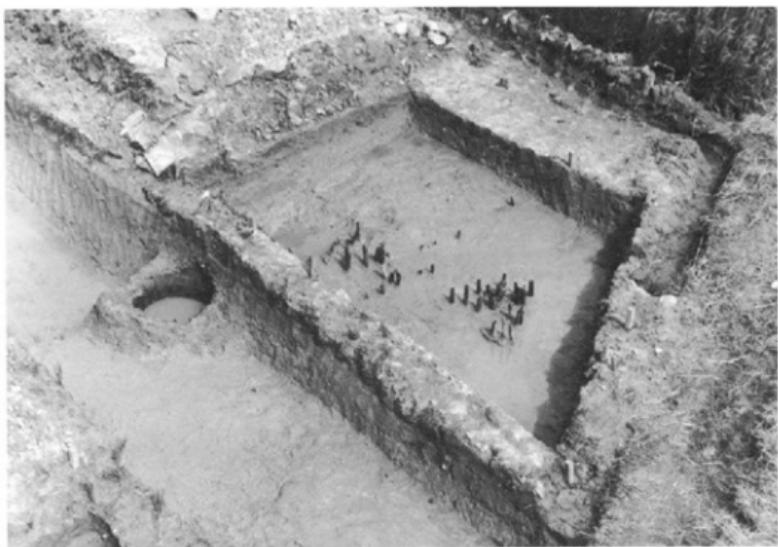


(1) 名子地区遠景（湯ヶ浦より名子地区のぞむ）



(2) 名子第1地点発掘区遠景



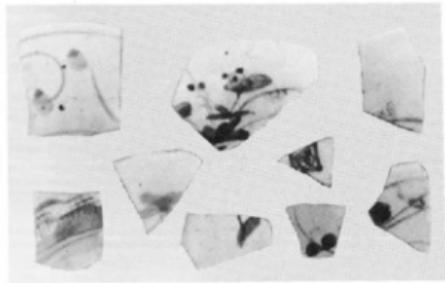
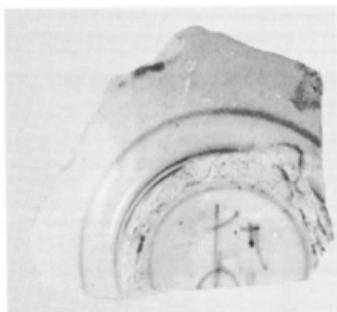
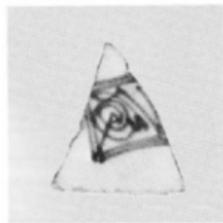
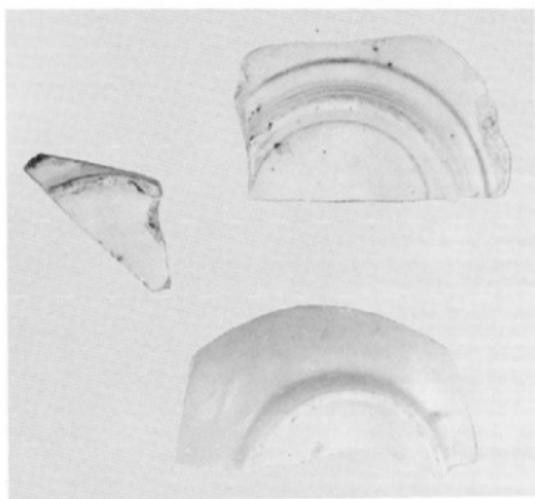


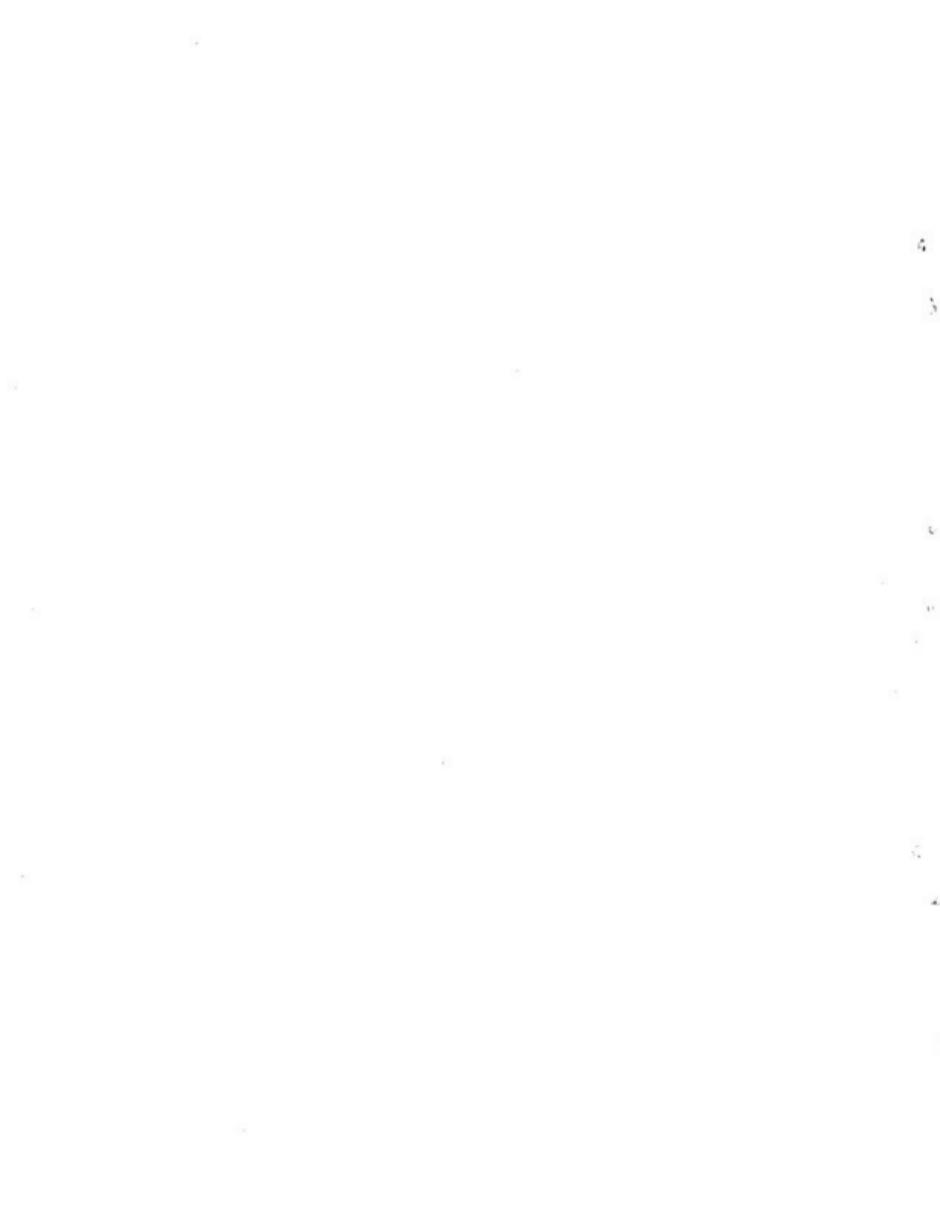
(1) 名子第1地点杭と桶出土状態

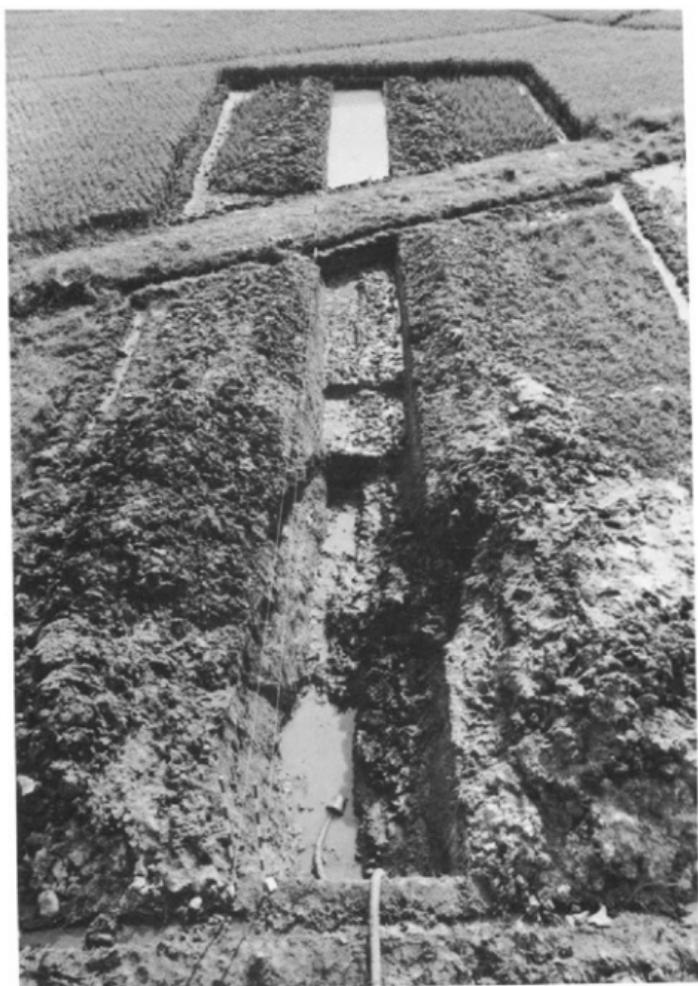


(2) 名子第1地点桶出土状態









名子第2地点堺掘区全景

4

5

6

7

8

9

10

11

12

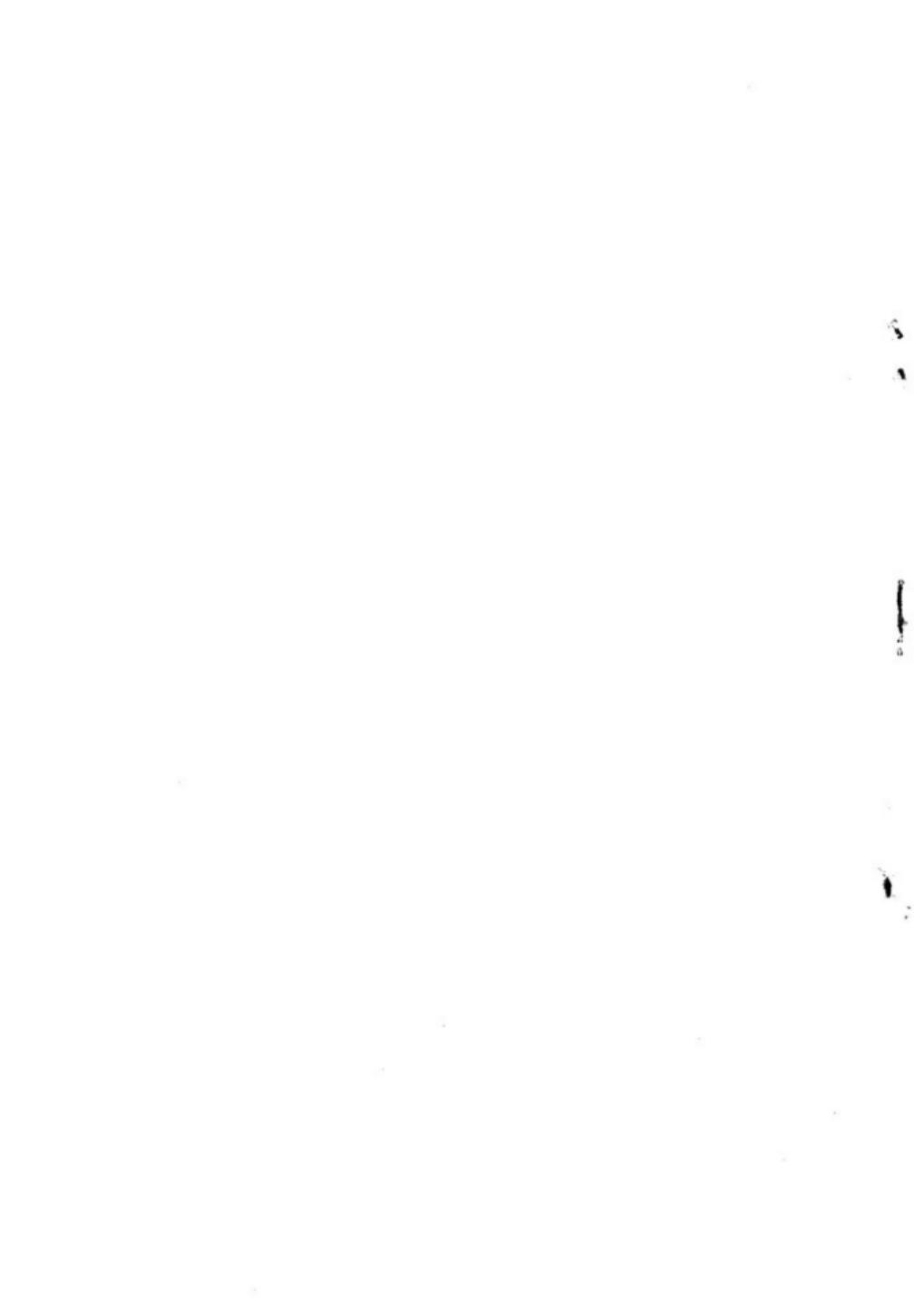
13

14

15



名子第2地点作業風景





(1) 名子第3地点発掘区全景



(2) 名子第4地点全景

1974

山陽新幹線関係
埋蔵文化財調査報告

昭和50年3月31日

発行 福岡市教育委員会
福岡市中央区天神1丁目8番1号

印刷 福博綜合印刷株式会社
福岡市博多区堅粕3-16-36